

## 第7章 基礎分析

### 第1節 土器から見た古墳群・古代墓

#### 1.はじめに

栗栖山南墳墓群では、再三報告してきたように、古墳、古代墓、中世墓、近世墓といった様々な時代に渡る多様な墳墓が同一の尾根の中腹部に営まれてきたことが判明した。これらの墳墓は、大きくは二時期の遺構群として捉えることができる。その一は、古墳および古代墓であり、その二が中世墓および近世墓である。これら二群は、それぞれが時期的に近接することと、前代の墳墓への意識が継続されていることから、古墳群・古代墓群、中世墓群として捉えて記述してきた。

さて、ここでは、古墳群および古代墓について土器から見てどの様なことが導き出されるかを見ていこうとする。

なお、当墳墓群から出土した土器は少量で有ると併に、古墳や古代墓が中世墓造成に伴い削平されたと考えられることから、厳密な意味で原位置を止めるものがわずかである。

しかしながら、当古墳群が7世紀の古墳時代終末期に営まれたものであり、それに続く火葬墓が8世紀代のものと考えられることから、その繋がりがどの様な様相を呈しているのかを、土器から検討していきたい。

#### 2.古墳出土土器

本文の項で、遺物の出土状況や器種などについて概観してきたが、ここでは、それらの土器をさらに詳細に比較検査することにより、何らかの傾向が窺われるかを見ていきたい。

##### (1) 古墳出土土器

古墳群から出土した土器は、わずかであり原位置を保っているものはないが、3号墳の区画溝および4・6号墳の石室から須恵器壺Gが検出されている。それらを、まず、比較してみる。

蓋(図36-1.2)は、4号墳のみ出土しており、いずれも、口径10.2cmを測り、宝珠つまみがやや偏平になり、かえりを付すための強い回転ナデを施している。また、器壁の厚みが一定せず、やや分厚い感がある。

身は、4号墳出土のもの(図36-3)が9.6cmと最も口径が小さく、6号墳(同図-6)の10.1cm、3号墳(同図-4.5)の10.2、10.7cmと大きさが増す。いずれのものも、口縁部が外方にわずかに開く傾向を見せ、特に、3号墳出土の(4)は外反ぎみになる。

以上の少ない遺物に加えて、3号墳の区画溝からは同時期の須恵器壺B(図36-6)が、4号墳石室から土師器壺A(図36-11)が各1点ずつ出土している。

4号墳の開口部列石南側出土の土師器壺A(図36-12)は、口径が最大径をもち、形態・調整などから、4号墳と同時期である可能性も捨てきれない。

これらわずかな遺物からは、大きな時期差を読み取ることが不可能であるが、強いて言うならば、大坂城14・15層より新しい傾向が読み取れることから、難波宮III新段階～IV古段階および飛鳥III後半～飛鳥IVの範疇に入ると考えられる。

以上のわずかな土器から、3・4・6号墳の時期差を求めるのは困難であるが、一定の時期幅を提示

できたと考えられる。

なお、第1・2層から、7世紀代の土器として須恵器壺にはB・Gのみが出土していることからも、当古墳群の時期幅を追認できる根拠と考えられる。

### 3. 古代土器

#### (1) 古墳区画溝出土土器

次に、3号墳区画溝上層出土の須恵器壺Bおよび5号墳区画溝出土の須恵器壺Lおよび土師器皿A・C・土師器壺Cについて見ることとする。

須恵器壺B（図36-8）は、口径に比してやや丈高のもので、口縁部が外方へ開き、高台部が底部の変換点に付されることから新しい傾向が読み取れる。

須恵器壺L（図36-16）は、体部上半を欠損するが須恵器壺A同様の肩がやや張るものと考えられるもので、高台の付し方も須恵器壺B同様である。

土師器皿A・C（図36-9.10）は、口縁部端部が外方へ開き、内面に1条の沈線が巡っており、体部には暗紋が施されないものと思われる。

土師器壺C（図36-17）は、在地産のやや長胴形のもので、他に類例を見ないものである。

以上の土器の類例を見るならば、須恵器壺Bは長岡京北西北区域S D19605と、須恵器壺Lは同左京南一条三坊三町S D8903下層にそれぞれ似たものがあり、平城宮VIおよび難波宮V新段階に相当すると思われる。また、土師器皿A・Cは、平城京左京八条三坊六坪S E200に類例があり、平城宮Vおよび難波宮V中段階に相当すると思われる。なお、土師器壺Cは、区画溝の堆積状況からすると8世紀後葉から9世紀初頭の時期に相当すると考えられる。

以上のことから、古墳群の区画溝が埋没する状況が読み取れるものと思われ、9世紀代には、ほとんどの古墳の区画溝が埋まっていた様子が窺われる。

#### (2) 火葬墓出土土器

火葬墓1から出土した土器は、藏骨器である土師器皿Aと須恵器壺B蓋（図36-13.14）の組合せである。土師器皿は、口径と体部最大径が同一でやや偏平な器形と体部外面が縱方向の刷毛目であることから、郡家今城遺跡井戸1出土のものに類似しており、8世紀前半から中頃と考えられる。また、須恵器壺は、つまみ部が偏平で天井部が丸みをもちや丈高である。胎土がやや粗く、灰白色であることから、須恵器壺ではないと思われるが鹿地を特定できなかった。類例はないが、口縁部端部の形状から、平城宮IIIおよび難波宮V古段階に相当すると考えられる。

以上のことから、この組合せは8世紀前半から中葉と捉えることができる。

#### (3) 土坑1出土土器

土坑1出土の小型の須恵器壺Aは、体部の肩の張り具合から、平城京左京一条三坊十五坪S D485出土のものと類似する。最も、当遺跡出土のものには高台が付されない。平城宮IIおよび難波宮IV新段階に相当すると思われる。

#### (4) 焼土坑5

焼土坑5出土の灰釉陶器の小型瓶子は、平安京右京三条三坊三町S X07出土のものに類似しており、猿投の黒窯90号窯並行のもので、9世紀後半に相当する。

#### (5) 第1・2層出土土器

以上、遺構出土のもの以外に、第1・2層出土の遺物があり、それらを見ていくこととする。

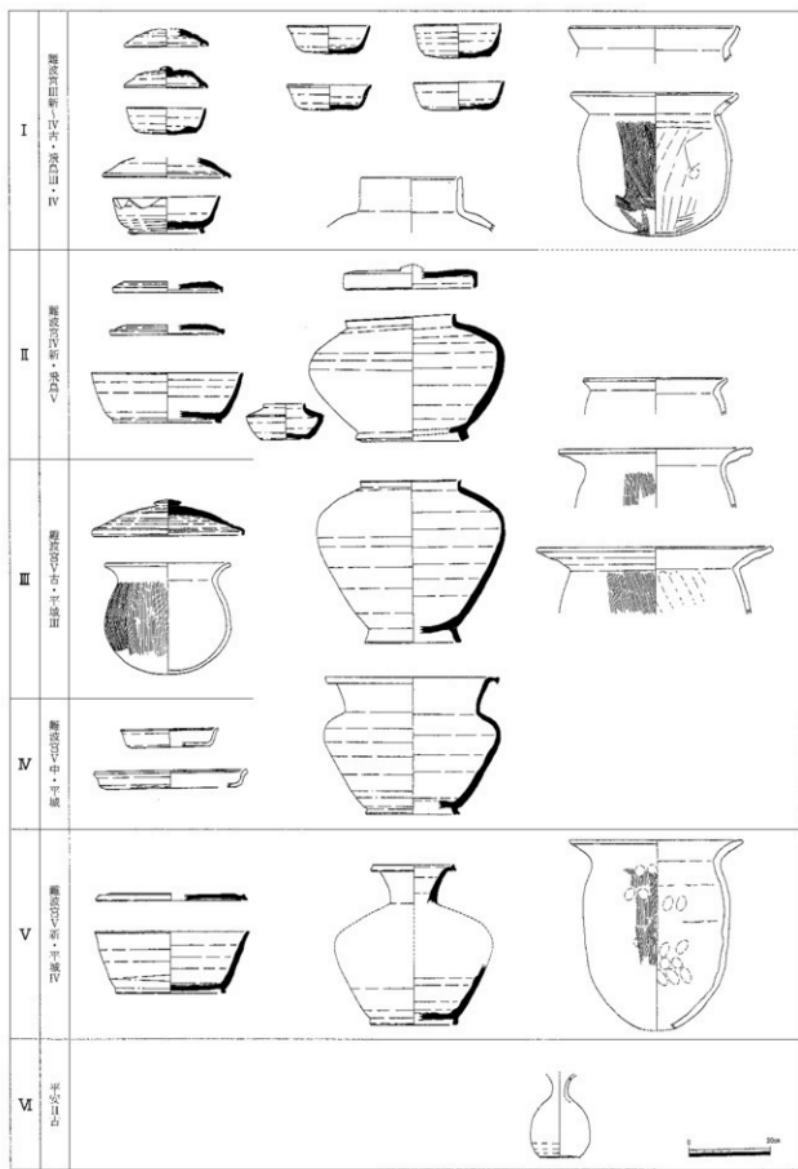


図134 古墳群・古代墓の土器の変遷

須恵器壺B（図37-10）は難波宮IV新段階に、（同図-24）は、難波宮V新段階に相当すると考えられる。また、（同図-22/23）は、藤原宮西方官衙地区S E 1105出土のものに類似し、飛鳥Vおよび難波宮IV新段階に相当すると考えられる。

須恵器壺A（図37-25～27）は、いわゆる「薬壺」と呼称されるもので当該期においては、藏骨器として用いられる例がままある。

(25.26)は、胎土や壺に付着した蓋の痕跡に蓋が一致することから、一対のものと考えられるが、口縁部端部の形状に差異がある。器壁が全体に厚みがあり、器高より最大径が大のやや偏平なもので、高台が厚みのあるものである。(27)は、器高より最大径が大であるが(26)と比較してやや丈高で、高台がやや高い。両者には、形態や胎土に差異が見受けられるが、それらが塵地差か時期差であるのかは判断に迷う所である。

類例としては、平城京左京一条三坊十五坪S D 485や定北古墳、大坂城S E 301出土のものなどがあるが、微妙に差異があるため、やや時期幅のあるものと考えられ、平城宮II～Vおよび難波宮IV新段階～難波宮V中段階の範疇に捉えられると思われる。

須恵器壺Q（図37-28）は、体部の肩の張り具合や高台の付し方が前述の須恵器壺Aに類似していることから、同時期と考えられる。

土師器には、壺B蓋（図37-13）や壺C（同図-7）などがあるが、いずれも小破片のため、確とはしがたい。また、短頸壺（同図-17）は器形から、難波宮IV古段階相当に類似したものがあるが、当遺跡出土のものは調整が不明なため、同時期としてよいものか、躊躇される。

なお、壺A（図-37-16）は、口縁部端部がわずかにつまみ上げられ、外端面をもち、頸部内面の屈曲に陵をもつもので、7世紀末から8世紀前半のものと考えられる。壺C（図37-18.19）は、長胴形のもので、口縁部が大きく開き外面に2条の強いナデを施している難波宮III新段階～V中段階の範疇に入ると考えられる。

以上、個々の土器の特徴を踏まえて、時期幅があるものかを見てきた。

#### 4. 古代土器の出土状況

以上、見てきた土器の出土状況を示したのが、図135である。特に、須恵器壺A・Qの分布状況を見てみると次のようなことが推測される。

地形的に見て、尾根が南西にやや振っており、南東に向けて傾斜が低くなっているところから、その分布状況は土器が壊れて破片になり、流失した状況が窺われる。このことから、本来、土器があった地點は、出土土器の最高位付近と考えられ、焼土坑群より北側に位置すると思われる。また、これらの土器は、藏骨器として用いられることが多いことから、火葬墓がその付近にあったと考えられる。

すなわち、焼土坑群の北側に、ほぼその墓域を設定することができると思われる。

なお、須恵器壺Bや土師器壺は古墳群周辺で検出していることは、興味深いものである。

#### 5.まとめにかえて

当遺跡の古墳および古代の土器について検討を加えてきたが、当初、古墳群と古代墓は数十年の時間差があり、断絶があったと考えられていたが、土器から見て、時期差があることが判り、継続性のあるものだと思われる。

最も、須恵器「薬壺」などは時期が特定できなかったが、遺構の立地等から火葬墓1と同様な時期と考えることが妥当ではないかと思われる。

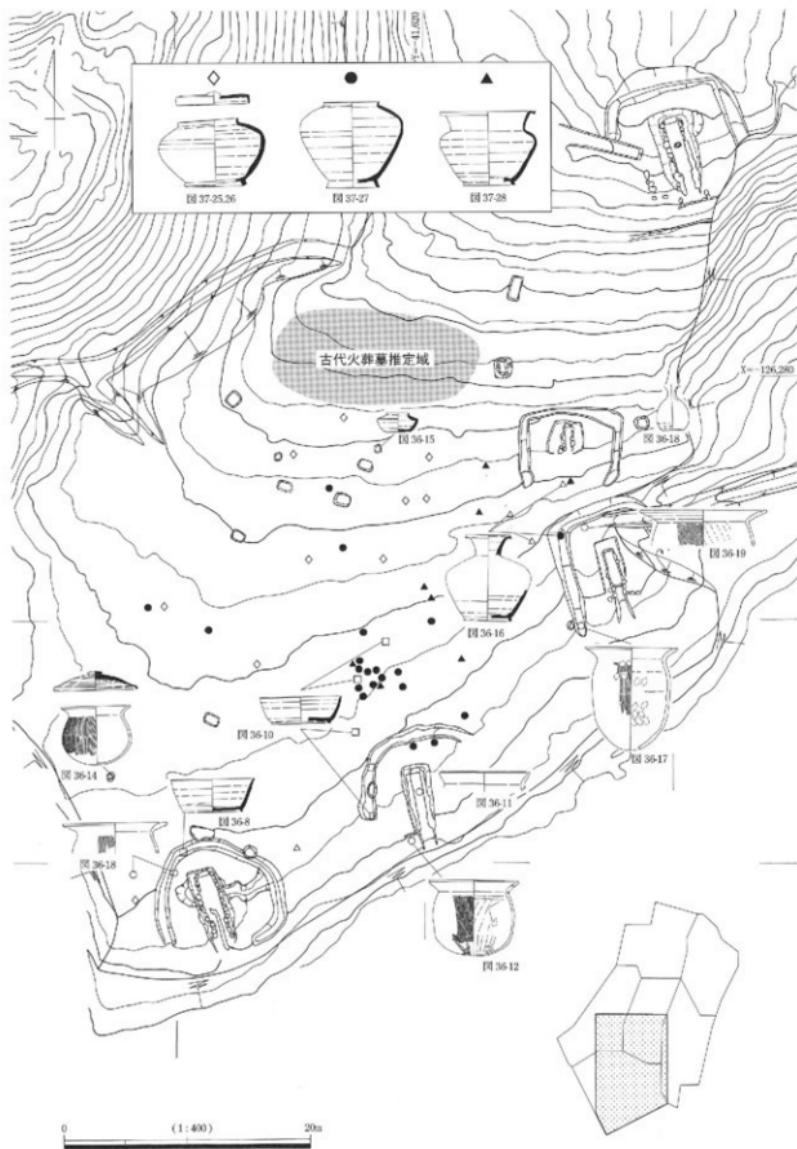


図135 古代土器の出土状況および古代火葬墓域推定図

いずれにしても、少ない土器で何處まで検証できるかは、疑問の余地が残るところであるが、一試案として受け止めていただきたい。

#### 参考文献

- 奈良国立文化財研究所 1962 「平城宮発掘調査報告II」 『奈良国立文化財研究所学報 第15冊』
- 奈良国立文化財研究所 1976 「平城宮発掘調査報告VII」 『奈良国立文化財研究所学報 第26冊』
- 奈良国立文化財研究所 1976 「兼島・藤原宮発掘調査報告I」 『奈良国立文化財研究所学報 第27冊』 奈良国立文化財研究所 1978 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告II」 『奈良国立文化財研究所学報 第31冊』 楠崎彰一 1983 「猿投げ窯の編年にについて」
- 前川 要 1989 「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究（上）」 『古代文化』
- 前川 要 1989 「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究（下）」 『古代文化』
- 古代の土器研究会 1992 「古代の土器1 都域の土器集成」
- 古代の土器研究会 1993 「古代の土器2・都域の土器集成II」
- 古代の土器研究会 1994 「古代の土器3・都域の土器集成III」
- 古代の土器研究会 1996 「古代の土器4・煮沸具（近畿編）」
- 林部 均 1998 「伝承飛鳥板蓋宮跡出土土器の再検討」 『櫛原考古学研究所論集 第十三』 （財）大阪市文化財協会 2000 『難波宮址の研究 第十一』
- 江浦 洋 2000 「難波宮北西の発掘調査」 （財）大阪府文化財調査研究センター

## 第2節 6号墳の構造および復元について

6号墳に関する事実記載は、本文第4章で述べたが、ここでは、それを踏まえて、その構造および規格について検討し、復元を試みた。

### 1. 構造

6号墳の築造に関しては、基本的に約18°の傾斜を持つ丘陵南斜面を利用し、盛土によって墳丘を築造している。

まず、6号墳の構造を理解するために、古墳の造成順序に従って、以下に記述してゆく。

6号墳は、先述したように、南面する斜面に位置し、開口部付近で傾斜が急になり30°を測る。築造前の地形の東西断面で見ると、南半部では東側がわずかに低くなり、平坦面をもつというよりは凹地状をなす。

#### (1) 選地

当古墳群の最も高所で、尾根の頂上からやや下った傾斜面の変換点に当たり、總ての古墳を見渡せる位置にある。しかしながら、1～5号墳からは、6号墳の開口部が見えない位置にある。

古墳築造に先立って、墓域の北端を区画するために斜面を「L」字状にカットする。その際、作業に向かうための経路と思われる東南部の地山直上に、階段状の造り出しを設けている。この階段状のものは、後に墳丘盛土に覆われる。

#### (2) 墓前祭祀

次に、石室位置の前面（2段日列石下部）に土坑が掘られ、その前面を水平に削平している。その水平面の上に、北端を掘削した時点の掘削土と思われる花崗岩の破碎土を10cm前後盛っている。そこで何らかの祭祀が行われたと考えられる。この土坑も、後に墳丘盛土に覆われる。

#### (3) 整地

次に、斜面地の高低差を解消するためと東西方向を平坦に均すために、墳丘の南半部に盛土がなされる。この盛土は、多い所で60cm程度残存していた。しかしながら、北半部が傾斜地であるために、南半部でも水平に土が盛られた訳ではない。

北半部では、風化した状態の花崗岩が削りだされており、それから推測すると、およそ10°の傾斜が想定でき、南半部で概ね1m前後の盛土が行われたと考えられる。

#### (4) 墓壙掘削

墓壙は、南面する斜面地に、上場幅約3m・下場幅約2m、上場長約7m・下場長約6mを測る孔を掘る。墓壙は、元々斜面地に穿つため、実際には断面L字状の形をなし、北側で深さ約2mを測る。墓壙は、北側約1/3程度が粗粒花崗閃緑岩の地山で、それをくり抜いて造られているために、その側壁に工具痕を残している。

また、南側の東西断面観察から、東側がほぼ垂直に墓壙が掘られているのに対して、西側では緩やかな傾斜をなしている。

#### (5) 石室構築

墓壙掘削後、墓壙の下場北端から2.32mの床面に径0.3m×0.25m、深さ5cmの不整形な浅い孔を穿ち、平らな割石を据えている。

この石は、古墳造成の要石と考えられる。これについては、後述する。

次に、奥壁および側壁の石を据えるための溝を掘ることにより、主体部および羨道を造りだす。その溝は、「コ」の字形に掘られ、幅約20~30cm、深さ25~45cmを測り、開口部から奥壁に向けて深さが増している。

玄室は、幅が中心部で1.2m・奥壁部で1.06mと中央部がやや膨らみをもち、長さが4.2mを測り、羨道部の幅は0.6m、長さが1.8mを測る。

石室は、まず、奥壁の幅1.14m、高さ1.02m、厚み0.48mを測る基底部石を1石置き、その後、東側の側壁基底部を奥壁側から設置し、西側の側壁も同様に設置していく様子が窺われる。それは、基底部石が奥壁に向かってわずかにもたせ掛けるように設置していたことから推測できる。基底部石は、先述したように、幅30~50cm、高さ60~80cmを測り、大きさに多少の差異があるが厚みがほぼ25cmと一定である。基底部石は、床面より下部が1/2以上埋め込まれており、基底部石の裏込めには、墓壙を掘削した花崗岩の破碎土が緻密に詰められていた。その土は、掘削時点で、一見地山の岩と見間違えたものである。

2段目の石が残存している部分で見ると、ほぼ奥壁の高さに揃っているところから、その段階で、一端、高さを揃えたものと思われる。なお、2段目の石は、側壁の基底部同様の石を横位に設置していることが判る。このことから、2段目以上は、石を横位に積んだ可能性も考えられる。

石室の裏込めの残存していた部分に數ヵ所窪みが見られることから、奥壁や側壁の石の痕跡と考えられ、基底部石を除き4・5段の石が積まれていたと推測できる。

また、同様な奥壁の石の痕跡から、基底部石の上に左右2個の石が4段積まれていたことが推測できる。なお、その痕跡から、床面から天井石までの高さが約1.3mと考えられる。

羨道部の石は残存していなかったが、玄室から続く溝は羨道部の方が深くなり、特に東側端では60cmを測っている。南側東西断面から、少なくとも基底部石を含めて2段は石が積まれていたことが判る。

墓壙の床面は、奥壁に向かいわずかに低く、数cmから10cm程度土を敷き、5cm~10cmの川原石を敷きつめている。羨道部には、ほとんど疊が残存していなかったが、本来、有ったものと考えられる。

#### (6) 墳丘築造

墳丘は、北辺および東西両辺に溝を穿つことにより区画され、南辺は、段を造りだすことにより区画されている。その内側に盛土することにより、台形の墳丘を造成している。

造成された平坦面は、後世の削平を受け厳密には築造当時の状況を残していないが、東西方向の北側で上辺7m、下辺9m、南北11m・南側で上辺約8m、下辺約10m、南北12mを測る。

盛土はほとんどが削平され、下半部でわずかに確認された。

1段目は、墳丘南側の両端が消失しているため、定かではないが15~20cmの段が残存しており、原位置を保つ石や周辺からも石が検出されなかったことから、土のみの段であった可能性が高い。

2段目は、中央部で東西に並ぶ石列を検出しており、石列は1段のみの残存で、中心から対称位置に南北に並ぶ階段上の石列を検出している。

3段目は、西側にのみ「L」字形に残存しており、残存状況や断面観察によると、斜面地に石を設置している所から、東西方向が3~4段積まれ、南北方向では北端が1段でその高さに合わせて2段程が積まれたと考えられる。東西方向の石列は羨道部の先端に取り付くと思われる。

4段目は、玄室部を覆う墳丘でほとんど残存していない。その一部が3段目石列東側に痕跡を止めている。

### (7) 区画溝

区画溝は、当初述べた様に、北側の斜面を「L」字状にカットすることで墳丘を造りだしている。東西の溝は南側に向かってやや開き、深さを減じながら段道部当たりで途切れると考えられる。

以上、平面・断面図を基に6号墳の構造を見てきたが、次に、その規格について見ていくたい。

## 2. 規格

古墳には何らかの規格があり、それに則って古墳が築造されたと考えられ、その規格を見いだすために設計図の復元と本来の6号墳の姿の再現を試みた。

### (1) 基準

最初に、6号墳の基準になるものが何であるかをここで検証していきたい。そのために、墓壙床面に埋め込まれた割石が、一体、何の役目を担っていたのかを、見ていくこととする。

まず、古墳造成時の状況と差異が無いと考えられ、残存状況の良い墳丘盛土の北側下場ラインの中心と墓壙の東西二分割線が一直線に繋がり、その線上に先述した墓壙床面に設置された割石がある。しかも、その線上の北側区画溝の外側と南側の1段目の段、すなわち、南北方向のほぼ1/2位の所にその右が位置していることが判明した。また、東西方向のほぼ1/2位に位置している。

以上の事から、この割石が6号墳の中心に位置すると捉えることができる。

しかし、この石は墓壙の中心位置からは、ずれていることが判る。

次に、石室の中心線を見ると、先程の墓壙の中心線とずれていることが判るが、石室の中心線も辛うじてこの割石上を通っていることが判る。

本末であれば、墓壙の中心線と石室の中心線が重なりを見せると思われるのであるが、何らかの理由で、石室を設定する時点、すなわち、基底部石を設置するための溝を掘削する時点で修正が加えられたことを窺わせている。

### (2) 規格

前述したように、この割石が6号墳の中心位置をなすとするならば、この古墳の築造にどの様に係わっているのかを、次に見ていくこととする。

割石を中心と考えた場合に、以下の様な作業工程を行い検証していく。

第1に、石室を東西に2分する線を中心線と捉え、割石を通り、その直行する線を設定し4分割をする。

第2に、石室の幅の2分割した長さ、すなわち、石室幅 $1.2m \div 2 = 0.6m$ の枠目を古墳全体に掛けれる。

以上の作図をした後に、6号墳の配置を見ると次のようになる。

まず、玄室の幅は、前述した通り枠目2個分であり、その長さは奥壁に向かって枠目3個分強、開口部に向かって枠目4個分であることが判り、割石から開口部の長さと同じ長さは、奥壁の内法ではなく奥壁の外側、すなわち、墓壙の下場であることが判る。

次に、羨道部の長さは枠目3個分で、2段目の列石までが枠目4個分である。その幅が枠目1個分である。

さらに、割石から北側墳丘下場、2段目列石、および東西両墳丘下場の長さがそれぞれ枠目8個分に当たり、2段目列石幅がその2倍になると推測できる。なお、1段目の幅が6号墳の南北長と同じ距離になると想定できる。

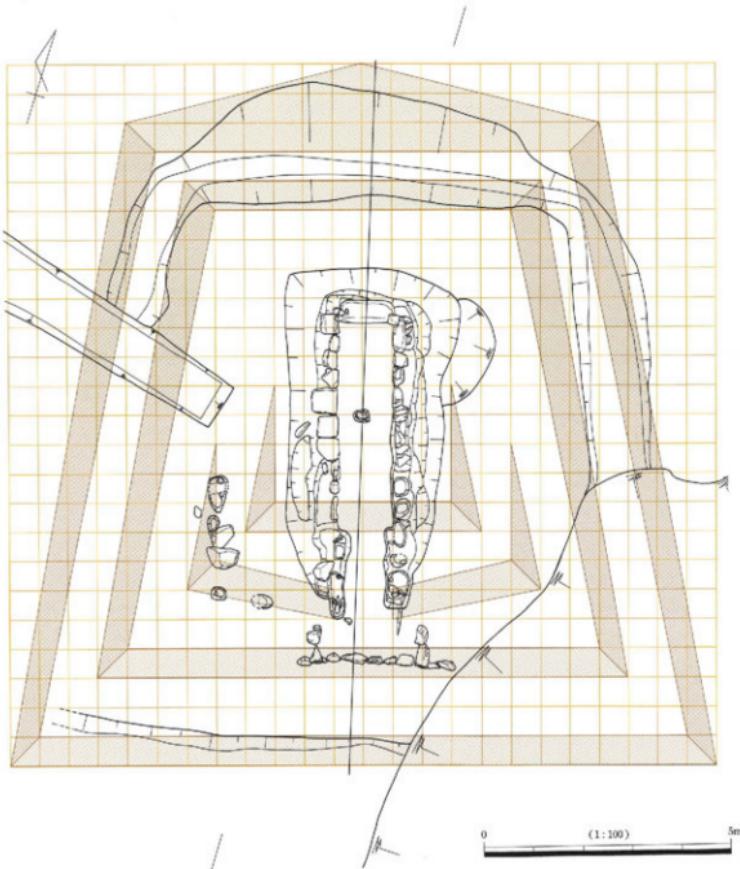


図136 6号墳築造規格(1)

しかしながら、墳丘北側の両角がこの折目では左右対称にならないのは、先述したとおり、墓壙掘削時点までの中心軸と石室の中心軸のずれのためで、石室構築以前に区画溝が掘削されていたことがこのことから検証できる。

### 3. 復元

これまで見てきたことを、総合的に判断して6号墳の築造当時の復元を試みると図136・137のようになると考えられる。

すなわち、6号墳は、平面形で見ると、1段目1辺13.2m、2段目1辺9.6m、3段目6.0m、4段目が1辺4.8mを測る正方形の区画内に納まり、さらに、それらの各角が対角線上に並ぶことが判る。

また、立面で見ると区画溝の北端から1段目下場までの比高差は4.8m、2段目4.2m、3段目3.8m

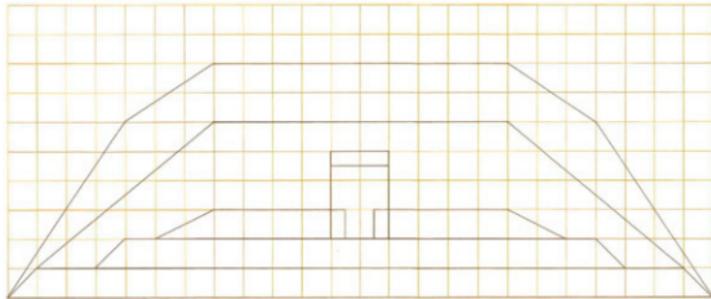
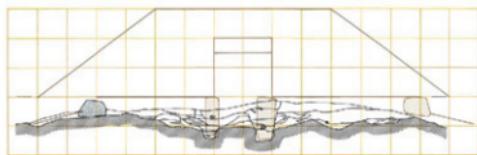
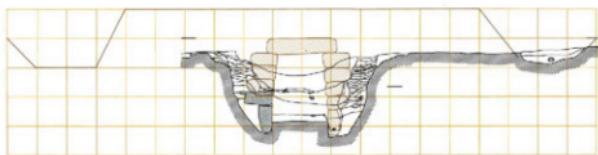
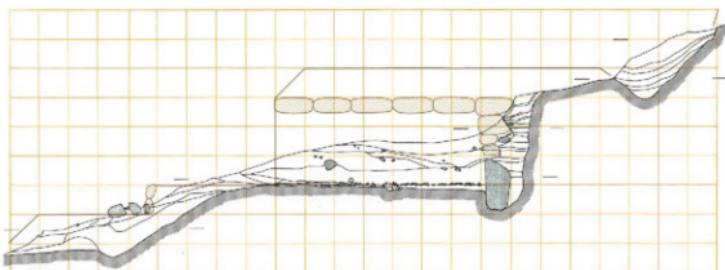


図137 6号墳築造規格(2)

を測る4段築成で高さ3.6mの墳丘をもつ古墳である。しかしながら、4段築成の墳丘をもつといつても、前面から見た場合および南側半分のみであり、北側半分の墳丘は段築構造ではない。

このことは、6号墳が、正面から見た場合の立派さを保ちつつ、如何に盛土を少なくして築造するかに重点を置いたものと考えられ、そのためには、墓壙を深く掘ることと、不利な斜面を利用することであったことが窺われる。

また、1段目については、墳丘とするか疑義のであるところではある。古墳全体の区画割りに合致しているところから、三方を巡る区画溝と同様な要素を持つとも考えられ、前面のテラス面と捉えることが妥当と思われる。そうすると、3段築造の古墳になる。

なお、6号墳の南側10m、標高約133mの所に平坦面を造りだしている。これは、後世に中世墓として再利用されているが、本来、6号墳に伴う作業的なものに使用されていたと理解できる。さらに、この平坦面の西側には、木棺墓1が築かれていることからも、6号墳との関連性を意味付けるものと推定される。

#### 4. 他の古墳との比較

さて、以上述べてきたことが、栗柄山南墳墓群で当てはまるものなのかを検証してみた。

##### (1) 1号墳

6号墳同様に、石室の幅0.50mの1/2のメッシュを切ってみると、石室長は石室幅の4倍であることが判るが、石室の位置が墳丘北半のやや西よりに配置されており、石室と墳丘の中心線が大きくずれていることが判る。墳丘と石室の配置の規格性は見いだせなかった。

しかしながら、5号墳との関連性で見るならば、当初の設定通りに墓壙を墳丘中心に穿つと、開口部が5号墳に近づき過ぎることから、前面に一定の余地を確保するために、北西にずらせたものと考えられる。

さらに、当初の石室位置を復元すると、石室長が墳丘長の2/7で中心に位置することが窺われた。

なお、3～5号墳の墳丘と石室とを比較した場合でも、總て墓壙および石室が西側に寄っていることから、1・3～5号墳共通の何らかの意図が働いたものとも受け取られる。

なお、2号墳に関しても、墓壙中心に石室が設置されおらず、西側にずれているのも同様な理由があつたとも考えられる。

##### (2) 3号墳

3号墳も、1号墳同様に墳丘の中心と石室の中心が大きくずれており、墓壙と石室の中心もわずかなずれを生じている。石室長が全長の約1/2の長さである。

奥壁は、墓壙下端から奥壁幅の1/2の長さの位置に設置されている。石室奥壁幅の2倍が墓壙幅に相当し、墓壙長が約7倍になると思われ、玄室長は石室幅の約3倍、羨道長と石室幅が同じ長さである。

また、古墳の平面形を方形に開いた四隅の交点を求めて中心線を引くと、奥壁東側に当たることが判った。石室は、墓壙の東側に寄っていることと側壁が奥壁に向けて傾いて設置されていることから、奥壁設置後、東側側壁から設置されたものと思われる。

##### (3) 4号墳

4号墳は、東側区画溝を消失しているので確とはしがたいが、3号墳同様、墳丘と石室の中心が大きくずれている。石室長が全長の1/2を占める。石室の基底行が總て抜き取られているため、実態が不明であるがその抜き取り孔から復元すると、羨道幅は石室幅の2倍、石室長が同5倍になると思われる。

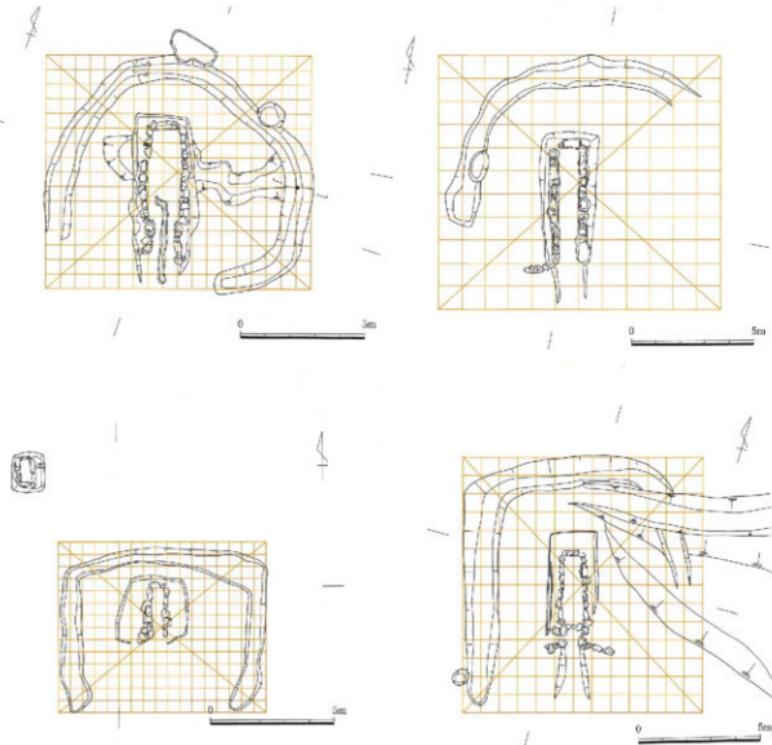


図138 1・3～5号墳築造規格

奥壁は墓壙に接する様に置かれたと思われ、その内法位置が石室幅の1/2の長さである。

また、4号墳も3号墳と同様に中心線が石室東側壁に沿っていると考えられる。

なお、側壁の抜き取り孔の位置からすると、東側壁から設置されたと思われる。

#### (4) 5号墳

5号墳も、前述の古墳と共に持つ要素を持っており、墳丘と石室の中心線がずれている。石室長が全長の1/3の長さである。石室幅の2.5倍が墓壙幅で、同6倍が墓壙長と考えられる。

奥壁は、墓壙下端から石室幅の長さの位置に外法が該当し、玄室長（樋石の所まで）が、その外法から石室幅の4倍の長さになり、石室幅と談道長が同じ長さである。

墓壙と石室の中心線は、本米、わずかにずれていたが、西側に溝を穿つことで幅を揃えているようにも窺われる。

この古墳も同様に、側壁が東側から設置されたと考えられる。

#### (5) 古墳群の比較

以上、各古墳を概観してきたが、2号墳を除く1～6号墳に共通する点は、それぞれの石室長は違う

ものの、各石室幅が各古墳造営時点の基準長になっていたと思われることである。

さらに、相違点を挙げるならば、以下のようになる。

①古墳の平面形は、以下の様な規格であると思われる。

- ・ 4号墳 {石室幅×11………10.5m}
- ・ 6号墳 {石室幅×11………13.2m}
- ・ 3号墳 {石室幅 8 × 9 …… 9.6×10.8m}
- ・ 1号墳 {石室幅14×17…… 7.0×8.5m}
- ・ 5号墳 {石室幅14×13……10.5×9.75m}

単純に区画面積のみで比較すると、6→4→3→5→1号墳の順に小さくなり、4・6号墳が正方形であるのに対して、1・3号墳が横長、5号墳が縦長な方形である。

②6号墳は、石室・墓壙・墳丘がほぼ同一の中心線からなり、左右対象であるが、1・3～5号墳は、墳丘と石室の中心線が同一ではなく、その中心線が石室東側壁に沿っている。

③石室長は、3・4・6（前庭部を含む）号墳が全長の1/2で、5号墳が1/3であるのに対して、1号墳が2/7である。

④石室幅と石室長の比率で比較すると、1・3・5号墳が1：4で、4・6号墳が1：5である。

⑤奥壁の設置状況は、1・3・4号墳が基準線を内法に設定しているのに対して5・6号墳が外法に設定している。

⑥石室の基底石は、「コ」の字形に溝を穿ち、奥壁から設置し、次に側壁が東側側壁奥から設置している。

以上の相違点が、何に起因しているのかは、定かでないが、横穴石室をもつ古墳の最終段階を現しているものと考えられ、古墳をつくるための機能の省略化が窺われるものと思われる。

## 5.まとめにかえて

栗柄山南墳墓群の各古墳について、その規格性が最も優れているのが6号墳であることが判ったが、他の古墳についても、墳丘や石室の設定に一定の規格性が見いだせたと考えられる。

しかしながら、ほとんどの古墳には、墳丘の盛土が残存しておらず石室も墓底部石のみであったことから、全容を把握しての復元ができなかったのは残念なことであった。ともあれ、当古墳群を理解する上での一方法と考えられる。

また、当古墳群を立地的に見た場合に、茨木川流域において最も高所に所在し、当古墳群からは、晴れた日には生駒山地が綺麗に見渡すことができる。なお、試掘調査を実施した福井北古墳群では、同様な時期の古墳が3基以上確認されており、茨木川流域の古墳群の有り様の一端が解明できたものと考えられる。

## 第3節 古代・中世における茶毘施設の検討

### 1. はじめに

栗栖山南墳墓群では、古墳群・中近世墓群を中心に複数の時代の墳墓を検出している。その中で、古代・中世の茶毘施設と思われる遺構がある。<sup>1)</sup>この茶毘施設は、土坑の壁や床面もしくは土坑内の石が被熱を受けており、なおかつ埋土に炭を含むという点が挙げられ、いわゆる「焼土坑」の性格をもつ遺構である。<sup>2)</sup>しかしながら、この種の遺構を茶毘施設とすることに否定的な意見もある。そこで、本節ではまず、既往の研究等を参考にして茶毘施設としての妥当性を検討したい。その上で、各地で検出されている古代・中世の茶毘施設を概観することで、その変遷などについても若干考えることにしたい。

### 2. 栗栖山南墳墓群で検出された茶毘施設

検討に入る前に、当墳墓群の茶毘施設についての概略を述べることにする。当墳墓群で茶毘施設と考えている遺構は203基を数える。この遺構は、前述した「焼土坑」の特徴を有するものである。当墳墓群においては、この「焼土坑」に焼土坑・火葬墓A類・火葬場という3種の名称を使い分けている。

#### (1) 焼土坑

焼土坑は11基が検出されているが、ここで茶毘施設と考えているものは墳墓群が広がる尾根の中腹で検出された7基である。これらは、土坑の規模が一辺0.8m~1.3m前後であること、平面形が方形または長方形を呈すること、壁面がほぼ垂直に立ち上ること、そして焼けた人骨を全く含まないこと等の共通性がある。さらに焼土坑5を除いては、埋土が炭を多量に含む下層、炭を少量含むか全く含まない上層の2層の水平堆積という点でも共通している。

この焼土坑を古代の茶毘施設と考えた根拠は第4章第2節での報告のとおりである。その根拠を再度記すと、土坑の主軸方向が中近世墓とは異なり東西を指向すること、焼土坑5からの9世紀後半の灰釉陶器の出土、焼土坑2の考古地磁気測定年代が8~10世紀であること、さらに火葬墓1の存在や8~9世紀の蔽骨器と考えられる須恵器壺や土師器壺が10数点、尾根の南側で出土していることが挙げられる。

ここで茶毘施設と仮定すると、焼骨が全く検出されることは拾骨を丁寧に行なったからと考えられる。また、埋土中の炭は混在していないので、1回のみ茶毘を行なったものと考えられる。なお、その上部に石組など検出されていないので、墓ではなく「一度限り使用の茶毘施設」であったと考られる。ただ、焼土坑5は下層が炭層ではなく、上層が灰釉陶器と共に石が落ち込んでいた。よって、木櫃等が掘えられていた墓であった可能性も考えられるが、焼骨が検出されておらず、断定はできない。

#### (2) 火葬墓A類

火葬墓A類は、先の焼土坑と同じ尾根中腹のほぼ全域で196基検出している。土坑の規模は、一辺0.6m~1.6mと非常に幅広く、平面形も方形・円形・長方形・楕円形と様々である。また、埋土は炭を多量に含む下層と、含まない上層の2層で構成される。この下層には焼骨を含むものが多く、なお明らかに骨を意識的に埋置したと捉えられるものもある。さらに、燃焼効果を高める棺台・煙道を有するものもあり、茶毘施設とするのは妥当であろう。また、棺台の存在、鉄釘の出土から、茶毘時に木棺を使用していたと思われる。遺物・墓群の構成から14世紀中葉~15世紀代に営まれたものと考えられる。

この火葬墓A類は、埋土から考えると茶毘を行なった後に拾骨をするために土坑内に片付けて、一部の焼骨を再び納めて、埋め戻すという過程が復元できる。土坑上には石組を築くことから、「一度限りの

茶毘施設を墓とする」遺構と捉えることができる。

### (3) 火葬場

火葬場も同じ尾根の中腹の両半部で7基検出している。土坑の規模は、最小が火葬場6で $1.6 \times 1.3$ m、最大が火葬場2で $3.7 \times 3.4$ mを測るもので、火葬墓A類よりも大きいものである。ただ、火葬場2も燃焼範囲自体は、1.5~2.0m前後である。埋土は焼骨を含む炭層で、この火葬場一帯が焼骨を含む炭盛土で厚く覆われていた。明らかに焼骨を置いたような状況は見られない。また、棺台・煙道をもつものもあるが、これも火葬墓A類に比べ、大きいものである。土坑内及び炭盛土から、多量の鉄釘・銭貨・土器が出土しており、これらから15世紀後半~16世紀中葉が中心に営まれたもので、近世以降も使用された可能性はあるが永続的ではなかったようである。

この火葬場は、規模が大きく、埋土が全て炭層であることから何度も茶毘を行った場所と考えられる。よって、墓ではなく「複数回使用の茶毘施設」として認識した。

### (4) 小結

以上のように当墳墓群で検出された茶毘施設は、その構造・規模そしてその使われ方に時期による差異が認められた。まず、構造の面では中世火葬墓A類・火葬場には棺台・煙道といった燃焼効果を高める設備が見られることが挙げられる。次に、規模の面では火葬場になると大きくなるようである。茶毘の回数としては、古代焼土坑および火葬墓A類では一度限り、一方火葬場では複数回の使用である。また、火葬墓A類は石組を構築して墓としての意識が見られることも、古代との違いと言える。

## 3. 「焼土坑」の茶毘施設としての妥当性の検討

栗栖山南墳墓群で検出された古代・中世の茶毘施設と考えた遺構について述べてきた。本節では、この妥当性について、既往の研究にも触れながら検討していくことにする。

### (1) 古代における茶毘施設の評価

藤澤一夫氏が奈良県郡郷村小治田安萬倡墓を「火葬場即ち墓」と指摘したことが、仏教的な茶毘が行われた遺構を認識した最初であろう<sup>3)</sup>。藤澤氏は、床面には玉石が敷かれた一辺3.5mの方形の土壇で茶毘を行い、その後清掃を行い炭が混じった土で埋め戻し、盛土を設け藏骨器である木櫃と墓誌を埋納したと考えている。報告・関係文献には土壇の被熱や焼骨出土の記載がなく、藏骨器が共伴したことと、土壇が人を茶毘するのに十分な規模を有していることが、茶毘施設とする根拠であったと思われる。最近精力的に研究を進めている小林義孝氏も、同様の根拠で、大阪府柏原市川辺7号墓、奈良県平群町高安山第10号墓、同天理市柏之内火葬墓で検出された火化遺構を茶毘に付した遺構として挙げている<sup>4)</sup>。

一方、当墳墓群で検出されたような一辺が1.0m前後で、なおかつ焼骨が検出されない「焼土坑」はどういう評価されているであろうか。森本徹氏は、当墳墓群のような7世紀の終末期群集墳等で見られるこの種の「焼上坑」を、藏骨器と思われる土器の存在、立地状況から茶毘を行った「火葬遺構」と判断している。当墳墓群においても森本氏と同様に周囲の状況を踏まえて判断したものである。

しかし、この見解に対しては慎重な意見をとる者が多い。その中で安村俊史氏は、第一に時期の判別が難しいこと、第二に壁面の火化が弱いこと、第三に焼骨の出土がないこと、第四に木棺等の痕跡を示す鉄釘が出土しないこと、そして茶毘を行うには規模が小さいことを挙げて、茶毘施設としての否定的な見解を明文化している。これは、茶毘施設の否定的な意見を集約したものであろう。

### (2) 中世における茶毘施設の評価

一方、中世墓研究においては、当墳墓群の火葬墓A類や火葬場と類似した遺構を茶毬施設として捉えることは、極めて一般的である。その理由は、焼骨が検出されることが多いこと、鉄釘の配置から木棺が復元できること、類例が増加したことが挙げられよう。また、兵庫県養久・乙城山遺跡では当火葬墓A類と構造・規模が類似する15世紀後半～16世紀前半の火葬跡が検出されており、犬による復元実験を行い、拾骨が可能な程度の茶毬を行うことが可能であるとされたことも重要な指摘であろう。<sup>72)</sup>

しかし、特に火葬墓A類としたものについて名称や解釈にやや見解が異なる場合がある。佐々木好直・岡本直久・太田三善三氏は、焼骨が検出されないものに関しては、墓とはせずに火葬施設としている。<sup>73)</sup>しかし、先の三氏も指摘するが、この両者は土坑の構造や規模に明瞭な差がないことが多い。当墳墓群では両者共同様に石組を構築しているので、広義で墓として捉えることにしている。また、乾哲也氏は大阪府和泉市万町遺跡において、遺構名は「火葬土壙」としているが同様の見解を示している。<sup>74)</sup>いずれにせよ、中世において「焼土坑」が茶毬施設である見解は、大方首肯されていると言える。

### (3) 小結

以上、古代と中世における茶毬施設に対する見解を示してきた。古代における否定的な見解の最大の根拠は規模の大きさと、焼骨が検出されないことであろう。<sup>75)</sup>まず、規模に関しては、当墳墓群においての比較が参考になると思われる(図139)。また、焼骨の有無に関しては、香川慎一氏も指摘するように火葬が基本的に捨骨を行う葬法である点で、やはり否定的な根拠としては成りがたい。しかしながら、「焼土坑」単体の存在のみで茶毬施設と判断するほどの根拠を、この遺構は有していない。よって、重要なのは周囲の様々な状況を踏まえた上で、遺構の性格を決定する必要があるということである。

## 4. 古代・中世の茶毬施設の変遷に関する予察

これまで当墳墓群における古代・中世の茶毬施設について検討してきたわけであるが、次は各地の古代・中世における茶毬施設を概観することで、その変遷の見通し、今後の課題としたい。この種の遺構は各地で検出されているが、今回、筆者が知り得た内で特徴的なものを図140にまとめた。

さて、先述したように最古の茶毬施設は、墓誌により没年が729年と確認できる從位四下・小治田安萬侶墓である。これは、規模が3.5m前後とかなり大きく、また施設自体に木櫃の蔵骨器が作うものである。一方、当墳墓群を始め、森木氏が火葬遺構として指摘した宝塚市山本奥古墳群等の終末期群集墳で検出された「焼土坑」は、規模が1.0m前後と小さく、蔵骨器を直接には伴わないものである。だが当墳墓群などに周辺で蔵骨器と思われる須恵器壺・土師器甕などが確認でき、時期的には8世紀前半・中葉のものが多い。よって、8世紀前半には茶毬施設の規模、蔵骨器の違い、またその共伴の有無に違いがあるということが言える。この時期は、「続日本紀」文武3(700)年条に僧道昭の火葬がその最初である

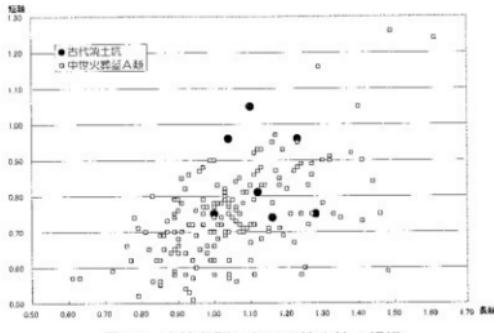


図139 当墳墓群における焼土坑の規模

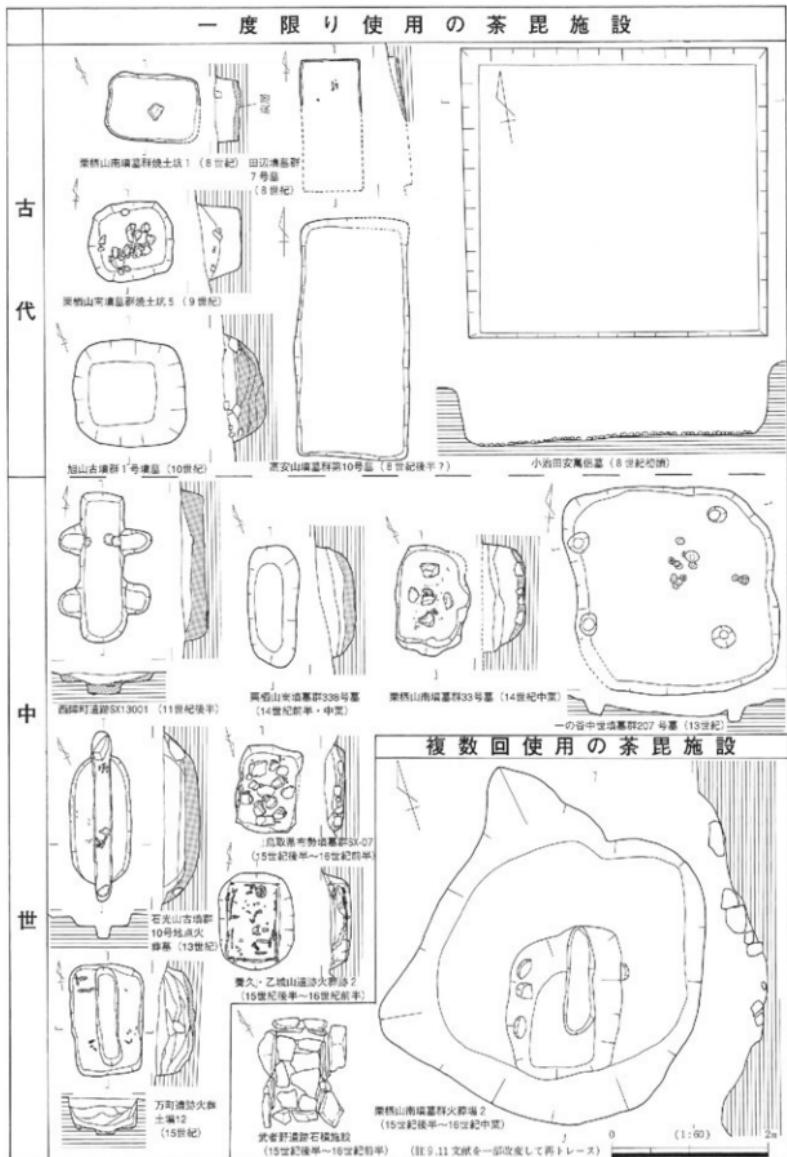


図140 古代・中世の茶毬施設

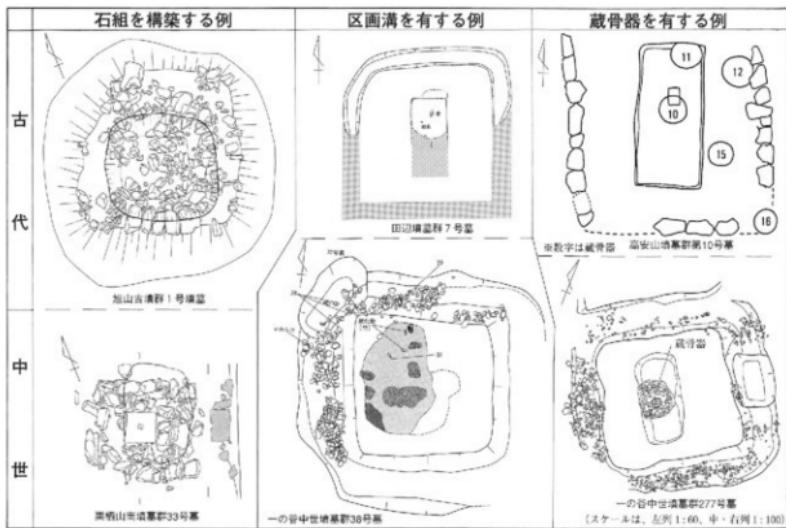


図141 茶毘施設に付随する施設

とする記載から考えられるように、日本で仏教に基づく火葬が行われた初期である。この段階に火葬の内容に差異が見られるということは、既に被葬者間の階層差がかなり見られたものと言え、火葬の技術の伝来、その受容の在り方を考える上で重要なことと思われる。

また、煙道や棺台といった燃焼効果を高める施設を有するものは、京都府長岡市西陣町遺跡のものが11世紀で最古と思われる。これは、長辺各辺2つずつの突出した掘り込み部をもつもので、2本の丸太を渡し、煙道の機能をもつと考えられている。また、長軸方向に溝を設け煙道とするものは、13世紀には奈良県当麻町石光山古墳群のものが挙げられる。このタイプは、乾音也氏が万町遺跡で指摘するよう、煙道が短くなり土坑内に収まる傾向がある。当墳墓群では土坑内におさまる69号墓等と、一端が突き抜ける197号墓がある。一方、棺台を有するものは、当墳墓群では33号墓等があり、14世紀中葉から出現している。よって、このような施設は中世に始まる可能性が高いと指摘でき、技術的な進歩と評価できよう。しかし、古代との連続性、その背景についてはここで検討する余裕もないが、仏教がより広まっていき、火葬が漫透していく中世という時代の芽生えを反映していると言えるかもしれない。

茶毘施設を区画する施設としては、溝と石組がある（図141）。石組を有する例としては、京都府旭山1号墳墓が最古の例で、13世紀以降には一般的に行われるようである。一方、区画溝を持つ最古の例としては田辺7号墓が挙げられ、中世には静岡県磐田市一の谷中世墳墓群遺跡等で検出されている。また、区画をもち藏骨器を共伴する茶毘施設は、古代には奈良県平群町高安山第10号墓、中世には一の谷277号墓等が挙げられる。このように区画をもつものは古代・中世を通じて存在しており、古代にも墓としての意識されたものもあったと言える。また、一の谷277号墓例は、茶毘施設の規模も2.5m前後と大きく、中世にも同様に被葬者間の階層差が見られたということを指摘できよう。

さて、当墓群の火葬場のような複数回の茶毘を行ったものには、滋賀県大津市上田上牧遺跡 T5-1、

SX02や福井県福井市武者野遺跡の石積施設がある。前者は当墓群の火葬場と類似する約3.0×2.4m、後者は石積炉ともいべき施設である。両者とも、当墓群の炭盛土のように周間に焼骨が混じった炭層が確認でき、多くの回数の荼毘が行われたものと思われる。このタイプは時期的には15世紀以降に出現すると思われ、より火葬が下位の階層に浸透してきたと見ることができよう。以上、古代・中世の荼毘施設について概観してきたが、今後これを基にさらにその背景を踏まえ研究を深めていきたい。

## 註

- 1) 茶毘を行った遺構は、「火葬遺構」、「火化遺構」、「火葬施設」などと呼称されることが多い。ここでは火葬という用語は、荼毘・焼骨・納骨といった一連の行為を指すと考えており、荼毘施設と一貫して使用する。
  - 2) 同様の「焼土坑」の定義は森本徹氏によってなされており、本稿も森本氏の研究に学ぶことが多い。  
森本 徹 1991「火葬墓と火葬遺構—群集墳周辺にて確認される「焼土坑」の検討-」『大阪文化財研究』第2号  
(財) 大阪文化財センター
  - 3) 藤澤一夫 1956「墳丘と墓誌」『日本考古学講座』第6巻歴史時代(古代) 河出書房
  - 4) 小林義孝 1997,1998「古代火葬墓の第一類型—河内田辺古墓の再検討ー」『大阪文化財研究』第13,14号 (財) 大阪府文化財調査研究センター
  - 5) 森本証! 文献
  - 6) 安村俊史 1997「河内における奈良・平安時代の火葬墓」『堅田寅先生古希記念論文集』同刊行会
  - 7) 深井明比古 1988「箕久・乙城山 兵庫県文化財調査報告第58回」兵庫県教育委員会
  - 8) 佐々木好直 1988「奈良県の中世墓」『権原考古学研究所論集』第十 吉川弘文館  
岡本直久 1994「東海の中世墓」(財) 濑戸市埋蔵文化財センター
  - 9) 太田三喜 1997「中世墓の様相—大和を中心にしてー」『西谷真治先生古稀記念論文集』西谷真治先生の古稀をお祝いする会
  - 10) 森本氏は、土坑の規模について古墳時代後期の木棺の規模から推定すると問題は残るとしている。
- 註1) 文獻
- 11) 香川慎一 1996「焼土坑に関する再検証」「論集しのぶ考古—日黒吉明先生上頃寿記念ー」同刊行会
  - 12) 図135,136に記載した遺構図は、註4)・註9)文献および以下の文献から作成している。  
河上邦彦 1983「高安城跡調査概報2」『奈良県調査概報 1982年度』(第2分冊)奈良県立橿原考古学研究所  
木下保明編 1981『旭山古墳群発掘調査報告』(財) 京都山埋蔵文化財調査研究所  
木村康彦他 1985「長岡京跡右京第130次(7ANKNC地区)調査概要—右京五条三坊十四町・西陣町遺跡」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第2集』(財) 長岡京市埋蔵文化財センター  
前田 均・神谷伊鶴 1998「布勢墳群」(財) 鳥取市教育福祉振興会  
白石太一郎ほか 1976『鳥城・石光山古墳群』奈良県立橿原考古学研究所  
角田文衛 1979「小治山安萬偶の墓」『古代文化』第31巻第7号  
花田勝弘 1987『田辺古墳群・墳丘群発掘調査概要』柏原市教育委員会  
水野和雄 1986「武者野遺跡—国道158号線改良工事に伴う事前調査報告ー」福井県朝倉氏遺跡資料館  
山崎克己他 1993『一の谷中世墓群遺跡』雪野市教育委員会
  - 13) 清水ひかる 1998「上田上牧遺跡I ほ場整備関係発掘調査報告書XXV-1」滋賀県教育委員会

## 第4節 1967年調査の再検討

栗柄山南墳墓群は、調査の項でも述べたように、一部が'67年に茨木市により調査されている。

その調査については、今回の調査地と重複していることから中近世墓を考える上で欠かせない要素と考えられ、まずは、当時の調査を振り返ってみたい。

### 1. '67年調査の概要

'67年の調査は、「茨木市佐保クルス中世墓地調査」として、茨木市教育委員会から出版されており、その内容は、以下の様である。

「昭和43年3月頃、この地が土地造成のため破壊される話を聞いた高谷は、同地の加藤とともに、3月26日現地を踏査し、石仏、五輪塔などの散在するのを確認した。当時、茨木市に於いて市史の編纂中であり、市史編纂事業の一環として発掘調査を行うことになった。破壊期日も迫っているので、5月21日、一部の試掘を行った結果、墳墓はよく当初の状態を保っており、石仏の下より火葬された人骨が発見され、その内の1基より瓦器碗の発見があるなど、遺物の重要性が認められた。

そこで8月6日より10日間、春日丘高校歴史研究部の応援を得て発掘調査を行い、その結果を春日丘高校歴史研究部部報に「石仏調査」として報告されたのである。・・・・」。

'67年の調査は、今回の調査の様に全面的に伐開が行われたものではなく、限られた期間、雑木林の中、石仏や五輪塔が覗いている所を中心に、50箇所余りをピント的に発掘が行われている。

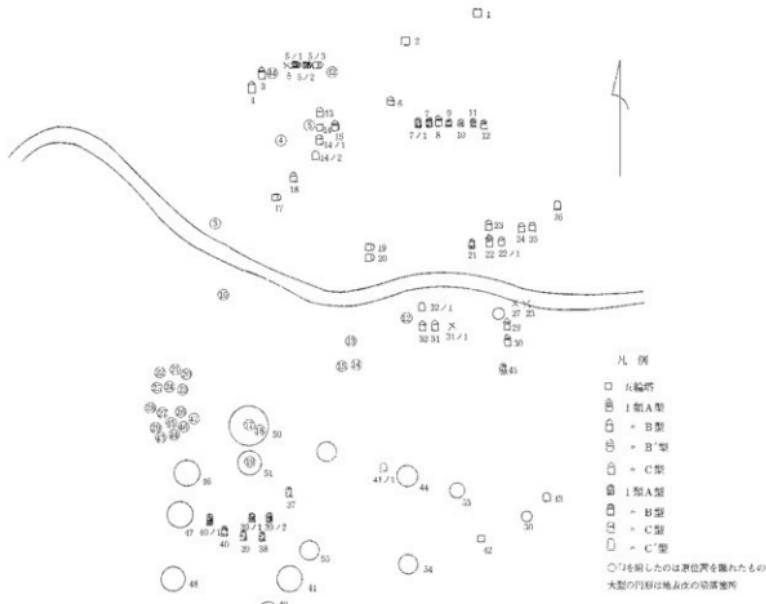


図142 '67年度調査墓標分布図

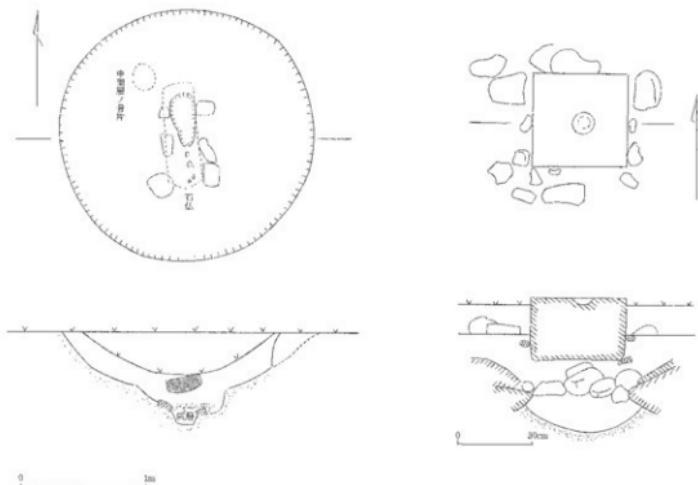


図143 41号地点・2号墓 ('67年度調査)

その方法は、まず、五輪塔や石仏を掘り出し、それらを撤去後、その周辺を掘り下げて下部遺構の検出に当たっている。なお、表土を全面的に剥がした状態でないために、石組および墓壇の調査が平面的にも完全に把握できた訳ではなく、部分的な調査にならざるを得なかった状況が窺われる。

遺構は、前述の状況から、完掘されたものがわずかで、ほとんどのものが焼骨が出土した段階で終了している。

その典型的な例として、16号墓が挙げられており、以下のような記述がなされている。

「16号墓は、1基離れて存在した。地山に深さ30cmあまりの壙をうがって火葬骨を収め、上に舟形の光背を負った弥陀の石仏を置き周囲をやや大型の石塊で固め、前方に供物台と見られる平石をとする。これが本遺跡に於ける最も普通の填墓構造である。」

また、例外として、2号墓が挙げられ、以下のような記述である。

「1基単独に存在した遺跡[中]、最も大形の五輪塔を墓標とするもので、地輪のみ原位置に存し他は失われている。構造は、地山に径40cm、深さ30cmの壙を穿ち、その際出土した大石によせかけて周囲の石塊で固め、簡単な橢円形の石室を造り、中に火葬骨を納めた如くで、遺骨はすべて消滅していたが、壙中には木炭、土師器の細片が見られ、土色の変化が認められた。石室上には一辺37cm、高さ27cmの五輪塔の地輪がえられ、当時の地表面周囲には石塊で固められている。これよりみて、当初地輪は15cmあまりが地表に出ていたと思われ、一石五輪塔を除く他の五輪塔に於いても同様のことが認められ、地輪の高さは非常に低いものであったことがわかる。この填墓の構造は規模と相まって本遺跡中の例外である。」

さらに、「火葬場として、1回限りの単独のものと、同一箇所で何回も使用したと考えられる共同の火葬場の両者が存する。」とされ、単独の火葬場として、41号地点・44号地点・22号墓下の遺構が挙げられ、共同火葬場として、50号地点・51号地点が挙げられている。

しかしながら、これらも、棺台に使用された石の検出までは行われているものの、床面の検出まで至っていないものがほとんどで、22号墓下の遺構と51号地点のみ明確な被熱痕跡を確認している。

また、41号地点および44号地点に関しては、検出時点では石組が存在しておらず、22号墓下の遺構は、「22号墓は高さ70cmの少し製作は粗雑であるが、板碑の約束によって造られた墓標をもつもので、原位置を保つ唯一の板碑である。碑は40cmが地上に出ていた。22号の東に接して22ノ1号石仏がある、この両者の中間より骨灰が出土し、その更に下、現地表より50cmでは△楕円形輪状に焼土の層が出土、その灰層下部より41号地点と同様な石組が検出された。・・・22号碑は火葬後其の上に建てた供養塔か墓標と見る可能性が強く感じられる。」とされている。

50・51号墓に関しては、「緩斜地に立地し、南方に厚く灰が堆積しており、中央に径2m、深さ30cmあまりの凹所が存した。発掘の結果、中央凹所は径2m、深さ60cmの壙をうがったもので、壙底及び上部に堆積した灰層中より焼けた石塊が多く出土し、中には一石五輪塔の風空輪も混在していた。これより見て、この地点に於いて何回も火葬が行われたことが推定できる。

この火葬壙の南に接しうど堤状に堆積した灰層下部の地山に径1m、深さ40cmの壙が存し内面は著しく焼けている。壙の周囲には石塊に混じって鎌倉風の五輪塔、地水火の各部分が存在し、いずれも壙の内部に面した部分は火を受けてボロボロになっている。壙中には火葬の骨灰が充満し、中より銅鏡6枚、鉄釘8本が出土した。」と記述されている。

遺物は、五輪塔が24点、石仏が97体、五輪塔が22点出土しており、その中には、石仏の集石群が2ヵ所あり、火葬場からは、銭貨90枚余り、鉄釘が約270本、銅製飾金具2点、ガラス溶塊4点、土師器・瓦器などが出土している。

銭貨の種類は、表2に示す通りである。

この「佐保クルス中世墓地」と今回の調査の「栗柄山南墳墓群」は、同一遺跡である。名称に差異が生じたのは、遺跡分布図に茨本市が別の地点に「クルス山中世墳墓」と言う名称を付しているためである。それと混同しないために、本調査の遺跡名称を「佐保栗柄山古墳跡」の南側に位置することと、古墳から中近世墓を検出していることから前述の名称を使用している。

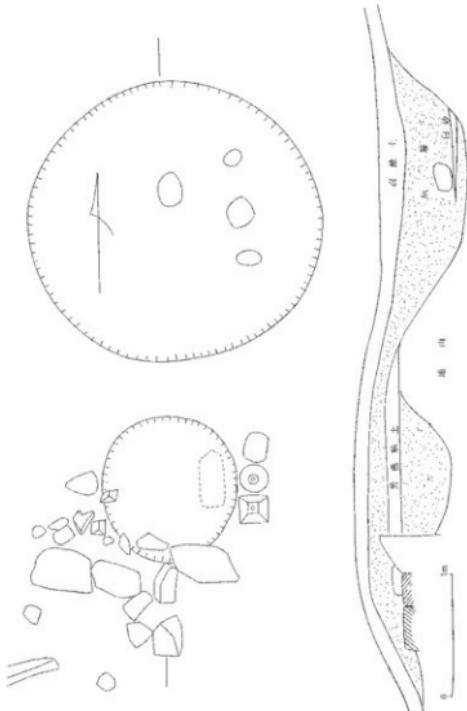


図144 50・51号地点 ('67年度調査)

表2 墳墓群出土銭貨一覧表

品目名	初期年	国名	69年	今回	合計
岡元通寶	621	唐	2	9	11
唐國通寶	959	唐	0	1	1
太平通寶	976	北宋	1	0	1
聖宋通寶	995	北宋	1	3	4
咸平元宝	998	北宋	2	6	8
景德元宝	1004	北宋	3	3	6
祥符元宝	1009	北宋	3	7	10
祥符通寶	1009	北宋	3	1	4
元祐通寶	1017	北宋	3	2	5
天聖通寶	1023	北宋	3	10	13
明道通寶	1032	北宋	3	1	4
景祐通寶	1034	北宋	2	0	2
皇宋通寶	1038	北宋	12	16	28
嘉祐通寶	1056	北宋	5	4	9
治平通寶	1064	北宋	1	3	4
治平通寶	1064	北宋	0	1	1
熙寧元宝	1068	北宋	6	10	16
元祐通寶	1078	北宋	9	17	26
元祐通寶	1086	北宋	7	19	26
紹聖元宝	1094	北宋	2	5	7
元祐通寶	1098	北宋	1	1	2
聖宋通寶?	1101	北宋	3	4	7
崇寧通寶?	1103	北宋	0	1	1
大觀通寶	1107	北宋	1	2	3
政和通寶	1111	北宋	4	5	9
正隆元宝	1157	金	1	1	2
朝鮮通寶	1190	渤海	0	1	1
洪武通寶	1368	明	1	2	3
永樂通寶	1408	明	0	13	13
朝鮮通寶	1423	朝鮮	0	1	1
古寛永通寶	1636	日本	0	1	1
新寛永通寶	1697	日本	0	1	1
寛永通寶?	1739	日本	0	1	1
錢文不明			12	3	17
総		計	91	150	241

## 2. '67年調査と本調査との位置関係の確認

'67年当時の調査は、1/100平面図が作成されているが、斜面地の調査で、直径30cmを越える大木がそこ・ここにあったため、その方向・距離が正確なものではなく、現在の測量技術と比較して拙拙であったことは、歪みようがない。

本調査では、数ヵ所'67年調査と符号するものが確認されたことから、当時の様子を復元してみた。

まず最初に、'67年調査の位置確認できたものは、以下のようになる。

	'67年調査	本調査
2号墓	→	35号墓
41号地点	→	571号墓
44号地点	→	423号墓
53号墓	→	424号墓
50号地点	→	火葬場2
51号地点	→	501号墓

## (1) 2号墓

当時、地輪が正位置で座っており、地輪上部を水平に据えるための石が組まれていたものが、小石室と捉えられていたものである。墓壙は、その石組の下部を深さ30cm掘られたのみで、その埋土から、土器片や炭がわずかに出土していた。石組の外周枠や墓壙底までは、調査がなされていない。

今回の調査では、地輪が動いていることが判り、当時の掘削痕を確認している。さらに、地輪周辺の石組が残存し、下部構造としての火葬墓を検出している。

## (2) 41号地点

当時、径1.7mの凹地になっており、その中心に高さ86cmあまりの石仏が上向きに横たわっており、その下部から棺台に使用された石が南北に2列並んでいた。その石列の間にはさらに深さ15cmの不整楕円形の窓があり、そこから焼骨が出土している。

今回の調査では、汚れた土に混じて石が放り込まれた状況で検出しており、その2層下部に墓壙の床面を検出しておらず、明瞭な被熱痕跡を止めているが、火葬墓として認識している。

両者の結果から、総合的に判断すると、2基の火葬墓が重複していたのか、2段掘りの火葬場の可能性も考えられる。

## (3) 44号地点

当時、径1mあまりの凹地になっており、腐植土中から水輪が1点出土しており、その下部から骨片や土師器片が出土している。

今回の調査で、その下部を確認し、被熱痕跡の明瞭な墓壙を検出している。



図145 火葬場 2周辺復元図

#### (4) 53号墓

当時、土が柔らかく遺物も出土していないと記されている。

今回の調査では、凹地になっており、腐植土でほぼ埋まっていた。腐植土を取り除き約5cm掘った所で、床面を確認している。墓壙の側壁および床面に被熱痕跡が残存しており、火葬墓であったことが判明した。

#### (5) 50号地点

当時の調査で、径2m、深さ30cmの凹地があり、それから30cm程掘り下げている。炭層からは、焼骨、鉄釘、銭貨および土師器などを多数検出している。当時は、床面まで期間の問題で掘り下げておらず、今回の調査で墓壙の床面を確認し、火葬場2として全容を検出している。

#### (6) 51号地点

当時の調査で、径1m、深さ40cmの墓壙を確認し、被熱痕跡が明瞭であった。しかしながら、今回の調査で、墓壙の深さが約20cmで、地山面を検出しているところから、前述の遺物の出土状況の詳細が判

らないが、本来は墓壙埋土からの出土ではなく、墓壙状面を覆う炭盛土の炭層から出土したもの可能性も考えられる。

この51号地点上層で検出した石組の内、東側に五輪塔の火・水・地輪が並んで出土しているが、これは、この墓壙に伴う石組と言うよりは火葬場4に伴う石列と考えられる。

また、南側に並ぶ石組も、その石の大きさが、他の石組と比較して大きく厚みがあることから、さらに、図145に示す様に位置を復元すると、火葬場2に伴う立石1の南側の辺と並ぶことから、これらも、火葬場2を囲む行列になる。

なお、22号墓下の遺構は、22号墓および22ノ1号墓の石仏と位置関係で離れていることが推測され、下部構造の火葬墓と上部構造の石組に差異が生じていることから、ここでも石組が造り替えられたと考えられる。

すなわち、本遺跡で唯一原位置を保っていると思われた板碑形石仏は、石組の造り替えにより立てられた石組のみのものであると考えられる。

今回の調査では、墓壙の掘削痕跡が判明したものがわずかであり、石組が確実に残存していないかったり、何らかの行為により破壊されたようなものや、中心部を欠失する石組などの存在から、当時の調査痕跡を窺い知ることができた。

以上、位置関係や遺構の類似性などを検証することで、当時の調査位置を、謙げながら復元することができた。それら数箇所の位置の特定に到ったものから、他の遺構の配置を類推すると図146の様に遺構配置を復元することが可能になった。

また、17.19.20号墓の石仏が西向きに設置されていたことから、それらの西側に東向きに石仏が設置された石組があったものと考えられ、石仏が東西向かい合わせに立てられた石組が、本遺跡では5組あったと思われる。

なお、'67年調査で7の1.7~12号墓と並んで7基の石仏が立って出土している状況は、正しく、本調査で検出した下部構造を伴わない石組のみの墓群と同一のものと考えられる。

その内の12号墓について「石仏調査」では、以下のように記されている。

「この石仏は、7~12号迄が一列に並んでいるうちの最東仏である。地上約10cmが露出していた。深さ45cmで前部及び横を掘ったが、礎石が横の両側に出ただけで、目的とする土師器や陶器類の発見はもとより、人骨・炭類の発見にも及ばなかった。周り一体に山肌の赤黄土が広がっており、埋葬の形跡をみつけるのも困難だったので、埋葬は行われなかったのか、僅かばかりの灰・骨が風化下のではないか、と考えられる。」

のことから、この12号石仏が石組のみのものであったことを窺わせているものと考えられる。

また、石仏の並んでいる状況からもそれは追認されるものである。

その状況は、西側から3基目の8号墓が板碑形の石龕状の石仏で阿弥陀座像が2尊安置されているもので、その東側に9.10号墓の光背形石仏が2体隙間を置かず並べられている様子から、石組の中心部に2体の石仏が設置された様子が窺われる。また、これらの石仏の左右には等間隔に2体1対の光背形石仏が配置されていることが判る。

それらの2体1対で立てられている石仏が、いずれも台座まで刻まれた阿弥陀如来の座像であるものの、両端の石仏が石龕状のものであることから、基本的に2体1対の石仏を立てる時は同一形態の石仏が立てられていることからすると、便宜的に使用された石仏と考えられ、個々の石組を意識したもので

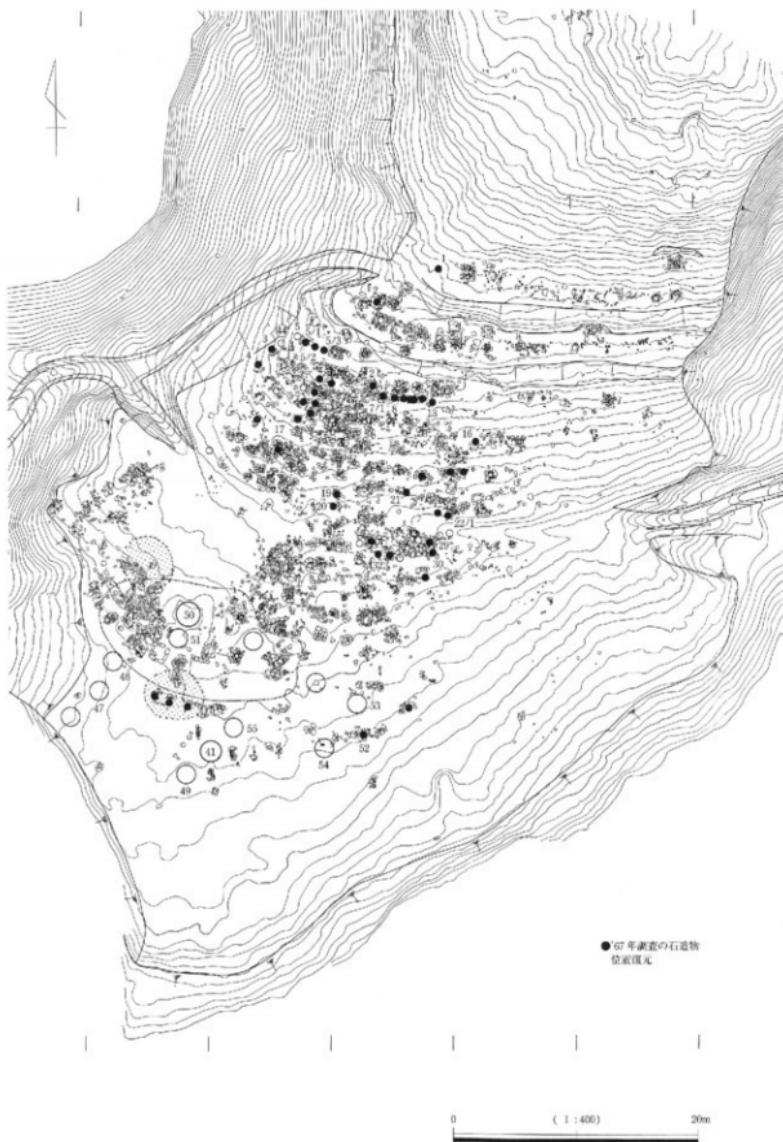


図146 栗栖山南中近世墓群復元位置図

ではなく、石仏を2体1対の単位としたこれらの石仏が並びを意識して連続的に立てられたものと推測される。

さらに、復元できた位置には、小規模の石組がわずかに残存していたことや、墓壙が確認できたのが1基のみで、その上部の石組が造り替えによるものと考えられることなどから、石組の列を揃えて造られる墓壙を伴わない石組のみの墓群であることが検証できるものと思われる。

上記のものに加えて、火葬場2（50号地点）周辺の移動された石仏群は、炭盛土の西端および南端の2箇所に位置すると考えられ、前者は、炭盛土下層の集石群と同様なものと考えられ、後者は、「近年付近の開墾に際して出土したものを集められたもの」であるとされており、それらの南半部のものは、石組に伴う石仏であることが判った。

それら以外の炭盛土に石仏のみが立った状態で出土したものについては、移動されたものと考えられることから、炭盛土の南側の墓壙群には石組がほとんど残存していないが、本来、石組があったものと思われ、それらに立てられていた石仏が移動されたものと思われる。

### 3. おわりに

以上、'67年の調査から知り得ることは、石仏が立って残存していた石組は、造り替えによる石組、すなわち、墓壙を伴わない石組のみの墓群がほとんどと考えられ、今回の調査で判明したそれらの墓群以外に、東側にも、石組のみの墓群がさらに大きな抜がりを見せることが判った。

さらに、炭盛土の北側に位置する石組のない空白地の南西側にも石仏の集積地点が確認できたことから、意図的に空白地を造るために、石組や石造物が排除されたことを追認する結果となった。

しかしながら、中世墓を考える上で、'67年当時の調査の成果が根本的に異なるものではなく、火葬墓と火葬場の存在は、本遺跡の特徴的なものといえる。なお、今回、全面発掘することにより土葬墓が確認できることと、石組の造り替えが判明したことが大きな成果であったと思われる。

### 追記

今回、本調査を実施するに当たり、'67年当時の調査の状況や実測図面および写真を快く提供していただいた免山 篤氏に感謝の意を表します。

### 註

'67年調査の石造物に関しては、財大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第40集 『彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』 1999.3 藤沢典彦 「茨木市佐保周辺地区の石造物調査」を参照されたい。

### 引用文献

- 茨木市教育委員会 1968 『茨木市佐保クルス中世墓地調査』 文化財調査報告第8集  
府立春日岡高校歴史研究部 1967 「石仏調査」「歴史研究部報」

## 第5節 土器から見た中近世墓群

### 1.はじめに

中近世墓群から出土した土器を検討することにより、墓群の造営時期、変遷や特徴を考えていくこととする。その為に、個々の土器の時期や産地などを検討し、さらに遺構ごとの出土傾向を見る必要がある。また、土器の出土状況等を検討することで、どのように土器が使われたのか、ひいてはどのような葬送儀礼が行われたかどうかも推測できるものと思われる。

### 2.出土土器の時期および特徴

当墓群では、土師器皿・瓦質羽釜・瓦質香炉・古瀬戸小皿・備前窯・常滑窯・丹波窯・瓦質系壺・肥前磁器碗・中国製磁器碗が出土した。特に一定量出土した時期幅がある土師器皿を中心に検討する。

#### (1) 土師器皿

第5章第6節で記述したように、土師器皿は主に形態・法量から4分類しており、各々のタイプごとに検討する(図147)。その際、北摂地域では該当時期の資料が少ないので、ここでは編年研究が進んでいる京都での成果を援用することとする。<sup>1)</sup>

**Aタイプ** 体部が短く直線的もしくはやや外反するもので、口径は8~9cm台が中心だが、6~7cm台のものもある。このタイプはさらに2つに細分できる。

①は、体部の外反の度合いが弱く、口縁端部を見るとやや端部が平坦になっており、わずかにいわゆる「面取り」の意識が認められるものである。色調はにぶい黄橙色で、また胎土が精良で赤色酸化粒を含まないものである。

②は、体部の外反の度合いが強く、口縁端部がまるくおさまるものである。このタイプは色調がにぶい橙色で、三島地域の胎土の特徴である赤色酸化粒を含み、胎土の密度がやや粗いものが多い。

小森・上村編年では、VII期古~中段階に相当し、年代的には13世紀後半~14世紀前半の時期幅で捉えることができる。この間の傾向を見ると、口縁端部の「面取り」がなくなり、体部の外反の度合いが強くなると指摘でき、①が古い傾向であると言える。

**Bタイプ** 底部はやや「上げ底」状を呈し、体部が大きく外方に開くいわゆる「へそ皿」の形態をなすものである。口径から7~9cmを小、9.5~11cmを大としている。このタイプは、形態・色調等も様々であるので、明瞭な境界を見つけがたいが、傾向的には大きく2タイプに分けられる。

①は、体部がその中位で彎曲し肥厚が強く、外反するものである。色調は橙色のものが多い。

②は、比較的体部が直線的に伸びるものである。色調は、黄橙色・にぶい黄橙色のものが多い。

小森・上村編年ではVIII期中段階~X期古段階に相当し、15世紀前半~16世紀前半の時期幅で捉えることができる。この間の傾向は、色調が赤褐色から色が淡くなる、法量の縮小化、体部中位の彎曲が弱くなり直線的になるといったことが挙げられるので、①が古い傾向であると言える。

**Cタイプ** 底部は平底で、体部が中位で彎曲するものである。口径は12~14cm台が中心である。このタイプはさらに2つに細分できる。

①は、体部の彎曲が頗著で、胎土が粗く赤色酸化粒を含み色調は橙色を呈するものである。

②は、体部の彎曲は緩やかで、胎土が精良で色調はにぶい黄橙色を呈するものである。

小森・上村編年ではIX期中段階~X期古段階に相当するものと思われ、15世紀後半~16世紀前半の時

期幅で捉えることができる。この間の傾向もBタイプと同様で、色調の淡色化、体部が直線的になるとといったことが挙げられるので、①が古い傾向であると言える。

**Dタイプ** 底部は平底が多く、体部が直線的に伸びるものである。復元口径から、小が9~10cm台、大が12~14cm台に分けた。色調は灰白色・にぶい黄橙色・黄橙色のものがある。完形のものが少ないので断定はできないが、さらに2つに細分できる。

①は、底部と体部の境が不明瞭で、底部が丸底に近いものである。

②は、底部と体部の境が明瞭で、底部が平底のものである。

小森・上村編年ではX期古～中段階で、時期的には16世紀前半～中葉と抑えることができる。この間の傾向としては、底部と体部の境が明瞭になることが挙げられるので、①が古い傾向であると言える。底部内面見込みに凹線状圓線が顯著なものがないので、16世紀後半には及ばないと思われる。<sup>2)</sup>図113-27・41などは、形態のみならず色調・胎土までも京都産のものと酷似しているものが多い。<sup>3)</sup>

その他のタイプ 上の4タイプ以外に、時期が断定できるものとして図113-24がある。小森・上村編年ではXⅠ期新段階で17世紀前半～中葉頃のものに相当する。ただ、京都ではこのタイプの色調が白色系であるのに、橙色であるので、在地産と思われる。

**小結** 以上、当墓群の土師器皿を分類した4タイプを中心的に時期および特徴を検討してきた。ここでは、各々のタイプを相互比較することで、当墓群の土師器皿の特徴をまとめることにする。

まず、時期的な問題を考えると、13世紀後半～16世紀中葉の時期幅を中心に出土していることが判明した。その内の14世紀後半に相当する土師器皿が出土していない。しかしながら、当地域で確立した編年がない現段階では、これを積極的に解釈することは避けたい。

次に地域性の問題であるが、基本的には当墓群の土師器皿は、京都のものと形態的に類似している。特にDタイプのものは、色調・胎土の面でも酷似するものが多く注目すべき点である。

また、それぞれのタイプの法量について検討する(図147)。そうすると、A・Bタイプは口径が7~9cm台が中心であるのに対し、C・Dタイプになると12~14cm台が中心となっている。なお、法量分布で見ると、A・Cタイプは1サイズであるのに対し、B・Dタイプは、大小の2サイズがあることが

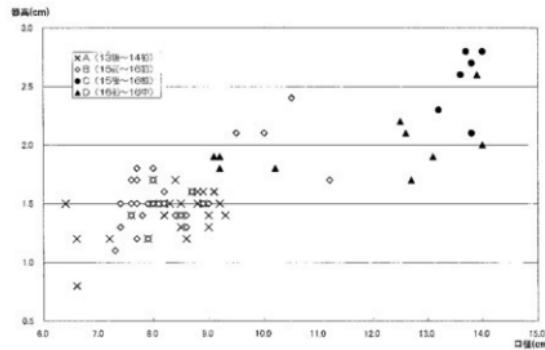


図147 土師器皿タイプ別の法量比較

分かる。これを時期を踏まえて考えると、Bタイプが出現する15世紀前半以降には土師器皿の法量が大小2サイズになり、またCタイプが出現する15世紀後半以降は大サイズのものがさらに大きくなるということができる。このことは北摂地域の特徴として断定できないが、少なくとも当墓群の特徴と言える。時期によって、使用する土解器皿のサイズが決まっていたとも考えられる。

他に特徴としては、内面にハケメを残すものが4点あることがまず挙げられる。特に図114-24は、内面全体にハケメが施されている。また、口縁部に煤が付着したものが3点出土しており、灯明皿として利用されたものと思われる。

## (2) 瓦器椀・瓦質羽釜・瓦質香炉

**瓦器椀** 丹波型（図109-34）が破片で1点のみ出土しているが、それ以外は和泉型である。当墓群で出土したものは、高台があるかないかの頃のものが多く、尾上編年のIV-2・3式に相当する。ただ、図109-33のみはやや古くIII-3式のものである。また、2Aトレンチの谷部で瓦器椀が約9個体集中して出土したものがあるが、全てIV-4式に相当する。

さて、時期であるが、尾上実の年代観とそれを再検討した森島康雄のものでは、50~100年近く差がある。<sup>43)</sup> 各々の年代を示すと、〔III-3式 尾上13世紀後半、森島13世紀前半〕、〔IV-2・3式 尾上14世紀中頃~後半、森島13世紀中頃~後半〕、〔IV-4式 尾上15世紀前半、森島14世紀前半〕となる。どちらが妥当であるかを詳細に検討する余地はないが、現段階では大きく13世紀後半~14世紀代の幅のものが出土していると考えたい。

**瓦質羽釜** 基本的に藏骨器として出土している。無足のものと三足のものが出土しており、さらには口縁部に環付がある茶釜も出土している。これらの羽釜は、体部から口縁部までを粘土紐で積み上げ成形し、調整が口縁部にヨコナデ、体部の外面にユビオサエのみ、内面にハケメを施し、その後に錆および足を貼り付けるといった製作技法は共通したものである。瓦質焼成が弱く土師質に近く、胎土は粗く砂礫が多く混じっているという特徴がある。

無足のものは、第5章で述べたように、口縁部の凹線または段の有無でまず2つに分けることができる。凹線・段がないものは、図112-1のみが破片で出土しているだけで、全体のプロポーションによる比較が難しい。一方、凹線・段があるものは、体部から口縁部にかけての形態が直線的に伸びるものが多いが、やや弓なり状をなすものもある。また口縁部の長さは2~3cmものが多いが、図111-9がそれよりやや長い。さらに、口径で見ると20cm前後、23cm前後、30cm前後と3つの異なるサイズがある。

この無足の羽釜は、畿内における羽釜を地域色の觀点から検討した菅原正明氏の研究によると、摂津型に相当するものである。<sup>44)</sup> さらに限定すると、凹線・段があるものを摂津F1型、ないものを摂津F2型に当てることができ、時期的には13~15世紀の幅で考えられる。しかしながら、この摂津型の羽釜は、現段階では未だ確立した編年研究がない。そこで、当墓群と同様に藏骨器として出土しており、良好な資料である高槻市岡本山古墓群の羽釜との比較をしてみる（図148）。

岡本山古墓群の羽釜は、形態的には大きく3つに捉えられる。①は口縁部が短く内湾しており体部が丸みをもつもの、②は口縁部が①よりも長く体部が直線的に伸びるもの、③は口縁部が②と同様だが内湾しており体部がやや深めのものと各々分けられる。当墓群の羽釜と比較すると、②の形態のものが類似していることが分かる。だが、①や③のものは口縁部の内湾、体部の丸みが強く、やや当墓群のものとは異なる。また、焼成・胎土の面では非常に類似しており、法量で見ると口径に20cm前後、24cm前後と異なるサイズがあることも共通していると言えよう。

### 栗栖山南墳墓群



### 岡本山古墓群

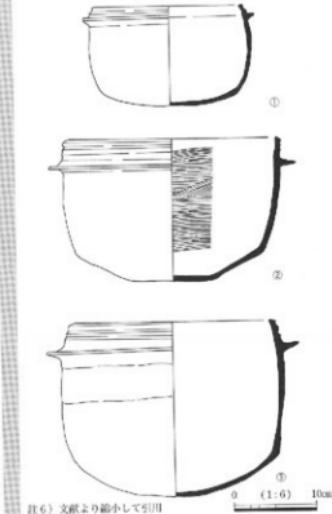


図148 岡本山古墓群の瓦質羽釜との比較

以上のように岡本山古墓群の羽釜と比較してみると、形態的に大きく2つの傾向があることが分かつた。それは、口縁部が内弯し体部が丸みのあるものと、体部が直線的に伸びるもの2つである。次にこの2つに新旧関係の検討をするために、折津型と比較的類似しており大枠の変遷が判明している山城型とされる京都の羽釜と比較してみると、京都の羽釜の傾向を見ると、口縁部は内弯するものから直立するものになっていくといった点が認められる。また、口縁部の長さが3cm以上の長いタイプは15世紀以前に出現するといつて指摘がされている。<sup>7)</sup> このような傾向で考えると、当墓群の羽釜の方が岡本山古墓群のものよりも新しい傾向があると言えよう。

さて、羽釜の年代観であるが、岡本山古墓群の③の羽釜から楠葉型IV-1式の瓦器焼が共伴していることが参考となる。橋本久和氏は、この共伴例から岡本山古墓群の羽釜を14世紀前半～中葉の年代を考えている。京都の変遷をも踏まえて考えると、当墓群の羽釜のおおよその年代は、14世紀後半～15世紀前半の時期幅が妥当と思われる。

三足のもの(図111-5)は、13～14世紀に多く見られるものである。高槻市安満遺跡で出土している羽釜に体部の形態が類似しているものが出土しており、楠葉型III-3式のと共に、おおよそ13世紀後半とされている。<sup>8)</sup> 無足のものよりやや古い傾向は否めないとと思われる。

茶釜(図112-3)は、無頬のものであり、近畿地方ではあまり例がない。ただ、未報告ではあるが当センターで調査を行った中世の集落跡である箕面市粟生間谷遺跡で1点出土している。類例が少ないので、時期を決定させるのは難しいが、作り方や形態から無足のものとおおよそ同時期であろう。

**瓦質香炉** 図114-27は、脚部の上部が膨らみをもつものであり、大和座のものとは異なっている。時期的には16世紀のものと考えられる。<sup>9)</sup>

### (3) 陶磁器

当墓群では、絶対的に量が少ない。備前、古瀬戸、丹波、肥前、中国製磁器等が出土しており、特記すべきものを記すことにする。

古瀬戸 小皿（図109-52）が14世紀中頃、入子皿（図114-29）は13世紀後半～14世紀前半ごろに多く作られるものである。<sup>109</sup>

備前 盔（図112-3）は、火葬墓A類68号墓の藏骨器としての出土である。狭い波状紋は、間壁IV A期の香川県水の子岩の資料等に良く見られるが、燃成がやや甘いところや口縁部の玉縁がしっかりとしているところなどからそれより古い要素もある。よって、従来の間壁編年III B～IV A期の中間位で、時期的には14世紀後半～15世紀前半ぐらいの年代が与えられる。擂鉢（図114-26）は、これもやや焼きが甘く乗岡編年では中世4期b段階で、15世紀中葉ごろに位置づけられる。<sup>110</sup>

肥前系磁器 碗が2点出土している。火葬場から出土した碗（図113-3）は、細分された編年案では伊万里の1650～60年頃に位置づけられる。448号墓から出土した碗は、口縁端部が端反りであることや、釉剥ぎ部にアルミナが塗布されていること、コンニャク印判の五弁花がかなり崩れたものであることなどから、波佐見の19世紀前半のものと思われる。<sup>111</sup>

中国製磁器 白磁碗（図109-30）は、口禿のものであるが、口縁部の端反りが強いので、おおよそ15世紀頃と考えられる。また青磁碗（図113-1）は、外面に鏡連弁をもつもので、13世紀中頃～後半と考えられる。鉄釉天目茶碗（図114-28）、器形・胎土から中國産のものと思われる。時期的には断言できないが、古瀬戸との器形の対応等から、14世紀後半以降のもの可能性が高い。

### (4) 全体の傾向

ここまで個々の土器の時期・特徴の検討を行ってきたわけであるが、土器全体の出土量・時期について考えてみる。

当墓群で出土した土器組成を表3にまとめた。出土量では、土師器皿が95.87%と圧倒的に多いことが分かる。瓦器碗は2番目の出土量であるが1.79%で、土師器皿の比ではない。時期的には先の編年の問題があるが、おおよそ14世紀代と言える。瓦質土器は、香炉・甕も出土しているが、ほとんど羽釜である。瓦質羽釜は19点出土しており、藏骨器としての出土したもののは10点であるが、他のものも藏骨器として使用されたものと思われる。陶磁器は日本製と中國製を合わせても1%にも満たないほど微量である。

時期的には、13世紀後半～16世紀中葉のものは、点的とは言え確認できるが、それ以後のものは図化した数点しか出土していない。また、陶磁器は、古瀬戸・備前・中國製はおおよそ14～15世紀、肥前は近世以降のもの、その間の16世紀代のものは全く出土していない。

### 3. 出土傾向からみた遺構の時期

中近世墓群では、遺構を土葬墓、火葬墓、火葬場および炭盛土の3つに大きく分類している。また、さらに土葬墓を2つ、火葬墓を3つに細分している。以下、各遺構の土器の出土傾向をまと

表3 中近世墓群出土土器組成

器種	破片数	%
土師器皿	1347	95.87
瓦器碗	25	1.79
羽釜	19	1.36
香炉	1	0.07
甕	1	0.07
小計	21	1.50
瓦質土器		
壺	1	0.07
擂鉢	1	0.07
瀬戸小皿・入子	2	0.14
常滑窯	1	0.07
丹波窯	1	0.07
肥前碗	2	0.14
日本製陶磁器小計	8	0.56
青磁碗	1	0.07
白磁碗	1	0.07
鉄釉天目茶碗	1	0.07
中國製陶磁器小計	3	0.21
不明青磁香炉	1	0.07
合計	1405	100.00

ることで、時期幅を考える。その際、墓出土遺物は墓壙のものに限って検討する。

土葬墓A類は、墓壙の形態が様々なものであるが、基本的には屈葬の姿勢で葬られたと考えられる墓である。瓦器椀が87・336号墓から、土師器皿A①タイプが341.571号墓から、B①タイプが36号墓から、B②タイプが552号墓、C①タイプがA②・B②タイプと共に共存して98号墓から、D②タイプが372.601号墓から、古瀬戸小皿が310号墓から出土している。資料自体が少ないので断続があった可能性があるが、土葬墓A類は13世紀後半～16世紀中葉の時期幅をもった墓と言える。

土葬墓B類は、大多数の墓壙と主軸方向を東西に向け、伸展葬により埋葬されたと考えられる墓である。448号墓から19世紀前半代の波佐見碗（図110-36）が出土しているのみであるので、土器だけでは時期幅を決めがたい。だが、555.600号墓から6枚重なった北宋錢が出土しており、第7章第11節で検討するようにこの錢種構成は17世紀前半以降にはかなり少なくなる。それを踏まえて上限を考えた時に、切り合いで全ての造構よりも新しいので、16世紀後半が上限と言える。よって、16世紀後半もしくは17世紀前半～19世紀前半という時期幅をもったものと考えられる。

火葬墓A類は、墓壙内で荼毘・捨骨・納骨という火葬の一連の行為を行った墓である。土師器皿Aタイプが23号墓、B①タイプが258.283.420.502号墓から、備前窯が藏骨器として69号墓から出土している。以上のように土器としては、主に15世紀前半のものが多く出土している。しかしながら、この土器が出土している墓は、別項で後述するが墓群の構成・墓の形態から検討した場合には最古期のものではない。また、33号墓の考古地磁気年代は1350年を示している。そのように考えると、この火葬墓A類は14世紀後半以前よりも遡る可能性がある。下限については、後述するように火葬場が造営される15世紀後半までが妥当と思われる。

火葬墓B類は、別の場所で荼毘を行った焼骨を納める墓で、藏骨器を使用するものとしないものがある。瓦質羽釜は無足のものが82.128.145.292.296.319.322.419号墓、三足が307号墓、茶釜が482号墓から各々出土している。また、藏骨器を使用しない223号墓から土師器皿B①タイプが出土している。三足のみ13世紀に遡るが、他については14世紀後半～15世紀前半に造営されたものと考えられる。

火葬墓C類は、炭のみまたは合わせて焼骨が検出されるが、A類またはB類かに決めがたいものである。ここからは土器の出土がなく、遺物からの時期の検討が困難である。

火葬場および炭盛土からは、土師器皿B②・C・Dタイプが主に出土しているので、15世紀後半～16世紀中葉の時期幅を考えられる。また、17世紀前半の土師器皿（図113-24）、17世紀中葉の肥前碗（図113-3）とそれ以降の遺物も微量に出土しており、17世紀代にも火葬場が使われた可能性はある。

以上、あくまでも出土した土器による年代であるので、そのタイプの墓が全てその時期幅に収まるかは断定できない。しかしながら、各遺構ごとの出土傾向が時期的な差として表れており、墓群の変遷を考える重要な指標と言えよう。

#### 4. 土器から見た墓群における儀礼行為

当墓群は、長期間続いた墓地遺跡なので、出土した土器が葬送に関する何らかの儀礼に使われたものと思われる。よって、土器の出土状況などからどのように土器が使われたのかを検討する。

まず、土器の出土状況から検討する。墓からは石組および墓壙から土器が出土している。ただ、石組の上面から出土したものは、その使われ方が具体的に推定できる状況のものがほとんどない。しかし、石組から出土するということは、石組に土器を供獻するということがあったと思われる。

墓壙から出土する場合には、幾つかの状況がある。まず、床面で出土する場合から検討する。土葬墓A類である571号墓では13世紀後半の土師器皿を大皿1枚、小皿4枚が床面から出土している。この土師器皿の枚数・構成は、いわゆる中世前半期の屋敷墓で見られる副葬品と同様であることが興味深い。<sup>15)</sup>また、567.569.572号墓では短刀や鳥帽子が床面から出土しており、この構成は茨木市總持寺遺跡等でも見られ、これも屋敷墓に多い構成である。

一方、火葬墓A類では土師器皿を茶毘後に置いている。402号墓では、土師器皿に墓壙内の骨とは別個体の骨を入れており、藏骨器的な使用と言える。

また、墓壙内に落ち込んだ状況で出土しているものもあり、土葬墓A類である98.601号墓、土葬墓B類である448号墓がそうである。この場合は、遺体を葬った後に木棺もしくは墓壙の上に置いていたものと思われ、遺体を葬ったあの儀礼に使われたものと言えよう。また、墓壙上面で検出されているものも同様な時に使用されたと思われる。その際に、火葬墓A類である283号墓のように2つの土師器皿の口縁部を合わせた状況で出土したものもある。

埋葬が行われたと考えにくい規模がかなり小さな土坑に土師器皿が埋納されたような状況で検出される場合がある。18号墓ではDタイプの土師器皿が1点正置で検出されたが、焼骨・炭等は検出されなかつた。586号墓では、浅い墓壙に10枚以上のAタイプの土師器皿が重ね合わさった状況で出土した。後者の場合は、この土師器皿自体を埋納することに意味があったと考えられる。

藏骨器としては、羽釜と備前壺が使われ、両者ともある程度炭の混じらない土を充填してから焼骨を納めている。特筆すべきこととして、69号墓の藏骨器である備前壺には成人と子供の第2椎骨が2つ検出され、2体分納められていたことが挙げられる。また、307号墓では三足の羽釜が検出されたが、焼骨が全く検出されないことや時期的に他の羽釜より古いことから、藏骨器以外の用途も考えられるのではないかと思われる。

火葬場では、土師器皿が多く出土しているが、被熱を受けているものが少なく、遺体と共に茶毘したものではなく、埋葬前後の何らかの儀礼に使われたものと思われる。後節で検討するように鐵貨がほとんど被熱していることと、対照的なあり方である。

土器自体に使用を窺わせる痕跡として、煤が付着したものと墨書きがある。口縁部に煤が付着したものがあり、灯明皿として使用されたものと思われる。しかし、3点しか出土しておらず、全体では微量である。例として、北側に隣接する15世紀後半～16世紀中葉の佐保栗栖山岩跡では灯明皿として使われたものが結構多い。一方、当墓群と同様な15世紀後半～16世紀中葉の火葬場が検出されている福井市一乗谷遺跡に近い武者野遺跡でも、灯明皿は4点しか出土していない。調査担当者である水野和雄氏は、灯明皿として使用されることが多い一乗谷遺跡と対比して、酒杯・盛皿として使われたのだろうとしている。<sup>16)</sup>当墓群でも同様の状況と言え、遺構の性格・時期が共通しており、距離的には直接結び付けられないが、興味深いことである。

墨書き土器としては、第2層で破片で出土したが完形のDタイプの土師器皿（図114-17）がある。これは、土師器皿の外側四方に各々口縁部から底部に向かって、金剛般若經によった偈頌が墨書きされている。これと同様の偈頌は、板碑に刻まれている例がある。<sup>17)</sup>このような墨書き土器の類例がなく、具体的にどのように使用されたかは断定できない。しかしながら、墓壙内での出土ではないので、これも石組に供獻されたか、または何らかの儀礼に使われた可能性が考えられる。

以上のように、当墓群では土器が様々な使われ方がされている。しかし、墓壙内の床面から出土した

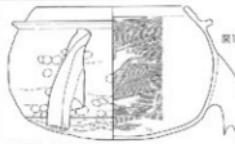
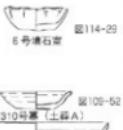
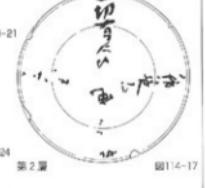
画 期	器種 略年代	土師器皿	瓦器・瓦質土器	陶磁器	土葬墓 A類	火葬墓 A類	火葬墓 B類	火葬場
I 期	1300	571号墓 (土葬A) 図110-2 571号墓 (土葬A) 図110-23 588号墓 (土葬塗納) 図110-33	307号墓 (火葬B?) 	111-5  6号塚石室 図114-29				
			130号墓 (土葬A) 図109-20	第1湯 図114-28				
			82号墓 (火葬B) 図111-6 	69号墓 (火葬A) 図112-3  3号塚石室 図114-30				
II 期	1400	36号墓 (土葬A) 図109-7 502号墓 (火葬A) 図110-5 420号墓 (火葬A) 図110-1						
III 期	1500	98号墓 (土葬A) 図113-43 火葬塗3 図113-38 灰盛土 図113-20 灰盛土 図113-22 火葬塗4 図113-41 601号墓 (土葬A) 図110-21	14-27 	11-17 				
IV 期	1600	灰盛土 図113-24	第2湯 図114-17 	113-3 				
期	1700			448号墓 (土葬B) 図110-36 				
	1800	(スケールは厘米・塚1:6、その他1:4)						

図149 土器から見た中近世墓群の変遷模式図

ものは少なく、火葬場、石組から出土したものの方がはるかに多い。よって、遺体に創葬するというよりも、埋葬に関しての儀礼および墓に対する供獻に使われた土器がより多いと言える。

## 5. 土器から見た中近世墓群の変遷と画期

ここまで中近世墓群出土土器の検討を行い、それにより遺構の時期および土器を使用した儀礼行為について考えてみた。ここでは、それらをまとめた上で、土器から見た場合の中近世墓群の変遷について検討する。そこで、土器から見た中近世墓群の変遷を模式図で表してみた（図149）。これは、当墓群出土土器で代表的なものを略年代順に並べて、その右に遺構別の消長を記したものである。ただ、土器と略年代の対応はおよそであるので、厳密ではない。以下、これを参照していただきたい。

墓群の時期軸は、出土土器から見ると13世紀後半～16世紀中葉のものが量的に多いので、その中心に当たるものと思われる。それ以降については、数点であるが17世紀、19世紀のものが見られ、また寛永通寶も出土しているので、細々と墓地として利用されていたものと思われる。

それでは次に、墓群の変遷を順に追っていくことにする。墓群の造営は13世紀後半に始まり、当初、屈葬による土葬墓A類が営まれた。この葬法は断絶があったかもしれないが16世紀中葉まで続いたと考えられる。火葬墓はA類が14世紀中葉に営まれ、火葬場が営まる15世紀後半には造営が終焉していたと思われる。また、B類は羽釜が14世紀後半～15世紀前半であるので、多くはこの時期に営まれたのであろう。火葬墓A類では備前壺を藏骨器として使用している墓があるので、この時期に藏骨器の使用が行われたと考えられる。15世紀後半には火葬場が造られることになり、16世紀中葉までを中心として営まれる。この間は具体的な數値を挙げられないが、土師器皿が前代以上の数量が出土しているに対し、全く陶磁器が見られない。この現象を積極的に解釈するならば、陶磁器を持つような階層が利川しなくなり、さらに低い階層がこの墓地を火葬場として使用するようになったなどと考えることもできる。再び、土葬墓に話を戻すと、先述したように火葬場が営まれている時期にも営まれている。16世紀後半もしくは17世紀前半には、仲尾葬による土葬墓B類が19世紀前半まで営まれたと思われる。

このような変遷の中で、土器による各遺構の消長から4つの大きな画期に分けることができる。

I期 13世紀後半～14世紀前半・中葉	[土葬墓A類の造営]
II期 14世紀中葉～15世紀中葉・後半	[火葬墓A・B類の造営から終焉まで]
III期 15世紀後半～16世紀中葉	[火葬場の造営・土葬墓A類の終焉まで]
IV期 16世紀後半～19世紀前半	[土葬墓B類の造営から終焉まで]

この画期であるが、土器による各遺構の時間的な消長の面でしか行っていないので、その内実は、葬法・墓群の構成からさらに検討していくこととする。

当墓群では、時期を限定できる土器が遺構から出土しているものは数少ない。しかしながら、様々な側面から土器を検討し、その傾向を掘ることで墓群の変遷・画期、そして特徴などを導き出すことは同様の中近世墓群の研究においてもやはり必要不可欠と言えよう。

### 註

- 1) 京都における土師器皿の研究は様々なものがあるが、全体の傾向を追いやすいという点で小森俊寛・上村憲章両氏の編年案に準拠している。しかし、他の研究も参考にした。また、年代観については森島康雄氏の再検討などのように各研究者により相違があるが、大きな軸で考えるときには人差がないものと思われる。

- 伊野近富 1987「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小森俊寛・上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財) 京都市埋蔵文化財研究所
- 勧柄俊夫 1994「平安京出土土器の諸問題」『古代學研究所研究報告第四輯 平安京出土土器の研究』 (財) 古代學協会
- 森島康雄 1999「戰国期から繩豊期の土器・陶磁器 - 京都の土器編年の再検討を中心に - 」『土器・陶磁器からみた繩豊期城郭 繩豊期城郭研究会第7回研究集会』 繩豊期城郭研究会
- 横田洋三 1982「出土土器皿編年試案」『平安京跡研究調査報告 平安京左京五条三坊十五町』 (財) 古代學協会
- 2) 伊野、小森・上村註1) 文獻
- 3) 伊野近富・勧柄俊夫氏による御指摘を受けた。また筆者も平安京左京内膳町の資料を、(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター、伊野氏の御厚意により実見し確認できた。
- 4) 風上 実 1983「南河内の瓦器窯」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論集』 藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
- 森島康雄 1992「畿内産瓦器の併行関係と曆年代」『大和の中世土器』II 大和古中近研究会
- 5) 齋原正明 1983「畿内における土器の製作と流通」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集
- 6) 岡本山古墓群の羽釜については、橋本久和氏が報告している。また、高槻市教育委員会森田克行、宮崎康雄岡氏の御厚意で実見することができた。
- 橋本久和 1992「第8章 古代後期・中世の土器」『中世土器研究序論』 真陽社
- 7) 勧柄俊夫 1988「畿内における古代末から中世の土器・模倣系土器生産の展開ー」『中近世土器の基礎研究』IV
- 8) 謄本註7) 文獻
- 9) 瓦質番炉については、元興寺文化財研究所佐藤亜喜氏から御教示を得た。
- 10) 古瀬戸・鉄釉天目茶碗については、(財) 濑戸市埋蔵文化財センター藤沢良祐氏から御教示を得た。
- 藤沢良祐 1997「付録 古瀬戸編年表」『研究紀要』第5輯 (財) 濑戸市埋蔵文化財センター
- 11) 備前については、岡山市教育委員会柴岡亮氏から御教示を得た。
- 佐野 元 1998「5. 備前焼」『六古窯の時代』 (財) 濑戸市埋蔵文化財センター
- 柴岡 亮 1999「中近世の備前焼鉢の編年案」『第11回関西近世考古学研究会大会レジュメ』関西近世考古学研究会
- 真壁忠彦・菱子 1966～1984「備前焼ノート」『倉敷考古館研究集報』第1～3・18号 倉敷考古館
- 12) 大橋康二 1993「肥前陶磁」ニュー・サイエンス社
- 中野謙二 2000「波佐見」『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会
- 13) 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 14) 基本的に口縁部の個体数により集計しているが、甕類は口縁部はないが体部片が各々同一個体のものであるので一つとして数えた。
- 15) いわゆる中世前期の巻敷草の副葬品の様相、特に土師器の枚数構成については江浦洋・橋田正徳両氏の研究がある。
- 江浦 洋 1988「中世土器をめぐる諸問題」『口置土器跡(その3)』 (財) 大阪府文化財センター
- 橋田正徳 1993「中世前期における土葬墓の出土供器品の様相」『貿易陶磁研究』No.13 日本貿易陶磁研究会
- 16) 水野和雄 1986「武者野遺跡」福井県朝倉氏遺跡資料館
- 17) 黒書土器については、当センター理事長水野正好の教示を受けた。
- 翌月友善・坂田二三太編 1984「備前 川勝政太郎講述」 言叢社

## 第6節 中近世墓の石組の検討

### 1. はじめに

当中近世墓において、墓群の構成を見る上で任意に区分し、その構造を見てきたが、より良く理解するため、石組の造り替えの現象を捉え、それらがどの様に行われたかを検証し、まずは、墓群の再構成の足掛かりとしていきたい。

### 2. 石組の造り替え

当中近世墓においては、墓群の構成の項でも述べてきたが、石組の造り替えが頻繁に行われていることが判った。それらをさらに詳細に見てゆくと、以下の様な造り替えの手順が考えられる。

その特徴として上げられるのは、石組總てが整理された後に、新たに造り直されるというよりは、旧の石組の存在が造り直しの段階で判っていたと思われ、それらの石組を利用しながら再整理されたものを受け取られる。そのことは、石組を詳細に観察すると、本来の石組の残骸がそこここに見受けられる場合が多々あることからも頷けるものである。

しかしながら、当初、これら石組の造り替えは、石組のみを見ていたのでは判明せず、墓壙と対比した場合に初めて、その現象が確認できたものである。

まず、当中近世墓の大前提として、墓壙と石組が同時に造られた場合に、墓壙の大きさに規制されて石組が造られていることである。すなわち、墓壙の長辺がほぼ石組の長辺に値するということである。

(例：35.36.57号墓等 墓壙を作うものに関して、基本的には土葬墓・火葬墓を問わない。しかしながら、時期の変遷に伴い容容容している。詳細は第7節で記述している。)

以下に、その顕著な例を記述してゆく。

#### (1) 【例1】119.120.122号墓（図150）

この一群は、墓群の構成の項でも述べた様に、119号墓が造られた段階で120.122号墓の石組が整理縮小されたことが判明している。それらの石組をさらに詳細に見ると、石組がどのように造り替えられたかが判る。

まず、地下構造の墓壙の切り合いかから122号墓が120号墓を切っていることが判り、その段階で120号墓の石組が壊されたことが判る。しかしながら、墓壙に伴う120号墓の石組の残骸は、その痕跡を現況では全く残していない。

そこで、122号墓の石組を観察し、墓壙との関係で見ると、墓壙の方向と合致する石組は、外周枠の南辺および西辺であり、そのことから、それらが当初の石組を残存しているものと考えられる。また、東辺も当初、120号墓の石組と考えられたものが、その方向から122号墓に伴うものと思われ、わずかに残存していたと考えられる。

さらに、地輪が座っていた下部の石を詳細に見ると、地輪を据えるための方形の石組が2段残存していることが判り、その方向が、上部では、東へ20度振っており、下部のものがほぼ南北方向を指していることが判った。

なお、南辺とは平行にならず、造り替えられたと考えられる北辺の石組の下部から小石が数個出土したことからも、当初の石組の中心部の石が北辺下部まで延びることが判り、石組の造り替えの様子が明らかになった。

すなわち、122号墓の墓壙に伴う石組は、南辺が全て残存していると考えられることから、一辺1.50

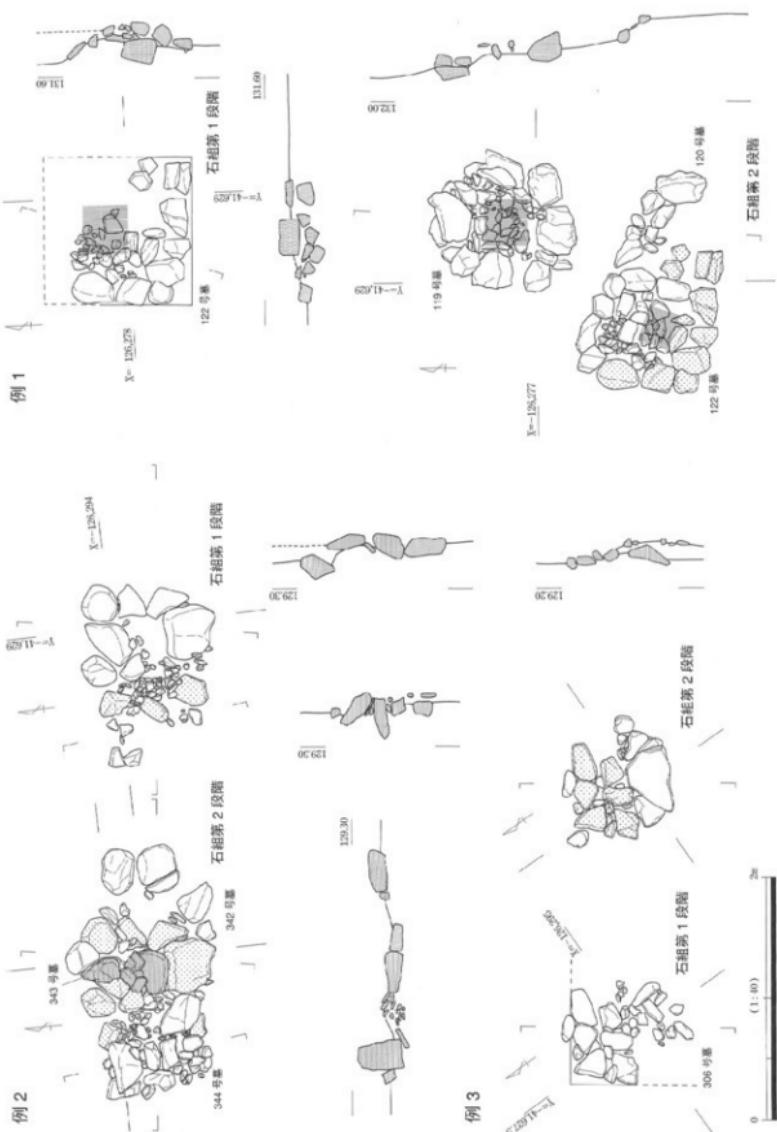


図150 石組の造り替え例（1）

mの方形区画を持つ石組で、中心に35cm前後の地輪が座っていたと考えられる。なお、その退かされた地輪は、119号墓の中心部の方形に組まれた石の痕跡から、そこに起きたものと考えられる。

加えて、120.122号墓の北辺と考えられた石組が斜めに一直線に並び、その上端が119号墓の面に揃えられていることから、119号墓を造る段階で、120.122号墓の北側が壊され、122号墓の石組の再整理と同時に石段としての再利用を目的に造り直されたものと思われる。

さらに、120号墓の東辺と思われた石も、119号墓への墓道の側壁補強のために置かれたものとも考えられる。

この石組の造り替えは、119号墓の前面に必要最低限の余地を確保するための意図をも兼ね備えているものと思われる。

以上の事柄は、本来方形の石組であったものの、造り直された石組が、他と比較して極端に歪曲している理由としても頗けるものであろう。

これらの石組の造り替えでは、石組を壊した時点で放棄せずにその石組を造り直していることから、旧の石組に対して粗末な扱いをしていないことが窺われる。

なお、120.122号墓が土葬墓で119号墓が火葬墓であることからすると、別の墓群の可能性があり、そうした場合においても、石組の造り替えがなされ、墓群の再整理が行われたことが判る。

#### (2) 【例2】342.343.344号墓（図150）

これらの墓は、342号墓が343号墓に地下構造の墓壙が切られていることから、343号墓を造る段階で342号墓の石組が壊され、342号墓の西半部の石組が半うじて残存していることが判り、その段階で石組の北辺を揃えていることが判る。

さらに、墓壙を伴わない344号墓を造る段階で、同時に343号墓の中心部の小石が342号墓の方へ搔きだされ、343号墓の中心部に35cmの川原石を加えている。

次に、344号墓の石組と北辺を揃えるために343号墓の石組の北辺に石を加えて新たな石組を造っていることが判る。その石組の中心部には、石仏が座っている（写184-3）。

344号墓の石組は、342号墓の残された石組および343号墓から搔きだされた石をそのまま再利用することで東辺に当てている。

なお、墓壙を伴わない石組のみの北辺を揃えた344.345号墓を造ることで、これらの墓群上に造り直された石組と新たな繋がりを見せ、さらに、本来、墓壙で見た場合に348～351号墓とは別墓群であるにもかかわらず、一連のものとしている。

#### (3) 【例3】306号墓（図150）

この墓は、上部の石組と下部の墓壙が位置的にずれており、別の墓と考えたものであるが、石組を詳細に観察した結果、以下の様に造り替えが行われたと考えられる。

当初の306号墓の石組が、何らかの理由で壊れ、その外周枠の北西辺および中心部が残存していた。また、石組を再整理するに当たって、南辺に石を数個置くことで、縮小した新たな石組を造っており、最も石組の造り替えの簡易なものである。

このことは、新たに置かれた石の下部や南側で数個の小石を検出しており、それらが本来の306号墓に伴う石組の中心部にあたると思われるところから判断できるものである。

なお、墓壙で見ると、306号墓が301号墓を切っていることから新旧が判り、新しく造り替えた石組の南辺が301号墓の石組の南辺と並ぶことからも、再整理されたことが判るものである。

例 4

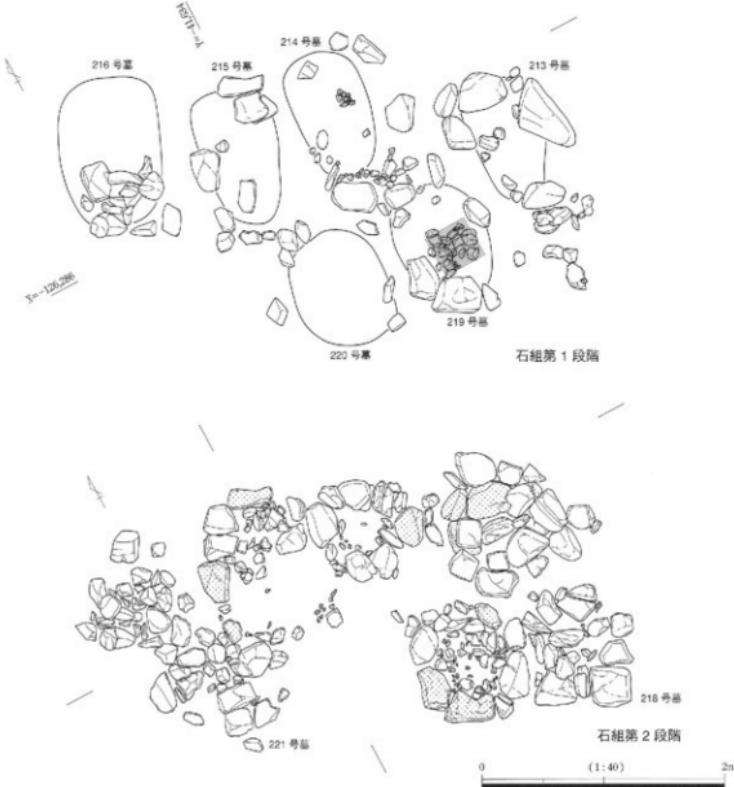


図151 石組の造り替え例（2）

(4) 【例 4】213~216.218~220号墓（図151）

これらの墓は、墓壇の主軸方向と石組の主軸方向に違いがあり、また、墓壇と石組の上下関係にずれを生じたもので、石組の造り替えが判明したものである。これらを、個々に見てゆくと判り難いので、墓群として塊で見ると、以下の様な石組が浮かび上がってくる。

これらの石組を石の検出状況から、下部と上部に区分して見た場合に、下部出土の石と墓壇を平面的に捉えると、墓壇に伴う石組の一群が浮かび上がり、上層で散在していた小石が、本来の石組に起因するものであることが判る。

また、219号墓の石組の中心部が2段あり、その下部が先述の122号墓同様の地輪を据えるための方形に組んだ石であり、上部が石仏の座っていた痕跡を残している。なお、下部のものがほぼ真南に向いているのに対して、上部のものが東へ約30度振っており、方向の違う石組の存在を明確にしている。

さらに、造り替えられた石組は、213~215号墓がほぼ南北両辺を据えていることと、218.219号墓も

ほぼ平行することからすると、これらの墓群は、墓壇を伴わない218号墓が造られた段階で再整理されたものと考えられ、それらがほぼ同規模の石組で構成され、東西に連接し、南北2列が余地無く群をなすことからも、時を余り置かずして造られたものと思われる。

なお、216号墓は、南半部が、ほぼ残存していると思われ、北半部が消失しているものと考えられる一方で、再整理された石組とも思われる。221号墓は、本来の215号墓の南辺を再利用し、218号墓に北辺を揃えて造られたものと考えられる。

以上のことから、この墓群は本来の墓壇の構成とは違ひ、再構成された石組のみのものと考えられる。なお、南側の228号墓～231号墓および237号墓～241号墓の石組群は、前述した墓群と同様な構成をしていることからも、墓壇を伴わない石組のみの墓群を構成していると考えられる。

以上の墓群は、約5m四方の墓域をもつものと考えられる。

#### (5) 【例5】161～164.176～182.183～189.192～194.202～208号墓（図152）

この墓群は、石組が最も密集して造られるもので、最も石仏の残存率が高い地点である。これらの石組は、東西南北共にほぼ接して造られており、石組が再整理された状況を端的に現していると考えられる。

墓壇の切り合い関係で見ると、上下関係に齟齬を來すものがままあり、ここでは、石組のみを見る方が理解し易いと考えられる。

石組のみで見た場合に、ほぼ同規模の石組で構成され、161.162.176.206～208号墓が最も小規模なものであることが判る。それぞれの東西に並ぶ墓群は、意図的に列を揃えようとしていることが窺われるが、統て揃っている訳ではない。このことは、本来の石組の配置に起因するものと考えられる。

特に西側の182.189.194号墓の縦列では、等高線に則しての西側からの墓群の並びと、東側からの墓群が交わる地点に当たる地点、すなわち、等高線の変換点であり、間隔が狭くなっている。その解消策として、189.194号墓ではそれぞれの北側の石組の南辺を北辺として利用し、共有することで石組を構成している。

これらが石組のみの連接した墓群を構成しており、さらに、194号墓の石組の南側に石を置くことにより、194～202号墓の再整理された墓群と、南辺を揃えることで関連付けていることから、大きな一塊の墓群と考えられる。

これらの石組のほとんどのものに石仏が座っているか、ないしは座っていた痕跡を残すもので、176.192.208号墓に地輪が座っていた。

なお、これらの石組は、絶てが再整理されたものと考えられず、本来の墓壇に伴う石組の一部を改変することで造り直しが行われたと思われる。

その際に、本来の墓の構成要素が優先される177～179号墓の例や、新たな石組の構成要素が優先され、対になる184.189号墓や、2基の切り合いのある石組が再整理された後に、その中心に、さらに石組を造る202～204号墓および206～208号墓の例などがある。

以上の墓の造り替え例に加えて、墓壇と石組の並びが異なる例が幾つか有り、その一例として、113～116号墓の墓群や130～140号墓の墓群が上げられる。

113.114号墓は火葬墓でその並びが南東へ約15度振っているのに対して、115.116号墓は土葬墓でその並びが南西に約5度振っており、並びの方向が違っている。さらに、再整理された石組は、それらとも方向を逆えており、東西方向に列をなしている。

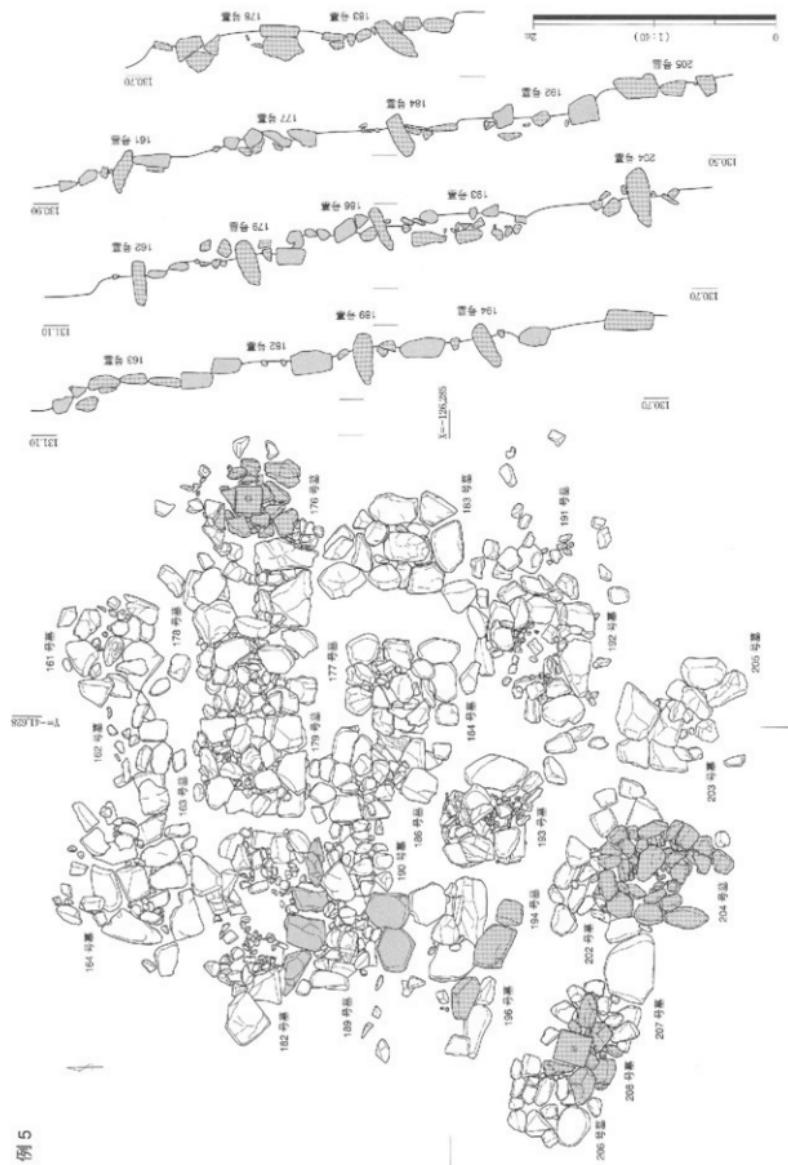


図152 石組の造り替え例（3）

130～140号墓の墓群は、先述のものと同様に墓壇の方向や間隔が石組と齋體を示すものである。さらに、136.132°.139号墓が北辺を削り、135号墓を加えて、外周枠を共有する形で造られており、一連のものと思われる。また、これらの墓群の北辺は、122号墓に対しての段を造り出している。

すでに、色々な石組の造り替えを見てきたが、それらとは違うものが2例ある。

まず、その一は、64～66号墓で、それぞれが61～63号墓を切って造られているが、その新しい石組がそれぞれの本来の石組の南西側に造られており、元の石組は整理されず残骸として残されている。本来の石組が方向を削りてはいるものの辺を削っていないことから、新たな石組もその限りではない。

その二は、281～294号墓の墓群で、墓壇などの切り合いから、石組の造り替えが窺われるが、それらに法則性が無く辺を削るなどの意図は一部に見受けられるのみである。

#### (6) 石組の造り替えによる組み合わせ

以上、当墳墓群の石組の造り替えには、幾つかの特色が見いだせ、これまで記述してきた事柄を要約すると、以下のようになる。

##### ①石組の造り替えにより、墓相互の関連性を寄り強調にする手段として行われる場合

例95.96号墓、203～204号墓、206～208号墓、227.228号墓、等

##### ②石組の造り替えにより、前面に余地を抜ける意図がある場合

例36号墓に対しての33号墓の北辺の縮小、119号墓に対しての122号墓の北辺の縮小

##### ③主に北辺を削ることによる墓群の並びを意図する場合

例318～320号墓、383～386号墓、427～431号墓等

##### ④石組の統廃合により、数列を面的に抜ける意図がある場合

##### 【例4、5】

##### ⑤墓群間に石組を配置することで数群を一まとめにしている場合

例12～33号墓間の17.31号墓

#### (7) その他

石組の造り替えに加えて、144～149号墓の北側に石を並べ関連付けている例があり、墓域の区画を意図している可能性が窺われるが、他にそういう例が見いだせなかった。

以上、石組の造り替えにより、様々な様子を窺い知ることができた。しかしながら、石組が東西端部および南端部でほとんど残存しておらず、それに加えて、石組の造り替えがかなりの確率で行われていることから、墓壇に伴う石組の実態が希薄になったことは歪めないものである。

なお、石組が全く検出されなかった箇所があり、それは、炭盛土の北西に位置し、東西約10m、南北約7mの範囲である。それの東側の366号墓周辺、西側の456～458号墓、南側の505号墓周辺に石組というよりは、集石群と考えられ、本来、先の墓壇上面に組まれていた石組が何らかの意図で取り除かれたものと考えられる。

### 3. 石組の規模

これまで、石組の造り替えの現象を捉えて、当墳墓群を外観してきたが、石組のみを見た場合に以下の様な傾向が窺われたので報告する。

まず、表4のように石組の残存状況が良く、規模のほぼ判るものに関して検討してみた。

何度も述べているように、当墳墓群の石組には、「墓壇に伴う石組」・「造り替えられた石組」・「墓壇に伴わない石組」の三種があり、それらの規模を比較すると図153の様になる。

表4 石組の組成一覧表

基番号	規模	石組の形態	石組の形式	種類
338号墓	2.00	1.30	火葬場A型	■裏側に伴う
119号墓	1.75	1.58	二段積A型	△仮面に伴う
122号墓	1.85	1.30	二段積A型	○仮面に伴う
146号墓	1.29	1.20	火葬場C II型	▲裏側に伴う
150号墓	1.50	1.50	二段積A型	●裏側に伴う
205号墓	0.95	0.95	二段積C I型	△裏側に伴う
209号墓	1.05	1.15	火葬場C I型	○裏側に伴う
234号墓	1.05	1.15	火葬場C I型	▲裏側に伴う
235号墓	0.95	0.85	火葬場C I型	○裏側に伴う
340号墓	1.49	1.40	火葬場A型	△裏側に伴う
341号墓	1.05	1.05	火葬場A型	○裏側に伴う
353号墓	1.49	1.48	火葬場A型	▲裏側に伴う
376号墓	1.35	1.05	二段積A型	○裏側に伴う
64号墓	0.85	0.80	火葬場A型	●裏側に伴う
160号墓	0.85	0.85	石組のみ	△裏側のみ
429号墓	0.90	0.88	石組のみ	○裏側のみ
500号墓	1.50	1.30	石組のみ	▲裏側のみ
501号墓	1.50	0.95	石組のみ	○裏側のみ
161号墓	1.05	0.95	石組のみ	●裏側のみ
162号墓	1.05	0.95	石組のみ	△裏側のみ
180号墓	1.95	0.95	石組のみ	○裏側のみ
907号墓	0.85	0.75	石組のみ	●裏側のみ
508号墓	1.05	1.00	石組のみ	△裏側のみ
311号墓	1.60	1.60	石組のみ	○裏側のみ
218号墓	1.05	1.05	石組のみ	▲裏側のみ
95号墓	1.13	1.05	石組のみ	●裏側のみ
292号墓	0.94	0.75	石組のみ	△裏側のみ
225号墓	0.75	0.65	石組のみ	○裏側のみ
81号墓	1.05	0.68	石組のみ	●裏側のみ
240号墓	1.05	0.95	石組のみ	△裏側のみ
405号墓	1.05	0.85	石組のみ	○裏側のみ
116号墓	1.05	0.95	石組のみ	▲裏側のみ
132号墓	1.05	0.95	石組のみ	●裏側のみ
126号墓	1.15	0.75	石組のみ	△裏側のみ
179号墓	0.95	0.85	石組のみ	○裏側のみ
154号墓	0.95	0.85	石組のみ	●裏側のみ
204号墓	1.05	0.95	石組のみ	△裏側のみ
206号墓	0.78	0.65	石組のみ	○裏側のみ
219号墓	1.00	0.95	石組のみ	●裏側のみ
219号墓	0.95	0.95	石組のみ	△裏側のみ
361号墓	0.95	0.85	石組のみ	○裏側のみ
503号墓	0.95	0.95	石組のみ	●裏側のみ
504号墓	0.95	0.95	石組のみ	△裏側のみ
306号墓	0.95	0.85	石組のみ	○裏側のみ

石組の規模比較

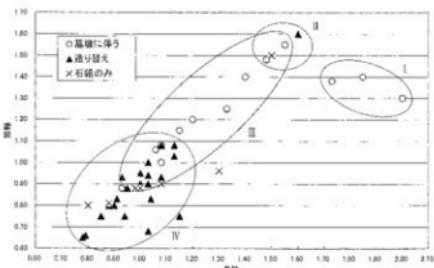


図153 石組の規模比較

石造物の種類

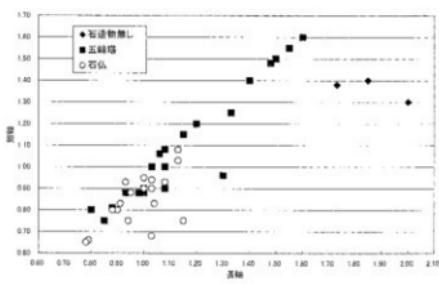


図154 石造物の種類と石組の規模

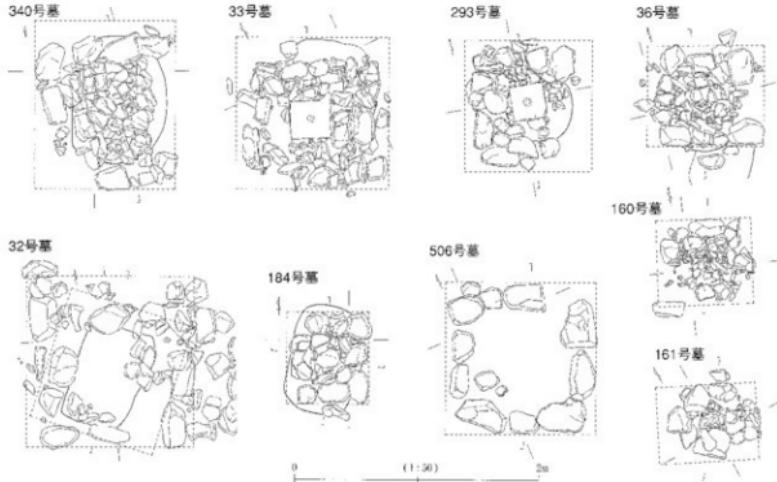


図155 石組の規模

その比較から、IVグループに分布していると考えられる。

まず、第I・第IIIグループは、「墓壙に伴う石組」のもので、前者の長軸が1.7m以上あり、短軸が1.3~1.4mの大形で長方形のものである。後者のものは、長軸が0.93~1.55m、短軸が0.88~1.55mでほぼ正方形のものである。

次に、第IIグループは、「造り替えられた石組」・「石組のみ」のもので、一辺が1.5~1.6m、と大型のもので、正方形のものである。

さらに、第IVグループは、「造り替えられた石組」・「墓壙を伴わない石組」のもので、一辺1.20~0.80mの長方形の小型のものが多い。

第IIIグループの小型のものと第IVグループは、ほぼ重なりを見せ、若干第IVグループの方が小型の傾向が強いと考えられる。

これらを、石組の形式で見た場合には、図154の様になる。

まず、石造物を持たないと思われる①類は先の第Iグループに属し、五輪塔を設置する②類は第II~IVグループに属し、石仏を設置する③類は第IVグループに属することが判る。

すなわち、五輪塔を設置する石組のほとんどのものが正方形であり、石組の規模も幅広く分布しているのに対し、石仏を設置する石組が1.13m以下の小型のもので、長方形のものである。

墓壙と対応している石組の葬法で見ると、火葬墓も土葬墓もある。

第Iグループの石組は石造物を伴わない①類で土葬墓A類のみであり、第IIグループの石組は五輪塔を設置する石組の②類で火葬墓A~C類および土葬墓A類であり、火葬墓A類の分布範囲が広く、対象の遺構数が少ないが、A類→C類→B類と小規模になる傾向が読み取れる。

なお、現存する石仏が設置された石組で確実に墓壙に対応し、規模が判明しているものがない。しかしながら、25号墓がほぼ対応すると考えられ東西幅がほぼ生きていることから1m以内の小型の石組と思われる。また、503.504号墓は石仏が残存していた石組で、炭盛土に覆われていることと、火葬場2に伴う石組のために造り直しが行われている様子が窺われるが、墓壙の規模から、やはり1m前後の小型の石組であったと想定できる。墓壙で見ると、25号墓が土葬墓A類で、503.504号墓が火葬墓A類であるが、石組の規模からは同時期と考えられる。

以上、石組の規模から言えることは、大規模なものから小規模なものへと移り変わり、石造物を設置しないものから、五輪塔を設置するもの→石仏を設置するものへと移行している。また、石組を方形に組み外周枠を設けるものから、数個の石を置くだけのものへと、すなわち、I類からII類へと新しくなると考えられる。

なお、墓壙を伴わない石組のみのものと、造り替えられた石組のなかに、一辺1.3m以上の大型のものがあり、これらは、墓域の端部に位置していることから、当墳墓群で特異なものと考えられるものである（10.17.32.491.506.537号墓）。

時期的には、火葬場の炭盛土の形成途上に506号墓が造られていることから、石組のみの墓群が形成されるとの同時期と考えられる。

#### 4. 墓群の再検討

第4章の第4節では、墓群の構成を平面的に捉え、任意に見てきたが、ここでは、墓相互の関連性に重点を置き、墓群の再構成を行ってみたい。

さらに、ここでは、前述の石組の造り直されたものおよび墓壙を伴わない石組のみのもの、土葬墓B

類や近世墓と思われるものを省き、後項に述べることとする。

### (1) 1群

1群はA群に相当し、火葬墓で見た場合に、面の違いから、3.11号墓と12~23.26~30.325~35.37~41号墓の2群に大きく分けることができる。

それらのうち、離壇状に造成された面に、12号墓から33号墓がほぼ等高線に沿って並ぶことから、これらが優先的に造られたものと考えられる。また、後方に造られる29.30号墓や西端に造られる35号墓~41号墓は、石組や墓壇の規模などから後出すると考えられる。

なお、3号墓は、面を違えるものの、石組や墓壇の規模を比較した場合に14.15号墓の後方と考えると12号墓から16号墓の墓群に含まれるものと推測される。

さらに、11号墓は、石組や墓壇の規模から33号墓と同様なものであることから、同時性があると思われる。

土葬墓では、9.24.25.36.42号墓があり、24.25号墓は石組や墓壇の規模と石仏が座っていたことから後出すると思われる。36号墓も同様に石組や墓壇の規模および斜面に位置しているという立地条件からすると、先の35号墓よりは後出することが判る。しかしながら、37~41号墓との先後関係は、不明である。また、9.42号墓は、石組の残存状況が不良であるため、確実なことはいえないが、それぞれ単独の墓とも考えられる。

墓壇を伴わない墓は、10.17.31号墓のように各墓群の隙間を埋めるような形で造られていることが判る。そうすると、先述したように24.25号墓が後出すると考えられることから、初期の墓群を考える時には、12~16号墓・21~23号墓・25~28号墓・32.33号墓との間には一定の距離が空いていたものと考えられる。

すなわち、火葬墓で見ると、11号墓は単独で造られ、3.12~16号墓、19号墓~23号墓、26号墓~30号墓、32~35.37~41号墓という群構造が浮かび上がり、この墓群は、当初、5群からなる火葬墓群の集まりであったと思われる。

### (2) 2群

この墓群は、主にB群に相当し、1号墳周辺を除いて東西にほぼ列をなしており、火葬墓群と土葬墓群に大きく別れており、ほぼ東半部が火葬墓群域で西半部が土葬墓群域になっており、その一部では錯綜している。また、西端ではC群の墓を、南端ではC・D群の一部をも含むものである。

1群と2群の大きな差異は、前者が離壇状に造成された墓域を区分して造られているのに対して、後者が当初から離壇状に造成されておらず、墓壇の段階では、斜面地にそのまま墓壇を掘り、石組の段階で土を盛り石組を水平に造っている。そのためか、1群の様に石組の段階でも東西に整然と列をなすものではなく、その方向が微妙に違っていることから、それぞれの墓群単位での並びが優先されている様子が窺われる。

この墓群を理解するには、先述したように、墓壇による火葬墓群と土葬墓群に区分して見た方が判り易いと思われる所以、以下、その様に記述してゆく。

#### 1). 火葬墓群

まず、火葬墓群は、その並びや切り合いなどから9群に区分できる。

①群は、49.50号墓で、その配置や墓壇の規模などから一対のものと思われる。周辺に火葬墓が見当たらないところからすると、2基のみの墓群と理解される。

②群は、147～150号墓で、等高線に沿った並びで列をなしている。石組の造り替えの項でも述べた様に、147～149号墓が繋がりが強いと考えられる。また、151号墓は土葬墓であるが、周辺に土葬墓が見当たらないことや石組が並んでいることからすると、150号墓と対になる可能性が高く、火葬墓と土葬墓のセットが考えられる一例である。

その南側に造られる152.156号墓は、墓壇の規模が前者より小さくなることから、それらに後出するものと思われる。

③群は、54～57号墓で、54.55号墓および56.57号墓が各々対になり、石組の北辺を対で揃え、組で違っている。

④群は、68～70号墓で、68.69号墓が墓壇の大きさは違うものの、両者間に煙道を伴うもので、より繋がりが強いものと考えられる。これらも、石組の残存状況が不良なものであるが、幸うじて北辺が残存しており、わずかに辺を異ならせるものの主軸方向が同一のものである。

⑤群は、78～82号墓で、80号墓が墓群の構成の所でも述べた様に、2度の利用が考えられ、墓壇の深さなどから80号墓の二度目のものと81号墓が対になるとを考えられる。また、79号墓は、80号墓と平行な位置関係にあるところから、関連性の強いものと考えられる。

なお、82号墓は80号墓の直ぐ北側に位置していることから関連性が強いものと思われ、78号墓と並びを同じくすることから対になる可能性がある。これらの墓も石組の残存状況が不良であることと81号墓が石組の作り替えが行われていることから、石組からの関連性が追えなかった。

⑥群は、88～90号墓で、これらの石組も作り替えがなされており、墓壇の規模などからすると、88.90号墓が対になるものと思われる。切り合いから89号墓が後出するものである。

⑦群は、97.99～102号墓で、石組がほとんど残存していない。墓壇の並びで見ると、101.102号墓がわずかに並びの方向を違えているため、2群に別れるとも思われる。墓壇の規模などから、99.100号墓および101.102号墓がそれぞれ対になるとを考えられる。

⑧群は、84～86.104.105号墓で、石組で見ると104.105号墓の石組が作り替えられており、84～86号墓の石組が若干方向を違えている。しかしながら、墓壇などの検出状況で見るならば、一連で並ぶものであり、関連性の強いものと考えられ、そうすると、84～86号墓の石組も作り替えられている可能性が大である。

⑨群は、106.108～110.113.114号墓で、これらの墓群も土葬墓に切られていたり、石組の作り替えが行われており、本来の石組の規模や並びなどは不明である。しかしながら、墓壇の主軸方向が同一であることや北端がほぼ揃うことから、一連のものと思われる。なお、106号墓に関してはやや北にずれているが、これは、105号墓が先行して造られていることが起因していると考えられる。

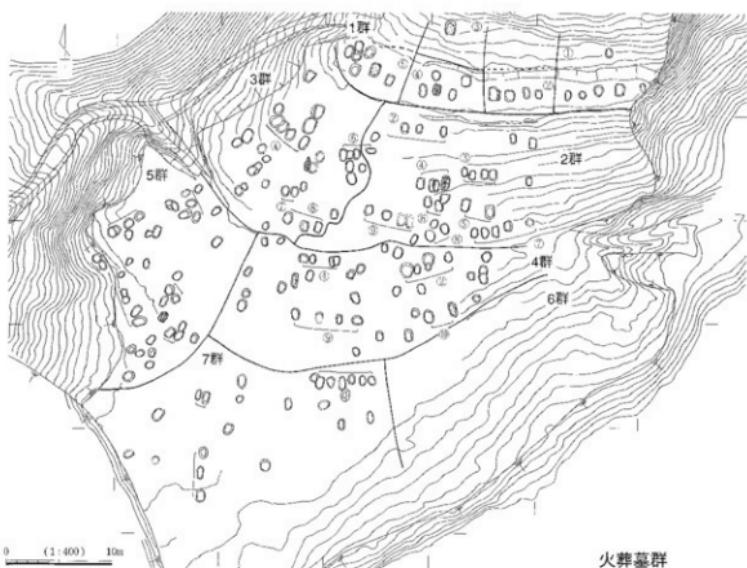
その位置関係や墓壇の規模などから、106.108号墓、109.110号墓、113.114号墓がそれぞれ対になる可能性がある。

以上に加えて、47.74号墓が火葬墓であり、それぞれ単独で位置している。ただし、47号墓に関しては、北側に土葬墓の46号墓があり、そういう上で見れば、49.46.47号墓が南北方向に並ぶことから、地下構造が火葬墓か土葬墓かを意識しているものかどうか疑問の余地を残すところではある。

## 2). 土葬墓群

次に、土葬墓群を見てゆくこととする。土葬墓群は、火葬墓群同様に並びで7群に区分できる。

⑩群は、58.60～63.174号墓で、墓の方向は同一方向を向いているが、南北辺を揃えず階段状に配設



火葬墓群

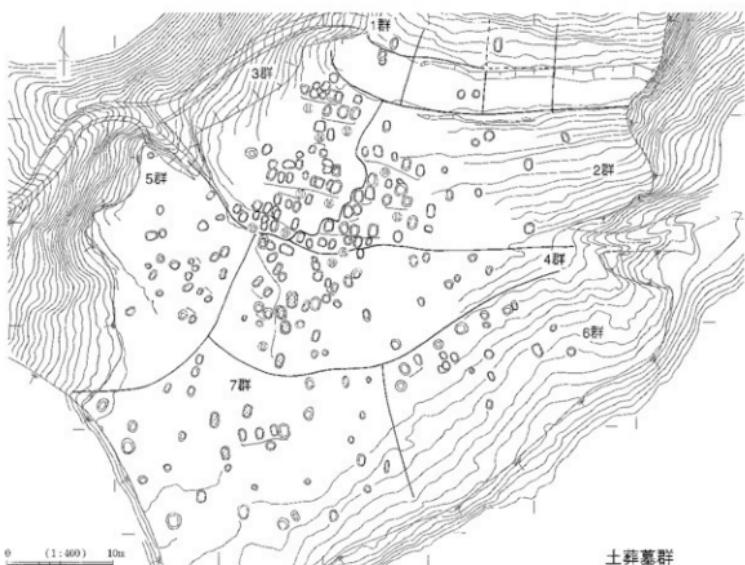


図156 墓群の再構成

している。また、60～62号墓の北側に各々石を置くことで、60.61号墓、61.62号墓、62.63号墓のそれぞれの北辺を揃えていることが判る。なお、58.62.174号墓が規模が小さいことから、子供の墓とも考えられ、58.60号墓、61.62号墓、63.174号墓でそれぞれ組み合わされるとも考えられる。

さらに、68号墓の北側に58号墓、70号墓の北側に石組が接して60号墓が造られていることから、68～70号墓とこの墓群が関連付けられる可能性もある。

⑪群は、71号墓～73号墓で、石組がほとんど残存しておらず、71号墓の墓壇上面から土器が出土していることから、この墓は15世紀代と考えられる。72号墓は、小規模なところから子供のものとも考えられ、73号墓と対になると思われる。

⑫群は、83.87号墓で、火葬墓群域にある土葬墓で、やや距離を置くものの、周辺に土葬墓がないことから、2基のみの墓群と考えられる。いずれも、石組がほとんど残存しておらず、87号墓の墓壇内から14世紀前半の瓦器碗が出土している。また、83号墓は小規模なもので、墓壇内に石が組まれ、漆片が出土していることから、箱が收められていたと考えられる。

⑬群は、93～96号墓で、95.96号墓が石組に向かい合う一対の石仏が立っており、墓壇としても一対のものと考えられる。なお、墓壇の主軸方向で見ると93.96号墓が同一方向であることと、93.96号墓の石組南辺が揃うことからすると、93.96号墓が後出すると思われる。このことは、96号墓が造られた時点で、95号墓の石組が造りなおされていることからも、頷けるものと思われる。

⑭群は、115.116号墓および107.111.112号墓で、115.116号墓は95.96号墓の南側に造られ主軸方向が同一で、墓壇の規模などから、それらより後出すると考えられる。

また、95.96号墓の真南に造らず、やや南西に位置しているのは、114号墓が、すでに存在していたことを窺わせるものである。

107.111.112号墓は、火葬墓群を切って造られている。107号墓は、小規模で墓壇内に石が組まれていた。111号墓は墓壇内から多量の石が出土している。

これらの墓は、切り合いが無く、石組の残存率が悪く、その先後関係が不明である。

⑮群は、233.272号墓～276号墓で、等高線に沿ってほぼ一列に並んでおり、東端の272号墓のみが火葬墓であるが、火葬墓群と列をなすものがなく、273号墓が土葬墓であるが土隣りとの間隔がわずかに空いていることからすると、272.273号墓で一対のものと理解したい。

石組の残存率が悪く、また墓壇の切り合いが無く、規模なども類似していることから、これらの墓群の先後関係は不明である。

⑯群は、277～279号墓、244～248号墓で、⑭群の南側に接する様に造られており、ほぼ列をなして並んでいる。前群と比較して墓壇の規模が小規模な一群である。

以上の様に、2群では、土葬墓群と火葬墓群の棲み分けが行われており、さらに墓群は、ほぼ東西方向に列をなすもので、2基1対になると考えられるものが多く検出されている。

以上の墓群が、大きくは、一つの墓域を共有しているものと考えられる。

### (3) 3群

この墓群は主にC群からなり、2群の墓群と同様に土葬墓と火葬墓がそれぞれに群をなしているが、若干、錯綜しているところもある。しかしながら、2群のように墓群毎に列をなすというよりは、一塊の群として捉えた方が理解しやすい。

#### 1). 火葬墓群

まず、火葬墓群で見るならば、その塊から12区分できる。

①群は、119.127.128号墓で、127.128号墓が南北に並ぶ配置から、繋がりが強いものと思われる。

なお、この墓群を平面的に見た場合に、同一面を共有している他の墓が土葬墓群でそれらの北端に位置していることから、1群のその五の墓群に統く一連のものの可能性が考えられる。

②群は、133.137.138号墓で、133号墓は138号墓に切られているが、墓壇の規模がほぼ類似していることから、一対のものと考えられる。138号墓は隣接するものの南東に位置し、列をなしていないもので、後出すると考えられる。

③群は、143～146.173号墓で、石組の残存状況が不良で確とはしがたいが、143.145.173号墓が列をなしていたと考えられる。

④群は、167.170～172号墓で、ほぼ列をなし並んでいる。墓壇の主軸方向や深さが同一であることから、171.172号墓が対をなすものと考えられる。167号墓は土葬墓であるが、墓壇の主軸方向が同一である170号墓と対になると思われる。これらの墓壇に伴う石組は残存しておらず、造り替えが行われた石組が重複していた。

⑤群は、175.177～179.181号墓で、ほぼ列をなして並んでいる。177号墓が178.179号墓に切られており、墓壇の規模などからすると、177.181号墓と178.179号墓がそれぞれ対をなすものと考えられる。また、175号墓は、それより、後出すると考えられる。なお、これらに伴う石組は造り替えが行われており本来のものではない。

⑥群は、183.184.186.188.192.195～197号墓で、183.184号墓および186.189.196.195.197号墓がそれぞれ列をなしており、192号墓はその南側に1基のみ位置する。これらの墓は、上部の石組が造り替えられており、本来の墓壇に対する石組が消失しており、詳細が不明である。

しかしながら、その造り替えの石組を見た場合に、183.184号墓が対になっていることから何らかの関係があったものと思われる。

⑦群は、213.219.220.223号墓で、これらの墓も、上部構造の石組が造り替えられており、墓壇に伴う石組がわずかに残存するのみであった。墓壇の規模や性格などから、213号墓が先行するものと考えられ、219.220号墓が対をなすと考えられる。221.223号墓は、219号墓の石組の造り替えられたものに揃えるように石組が組まれていることから、それより、後出するものと思われる。

⑧群は、225.234.235.237号墓で、石組がほとんど残存していないため、詳細は不明である。墓壇の規模などから、234.235号墓が対をなすと考えられ、237号墓が後出すると考えられる。

また、225号墓は、これらの墓と列をなさず、233号墓の土葬墓の北側に作られており、何らかの関連性が考えられる。

⑨群は、242.243号墓で、これらのみ、やや外れて造られており南北に切り合っていた。

⑩群は、257～259.268.269.222.263～266号墓で、石組がほとんど残存しておらず、詳細は不明である。257.258号墓、222.264.266.268号墓がそれぞれ列をなして並んでいたと考えられる。

以上、見てきた火葬墓群であるが、大きくは、③群～⑥群、⑦群～⑨群の2群がそれぞれ纏まっている。

## 2). 土葬墓群

次に、土葬墓であるが、その塊から9群に区分される。

⑪群は、117.118.120～126号墓で、大きくは、その規模などから2群に区分される。

まず、117.120.122号墓の一群は墓壙の深さが深いものである。120.122号墓は切り合いがあるが、ほぼ同規模の墓壙を持つことから対になると考えられ、117号墓が後出する。

120.122号墓は、130.131号墓の後に、雛壇状に造成された面に造られたものである。

次に、118.121.123～126号墓の一群は、浅い墓壙群である。石組がほとんど残存しておらず、その詳細は不明であるが、墓壙の切り合いから北側から南に向けて造られていった様子が窺われる。

⑪群は、130～132.140.141号墓で、上部の石組は本米の形を残存しておらず、石組の造り替えが行われていることが判明している。130.131号墓は、規模などから一対のものと考えられ、132号墓に関しても、規模が若干小さくなるが、一連の墓壙群と考えられる。140号墓は、火葬墓を切っていることと小規模になっていることからすると、後出すると考えられる。141号墓は、さらに、小規模になることから、この墓群で最新のものと思われる。これらの墓は、間隔をやや開けるものの、ほぼ列をなし並んでいる。

前述の⑪・⑫群の土葬墓群が大きく一塊の墓群を構成している。

⑬群は、142.159.164号墓で、いずれも、石組の残存状況が悪く不明な点が多い。142号墓は、墓壙に石が組まれた状態で出土していることから567号墓との類似性が強く、159号墓は、墓壙から石が多数検出されるもので、列をなすものではない。また、南北に互い違いに並んでいるため、その関連性は希薄である。

⑭群は、165.182.199.200号墓で、165.182号墓、199.200号墓がそれぞれ並んでいることや、墓壙の規模などから、対になると思われる

⑮群は、185.187.193.194.198.201.256号墓で、切り合いからこの墓群では185号墓が一番古いと思われる。墓壙の規模や深さなどから、185.194号墓、198.201号墓がそれぞれが対になると思われる。

⑯群は、202.203.206.207.209.214～216号墓で、ほぼ列をなして並んでおり、墓壙の切り合いや規模などから202.203号墓および206.207号墓、214.215号墓がそれぞれ対になると思われる。

以上の⑬群から⑯群が大きく一塊の土葬墓群として捉えることができる。

⑰群は、217.227～229.232号墓で、227～229号墓がほぼ列をなして並んでいる。

⑱群は、236.238～241号墓で、⑰群の南側に位置し、ほぼ列をなし並んでいる。

⑲群は、250～252号墓で、石組はほとんど残存していなかった。ほぼ列をなし、墓壙の規模などから250.251号墓が対になると思われる。

以上の⑰群から⑲群が大きく土葬墓群として捉えることができる。

この3群では、火葬墓群が6ヶ所、土葬墓群が3ヶ所が一部重複するもののそれぞれの墓域を構成していることが判り、墓壙のみで見た場合でも、密集度が高いものである。

#### (4) 4群

この墓群は、主にD群およびE群の北半部を含むもので、1～3群と比較して、より緩やかな斜面地に位置している。ここでの墓群は、東西方向に整然と列をなすものと重複し塊状になっているものがある。火葬墓と土葬墓がそれぞれ櫻み分けが行われているようであるが部分的に重複があり、この墓群では火葬墓群の方が優勢である。

##### 1). 火葬墓群

火葬墓群は、その列や塊から概ね11区分できる。

①群は、309.312.313.314号墓で、石組の残存が不良で詳細が不明であるが、墓壙の規模などからみ

ると312.314号墓が対になると考えられる。

②群は、280.281.283.284.286～293号墓で、石組においても切り合いが認められ、その主軸方向が一定していない。墓壇で見ても列をなしておらず、その切り合い関係に一定の法則が見いだせない。墓壇の規模などから、280.281号墓および292.293号墓が対になると考えられる。

③群は、296.297.300.302.304.306～308号墓で、石組の残存状況が不良のものが多く墓壇に伴う石組は定かではない。墓壇を伴うものは302.306号墓のみで、他は焼骨のみが出土しているものと瓦質羽笠の藏骨器を伴うC類のみのものが散在している。

④群は、342.343.348.349.351号墓で、これらのものは列をなし並んでいる。いずれも、石組の造り替えが行われており、本来の墓壇に伴う石組が不明である。墓壇の規模などから、342.343号墓および348.349号墓がそれぞれ対になると考えられる。

⑤群は、253.353.355号墓で、石組を全く残していないもので、墓壇の規模などから253.353号墓が対になるとと考えられる。

⑥群は、357～361号墓で、石組が残存していないか造り替えが行われており、本来の墓壇に伴う石組は不明である。これらの墓は、ほぼ隣接して造られているものの、墓壇の主軸方向が微妙に違いその関連性は不明である。

⑦群は、338.367号墓で隣接し、南北にややずれるが主軸方向が同一のため、何らかの関連性があると思われる。また、338号墓は、石組や墓壇の規模などから上葬墓の337号墓と対になると考えられる。

⑧群は、319.320.322.323.327.328号墓で、石組の造り替えにより、本来の石組は不明である。墓壇の規模や性格から、319.322号墓および320.323号墓がそれぞれ対になるとと考えられる。327.328号墓は遺構の配置から、前述のものに後出すると思われる。

⑨群は、374.378.382.383.385号墓で、378号墓を除いてほぼ等間隔に並んでいる。墓壇の規模などから378.382号墓および385.374号墓がそれぞれ対になるとと考えられる。

⑩群は、330～332.334.403.408号墓で、330～332.334号墓は石組が消失しており、403号墓は石組の造り替えが行われており、本来の石組が不明である。墓壇の規模や並びなどから、331.332号墓および334.403号墓がそれぞれ関連性が高いものと思われる。なお、331号墓は、墓壇の構造から338号墓と同規模の墓と考えられる。

⑪群は、370.401.394.402号墓で、402号墓を除き南北方向に並んでいる。石組がほとんど残存しておらず、詳細は不明である。

## 2). 土葬墓群

土葬墓群は、列をなして並ぶものが少なく散在している。その塊から7区分できる。

⑫群は、336.337.339～341号墓で、南北に配置されている。336号墓は石組を消失しているが他は残存しており、石組の組み方に共通性がある。

⑬群は、310.311.315～317号墓で、石組がほとんど残存しておらず、詳細が不明である。墓壇がやや小規模であるが、列をなさず散在している。

⑭群は、282.285号墓で規模が若干違うが、周囲に火葬墓群があるところから、この2基が何らかの関連性を持っていると考えられる。

⑮群は、298.301.305.346.347.359.363.364号墓で、これらのものは、配置的に並ぶものではなく、石組がほとんど残存していないために詳細が不明である。火葬墓に切られるものが多く、墓壇の規模な

どにも差異があるため、その関連性は不明なものが多い。363.364号墓が墓壙の規模などが類似しており対になると考えられる。

⑩群は、377.379.371～373.381号墓で、これらのものも列をなすものではなく散在している。377号墓は石組の主軸方向が378号墓と同一のため、何らかの関連性があると考えられる。墓壙の規模などから、379.371号墓が対になると思われる。

⑪群は、354.356.366.368.369.391.392.397.399号墓で、これらも列をなすものではない。石組の残存が不良で詳細が不明である。墓壙の規模などから、368.369号墓、397.399号墓がそれぞれ対をなすと考えられる。

⑫群は、335.407.404.405.388.409.410号墓で、404号墓は集石造構で墓とするのか疑問の余地が残るものである。335.407号墓、405.388号墓、409.410号墓が遺構の配置などから、何らかの関連性があると思われる。

以上、列をなす火葬墓群と列をなさない火葬墓群があるものの対をなすものが多く、土葬墓群に関しては、列をなさないものの2基一対になるものが多いのが特徴的である。

### (5) 5群

この墓群は、主にF群で構成されており、この墓群でも火葬墓域と土葬墓域に概ね区分できる。

#### 1). 火葬墓群

火葬墓群は、西半部と南半部に集中しており、大きくは3区分できる。

①群は、434.437.440.442～445.452～454号墓である。石組がほとんど残存しておらず、詳細が不明である。墓壙で見るならば、主軸方向や規模などにも差異があり、列をなすものでもない。444.445号墓は、墓壙の規模などから対になると思われる。しかしながら、配置から見るならば、433.434号墓、435.437号墓、439.440号墓、441.442号墓がそれぞれ対になるとを考えられる。これらは、西側に火葬墓で東側に土葬墓の2基一対の組み合わせであり、そうであれば、369.370.439～442.444.445号墓と列をなし並んでいる。

先述したように、火葬墓と土葬墓の組み合わせは、随所に見られるものの、これらが列をなすものはこれ以外にはない。

②群は、478.480.481～483.485～488.472.473.489.521～523号墓の一群で、石組がほとんど残存しておらず、詳細は不明である。墓壙の規模や配置などから、486.487号墓、485.488号墓、521.489号墓および522.523号墓がそれぞれ対になるとを考えられる。

③群は、463.466.467.474.501～505.509.510.512.516.518～520号墓である。

列をなすものと、列をなさないものがあるが、466.467号墓、501.502号墓、503.504号墓、474.505号墓、516.518号墓および519.520号墓のようにほとんどのものが2基一対になると思われ、463.461号墓のように土葬墓と対になるものもある。概して、この墓群の火葬墓群も2基一対の組み合わせが重点的に造られている。

#### 2). 土葬墓群

土葬墓群は、火葬墓と対になるものを除いて東北部に集中しており、他は散漫である。土葬墓には、447.449.450.451.450.479.477.484.459.460.462.464.465.468～471.475.515.517号墓がある。これらのものも前述の火葬墓同様に2基一対になるものがある。

以上、この墓群は、全体的に土葬墓と火葬墓においても2基一対で造られるものが多く、それらが列

をなすというよりは、組み合わされて墓群を構成している。

なお、北半部においては、石組が全く検出されず、西端において集石されている部分があることと、南東端においても、炭盛土の下層で石組の上部に集石がなされていることから、前述の石組が何らかの理由で取り扱われたものと考えられる。

#### (6) 6群

この墓群は、墓域の南東端に当たり土葬墓のみがあり、火葬墓は検出していない。ほとんどのものが石組を残存しておらず、詳細が不明である。南に行くにつれ、散漫になる。

#### (7) 7群

この墓群は、主にE群の南半部とII群で構成されるもので、火葬墓群と土葬墓群がある。

##### 1). 火葬墓群

火葬墓群には、列をなし並ぶものと2基一組のもの、散在するものがある。

列をなすものは、2群あり、その一は、414.415.417~419.420.421.423号墓で、西半部では石組が全く残存しておらず、東半部でも部分的に残存するのみで、全容が不明である。419.423号墓は、遺構の検出面が1枚上になると思われ、後出すると考えられる。墓壇がほぼ列をなし並ぶことから何らかの関連性が強いと思われる。413.416.422号墓は、土葬墓であるが、並びを一にしていることから同様な関連性が考えられる。

その二は、558~563号墓で、石組の造り替えが行われており、墓壇から見ると本来、558~560号墓および561~563号墓が主軸方向を違えているため別の墓群を構成していたと考えられる、しかしながら、石組の造り替え時に一連のものとして扱われている。

2基一組として考えられるものには、425.426号墓、427.432号墓、547.548号墓、578.579号墓、582.583号墓、574.575号墓、588.593号墓があり、これらのものは石組が残存しておらず、詳細が不明である。墓壇の規模などからは差異があり、同一規模のものが組み合わされるものと違っているところが特徴的で、隣接して造られるものとやや距離を置くものがあり、また、南北に並んでいるものもある。

散在するものには、494.554.556/571.596号墓があり、周辺に組み合わせるものを検出していなかっため、単独で造られたものと考えられる。596号墓は、最南端に造られた火葬墓である。

##### 2). 土葬墓群

土葬墓は、列をなすものが1群のみあり、他は、散在している。南端ではほぼ土葬墓が占めている。

572.573号墓は、石組が一部しか残存していないが、341号墓と同様な石組が造られていたと考えられる。また、墓壇の規模からすると、572号墓は341.339号墓と同様なものである。573号墓は340号墓と同様な規模のものである。これらが、2基1組のものと考えられる。

列をなすものは、567~570号墓で、石組の残存が不良であるが、341号墓と同様な石組であったと考えられる。570号墓の石仏が座っている石組は、微妙にずれているため造り替えられたと思われる。墓壇の規模は、567~570号墓がほぼ同様なものと思われる。

なお、496.497号墓は、南北に並ぶ土葬墓で、石組の規模がほぼ同じで、墓壇から石が多量に出土する共通性があり、2基一对のものと思われる。

その他の土葬墓は、散在しており、群をなすものではない。

以上、墓群の再構成を火葬墓および土葬墓に区分して見てきたが、大きくは7群に区分でき、さらにそれらを細分することができ、各墓群により差異が見いだせたと思われる。

次に、墓壙を伴わない石組のみのものや、造り替えが行われた石組を見てゆくこととする。

#### (8) 墓壙を伴わない石組と造り替えられ列をなす石組

墓壙を伴わない石組のみのものは、全体で74基あり、それらが単独で造られる場合と石組の造り替えに連動している場合がある。ここでは、個々に造り替えられた石組を省き、連接して造られ群をなす石組について見てゆくこととする。

上記の石組は、主に2~4群に集中しており、特に2群での密集度は群を抜いている。石組の造り替えの項でも述べたが、これらの石組は、上部構造の石組すなわち、墓壙に伴う本来の石組を再利用することで成り立っており、總てを新しく造り替えていないのが特徴的である。その場合に、地上に残存している石組を再利用しているため、辺を揃えて隣接して造ることが最大の課題となっており、本来、石組の前面に余地を設けているものが、前後も接して造られ、余地が消滅している。大きくは2箇所の塊があり、他は、列をなすものである。

ここでは、石組群として捉えられるものについて記述する。

石組群として捉えられるものの一つは、2群の大半を占めるもので、東西約11m、南北約8mを測る範囲のもので、およそ、等高線に沿って造られている。今回の調査で最も多く石組に石仏が座っていたもので、石組が総数60基以上有り、西端部での残存率が悪く（'67年調査で一部調査されている）、正確な数字は不明である。

その二是、前者の南西部に当たり、東西約5m、南北約4.5mを測る範囲で、およそ20基弱の石組が密集している。部分的に石組が壊れているものの、前者と同様にほとんどの石組に石仏が立っていたものと考えられる。

それらの南西に東西・南北が約10m前後の空白地帯がある。この区域は、墓壙が検出されているところから墓地であったことが確認できており、その周辺に集石群がある所から意図的に整理されたと考えられる。さらに、その南側に火葬場群および炭盛土が分布することから、これらとの何らかの関連性が考えられる。

#### (9)まとめ

以上、中世墓群の再構成を試み、それらの群構造を見てきたが、大きくは7群の墓域に区分でき、それらの各々に若干の差異が認められられた。基本的には、火葬墓群と土葬墓群の二者に区分でき、それらが明確に区分できる場合と鉛綜している部分があった。

また、それぞれの墓群の中で小区分ができる、石組や墓壙の規模に差異のあるものが組み合わされる場合と同規模の石組や墓壙が隣り合わせで配置される2基一対のものがある。前者は時期差と考えられ、後者は同時性が強いものと思われる。

なお、火葬墓と土葬墓が組み合わされる場合があることも確認できた。

さらに、墓壙を伴わない石組のみの墓群があり、中世墓が8群の墓群で構成されることが判明した。この墓壙を伴わない石組のみのものは、遺構の項でも述べた様に火葬場との関連性が強いと考えられ、火葬場出土の遺物から、16世紀以降と位置づけられる。

それに加えて、近世墓の土葬墓B類の一群があり、中近世墓で大きくは9群の墓群で構成されていると考えられる。

なお、これらの墓群の時期変遷に関しては、後節の第8節に譲る。

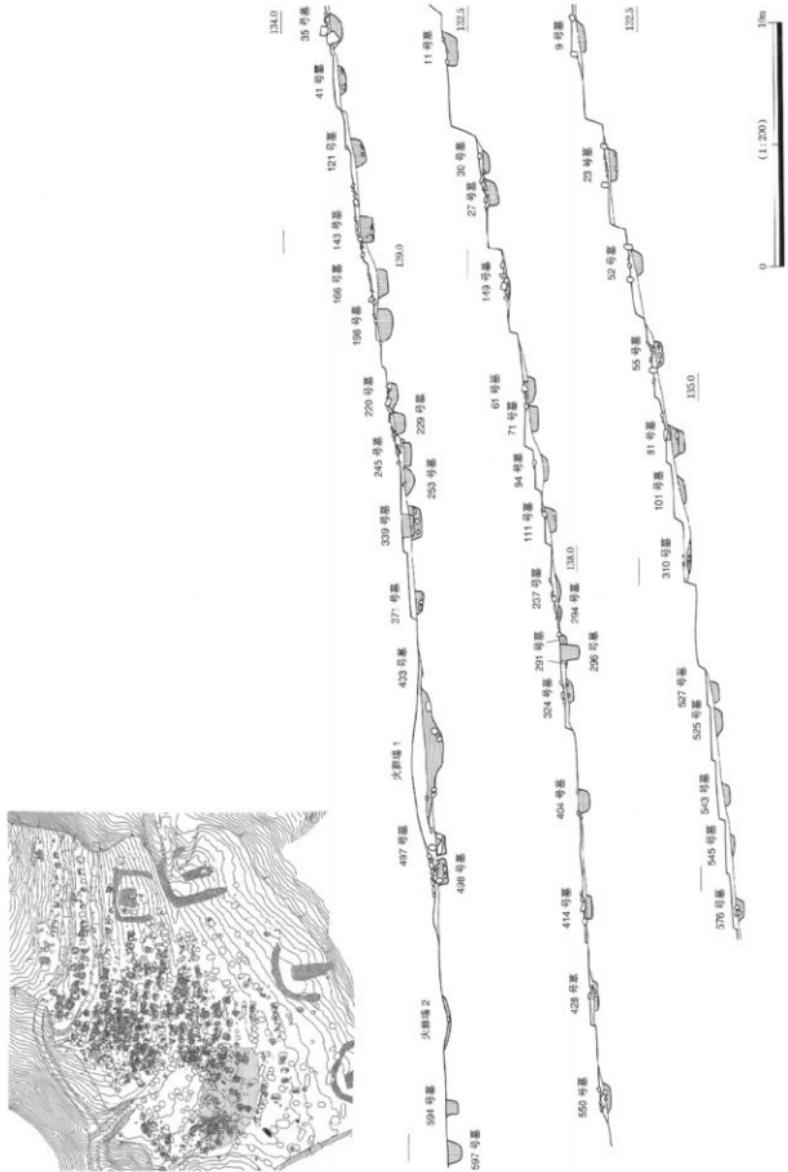


图157 中近世墓縦断面模式図

## 第7節 中近世墓群の墓壙と葬法の検討

### 1.はじめに

中近世墓群では、515基の墓壙を検出している。これらは基本的に火葬墓または土葬墓であったと考えており、第5章第3節においては各々幾つかのタイプに分類して、その諸相について記述してきた。また、本章第5節では、出土土器の傾向を検討することで、墓壙各タイプの時期幅とその面期を推察することができた。しかしながら、各タイプの墓壙の性格付けおよび、形態・構造の細分や時期的変遷等についてはまだ検討の余地があると思われる。そこで、本節では各タイプごとに既往の研究や他遺跡の例を援用しながら、まず上記の点についての検討を行う。そしてさらに、墓壙の分布状況・立地の側面からその構成・時期的変遷についての見通しを検討してみる。

### 2.火葬墓の検討

当中近世墓群では、「被熱した人骨（焼骨）」、「（墓壙の壁面や床面の）被熱痕跡」、「炭」が検出された墓壙を火葬墓として、これらの組み合わせの違いにより3つに細分している。この分類は、火葬の過程を踏まえた上で行ったものなので、まず火葬墓に関する認識を整理する必要があろう。

#### （1）火葬墓の認識

火葬とは、広辞苑に記載されているように「死体を焼き、骨を拾って葬ること」と通常理解されている。また、ほぼ同様の意味をもつものとして、旧セイロン・ビルマ・シャムなどで仏典に用いた言語であるパーリ語で焼身・焚焼の意味する「jhapeta」に当たる「荼毘」がある。また、火葬を行う場所を表す言葉として「火葬場」「荼毘所」があり、遺骸または遺骨を葬った場所とする「墓」とは異なるものとのするのが、一般的な認識と思われる。<sup>1)</sup>

さて、最近の考古学調査では火葬自体は縄文時代に遡ることが指摘されているが、仏教的な火葬は『続日本紀』文武3(700)年の僧道昭の火葬が「天下火葬從比而始也」と記されるように奈良時代から行われるようになったと考えられている。<sup>2)</sup> そして、木藤真氏が『西宮記』に記述される延長8(930)年の醍醐天皇の葬送などを挙げ、現在に近い仏式による火葬は天皇や貴族の間では平安時代のころまで遡ると指摘している。

また、過去の火葬の認識を窺えるものとしては、古くは『続日本紀』元正天皇養老5(721)年に元明天皇が詔した「朕崩之後。宜於大和国添上郡戴宝山北雍良岑、造庵火葬。莫改他姓。」の言葉がある。この条は藤澤一夫氏の解釈によると、庵とあるのは火葬を行う場所で、火葬場所から他所に改葬してはいけないという意味として、本来は火葬場所と墳墓を別の場所に営むものであったことを指摘している。<sup>3)</sup> つまり、仏教的な火葬が行われたところには、既に現在とほぼ同様の意味で理解されていたようである。

一方、考古学においては、藏骨器や墓誌が検出されると火葬墓としてたやすく認識できる。しかしながら、わずかに骨が見られるだけで、多量の炭、被熱した鉄釘などが検出される土坑などその理解が不明瞭である遺構も存在した。また、「火葬場」についても、被熱痕跡や多量の炭、被熱した鉄釘の存在から「火葬施設」「火葬構造」「火化遺構」などと報告されたものもあるが、本章第4節で記述したように、必ずしも大方の首肯を得られている状況ではないのである。このように、火葬に関する遺構の認識については、藏骨器や墓誌以外はその性格づけが極めて曖昧であると言えよう。

そういった状況の中、近年の小林義孝氏の古代火葬墓に関する一連の研究は非常に示唆に富んだもの

<sup>5)</sup>である。小林氏は、火葬とは遺骸を「納棺」し、それを「荼毘」し、「拾骨」して藏骨器に納め、墓に「納骨」するという過程を経る葬法であると整理しており、このような視点で火葬に関する遺構を理解することを提倡している。当墳墓群では、火葬墓の要件として「焼骨」「被熱痕跡」「炭」の3つを挙げて分類したが、これは小林氏と共通の理解のもとにあるものと言える。

## (2) 火葬墓の性格

火葬墓の細分および各タイプの詳細な内容については、第5章第3節を参照して頂くことにして、ここでは簡潔にまとめることにする(図158)。以下、各タイプの性格について検討していく。

**火葬墓A類** 壁面や床面に「被熱痕跡」があり、埋土の下層に多量の「炭」を含み、「焼骨」は含む場合が多いが含まれないものもある。内部構造としては、棺台と煙道が設けられたものもあり、これらは燃焼効果を高めるものであったと考えられる。

このような状況から、この墓壙は基本的には一度限りの「荼毘」を行い、そして「拾骨」の際に墓壙内を片づけた後、「炭」と共に「焼骨」を納め、再度埋め直したものと考えたのである。また、棺台や被熱した鉄釘の存在から、遺骸は木棺に納められていた墓壙でもあることも示唆される。このように考えると火葬の過程の全てを一つの墓壙で行ったと理解できるのである。

さて、ここで問題になるのはこの遺構が墓として認識されていたかについてである。墓としての認識を骨の有無で考えるならば、この火葬墓A類としたものには墓と意識されたものとそうでないものがあったと理解される。しかしながら、第5章第3節で記したように、当墓群の火葬墓A類については墓壙を埋めた後、基本的にはその上に石組を構築したものと考えられるものである。また、このタイプの墓壙は、その規模・深さ・棺台・煙道および焼骨の有無といった点に違いがあるが、火葬の一連の行為を行ったという点では違ひがないと思われる。

この火葬墓A類は、時期的には出土土器および墓群の構成、考古地磁気測定から、14世紀中葉～15世紀中葉・後半と推定している。このように時期幅が見られるので、後にその細分について検討する。

**火葬墓B類** 「被熱痕跡」が認められない墓壙に、「焼骨」が検出されるものである。藏骨器を使用しているかどうかで細分でき、使用するB I類が10基、使用しないB II類が19基である。

この墓壙に関しては、他所で「荼毘」され、「拾骨」された遺骨を納めた遺構、火葬の最後の段階で

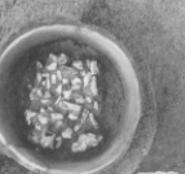
	火葬墓A類	火葬墓B類	火葬墓C類
写真			
要件	「被熱痕跡」「炭」が認められる。「焼骨」は有るものも無いものもある。	「焼骨」のみ認められる。藏骨器があるものをI類、無いものをII類に分ける。	「炭」のみ(II類)または合わせて「焼骨」(I類)が認められる。
葬法	火葬の一連の行為「荼毘」「拾骨」「納骨」を行う。	「拾骨」された骨を「納骨」のみを行う。	A・B類かは判別が付かない。しかし、上面に石組が認められるものもあり、墓として意識されている可能性もある。

図158 火葬墓の分類と葬法

ある「納骨」のみを行ったものと考えられる。考古学で言う從来から火葬墓とされてきた典型的なものである。藏骨器は全て瓦質羽釜で、土をある程度充填してから焼骨を納めて再度土を充填するという埋納方法も共通する。特定の骨が集められることも無く、他に遺物も出土しない。

時期的には、B I類を瓦質羽釜から14世紀後半～15世紀前半の年代で捉えることができる。B II類は、出土遺物がなく時期の想定が困難であるが、分布的にはB類はI・II類共に集中した状況を見て取れることから、ほぼ同時期のものと考えたい。

また、問題となるのは、ここに納められた骨がどこで荼毘されたものかである。当墓群内で考えならば、火葬墓A類か火葬場が相当する。火葬墓A類ならば時期的には問題がないが數的に合わない。火葬場ではB I類に関して時期的に、B II類ならば數的に合わない。よって、当墓群以外の他所で荼毘された可能性が考えられ、静岡県一の谷中世墳墓群跡等の多くの遺跡でも同様の想定がされている。<sup>10)</sup>いずれにせよ、荼毘を行った場所と骨が納められた場所が異なっているという点で、火葬墓A類とは異なる形態のものである。

**火葬墓C類** 「被熱痕跡」が認められない墓壙に「炭」が多量に検出されるものである。また合わせて「焼骨」も検出されるものをC I類とし22基、「炭」だけのものはC II類とし22基を数える。

さて、この墓域の性格であるが、「被熱痕跡」がないことから、荼毘は行われていないものとすることができる。しかし、火葬墓A類では棺台が明瞭に被熱していても、壁や床にその痕跡が不明瞭な場合もあるので、火葬墓A類であった可能性も否定できない。特に長軸1.0m前後のものは火葬墓A類と規模的に近いので、その可能性も想定することができよう。しかしながら、全体的には規模的にばらつきがあるため、全てが火葬墓A類であったとも考えられない。

それでは、他にどのような性格が考えられるであろうか。単純にこのような墓であったと考えることも出来るし、また荼毘時に生じた炭を廻棄した遺構などとも考えられる。前者の可能性が考えられるものとしては、C II類である119.293号墓のように確実に石組が伴うと思われるものが挙げられる。逆に石組が構築されないものに関しては、後者の可能性が考えられる。しかし何度も述べているように石組自体は後世の改変を受けているので、必ずしも断定することが出来ない。また、290.358号墓等のように薄く炭と焼骨が散在しているものは、廻棄か散骨であるかの判断が難しい。

その他には、小林氏が「火葬灰埋納遺構」と提唱する、墓そのものではなく墓域を限るためなど墓に付属する施設であったとする考え方がある。<sup>11)</sup>この意見は、墓とは埋葬だけでなく様々な葬送儀礼が集約された場であると考えたときに非常に魅力的なものではある。しかしながら、小林氏が例に挙げた古代の火葬墓のように藏骨器の回りを囲うように存在するといった状況が、当墓群では認められなかった。

以上のように、火葬墓C類はその性格が多様であると考えられるが、確実に石組を伴う例もあることが注目すべきことと思われる。また、出土遺物がないので詳細な時期を決定することは難しいが、火葬が行われた14～16世紀の間、より限定するならば火葬墓A・B類と同様の造営時期を考えたい。

**火葬場** 火葬墓A類より規模が大きく一辺約2～4m前後の「被熱痕跡」がある土坑で、埋土は炭盛で構成されているもので、7基を数える。内部構造としては棺台・煙道がある。これらは墓域の南西部に集中し、そのほとんどが焼骨が混じった炭盛土で覆われていた。この炭盛土からは、被熱した鉄釘や銭貨が出土している。炭盛土の切り合ひ・分布から、まず火葬場3・4が営まれ、次に2、そして周辺の1・5・6・7が造られていったようである。

土坑の規模と炭盛土の存在から複数回の「荼毘」が行われた遺構であると考えられ、検出された焼骨

の各個体の全ての部位が出土しているわけではないので、「拾骨」が行われたものと思われる。炭盛土は、茶毘時に生じた炭をかき揚げて、徐々に形成されていったものと考えられる。

この時茶毘に付され拾骨された焼骨は何処に納められたのであろうか。火葬墓B類の項でも述べたように、歳骨器の時期が合わないし、火葬墓B類の数も多くないので、当墓群には納められなかつた可能性もあるのではないかと思われる。しかしながら、石組にわずかに納められたり、散骨が行われた可能性までは否定できない。ただ、藤沢典彦氏が指摘するように中世には納骨信仰が流行したときでもあるので、寺院などに納骨された可能性なども無視できないであろう。<sup>6)</sup>

時期的には、出土土器から15世紀後半～16世紀中葉が中心と考えられるが、17世紀以降のものも出土している。このような現在にもその系譜が認められる火葬場は、近世以降に出現すると考えられていた。しかしながら、ほぼ同時期の福井県福井市武者野遺跡や14～15世紀の大津市上田上牧遺跡など当墓群と同様な火葬場が近世以前にも存在することは留意しておくべきことであろう。<sup>7)</sup>

**火葬墓の性格と名称の問題** さて、以上のように当墓群の火葬墓の性格を、分類した各タイプごとに記述してきた。これら各タイプの墓壙は、中世において他の遺跡でも普遍的に検出されているが、遺構名およびその性格について必ずしも統一されてはいない。しかしながら、当墓群では非常に多くの火葬墓が検出されており、「被熱痕跡」「焼骨」「炭」を火葬墓の要件としてその組み合わせにより細分する方法は当墓群だけでなく他遺跡でもある程度有効なものと思われる。

なお、遺構名の全てに火葬墓と付したことに関しては、多くの異論があることが想定できる。だが、火葬墓B類だけを墓にしたり、火葬墓A類を焼骨の有無で火葬施設と火葬施設墓に分けたりすると、ますますその性格が恣意的なものになると考えられた。<sup>10)</sup>そこで、ひとつの試みとして上のような分類を行い、先の用語を選構名としたものである。

その他、第8章第4節で分析したように火葬墓の全タイプ、火葬場からは伴に成人だけでなく、小児・乳幼児の骨が検出されていることが判ったことは、重要なことである。

### (3) 火葬墓A類の細分と時期的変遷

火葬墓A類は196基と数が多く、時期的にも幅があるものなので、その細分を試み時期的変遷を追求したい。しかしながら、出土土器が非常に少ないので、この側面からのアプローチのみでは不十分と思われる。また、形態・構造の面でも細部を見ればバラエティーに富んでいるが、明瞭な差異が付けがたく、機械的な分類に陥ることになろう。そこで、時期が推定できる墓壙を基準にして、火葬墓A類が有する各属性ごとにどのような傾向があるかを分析することで、時期的変遷が追えるかどうかを検討する。

**時期が推定できる墓壙** 火葬墓A類の時期幅は、本章第5節で検討したように主に出土土器から14世紀中葉～15世紀中葉・後半の年代が考えられ、この間は中近世墓群を時間的に4区分したII期に当たるものである。この際に、時期が推定できる墓壙が6基しかないが、これらはさらに4つの時期で捉えることができる。

①338号墓－出土土器がないが、本章第6節の検討により石組の形態では後述する33号墓より古いものである。それから考えると14世紀中葉以前の可能性がありうる。

②33号墓－出土土器はないが、考古地磁気測定で1350年の年代が推定されている。

③69号墓－備前壹から14世紀後半～15世紀前半、また考古地磁気測定では1400～1425年という年代が推定され、相互の矛盾がそれほどないので、ここでは幅を持たして前者の年代を用いる。

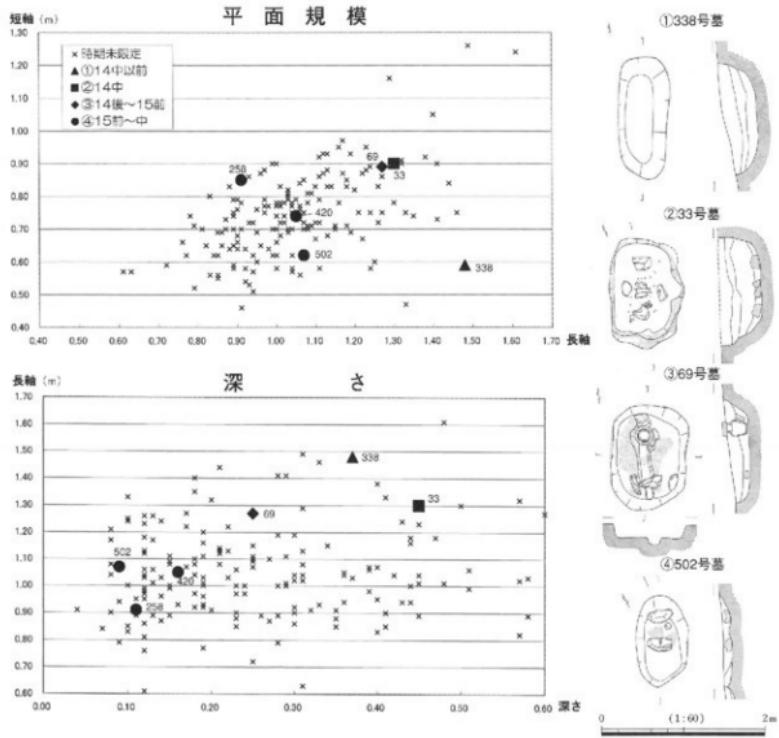


図159 規模から見た火葬墓A類の時期的傾向

④258, 420, 502号墓—これらは全て土器施設から15世紀前半～中葉と考えられる。

以下、これらを基準にして各属性ごとの傾向を検討していくのであるが、ある程度類型化できる平面規模・深さ・壇内施設・焼骨の検出状況の4つの属性において分析を行うこととする。

**平面規模** 火葬墓A類の平面規模を図159のようにグラフにして表し、先述した時期が推定できるものに別の記号を付している。これを見るとまず、長軸0.85～1.20m、短軸0.60～0.80mの範囲に集中していることが分かる。次に、時期が推定できる墓壇の分布を見ると、④がこの範囲に取まるが、①・②・③が外れて長軸1.20m以上であることが分かる。このことからすると、平面規模は時期が古いものがより大きいという傾向を読み取ることができる。また、この結果を単純に考えれば、15世紀前半～中葉の墓壇が多く、それ以前のものは少ないと言える。

**深さ** 墓壇の深さを平面規模と同様にグラフにしてみた。これを見ると、墓壇の深さは約0.1～0.6mの範囲でほぼ満遍なく分布しているように見える。強いて言えば0.3mまでのものがもっとも多いということになる。時期が推定できる墓壇で見ると、①・②が0.4m以上、③が0.25m前後、④が0.1m前後となる。このように見ると、時期が新しくなれば浅くなるという傾向を見ることができる。この場合で

も、時期が古いものの方がより少ないという見方ができる。

**壇内施設** まず、棺台の有無を時期の基準とした墓壙で見ると、④では502号墓に棺台があるが他のものにはないということになる。時期的に古いと思われる338号墓には棺台がないことからすると、この観点で時期差を捉えるのは難しいということになる。また、棺台には③・④のように南北に2～3カ所置く場合、②のように十字に置く場合や、これらより多くの石を置く場合等の幾つかのパターンがある。基準とした墓壙の中では、②が前者、③・④が後者であるので、これに関しては時期差の可能性があるが、限定ができないであろう。一方、煙道は5基の墓壙しかなく、時期の基準となる墓壙では69号墓しかないのでその比較ができない。

**焼骨の検出状況** 火葬墓A類では、焼骨は基本的に炭が多く含まれる埋土下層で検出され、その状況には幾つかのパターンがある。明らかに置かれた状況が腐えるものが44基、意識的であるかどうかは不明だが重量が10g以上のが51基、10g以下であるものが58基、全く検出されないものが43基となっている。基準とした墓壙で見ると、①が全く検出されないもの、②が10g以上で散在するもの、③が藏骨器を使用しており、④が258.420号墓で10g以上が散在するものだが、502号墓が10g以下で散在するものである。この属性も現段階では時期差に由来するものかを判断できない。

**各属性の相関関係** 以上、火葬墓A類の4つの属性各々の傾向を見てきたわけであるが、平面規模と深さについてはその差異が時期的な傾向を表している可能性が高いと言える。一方、壇内施設と焼骨の検出状況についてはその差異が明確な時期差としての認識が難しい。そこで、平面規模と深さの差異が基本的には時期差を表すとしたときに、各属性の相関関係を考えることとする。

先に検討したように、時期が新しくなるにつれて、平面規模は小さくなり、深さが浅くなるという傾向がある。しかしながら、深さと長軸の相関関係のグラフを見ると、両者が必ずしも一致した相関関係ではないことが分かる。また、両属性の数値の分布状況を比較すると、平面規模より深さの方が各数値ごとに満遍なく分布しているが、どちらがより時期差を反映しているものは判断しがたい。

そこで、両属性が表す意味を考えてみると、まず平面規模は木棺の大きさまたは荼毘時の遺体の姿勢状態を表すとみることが妥当と思われる。そうすると、①はやや伸展葬に近い姿勢で埋葬されたと考えられるが、総体的には屈葬の姿勢を取っていたと考えられる。そう考えると、深さの差異が遺体を荼毘に付すという機能的な差異を表している可能性を想定できる。そこで、深さの数値がより満遍なく分布し、時期が推定できる墓壙のまとまりもより明確であるので、断定はできないが平面規模よりもより時期差を表しているものと見たい。

次にこれら両者と壇内施設の相関関係であるが、基本的には一致はしない。しかしながら、先述したように煙道は長軸が比較的大きいものに多いので、古い傾向を示すものと思われる。また、深さ20cm以下のものがないこともそれを裏付けよう。なお、棺台の有無では時期差を決めることができないが、最も古い可能性がある338号墓にないので当初はなかったかたずけられた可能性がある。

最後に、焼骨との相関関係であるが、火葬本来の姿から考えると、きれいに拾骨してしまうのが古相であると考えられる。また、拾骨後に墓壙内に焼骨を残すならば、明らかに置いた状況がうかがえるものも古相であると思われる。一方、焼骨が散在したような状況で検出されるものが新しい傾向と考えることが出来るが、実際には平面規模・深さとの間に明確にそのような相互関係をみることが出来ない。<sup>11)</sup>

**小結** 以上のように、火葬墓A類について、その時期的な傾向をつかむために、各属性ごとに分析してきた。その結果、火葬墓A類においては、時期的な傾向として平面規模が小さくなり、深さが浅くな

るということが判明した。そして、平面規模と深さでは明確な相関関係を捉えるのが難しいが、機能的な差異で深さのほうがより反映していると考えた。しかしながら、出土遺物等で時期が推定できる墓壙が少なく、平面規模・深さ共にその差異の境界はやはり不明瞭であるため、具体的な数値化による細分が困難であった。ただ、後述するように平面規模および深さを便宜的に幾つかに分類した墓壙の分布を見ると、ある程度の傾向を捉えることは可能であると考えたい。

### 3. 土葬墓

当墓群では、土葬人骨が全く検出されていないので、その意味で確実に土葬墓と言えるものがない。しかしながら、先に挙げた火葬墓の3つの要件が見られない墓壙の内233基を、墓壙の形態・構造およびその分布状況から基本的に土葬墓と認識した。まず、この認識について整理する。

#### (1) 土葬墓の認識

火葬の痕跡が残らない墓壙を基本的に土葬墓と考えたわけであるが、その根拠について記していく。火葬墓の要件の内「焼骨」「炭」は基本的に残りうると考えたのである。また、後に検討するように、これらの墓壙は規模的に人を埋葬することができるものであり、実際人骨が良好に残存している他遺跡からの対比で証明できる。また、棺台と思われる石が設置されたものや、副葬品と思われる状況で遺物が出土している墓壙も土葬墓である可能性を示すものと言えよう。

しかしながら、本当にすべて土葬墓であると旨い切れるのであろうか、その危惧は確かにある。焼骨がかなりの量検出されたものとして372号墓の例があるが、当墓群ではこの一例だけであり確実に埋納したかどうか判断できなかった。しかし、これと同様の1m前後の墓壙に1ヶ所に塊まって焼骨のみ検出された例が、京都府加茂町前門墳墓群で3基報告されている。<sup>10</sup> よって、焼骨のみを納めた火葬墓B類の一種であるものも含まれている可能性自体を否定できないが、基本的には土葬墓と考えたい。

さて、先のような認識に基づいて土葬墓を設定したわけであるが、さらにその規模・形態からまず大きく2つに分けることができる。以下、各々についてその性格・細分について検討していく。

#### (2) 土葬墓A類の検討

土葬墓A類は、その主軸を概ね南北に指向し、その規模が長軸0.50~1.60m、短軸0.50~1.40m、深0.10~0.95mの間に分布するものである。平面形態も方形・円形・長方形・楕円形と様々である。時期的には、本章第5節で検討したように出土遺物から13世紀後半~16世紀中葉と幅を持ったものと考えられる。このように土葬墓A類は広い時期幅を持ち、またその規模・形態も多様であることからその細分および時期的変遷について火葬墓A類と同様の方法で検討してみる。

**時期が推定できる墓壙** 土葬墓A類は、本章第5節で出土土器から検討した両期では、I~III期に当たるものである。各両期に倣する墓壙を挙げて、年代の基準を考えることにする。

I期（13世紀後半~14世紀前半・中葉）-341.571号墓は13世紀後半の土師器皿が、87.130.336号墓は14世紀前半・中葉の瓦器碗が出土している。そして、これらと同様の規模をもつ567.572号墓は鳥帽子・短刀、569号墓からは短刀が出土しており、当該期と思われる。

II期（14世紀中葉~15世紀中葉・後半）-34.36.71.552号墓から15世紀前半・中葉の土師器皿が出土している。310号墓からは、14世紀中葉頃の古瀬戸小皿が出土している。

III期（15世紀後半~16世紀中葉）-98号墓からは15世紀後半・16世紀前半、601号墓からは16世紀中葉の土師器皿が出土している。

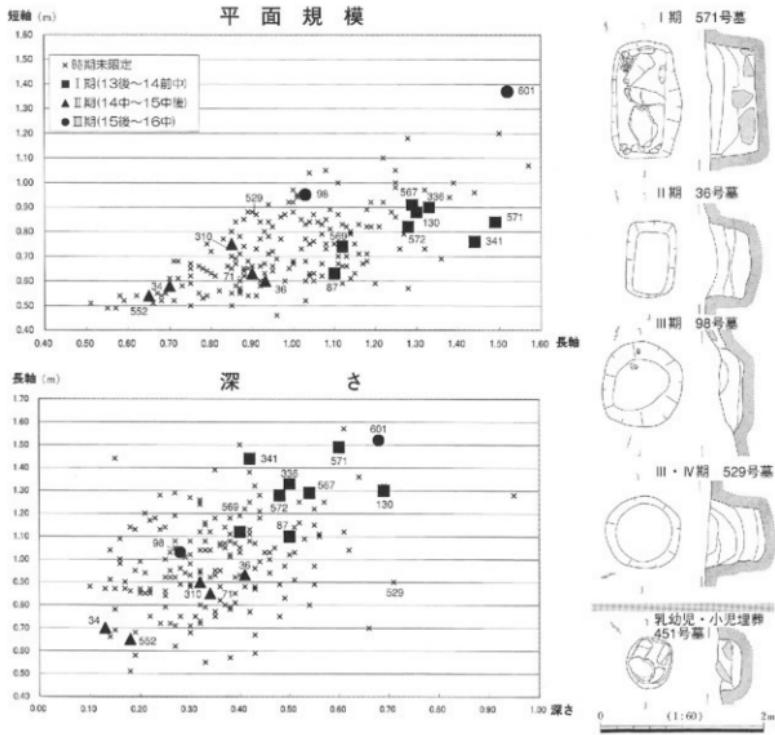


図160 規模から見た土葬墓A類の時期的傾向

以下、土葬墓A類が有する属性のうち、平面規模・深さ・壇内施設および木棺について検討する。

**平面規模** 火葬墓と同様に散布図を作成し、それにより見ていくことにする（図160）。これを見るに、長軸で0.80～1.20mの範囲に集中し、この間は長軸と短軸が比例関係にある。長軸1.20m以上のものはまばらに分布し、長軸と短軸の比率が1.5以上と大きいものが多い。時期の基準となる墓壇の分布を見ると、I期のものが長軸1.2m以上が多いことがまず分かる。そして、III期のものは長軸と短軸の比率が1.0前後のものであることも注目に値する。

**深さ** 土葬墓に関しては、実際の調査では検出が難しく、これより深い可能性が考えられる。深さは満遍なく分布しているが、0.20～0.40mの範囲に多く分布している。時期の基準となる墓壇の分布を見ると、I期のものが深さ0.40m以上であることが言える。他の時期に関しては、II期がそれより浅いが、III期が深浅両方のものがある。深さに関しては、深い方が古い傾向が見られるが、平面規模よりは明確ではないと言えよう。

**壇内施設と木棺** 壇内施設としては石囲いと棺台がある。石囲いには、451号墓のように1.0m以下の小さなものと、567号墓のように長軸1.2m以上の墓壇の壁面を巡るものがある。前者の場合は、成人の

表 5 吉母浜遺跡土葬墓一覽

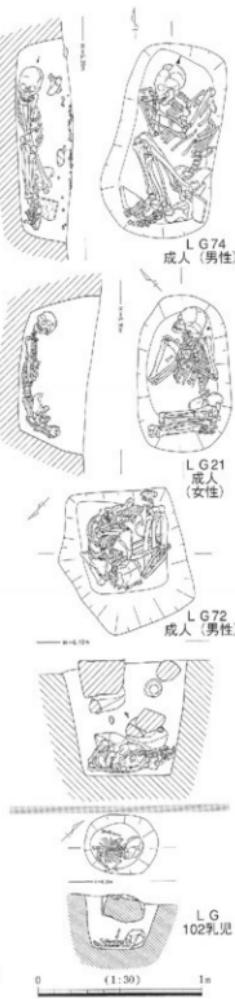


図161 吉母浜遺跡の土葬墓

埋葬を考えがたく、土葬であるならば乳幼児の埋葬もしくは改葬の可能性が考えられる。後者の場合は、遺体もしくは木棺の安置のために設けられたと思われる。棺台に関しては、数個の石を南北に配するものが多いが、明らかに棺台と考えることができるものが、10数基しかない。

棺台の存在は遺体を木棺に納めていた証拠と考えられる。また、他に木棺の痕跡としては、鉄釘の出土状況が考えられる。あと、当墓群で特に重要な事として、埋土の堆積状況と墓塚内に落ち込んだと思

われる石の存在である。前者に関して、当墳墓群では土壤の関係のためか通常言われる木棺の痕跡が検出されていない。しかしながら、埋土の中央が窪むような堆積を示すものがあり、これは何らかの木棺の痕跡と考えている。また石の落ち込みも、木棺の存在を示すのでないかと考えている。

**吉母浜遺跡の土葬墓との比較** 当中近世墓群の土葬墓の具体相を推定するために、ほとんどの墓壙から人骨が良好な形で検出された山口県下関市吉母浜遺跡の土葬墓と比較してみる<sup>19)</sup>(表5・図161)。

吉母浜遺跡は13世紀後半～15世紀代を中心にして、土葬墓116基、火葬墓19基が検出された墓群である。ここでは、土葬墓について墓壙のプランが良好に検出されたものの平面規模をグラフ化してみた。その際に被葬者の性別・年齢で、若年以上の女性と男性、そして小児以下の3種に分けてドットを落とした。これを見ると、小児以下は長軸0.5～1.0m、女性は長軸0.8～1.2m、男性は長軸1.0～1.4mというような傾向を認めることができる。しかし、当墓群のように規模の差異が時期差を表しているかどうかは、明らかにできないようである。

ここで重要なことは、吉母浜遺跡では墓壙の規模の差異により、成人と小児を認識できるということである。当墓群でもそのように考えると、0.8m以下の墓壙がある程度のまとまりをもっていることから、小児以下の子供を埋葬した墓と考えることができる。また、吉母浜遺跡では成人の性別に関しても男女である程度の差異が認められるが、当墓群では具体的な数値をあてることが難しい。

**小結** 以上のように、土葬墓A類としたものは、傾向的に時期が下るほど墓壙の平面規模が縮小するといふことがまず言える。特に、I期のものが長軸1.20m、深さ0.40m以上のものである可能性が高いと言え、副葬品が見られる墓が6基と多い。そして、III期の土器が出土した98.601号墓は、長軸の比率が1.2以下で、方形を呈するものである。全国的に、近世以降には方形箱型木棺、早桶を使用した座臥屈葬となるので、平面形が円形・方形を呈する墓壙がIII期以降の可能性が高いことが言える。また吉母浜遺跡との比較から、長軸が0.8m以下の墓壙は小児・乳幼児が埋葬されたものと思われる。

### (3) 土葬墓B類の検討

土葬墓B類は、墓壙の主軸が概ね東西を指向するもので、長軸と短軸の比率が2.5以上であることに特徴がある。その規模は長軸が0.85～2.40m、短軸が0.40～0.75mの幅で、深さが0.35～0.80mを測る。鉄釘の出土状況から木棺が使用されていたと思われるものが多い。また、鉄釘が出土していないものも先述した堆積状況から、鉄釘を使用しない木棺もしくは他の有機質の棺が使用されていたと思われる。

時期的には、上限が6枚セットの錢貨に古寛永通寶がなく明錢を含まない渡来銭であることと、遺構の切り合い・分布から、火葬場よりも新しく16世紀後半以降と考えられ、その下限が波佐見碗の時期から19世紀前半と考えられる。このように非常に長期間の時期幅を持つものであるので、時期差を捉えられるかを検討してみる。そこで、先述した錢貨が出土している555.600号墓と波佐見碗が出土した448号墓の差異を考えることにする。この両者では、前者に鉄釘で打ち付けた木棺を用いられているのに対し、後者で全く鉄釘が出土していないので、断定が出来ないが時期差を示す可能性がある。

報告でも述べたように、規模的には墓壙の長軸から大が1.7～2.4m、小が0.8～1.3mの2つに分けることができる。この違いを考えるために、墓壙の形態が酷似している高柳市高柳城跡のキリストンが埋葬されたと思われる木棺墓と比較してみる<sup>20)</sup>(表6・図162)。当中近世墓群と同様に、墓壙の規模に大小がありかなり酷似したものである。また、この高柳城跡の木棺墓は、人骨が半数以上残存している。すると、墓壙の規模が小さいものには幼児のものが4体あった。なお、規模が大きいものは、10代と推定されるやや若年のものが1体あったが基本的には成人のものである。

このように、土葬墓B類は伸展葬で成人、小児が各々葬られた墓壙と言える。高槻城跡のキリシタン墓と酷似しているのは確かであるが、当墓群ではそれを証明する遺物が全く出土していないので、断言を避けておく。

#### (4) 墓以外の性格を有する遺構(図163)

墓以外の性格が考えられる確実な遺構としては、586号墓のような土師器皿を埋納した遺構や、141号墓の石造物を埋納する遺構などがある。両者ともその性格を具体的に論ずることが困難だが、何らかの埋葬もしくは墓に関する地鎮などの儀礼的な遺構だと思われる。時期的には、前者がⅠ期の複数枚の土師器皿を重ねて埋納するものが2基、そしてⅢ期のものに土師器皿1枚だけの1基がある。後者は、石造物の時期から推定すると、概ね16世紀、もしくはそれ以降と捉えるのが妥当であろう。

#### 4. 墓壙から見た中近世墓群の構成と時期的変遷

以上、墓壙を火葬墓と土葬墓に分けて、その性格および時期的な細分について検討してきた。その結果、火葬墓A類と土葬墓A類に関しては、断定できないが時期的な傾向を規模の縮小化として捉えることができた。ここでは、墓壙から見た墓群の構成および時期変遷について検討していきたい。

##### (1) 墓群の様相とその構成

墓群の構成については、第5章第4節のグルーピングを見かけ上の分布・立地のみで判断したものだが、本章第6節のものは石組の造り替えや墓壙のタイプを考慮して再構成したものである。このようなグルーピングはその細部においてまで統一した見解を見いだすことが難しいが、ここでは便宜的に様々な側面から検討したより妥当性が高いと思われる後者の再構成された墓群に従うこととする。

**墓群の構成(図164)** 当墓群のような長期間営まれた墓地において、グルーピングを行うためには対象とする時期幅を設定する必要がある。当墓群においては全ての墓の時期を限定することが難しいが、墓群の大勢から外れ、時期的にも限定できるⅢ・Ⅳ期(15世

表6 高槻城跡木棺墓一覧

No.	年齢性別	墓壙		木棺	
		長幅	短幅	長軸	短軸
1	成人	1.94	0.96	1.65	0.30
2	成人?	1.12	0.66	1.83	0.28
3	5~7歳	0.94	0.47	(0.63)	0.18
4	—	0.70	0.46	—	—
5	—	0.68	0.45	—	—
6	—	0.74<	0.44<	0.36<	0.14<
7	3~5歳	1.39	0.50≤	0.95	0.21≤
8	—	1.69	0.48	0.74	0.26
9	成人	1.68	0.83	1.44	0.35
10	成人女性?	1.80	0.98	1.57	0.38
11	成人男性?	1.90	0.62	1.64	0.46
12	—	0.85	0.46	0.64	0.25
13	乳幼児	0.97	0.50	0.63	0.27
14	—	0.65	0.37	—	—
15	熟年?	1.60<	(0.84)	1.45<	0.42
16	—	1.11	0.62	(0.75)	(0.38)
17	—	0.12<	0.45<	—	—
18	—	1.22	0.60	0.82	0.25
19	—	0.84	0.79<	—	—
20	10代	1.84	0.81	1.58	0.30
21	男性?	1.87	0.84	1.50	0.30
22	幼児	1.14	0.51	0.91	0.22
23	成人男性?	1.98	0.58	1.64	0.40
24	成人男性?	2.05	0.84	1.67	0.37
25	成人女性?	1.45<	0.90<	1.63	0.32
26	—	—	—	—	—
27	成人女性?	1.80	0.50	1.67	0.31
28	成人男性?	1.90	0.67	1.65	0.32
29	成人男性	1.40<	0.75	1.05<	0.38

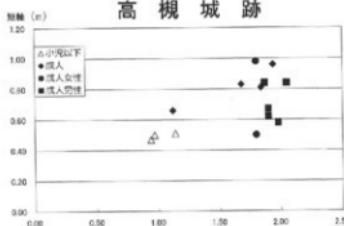
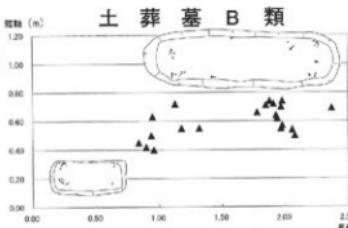


図162 土葬墓B類と高槻城跡木棺墓の比較

土器埋納遺構 石造物埋納遺構

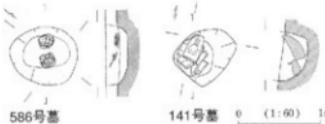


図163 墓以外の性格をもつ遺構

表7 墓タイプ別の総数

	火葬墓			土葬墓	計
	A類	B類	C類	A類	
1群	25	0	0	6	31
2群	34	5	5	39	82
3群	35	7	11	47	100
4群	39	12	12	41	104
5群	40	3	6	25	74
6群	0	0	0	20	20
7群	23	2	10	34	70
計	196	29	44	212	481

紀後半・16世紀前半～19世紀前半) 以降の火葬場・炭盛土、土葬墓B類を除いて考えることにする。よって、ここで述べる墓群は基本的にI・II期(13世紀後半～15世紀中葉・後半)の状況と言える。ただ、土葬墓A類の一部についてはIII期以降のものが含まれるが、逆に分布の側面からこの時期にあたる墓を抽出できる可能性がある。

当墓群の分布上の特徴としては、基本的に等高線に沿って東西の列状に並んでいるということである。密集している所ではそれが崩れ、塊状になっている部分もある。また、墓壙のタイプで見ると大略的には土葬墓と火葬墓が全域に混合して分布しているように見える。だが、微視的に見ると数基の単位ずつで各々棲み分けが見られる。このような状況を踏まえて、本章第6節では大きく7つにグループ化しており、さらにその大群を幾つか土葬墓と火葬墓ごとの小群に分けている。ここでは、小群については必要な時に応じて触ることにして、大群ごとの様相を見ていきたい。

**各墓群の様相** 各墓群の様相を検討するために、立地・分布状況をもちろんのこと、特に墓壙のタイプを踏まえて見ていただきたい。そこで、墓群ごとの墓壙のタイプ(表7)、火葬墓A類と土葬墓B類の細分(表8・9、付図6・7)別の基数をまとめた表・図を作成した。火葬墓A類の細分は、時期的な傾向を示す深さの数値を便宜的に区分した。また、土葬墓A類については、ある程度時期が推定できるI期とIII期および乳幼児・小児が埋葬された子墓と思われるものの基数を示すことにした。両者とも墓群ごとの傾向を見るために作成したもので、個々の墓について限定したものではない。

**1群 墓域北端の最高所に位置し、平坦なテラスを造成して他群よりも整然と列状に並んでおり、立地的に卓越した群と言える。さらに5～10基前後で3小群前後に分けることができる。南側のテラスは全体に墓壙が並ぶが、一方北側では墓壙自体が散在しているので後出するものと推定される。墓壙はほとんど火葬墓A類で他群よりも墓壙が深いものが多く、立地・分布も踏まえるとこのタイプの初期に当たるものと考えられる。また、土葬墓A類は9号墓が規模からI期の可能性があるが、他は立地的にも後出すると思われる。また子墓と思われる墓壙が3基あり、単位構**

表8 火葬墓A類墓群別の規模比較

	~0.15～0.25			~0.40	0.41～	計
	1群	2群	3群	4群	5群	
1群	2	3	9	11	25	
2群	9	10	11	3	33	
3群	7	13	8	7	35	
4群	12	11	13	3	39	
5群	22	12	5	1	40	
6群	0	0	0	0	0	
7群	8	10	3	3	24	
計	60	59	49	28	196	

表9 土葬墓A類推定期別墓壙数

	総数	I期	II期	子墓
1群	6	1	0	3
2群	39	1	3	5
3群	47	3	3	7
4群	41	7	1	7
5群	25	1	0	8
6群	20	1	5	3
7群	34	4	4	6
計	212	18	16	39

成の面から注目すべきである。

**2群** 墓域北半西側のやや傾斜がきつい斜面に基本的に列状に並んでいる墓群である。この群の上段の墓は1群のテラスを意識しているように作られているが、下段になるほど墓の密度が高くなり列もやや不整然となる。4～6基前後で10小群前後に分けることができ西側が火葬墓、東側が土葬墓という大きな棲み分けが見られる。墓壙のタイプは火葬墓と土葬墓の割合がほぼ同じで、火葬墓は全ての種類が見られるがA類が多い。この火葬墓A類は1群よりも浅いタイプが多いので、1群よりもやや後出するものと思われる。また、火葬墓B類が集中しており、注意を引くところである。土葬墓A類はI・III期のものが数基見られるが、分布・立地から基本的には火葬墓と同時期での棲み分けを見たい。

**3群** 2群の東側でその境界の判別は微妙であるが、墓壙タイプ別の分布の違い、石組の状況から別群と捉えた。この群も基本的に列状に並んでいるが、墓の密度はかなり高く塊状になっている小群が多い。この群も4～6基前後で10～15小群前後に分けられるが、2群に比べ火葬墓と土葬墓の棲み分けがモザイク状である。火葬墓と土葬墓の割合はほぼ同じで、火葬墓に全ての種類がありC類がやや目立つ。火葬墓A類は浅いタイプが多いが、深いタイプや煙道を有する197号墓もあるので、いくつか初期のものが當まれている可能性がある。また、火葬墓B類は墓群北端に集中している。土葬墓A類はI期と見られる130、131号墓が含まれる小群(図164-①)があり、長期間土葬墓を営んだ墓群と思われる。しかし、火葬墓と同様の列状に展開するので、2群と同様に基本的には同時期に営まれたものであろう。

**4群** 墓域中央の北半に比べ傾斜が緩やかな所で、1～3群に比べるとあまり整然とした列状ではない。よって、小群もその認識が非常に難しく、図164-②のように狭い範囲で切り合いを繰り返し、塊状に密集する小群があることが注目される。墓壙の棲み分けは、大きくは東側が火葬墓と西側が土葬墓と捉えられるが、あまり明瞭ではない。火葬墓と土葬墓が6：4程度の割合で、また火葬墓はB・C類が他群よりも多い。この群で注目すべきことは、西側にI期の土葬墓A類が南北に並んで推定6基あることである。西側に土葬墓が集中していること合わせると、土葬墓を長期間営んだ小群の存在が指摘される。しかしながら、さらに興味深いのは先に初期の火葬墓A類と指摘した338号墓がこれらの墓と南北に並んでいるので、土葬墓から火葬墓へと展開する小群があることであろう。

**5群** 墓域南西に位置し、他群と比べ墓の主軸がやや西側に振っており地形に影響されたものと思われる。4群と同様に列状ではなく、5基前後が塊状に集中した小群が10群前後に分けられる。墓壙のタイプは、火葬墓と土葬墓が7：3程度の割合を示しており、土葬墓が北東部に集中している。火葬墓A類は、浅いものが圧倒的に多く、小群が列状ではなく塊状もしくはやや散在した状況であるので、他群よりも造営時期がやや遅い可能性が考えられる。土葬墓A類に関しては子墓が占める割合が高く、この群であまり中心を占めなかったものと思われる。

**6群** 墓域南東に位置し、列状に見える一群があるが全体的に散在した状況を呈している。墓壙は土葬墓A類のみで、III期のものが割合的に多い。よって、I期に相当するものも1基あるが、子墓と思われるものも含めて、全体的にIII期以降に形成の中心がある新しい墓群である可能性がある。

**7群** 墓域南側中央で傾斜はかなり緩やかな所で、6～10基前後が整然と列状に並ぶ2・3の小群があるが、全体的に散在した分布である。列状に並ぶ小群は主に火葬墓で構成される群と、土葬墓のそれがある。前者の一つである413～424号墓の小群(図164-③)は、土葬墓A類が3基ありその内の1基が子墓で、他の2基が限定できないが火葬墓に切られている。よって、この小群は土葬墓から火葬墓へ

展開していると捉えられ、小群内での変遷を考えるために重要である。後者の567～572号墓の小群（図164-④）は、I期の土葬墓A類が4基存在しそれらを中心にして列状に展開するようである。

**小結** 以上、各墓群ごとの墓壙の様相を見てきたわけであるが、各墓群ごとに特色があることが分かる。また、火葬墓A類と土葬墓A類の時期的な傾向として捉えた規模の縮小化が、立地的に卓越した1群に古い傾向と見られるものが集中したことから、その妥当性がある程度確認できた。大群を構成する小群は、基本的には数基が列状に展開するものであるが、密集して塊状になっているものもあり、先に見たように後者が後出する可能性がある。これら小群単位については第9章で詳述するが、藤沢典彦氏<sup>10)</sup>が指摘するような夫婦を中心とした家族墓的な展開を見て取ることができよう。そして、火葬墓と土葬墓の棲み分けは小群ごとに見られ、全体的にはモザイク状を呈することから、II期（14世紀中葉～15世紀中葉・後半）の間では共存しているものと捉えられる。

## （2）各画期の様相と時期的変遷

これまで、各墓群ごとの墓壙の様相を見てきたわけであるが、それを踏まえて時期的変遷を検討することで墓壙に関してまとめてみたい。そのため、これまでと同様に本章第5節で設定した4つの画期の各様相をまず見ていくことにする。そこで、今までの検討を踏まえた画期ごとの墓壙の分布図を作成したが、あくまでも傾向的なものである（図165）。特に、土葬墓A類に関しては先程検討したように、墓壙の平面規模からの推定によるものなので、この図は必ずしも厳密なものではない。

### I期（13世紀後半～14世紀前半・中葉）

### 〔土葬墓A類の造墓〕

この時期に当墓群の中世墓地の造営が開始される。その様相としては、土葬墓A類が主に墓域南半（4・7群）を中心に数基が点在して營まれた状況が推定される。後に当墓群の基本的な単位となる列状に展開する意識が見られず、339～341号墓のように南北に並ぶものがある。

この時期の墓壙は、規模が長幅1.20m以上で、平面形が比較的長方形に近いものが相当するものと思われる。この内8基に鳥櫛子・短刀・土師器皿・瓦器碗等の遺物が見られ、後に比べると割合的に多い。また、336.340.341.541号墓から1・2木前後の鉄釘と思われる鉄製品が出土しており、一の谷中世墳墓群跡でも指摘されるように副葬的な意味合いを持つ可能性があるかもしれない。

### II期（14世紀中葉～15世紀中葉・後半）

### 〔火葬墓の造墓から終焉まで〕

この時期は、火葬墓の造営期間に相当する。火葬墓A類は14世紀中葉には確実に造墓されたと思われ、先に触れた338号墓はI期の土葬墓A類の一羣付近に位置するのでこの初期のものと思われる。そして、整然と列状に並ぶ1群には深いタイプが多いことから、墓群が列状に展開する初期のものであつたと推定できる。一方、5群は列状ではなく塊状に密集する小群が見られ、これらが浅いタイプであるので、時期的には後出する群と言える。そう考えると、1群が形成された段階に列状に展開し、それが他群にも造られるようになり、後に塊状の小群が展開していく様相が認められる。また、火葬墓B類は数基が集中する小群が2・3ヶ所に散在しており、時期・墓群的に限定されたものと言える。火葬墓C類もその分布からこの時期に相当すると思われ、火葬墓B類と類似した状況が認められる。蔵骨器は備前壹・瓦賀羽釜で、遺物が副葬された火葬墓は7基しかなく、土師器皿・温石・六道鏡がある。

一方、土葬墓A類であるが、出土土器から確実にこの時期といえる墓が5基ほどしかない。だが、先に述べた火葬墓A類と同様な列状に展開する小群が2・3群を中心見られるので、この時期にその多くが營まれたと考えたい。それは、これらの墓壙の規模が長幅1.0～1.2mの範囲で取まるものが多いことも裏付けられよう。遺物は、土師器皿・瀬戸小皿・錢貨があり、破片を除くと6基のみの出土であつ

た。

以上のように、この時期には火葬墓A類と土葬墓A類を中心にして、当墳墓群の大多数の約400基前後墓が営まれることになる。そして、火葬墓と土葬墓の割合はおそらく7:3程度であったであろう。それではこの時期に営まれた土葬墓と火葬墓、I期の土葬墓とはどのような関係が考えられるであろうか。まず、土葬墓から見ると、I期の土葬墓を意識して造られている小群が幾つか認められるので、前代に引き続いている小群もあることが分かる。次に、火葬墓であるが先に述べた338号墓以外には、I期の土葬墓を意識しているものはない。しかし、土葬墓を切っている火葬墓A類の小群が認められるので、土葬墓から火葬墓に展開する群があったことは確実である。いずれにせよ、この時期には土葬墓を主に営む小群と、火葬墓のそれが基本的には棲み分けながら造墓を行っていたのである。

### III期（15世紀後半～16世紀中葉）

### 【火葬場の造営・土葬墓A類の終焉まで】

この時期には、火葬場が造営され、火葬墓が基本的には営まれなかつたと考えられる。この火葬場は墓域中央よりやや南西部に7基営まれている。先述したように、火葬場は同時にではなく順に造られていったもので、それに伴い生じた炭が盛土として形成されていったものと思われる。この一帯は、現状から見ると墓壙の分布がそれほど密ではなかったと思われる。しかしながら、炭盛土で覆われた墓があることから、この周辺の前代の墓をある程度破壊して火葬場を造営したものと思われる。

この火葬場は、炭盛土の量からするとかなりの人数が荼毘されたことと思われる。ここで荼毘された骨は、確実にこの時期の火葬墓B類であるものと確認できていないので、以前からあった石組に葬ったか、寺などの別の場所に納骨した可能性などが考えられる。出土遺物は他時期と比べ土器皿が景的によく出土している。また、陶磁器が破片でも全く見られないこともI・II期とは異なる様相と言えよう。他に、鉄釘・鐵貨が大量に出土している。

一方、土葬墓A類は前代に引き続き営まれるようである。しかし、II期とは異なり列状に展開するものではなく、6・7群を中心に墓域南東端に細々と20基前後営まれるような状況が窺える。墓壙は、平面形が円形・方形であるものが相当するので、IV期以降に下るものもあるかもしれない。

### IV期（16世紀後半～19世紀前半）

### 【土葬墓B類の造墓から終焉まで】

火葬場がほぼ終焉した以降に、土葬墓B類が営まれることになる。この土葬墓B類は、出土遺物から約200年前後に渡って21基が営まれることになる。この墓壙だけの分布を見ると火葬場を避けるような形で墓域南半に集中しており、2～3群程度に分けることができるが、時期幅から考えると必ずしも造営集団の差であるのかは判断しがたい。いずれにせよ、前代の墓壙とは形態的に明らかに異なっており、構成的にも強い繋がりを見つけがたいものである。出土遺物には、六道鏡・波佐見碗がある。

**小結** 各画期ごとの墓壙の様相を見てきたわけであるが、ここで要点をまとめて全体の流れを整理することにする。まず、葬法の変遷を大きく捉えると、土葬は全画期を通じて行われ、火葬がII・III期に行われる。墓群の流れは、I期には単独で点在するのが、II期には全域に列状に展開する小群が現れ、一部密集し塊状になるものも生まれ、III期には南東部に集中し、IV期には南半に散在する形になる。特にII期が微視的に見ると、非常に多様な様相であることは先に述べたとおりである。

さて、この各画期の背景については第9章で論じることにするが、ここで若干見通しを建てておきたい。当墳墓群の変遷は、II・III期を通じて墓もしくは被葬者の増大の反映したものと位置づけることができる。それはII期に始まる列状に展開する小群が、先に触れたように家族墓として認められることと一致する。そして、密集して造られる小群は造墓範囲が決められていたことが想定され、先の見解をさ

らに裏付けるものであろう。Ⅲ期については、墓自体が少しか當まれていないが、火葬場で荼毘された人の数を具体的に論証できないが、かなりの数であったと思われる。このように、Ⅰ期に比べ、時期が下るほど被葬者が増大していった状況を見て取ることができる。これは、造墓可能階層の陥下もしくは家長墓から家族墓、または一つの集落だけではなく近辺のいくつかの集落の墓地への展開といったようなことが考えられる。

これらの見解の是非は後に回すこととして、墓の均質性、各々の墓が意識することで形成された列状に展開する墓群の存在、そして火葬墓と土葬墓を大きく捉えたときには同時期に當まれていたといったことが、墓壇の検討で判明したこととして強調しておきたい。

#### 註

- 1) 新村 出編 1994『広辞苑』第四版 岩波書店
- 2) 古墳時代の電器などをもって、この道昭の記載について安井良三氏らの再検討もしくは若干の疑義を挿む意見があるが、しかし黒崎直・森本徹氏らが指摘するように一定の容器に骨を納め埴墓を焼く埋葬の方式は8世紀初頭から増大することで、この時期に仏教的な火葬が始まったと考えるのは妥当と言えよう。  
安井良三 1960「日本における古代火葬墓の分類」『日本古代史論叢』(財)古代學協会編 吉川弘文館  
黒崎 直 1980「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論叢VI』奈良国立文化財研究所学報第38冊  
森本 徹 1999「群集墳の変質からみた古代墳墓の成立過程」『古代文化』第51巻第11号 (財)古代學協会
- 3) 水藤 真 1991「第二 中世的葬送・墓制の源流」『中世の葬送・墓制－石塔を造立すること』吉川弘文館
- 4) 藤澤一夫 1956「墳墓と墓誌」『日本考古学講座』第6巻歴史時代(古代) 河出書房
- 5) 小林義孝 1999「古代墳墓研究の分析視角」『古代文化』第51巻第12号 (財)古代學協会
- 6) 加藤恵子 1993「第4章第1節 火葬について」『一の谷中世墳墓群遺跡』碧田市水堀土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 碧田市教育委員会
- 7) 小林義孝 1992「灰を納めた上塙」『究班 埋蔵文化財研究会15周年記念論集』15周年記念論文集編集委員会
- 8) 藤澤典彦 1988「日本の納骨信仰」『仏教民俗学大系4』祖先祭祀と葬墓 名著出版
- 9) 本章第3節でも触れているので参照のこと。
- 10) この両者は分類している岡本直久・太田三喜両氏は、その判別は困難であると但し書きの上で行っている。  
岡本直久 1994『東海の中世墓』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター  
太田三喜 1997「中世墓の様相－大和を中心にして－」『西谷真治先生古稀記念論文集』西谷真治先生の古稀をお祝いする会
- 11) 本章第3節でも触れたように、古代の荼毘施設と考えられる遺構でも既に焼骨の処理方法はこの2種が見られるとするならば、やはり時期差ではなく別の要因によるものと思われる。
- 12) 戸原和人 1987「前略の中世墳墓－加茂町出土中世墓の検討－」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 13) 田中良之 1985「中世の遺構」『吉母浜遺跡』下関市教育委員会
- 14) 高橋公一 1999「高櫻城三の丸跡のキリストン墓」『大阪府埋蔵文化財研究会(第39回)資料』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 15) 藤澤典彦 1990「墓地景観の変遷とその背景－石組墓を中心として－」『日本史研究』第330号 日本史研究会

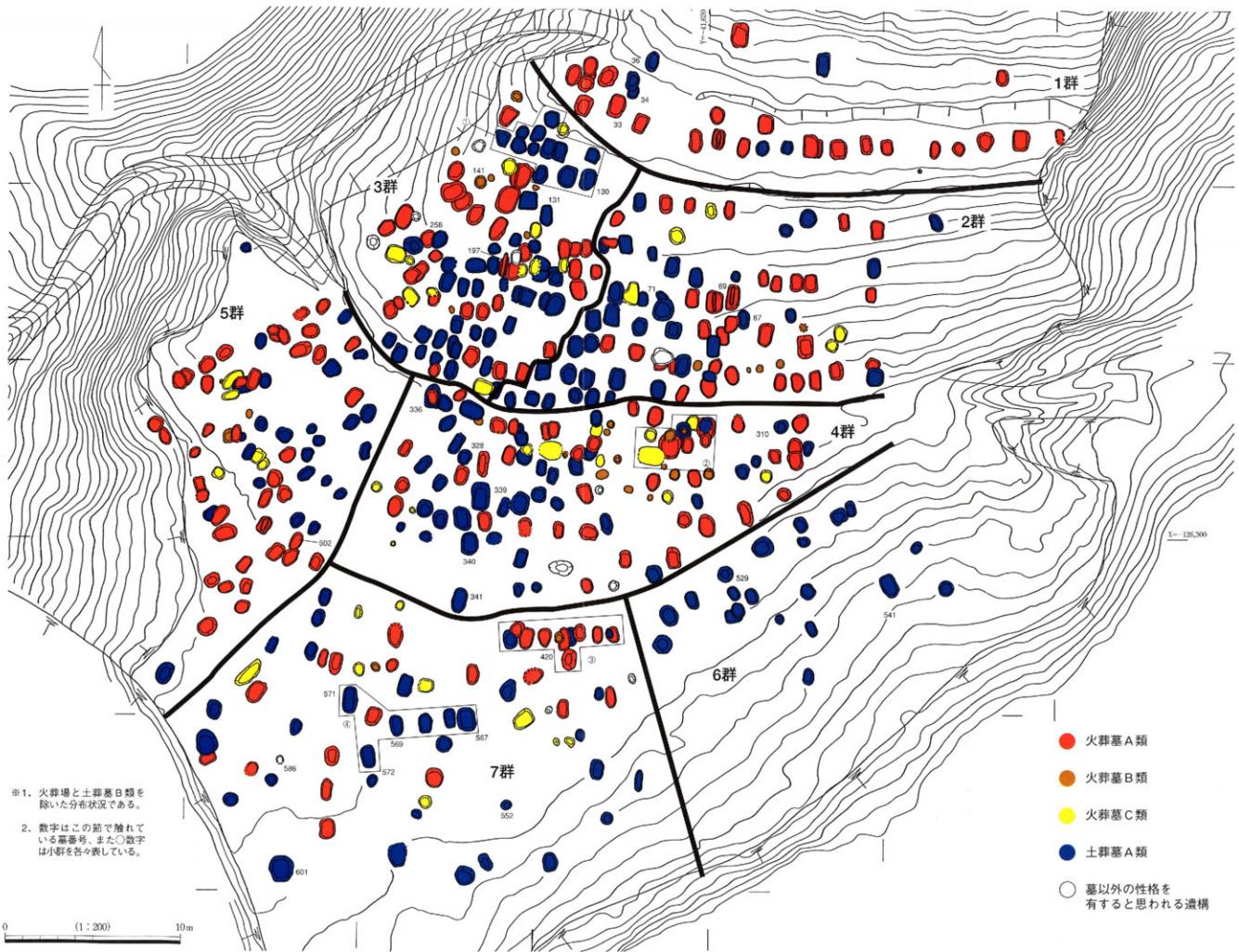


図164 墓壙タイプ別全体図

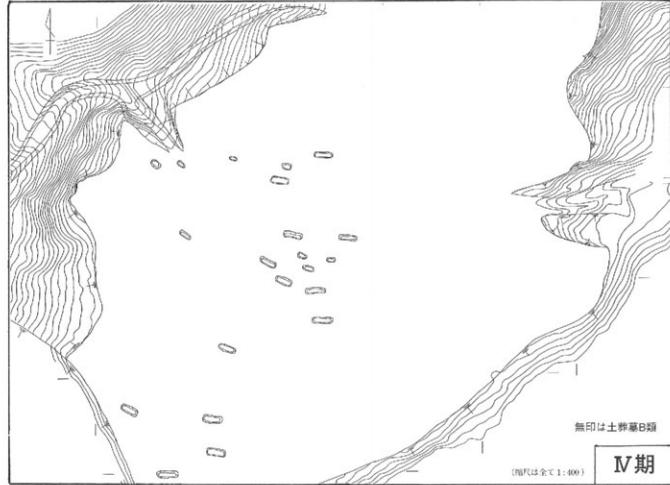
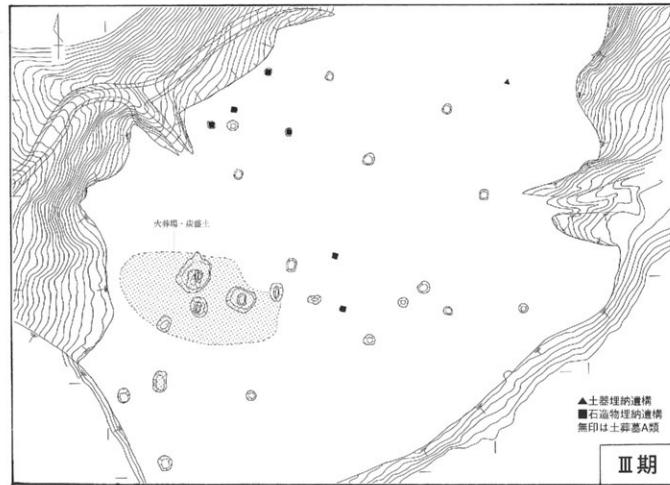
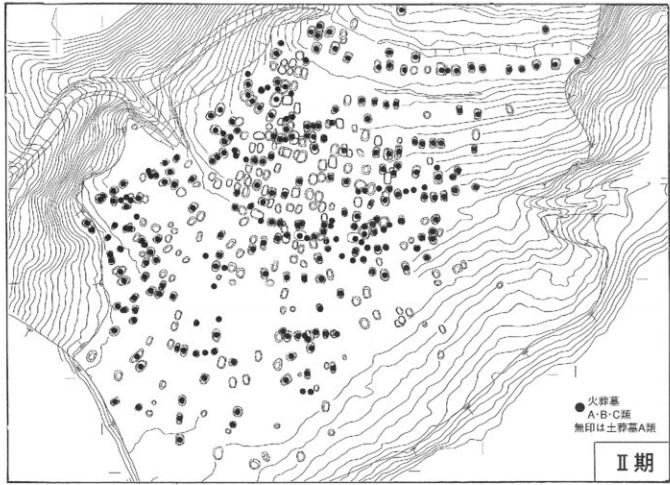
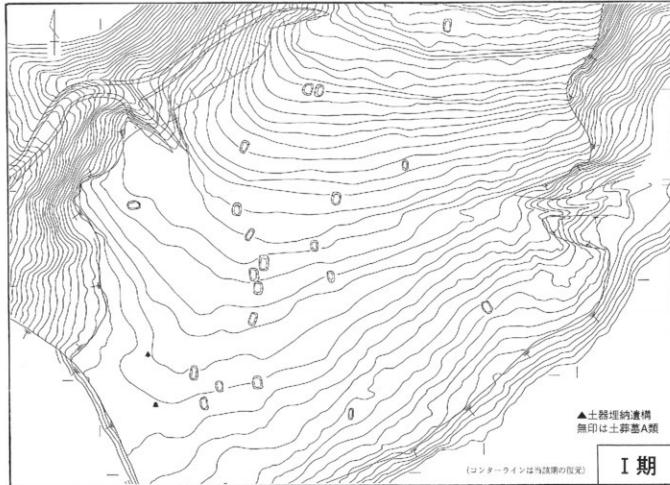


図165 墓壙時期別分布図

## 第8節 鉄釘の検討と木棺の復元について

### 1. はじめに

当墳墓群では、鉄釘が古墳群から120本、中近世墓群から1191本出土している。これらは基本的に木棺の緊結具と推定され、本稿では鉄釘自体および木棺の復元について検討する。

### 2. 墓群出土の鉄釘の検討

鉄釘については、古墳群が第4章第4節2項、中近世墓群が第5章第6節3で報告しており、そこで頭部形態を分類している。ここでは、両遺構群の鉄釘を頭部形態と全長から比較検討する。

#### (1) 頭部形態

古墳群および中近世墓群から出土した鉄釘は基本的に鍛造によるもので、また基部と頭部から成っている点で共通する。そこで、頭部形態の分類は両群に共通したものを使用することにした。

**分類 (図166)** 側面観によります3つに大きく分けている。それは各々頭部を基部より、A類が横に突き出ないもの、B類が横一方向もしくは上に突き出るもの、C類が横二方向に突き出で円形の鉢状を呈するものの3つである。さらにB類は細分が可能であり、上方向に突き出るI類と横一方向に突き出るII類に分けられ、また各々さらに細部の異なりで幾つかに細分できる。

**造り出し方** 基本的には鍛造であるので、基部は鉄片から叩き延ばし整形されたものと思われる。頭部は、まずA類がそのまま上面を叩き潰したものと言えよう。B類は、正面から見ると左右に突き出でT字状になっているので、基部から叩き延ばされたと考えられよう。最後にC類であるが、まず頭部と基部を別個に造り貼り付ける方法が考えられる。また、型を使用して基部を造り出してからその上面を叩き延ばす方法もある。頭部と基部が外れた状態で出土しているものがあるため、前者の可能性を考えたいが断定は出来ない。いずれにせよ、工芸的に手が込んでおり、見栄的にも目立つものである。

**機能的な差異** 頭部は接合体を押さえつける役目が一般的に考えられている。そうすると、頭部がより突き出る大きなものがその役目が大きいと考えられる。また、打ちつける際にも頭部が大きなものの方が打ちつけやすいとも思われる。このような視点で見ると、C類が一番機能的に高く、次にB II類、そしてB I類とA類が頭部が小さいため、より使いにくいと考えられるが、断定はできない。

また、B類においてはII類がI類を横方向に折り曲げたものと形態から考えることできる。そう考えると、このB類が本来基本的にはI類として造られたものであり、使用する際に折り曲げたもしくは折れ曲がったと見ることができ。だが、鉄釘自体の検討のみでは機能を断定することができない。

**形態の比較** 古墳群からはB I③類・B II①～③類・C類が、中近世墓群からはA類・B I全種類・B II②～⑦類が出土している(図166)。全体の出土数としてはB II③・⑥・⑦類が各々120～150本程度と他のものを圧倒する。以上

分類	側面形態	古墳群	中近世墓群
A		0	1
B I		0	12
①		0	26
②		1	4
④		0	65
B II		7	0
①		20	39
③		3	122
④		0	54
⑤		0	53
⑥		0	137
⑦		0	150
C		32	0

図166 鉄釘の頭部形態

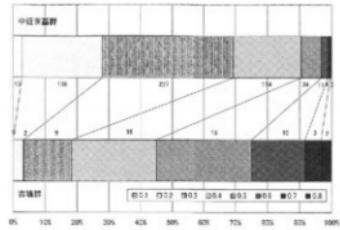


図167 鉄釘の頭部長（厚さ）の比較

表10 頭部形態別の全長部分

範囲	A		B I		B II		C		件数
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
2.5~2.7	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2.5~2.9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2.9~3.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.1~3.3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.4~3.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.6~3.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.8~4.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.0~4.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.2~4.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.4~4.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.6~4.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.8~5.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.0~5.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.2~5.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.4~5.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.6~5.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.8~6.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.0~6.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.2~6.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.4~6.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.6~6.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.8~7.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.0~7.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.2~7.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.4~7.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.6~7.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.8~8.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.0~8.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.2~8.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.4~8.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.6~8.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.8~9.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.0~9.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.1~9.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.2~9.3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.3~9.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.4~9.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.5~9.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.6~9.7	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.7~9.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.8~9.9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.9~1.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1.0~1.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

表11 遺構別の全長分布

範囲	古墳群		中世墓群		古墳群		中世墓群		件数
	古墳群	中世墓群	古墳群	中世墓群A	中世墓群B	古墳群	中世墓群	古墳群	
-2.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2.2~2.3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2.3~2.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2.4~2.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2.5~2.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2.6~2.7	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2.7~2.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2.8~2.9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2.9~3.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.0~3.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.1~3.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.2~3.3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.3~3.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.4~3.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.5~3.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.6~3.7	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.7~3.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.8~3.9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3.9~4.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.0~4.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.1~4.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.2~4.3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.3~4.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.4~4.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.5~4.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.6~4.7	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.7~4.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.8~4.9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4.9~5.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.0~5.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.1~5.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.2~5.3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.3~5.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.4~5.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.5~5.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.6~5.7	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.7~5.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.8~5.9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5.9~6.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.0~6.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.1~6.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.2~6.3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.3~6.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.4~6.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.5~6.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.6~6.7	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.7~6.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.8~6.9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6.9~7.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.0~7.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.1~7.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.2~7.3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.3~7.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.4~7.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.5~7.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.6~7.7	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.7~7.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.8~7.9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7.9~8.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.0~8.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.1~8.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.2~8.3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.3~8.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.4~8.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.5~8.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.6~8.7	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.7~8.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.8~8.9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8.9~9.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.0~9.1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.1~9.2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.2~9.3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.3~9.4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.4~9.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.5~9.6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.6~9.7	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.7~9.8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.8~9.9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9.9~1.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1

から考えると、古墳群で多く出土しているB II①・②類・C類は中近世墓群では少ないか全く無いので、古い傾向をもつものである。また、B I類には全種で108本だが、その内で65本と一番多いB I④類がB II⑦類と判別しにくく、より少数のタイプと言える。

以上、古墳群よりも中近世墓群の方が様々な形態があることが分かり、時代が下る程より叩き延ばして、技術的な進歩と捉えられる。古墳群のB II類は、基部と頭部の厚みがあり変わらないものが多く、特に全長が長いものにその傾向がある。

(2) 全長

次は、全長について頭部形態のタイプ別および古墳群・中近世墓群の遺構別について各々検討する。

頭部形態別の全長の差異 表10は、頭部形態のタイプ別の全長分布を便宜的に全長を0.3cmごとに区切った範囲の個数を示したもので、また括弧内は古墳群のものである。これによると、B I類のものは総じて全長が2.5~4.5cmの範囲に分布するものが多い。B II②類は、中近世墓群のものがほぼ同様の分布を示すが、古墳群のものが7.0~8.4cmの範囲を中心に分布し、時期的な違いを見せる。そして、B II③~⑦類は先と同様2.5~4.5cmの範囲に集中を見せるが、4.6~8.4cmの範囲にも比較的分布している。さらにB II⑥・⑦類は少数であるが、8.5~11.1cmの範囲にも分布が見られる。最後に古墳群のみの出土であるC類は、6.7~9.9cmの範囲に集中し、中近世墓群とはその分布の中心が異なる。

以上のような状況からは、この差異が何によるものであるのかを鉄釘そのものでは判断がつかない。ただ、B II⑥・⑦類などは頭部が大きいため、何らかの機能的な原因に由来する可能性が考えられる。

古墳群・中近世墓群間の比較 全長の違いを先と同様に区切り、それを遺構別に集計したものが表11である。これによると、古墳群のものが7.0~9.9cmの範囲に、中

近世墓群のものに2.5~4.5cmの範囲で多く集中するが、10.0cmぐらいまでは満遍なく分布している。このような状況からすると、古墳群ではあまり法量の分化がなく、中近世墓群では短いサイズが現れて分化が進んだと見ることができよう。

次に、中近世墓群内での遺構別の傾向を見ることにする。そうすると、14世紀中葉~15世紀中葉・後半の火葬墓A類では出土数が少ないが4.2cm以下のものは全くないことが注目できる。一方、15世紀後半~16世紀中葉の火葬場、16世紀後半~19世紀前半の土葬墓B類のものはこの短いものが大半である。よって、4.2cm以下のものは火葬場以降の時期に多く使われたものと思われる。そうすると、土葬墓A類は13世紀後半~16世紀中葉と時期幅があるが、4.6~6.3cmのものが多く4.2cm以下のものが比較的少ないので、より古い時期に鉄釘が使用されたと考えることも出来よう。

### (3) 小結

以上、鉄釘を主に頭部形態と全長から検討してきた。頭部形態については、叩き延ばす工程がより複雑で高度と思われるB II⑥・⑦類が中近世墓群に多く、また頭部の厚みもより薄いため、技術的な進歩が見られる。全長については、古墳群には7.0~9.9cmのもの、中近世墓群には2.5~4.5cmのものと、その頻度に差異があることが分かった。このことは、付着する木目から推定される板材の厚みが、前者では3.0~4.0cm、後者では1.0~2.0cmと違いがあることと関連していると思われる。そうすると、中近世墓群の方が薄い板材で木棺を作ることができ、短い鉄釘で十分であったと考えられようか。

## 3. 木棺の復元

今まで、鉄釘自体を検討してきたわけであるが、次に木棺の復元を行う。そこでまず、鉄釘の木目の残存状況が良く、理解しやすいと古墳群の木棺墓1においてその具体的な方法を行うこととする。

### (1) 木棺墓1の復元

鉄釘の出土状況、木目の付着状況などから木棺の復元を行う研究はすでに幾つか行われている。ここでも、これらと同様の視点によって木棺の復元を検討していきたい。

**鉄釘の出土状況** 第一に、鉄釘の出土状況を平面的配置とそのレベルから見ていきたい。方法として、小川真木子氏が試みたように、鉄釘の出土状況の平面図と、長短軸の中心から各々四方をみたときの立面図を作成する（図168）。この図は、原位置を記録できなかった南西端以外で、鉄釘を原位置で捉えることができている。また、鉄釘は43本出土しているが、頭部を残存しているものが35本である。

**鉄釘の平面的な配置**は、そのほとんどが南北口の両端に集中しているが、側板には中央部の東西に1本ずつ検出されている。レベル的には、南北口を見るとほぼ床面から30cmの間にまんべんなく分布している。その内、ほぼ床面にある鉄釘はその先を上に向けて出土している。また、前述の側板のものは床面より約20cm程度浮いた状況での出土である。この鉄釘の存在から、底板の上に小口および側板が載る構造であることが分かる。そして、側板中央部の鉄釘は床面よりかなり浮いているので、蓋板を打ちつけたものと考えられる。また、小口に鉄釘が集中しているのは重点的に鉄釘を打ちつけたことが窺える。

木棺の規模であるが、側辺1.70m、小口0.40mで、高さは0.40m程度であったと思われる。

**木目の付着状況** 木目の分類は第4章第4節2項で行っているが、これは福島雅義氏の分類およびそれを整理・細分した山本圭二氏のものに準拠したものである。図38は、木目の分類を模式図にしたものであるが、これは山本氏のものを引用している。両氏によるとこの分類は板材の組み方と打ち込む場所を反映するもので、さらに山本氏は鉄釘の打ち込み向きによって2つに細分している（図168）。

a類は、鉄釘の頭部側が横方向、基部側が縦方向と木口が直交しているもので10本あり、平面的には

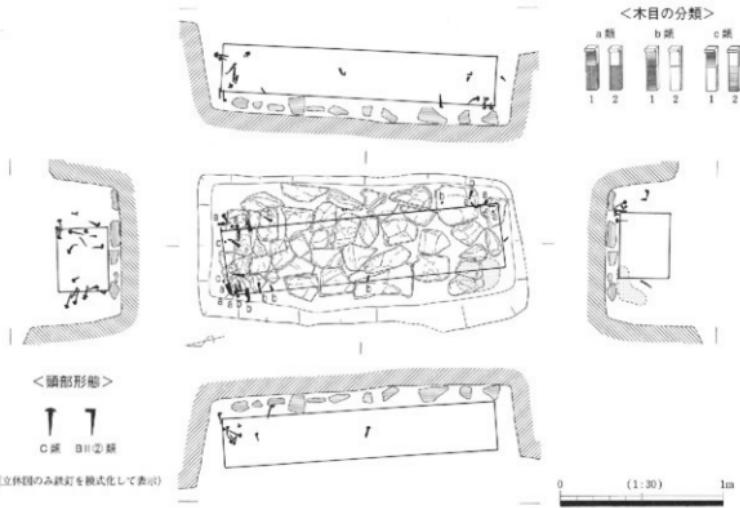


図168 木棺墓1復元模式図

小口両端で、レベル的には床面より浮いたものが多い。

b類は、鉄釘の2面全体に横方向の木目が付着するもので12本あり、小口両端で床面より浮いたものと、側板のものがある。c類は、鉄釘の頭部と基部で面が連続しない横方向の木目が付着するもので6本数え、小口の床面で先を上に向かたものがある。

以上のように、場所によって木目に一定の傾向があり、これにより使用された板材がどのように木取りされたものかを推測することが可能であろう。まず、前提として底板・蓋板・側板は長い板材が必要であるため、木目が側板に対して平行に走る板材の使用を考えることが妥当と思われる。しかし、より短い小口板の場合は木目が地面に対して平行するものと直行するものの2通りが考えられる。木棺墓1の場合は、小口の床面の鉄釘が全てc類であるため、地面に対して平行するものが考えられる。

次に板材の組み合わせについて考えていくたいが、先の鉄釘の出土状況から底板・蓋板と小口・側板の関係については推察できた。そこで、小口・側板との関係であるが、小口の床面より浮いている鉄釘はa・b類の木目のものがある。だが、b類の木目は蓋板から打ちつけたものと考え、a類の鉄釘が側板から小口に打ちつけたものと考えると、各隅に4本程度で打ちつけたものと思われる。また、b類の鉄釘の数から蓋板は底板と同様に、小口に4ヶ所、側板の中央1ヶ所に打ちつけたことも推測できる。

**鉄釘の使い分け** 木棺墓1では、頭部形態がB II②類とC類のものが使われている。それを踏まえて出土状況を見ると、底板から打ちつけたと思われる鉄釘が全てB II②類であり、この場所は外から見えない。よって、C類は外から見える場所に使われていることになり、このタイプが装飾性を意識したもの

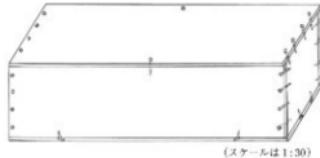


図169 木棺墓1復元想定図

表12 中近世墓群木棺一覧

造構名	墓式	規 格	鉄釘使用箇数	鉄釘使用本数		全長	備考
				蓋板	底板		
11号墓	火葬A	0.90 0.60	有	小2・側2	有	B 1(0.1)・C(0.6)・S(0.5)・D(0.7)	49 4.5~9.1 不覆面に使用
68号墓	火葬A	0.80 0.40	不明	小2?	有	B 1(0.1)・C(0.4)・S(0.1)	16 5.8~8.7 不覆面に使用
76号墓	土葬B	1.70 0.30	有	小3・側3	有	B 1(0.2)・C(0.4)・D(1.7)	20 3.1~6.1
91号墓	土葬A	0.75 0.55	不明	小2?	側1?	B 1(4.1)・C(1.6)・D(1.5)・E(0.7)	19 4.0~5.5
211号墓	土葬B	不詳 0.70	不明	平明	不明	B 1(0.1)・C(0.1)・D(1.7)	11 3.8~6.0
217号墓	土葬B	0.65 0.30	不明	小2	不明	B 1(0.2)・C(0.1)	7 3.7
224号墓	土葬B	0.60 0.25	小2	小2か	有	B 1(0.1)・C(0.1)・D(1.7)・E(0.3)	22 3.4~5.5
226号墓	土葬B	1.60 0.35	不明	小2	有	B 1(4.2)・C(2.2)・D(1.7)	12 2.6~3.5
241号墓	土葬A	不明 不明	不明	不明	不明	B 1(0.2)・C(0.2)・D(1.7)	8 3.0
256号墓	土葬B	1.75 0.30	不明	小2	有	B 1(4.1)・C(1.6)・D(1.5)・E(0.7)	15 3.9~8.4
259号墓	土葬B	0.60 0.25	無?	小2?	側1?	B 1(0.3)・C(0.1)	7 6.2~8.6
362号墓	土葬B	1.70 0.30	小2?	側1?	有	B 1(0.2)・C(2.2)	17 4.0~
361号墓	土葬A	0.60 0.35	有	小2・側2	有	B 1(0.1)・C(0.6)・D(1.7)	14 4.9
372号墓	土葬A	0.73 0.55	有	小2	側3	B 1(4.1)・C(1.6)・D(1.5)・E(0.7)	20 5.8~7.3
373号墓	土葬B	不詳 不詳	不明	不明	不明	B 1(2.1)・D(1.7)	5 10.3
376号墓	土葬B	1.63 0.40	小2	小2	側2	B 1(0.1)・C(1.6)・D(1.5)・E(0.7)	16 3.9~4.4
380号墓	土葬B	0.85 0.30	不明	小2	有	B 1(0.1)・C(2.2)	13 8.9
389号墓	土葬B	1.53 0.45	不明	小2	不明	B 1(7.7)	7 3.6~4.3
433号墓	土葬A	0.50 0.30	不明	小2?	不明	B 1(0.2)	7 3.4~5.0
436号墓	土葬B	0.63 0.25	有	小2?	有	B 1(4.1)・C(1.6)・D(1.5)・E(0.7)	26 3.1~4.8
446号墓	土葬B	0.55 0.25	有	小2?	有	B 1(0.3)・C(0.2)・D(1.7)	17 4.1~7.9
553号墓	土葬A	0.45 0.40	不明	小2?	不明	B 1(4.1)・C(1.6)・D(1.5)	13 4.8~6.1
555号墓	土葬B	1.50 0.35	小2・側2	側4?	有	B 1(1.1)・C(0.2)・D(2.2)・E(2.2)・F(1.7)	38 3.0~9.7 八瀬鶴塚
560号墓	土葬B	1.58 0.35	不明	小2	不明	B 1(6.6)	7 7.8
562号墓	土葬B	0.70 0.30	不明	小2	不明	B 1(4.1)・C(1.6)・D(1.5)	8 3.7~6.8
597号墓	土葬A	0.60 0.35	不明	小2	有	B 1(4.1)・C(1.6)・D(1.5)	15 3.2~6.5
599号墓	土葬B	1.65 0.35	有	小2?	有	B 1(0.1)・C(1.6)・D(1.5)・E(0.7)	20 3.2~4.4
600号墓	土葬B	1.80 0.40	有	小2	有	B 1(0.6)・C(2.5)	16 6.6~7.6 八瀬鶴塚
601号墓	土葬A	0.80 0.35	不明	小2?	不明	B 1(4.1)・C(1.6)・D(1.5)	9 4.8

のと考えられる。また、全長では6.8~9.7cmのものが使われているわけであるが、特に蓋板を打ちつけたと考えられるものには長い傾向があり、これも何らかの使い分けが考えられる。

以上の検討を経て、木棺墓1の木棺を復元した（図169）。

## (2) 古墳群の木棺の様相

古墳群では、木棺墓1の他にも2~4・6号墳から木質の付着した鉄釘が出土しているが、具体的な木棺を復元することができなかった。しかし、3号墳ではB類のみの出土であり、4・6号墳ではB・C類が出土しており、古墳によって鉄釘が異なり、階層の違いなどを表す可能性も考えられる。また、2号墳においては頭部が全くなく、全長も他のものに比べ12cm以上と長く、その配置からは木棺が復元できないことなどと、石室の規模が小さいことも含めて改葬などの可能性も考えられる。

## (3) 中近世墓群の木棺の様相（表12）

中近世墓群では、鉄釘の出土本数・その配置から木棺が使用されていたと思われる墓が、土葬墓A類で9基、土葬墓B類で18基、火葬墓A類で2基がある。木棺存在の条件としては、墓壙の四隅に鉄釘が出土すること、もしくは鉄釘を原位置のまま検出するのが困難であったものもあり鉄釘が4本以上出土したものとした。また、X線写真による観察でも鉄釘の頭部形態が分からぬものが多く、どの部位にどのタイプが多く使われているかなど具体的な様相は追求できなかった。だが、木棺の規模、鉄釘の使用本数・その箇所などについてある程度の傾向を掴めたので、その結果を一覧表にまとめた（表12）。

**木棺の規模** 鉄釘が確実に四隅に残っているものから木棺の平面規模を推定して、それを造構別にドットを変えてグラフにした（図170）。これによると、土葬墓B類においては、大が長軸1.55~1.80m・短軸0.30~0.45mで、小が長軸0.55~0.80m・短軸0.25~0.30mというまとまりで捉えられる。これは、墓壙の規模の大小と合致する傾向であるため、大が成人、小が小児・乳幼児を伸展葬により葬ったことを裏付けよう。また、土葬墓A類においても、長軸0.75~0.80mで長短の比率1.4程度のものと、長軸0.45~0.65mで長短の比率1.6程度のものに分けられる。この場合はやや明確ではないが、墓

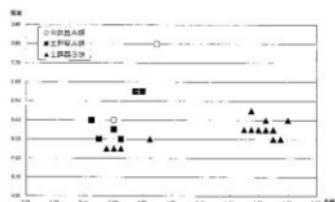


図170 中近世墓群木棺規模比較

サンプリングエラーや頭部の欠損などにより、若干増減する可能性がある。だが、この本数の幅をある程度認めるならば、使用する鉄釘の数には幾つかのパターンがあった可能性が考えられる。仮にそうすると、鉄釘の数が10本以下のものは、一部板材を組み合せに拵った可能性も想定される。一方、遺構別・木棺の大きさから見ても、鉄釘の数にバラツキがあるため、時期的な傾向とは捉えにくい。それを具体的に証明するものとして、土葬墓B類である555.600号墓では渡来鏡のみの六道鏡が検出されており時期的に近しいものと思われるが、鉄釘の数は前者が38本、後者が16本と異なっていることが挙げられる。そう考えると、例えば被葬者の家族、階層差などを表している可能性も考えられるが、分布的にはそのような状況を見て取ることはできない。

鉄釘の使用箇所は、基本的には四隅に使用されると考えられ、さらに小口に多くの鉄釘が集中していることが分かる。これは、木棺墓1と同様に小口を頑丈にする意図があったと考えられよう。また、表12には、蓋板・底板・小口板から1辺ごとの鉄釘を打ちつけた数を記載しており、この使用箇所にも幾つかのパターンがあったことが推察できる。ただ、使用本数と同様にそれらを類型化するには至らなかったが、時期的な傾向ではないようではある。

#### (4) 小結

ここまで、木棺の復元について検討してきたわけであるが、紙幅の都合もあり、個々の木棺について十分な記載が出来なかった。だが、木棺墓1の復元の検討においては、その具体的な方法を提示した結果、打ち込む場所によって鉄釘の使い分けがあることが判明した。また、古墳群においては、それぞれの古墳で使用されている鉄釘のタイプが異なっており、階層的な違いであった可能性も示唆される。そして、中近世墓群においても、鉄釘の使用本数・箇所に違いが見られ、それが必ずしも時期的な違いではないことが推察された。以上、不十分ではあるが、当墳墓群の鉄釘・木棺の様相をある程度まとめることができたものと思われ、今後の研究に何らかの参考になれば幸いである。

#### 註

- 1) 梶口昇一他 1977「第4節 中世の遺物2 鉄釘に関する問題」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・その5』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会
- 2) 伊藤美鈴 1993「第章6釘」「一の谷中世墳墓群跡」静岡市教育委員会
- 3) 小川真木子 1988「木製棺使用の鉄釘と金具の分類と木製棺について」『福瑞光寺跡追跡』山口市教育委員会
- 4) 福島雅儀 1984「第VI章1 木棺の復原」『旭山古墳群発掘調査報告』財京都都市埋蔵文化財研究所
- 5) 山本主二 1999「東山15号墳後室東棺の木棺について」『東山古墳群I』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

## 第9節 中世墓出土鳥帽子の観察

### 1. はじめに

近年発掘調査の増加にしたがって出土する遺物も多岐に渡ってきている。残りにくいとされている有機質の遺物についても多数出土しており、歴史観を変える大きな役割を果たすことが多い。なかでも鳥帽子について、管見する限りでは北は岩手県平泉町柳之御所遺跡、南は福岡県博多市博多遺跡群の範囲で、1998年までの報告では19遺跡で24点出土している。それに加え当遺跡出土の2点、富山県道場I遺跡で1点、神奈川県由比ヶ浜南遺跡で1点出土し、現在は22遺跡28点の出土数を数える。これら鳥帽子の出土状況の傾向として、当遺跡と同様に中世墓から出土している例が多い。しかし資料の希少さ等の問題から、現在まで鳥帽子やその出土状況の示す意義について積極的に分析し、論じられることはあまりなかった。

したがって本稿では鳥帽子の全容を捉える足掛かりとして、当遺跡出土の鳥帽子を中心とし、ほぼ同時期とされている大阪府下の泉佐野市湊遺跡、茨木市總持寺遺跡の出土鳥帽子や、現在使用されている鳥帽子を対象に観察をおこない、鳥帽子の復元的観察にはさらに岩手県柳之御所遺跡、栃木県下古館遺跡出土資料を加え、鳥帽子について検討した。

### 2. 鳥帽子とは

まずははじめに、鳥帽子とはどのように使用され、位置づけられてきたものか若干の説明をしておく。鳥帽子とは鳥のような黒色の帽子という意からこの名が付けられたとされ、古代より成年男子が一般的に被る被り物で、鳥帽子を被らずに頭部を見せること（露頂）は恥辱とされる程であった。天武11年（683）に官制が定められた際に鳥紗帽と主冠が成立し、このうちの主冠は先端が尖り下部が方形を呈する形状で黒色の布により作られたものである。有位の官人の略装に用いられた被り物であり、これが発達したものが鳥帽子の起源といわれている。文献では、9世紀末～10世紀始めの平安時代に成立されたとされる『新撰字鏡』に「江牟保宇志」、10世紀前半に源順が記した『和名類聚抄』には「鳥帽・焉帽」という文字の記載があり、これらが鳥帽子を指すといわれる。このことから鳥帽子は10世紀頃には成立していたと考えられる。12世紀前半に成立したとされる『源氏物語絵巻』第十六帖に逢坂の闇で源氏の一一行と空蝉を連れた常陸介一行が会う場面がある。源氏物語中で唯一殿上人以外も描かれているが、徒歩の従者も含めて皆鳥帽子を被っている。続いて12世紀後半に成立したとされる『伴大納言絵詞』、『信貴山縁起』には多くの庶民の姿が描かれているが、この時期には全ての成年男子によって鳥帽子が着用されている様子が見られる。したがって鳥帽子は少なくとも12世紀末頃には、上下を問わずに成年男子一般で被られるようになっていると考えられる。そして12世紀頃の強装束の流行により、漆で塗り固めた紙製の鳥帽子なども登場している。

中世から近世にかけては階級や用途による分化がいっそう進み、さまざまな形式の鳥帽子が出現した。このう

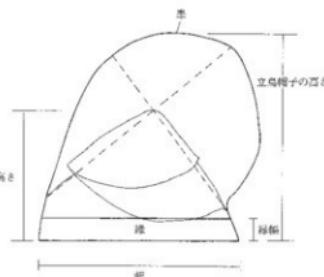


図171 鳥帽子の各部位名称

ちの主なものである立鳥帽子、折鳥帽子、萎鳥帽子について記述しておく（図174-1）。

立鳥帽子とはただ鳥帽子と呼ばれていたものが、折鳥帽子などが出現するなかで、本来の立てた状態の鳥帽子のことを立鳥帽子と呼称するようになったもので、主に5位以上の官人が被ったものである。高さ、幅ともに8寸（26.5cm）、高さが1尺を越えるものを長鳥帽子と呼ぶ。それに対し折り曲げた鳥帽子については広く折鳥帽子と呼ばれ、6位以下のものが着用し、主なものに風折鳥帽子、侍鳥帽子がある。風折鳥帽子は立鳥帽子の先端が風に吹かれて折れ曲がった様子を形式化したもので、また侍鳥帽子は鳥帽子を脇の分だけ残して数回折り曲げ小さくし、その名のとおり武士が被った鳥帽子である。萎鳥帽子は武士が兜の下に着用した柔らかい鳥帽子で、庶民は峯の中央を尖らせた圭頭（はしひがしら）の萎鳥帽子を着用したといわれる。このように多様化されすべての成年男子によって被られた鳥帽子も、江戸初期に描かれた絵巻物のなかでは鳥帽子を被って描かれている者が數人しか存在しなくなり、一般に被られることが無くなる。以来鳥帽子の着用は日常である慶の日の行為から疎の日の行為へと転化し、限定された場で使用されることにより儀式化、形式化されてきた。そして今日においても神社等の祭式などにその存在が認められている。

### 3. 栗栖山南墳墓群出土鳥帽子について（図172、図173-1,2）

中世墓群南側の567号墓、572号墓の2基からほぼ完形の鳥帽子がそれぞれ1点ずつ出土しており、遺構の規模、出土状況などに共通性がみられる。出土遺構は長軸約1.3m、短軸約0.8～0.9m、深さ0.55mの長方形を呈する土壙墓である。中央が落ち込む土層堆積がみられることから木棺で埋葬されたと推察される。落ち込んだ埋土には疊群が混入し、鳥帽子は疊群よりさらに下の、床面から少し浮いた位置でそれぞれ短刀と一緒に北隅から検出されている。時期については出土遺物から述べることは難しく、当の中世墓群の遺構の変遷から13世紀後半から14世紀初頭と位置付けられる。

#### （1）567号墓出土鳥帽子（図172-1）

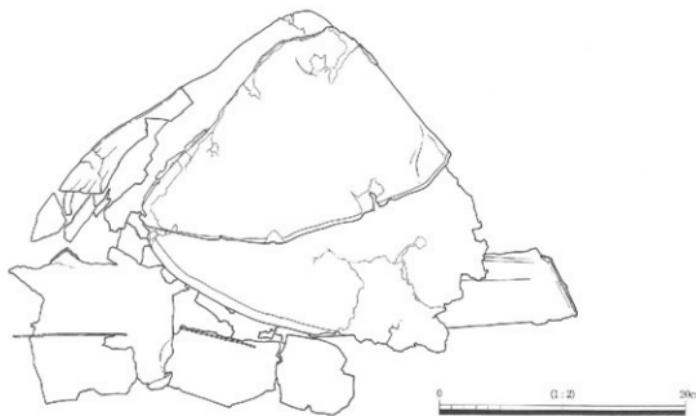
破損し土圧により押し潰されているものの鳥帽子と判別できる程度の残存状態であった。鳥帽子の縫い合わせの糸部分が外形ラインで観察でき、鳥帽子のほぼ端部で閉じたような状態で検出されている。左側部分については裏面側へ折れ込み、縁も表面側に折れ曲がっている様子が観察される。いずれもどの時点での所作であるか判断は難しい。残存高11.2cm、残存幅10.0cm、縁幅2.8cmを測り、肉眼観察によると、表面にみえる黒褐色の漆膜は光沢を失っているものの残りは良好で、厚く塗布されているためか表面は滑らかである。漆膜が薄くなっている部分で布目压痕が観察でき、その压痕から布目の密度はおよそ40×40本/cm<sup>2</sup>で、織り密度から平織りの綿布であると推察できる。

#### （2）572号墓出土鳥帽子（図172-2）

やや破損し原位置から動いている破片もあるが全体的に残りは良好で、土圧により押し潰された状態で検出された。残存高12.9cm、残存幅22.0cm、縁幅3.0cmを測り、表面の漆膜は光沢があり残りは極めて良好である。縫い合わせ部分も良好に観察でき、その様子から折鳥帽子であることがわかる。肉眼観察から、一枚の布地が何重もの漆膜によって構成されていることが観察でき、その漆膜のなかに2種類の压痕があることがわかる。一つはおよそ40×40本/cm<sup>2</sup>の平織りの压痕で、織り密度から推測して綿布と思われる。そしてその上に布目压痕が約9×9本/cm<sup>2</sup>の平織りの漆膜がみられ、おそらく麻布と思わ



1. 567号墓出土



2. 572号墓出土

圖172 栗柄山南中世墓出土鳥帽子



圖173 鳥帽子復元模式図

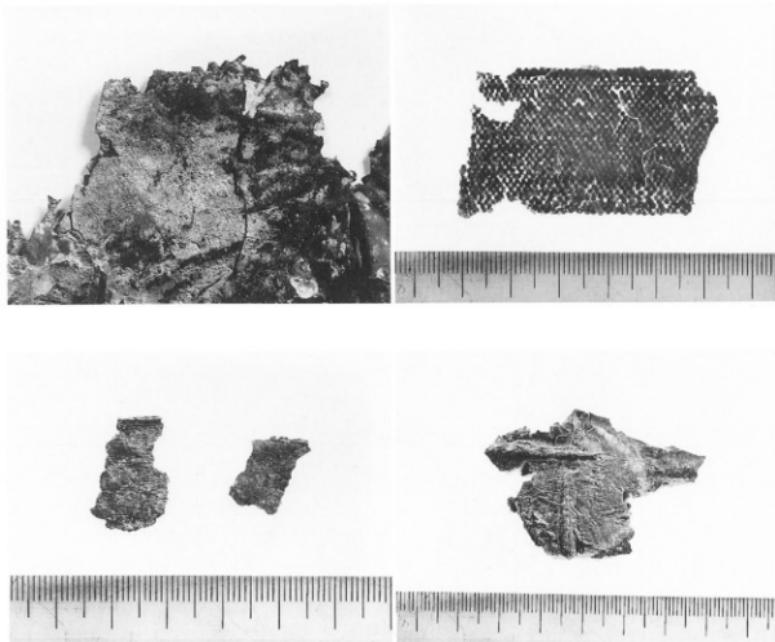


写真3 栗栖山南中世墓出土鳥帽子片

れるものが外面から見ることができる。よってこの鳥帽子の重構造として、綿布に麻布を重ねていることがわかる。鳥帽子の折り方は前方を右側頭部へ向かって折り、さらに後方を左側頭部に向かって折り曲げる折鳥帽子である。

### (3) 鳥帽子の復元 (図172-2,3)

以上に記した2点の鳥帽子について、形状復元をおこなった。これより、567号墓の鳥帽子は高さ16.0cm、幅24.0cm、572号墓の鳥帽子は高さ16.0cm、幅24.6cmに復元できることがわかった。また572号墓の鳥帽子については折り曲げる以前の立鳥帽子の形状についても復元することができた。これによると567号墓の鳥帽子は峯が尖った圭頭の立鳥帽子であること、また572号墓の鳥帽子は折ることにより圭頭の形状を呈する折鳥帽子であることがわかった。折鳥帽子を展開することにより立鳥帽子の形状も復元した。立鳥帽子の高さは縁を折り返した状態で26.0cmを測り、前頭部は傾斜している側と考えられ、峯は尖り後頭部は膨らみをもち、下から約6cmの所で一度窪み、再び膨らむため後頭部の縁は傾きをもつ。この縁の折り返しを考えた際、布地が余らないよう縫い合わせて折り返すため、出来上がりの形状を想定した専用の型の存在が想像できよう。

#### 4. 鳥帽子出土例

(1) 渕遺跡(92-2区) 大阪府泉佐野市所在 (図174-4,図175-4,5)

ST30、ST70、SK02から出土しており、ST30、ST70出土は漆断片で、SK02出土は破損品である。ST30、ST70は長軸1.3~1.43m、短軸0.8m、深さ0.25mの方形の土壙墓で、ST70では長さ1.0m、幅0.5mに復元できる組み合わせ式と思われる木棺痕跡が残されている。北半に上飾器杯を一点出土し、頭骨と思われる骨片に漆膜片が付着していることから鳥帽子と想定され、この状況から鳥帽子を被せて埋葬した可能性が高いと報告されている。人骨の体位は頭部が北で、西に体を向け足を折り曲げている様子がわかる。ST30は北半に瓦器椀1点、上飾器杯4点、短刀1点が出土し、北隅に漆膜片が40×30cmの範囲で散在しこの範囲内で人骨も確認されている。ST30の漆膜片についても、ST70と出土状況が似ていることから鳥帽子である可能性が高いといえよう。SK02は調査区の南に位置する5.2×4.8m、深さ0.3mの土坑である。外面の漆は光沢があり残りは良いが土圧で押し潰されたものと形状を窺い難い。検出状況からみて待鳥帽子ないしは折鳥帽子と推察され、高さ15cm、幅約16cm程度とされる。出土器から13世紀後半~14世紀前半と報告されている。

実見したところ、鳥帽子を被るよう立てた状態で、上方から押し潰された様子が看取される。縁が岡の正面および左側でV字に開く様子が確認でき、縁での縫い合わせ部分も看取される。2.8cmの縁幅を測り、鳥帽子の構造は肉眼観察により2種類の布目圧痕が観察できる。一つは布目の密度34×34本/cm<sup>2</sup>の平織りの圧痕を残し、織密度から推測して絹と思われる布で、もう一つは圧痕から布目の密度6×6本/cm<sup>2</sup>の平織りでこちらも織密度からおそらく麻製の布であると思われる。麻と思われる布が外面側から見えているため、絹布に麻布を重ねていることがわかる。布地の重なりが確認できる部分が多いことから折鳥帽子であると考えられる。

(2) 総持寺遺跡(その2) 大阪府茨木市所在 (図174-1,図175-8)

6c地区の東南端に土壙墓が3基並んでおり、そのうちの西側に位置する土壙墓23660からほぼ完形品が、中央と東に位置する土壙墓23783、23664からは短刀に漆膜片が重なって出土している。ここでは鳥帽子の形状がわかる土壙墓23660の鳥帽子についてのみ取り上げる。土壙墓23660は長軸1.33m、短軸1.05m、深さ0.25mを測る方形の土壙墓である。鳥帽子は最下層のシルト上面で墓壇北隅に小刀の上に重なって出土し、同面南側では自然石が2石検出される。時期は13世紀後半とされている。

肉眼観察より、縫い合わせ部分を端にして閉じた状態で、土圧により押し潰された様子が確認できる。折られている頭部の端には縫い合わせている様子が観察できる。残存高17.0cm(推定復元18.0cm)、幅28.0cm、縁の幅3.0cmを測り、2種類の布目圧痕が存在することがわかる。一つは布目の密度6×6本/cm<sup>2</sup>の平織りの圧痕が残る、おそらく麻布と思われ、外側で観察できる。もう一つは布目の密度が50×50本/cm<sup>2</sup>で平織りの布目圧痕が残り、絹製と思われる布である。

#### 5. 現代の鳥帽子

現在使用されている鳥帽子を3点検討資料として挙げる。これらの鳥帽子は神社などの祭事で使用される際に、鳥帽子を被る者のなかで荷物持ちなどあまり重要な役割を持たない、身分でいうなら低いとされる白丁が着用する鳥帽子(資料①②)と、楽師が着用する鳥帽子(資料③)である。

全体的に形式化、合理化の傾向がみられ、布地はすべて一重で塗布された漆は薄く透けて見える程で

ある。縁についても外側へ折り返すのではなく、布地の端処理として内側へ縫い込まれている様子がみられる。現在では縛りつける帯が無いため風口を持たせず頭部に密着して被っている。ここで掲載している図は計測数値、観察をもとに作成した模式図である。

資料① (図174-5)

左折れの風折鳥帽子で高さ26.8cm、幅30.3cmを測る。頭部円周の内側へ縫い込んだ幅は2.8cmで、これは縁の痕跡と考えられる。布目の密度は $17 \times 13$ 本/cm<sup>2</sup>の平織りで、麻製と思われる布に黒色の漆を塗布している。折鳥帽子の折り方は前頭部の高さ26.8cm、後頭部の高さ16.0cmの所から頭頂部を左側に折り曲げている。立鳥帽子の高さは32.0cmである。

資料② (図174-6)

立鳥帽子で高さ20.5cm、幅30.5cmを測る。頭部円周の縫い込んだ幅は1.7cmである。前頭部は高さ14.0cm付近まで少し膨らみを持ちつつもまっすぐ立ち上がり、峯は平坦面をもつ。後頭部は高さ12.0cm付近まで真っ直ぐ立ち上がる。布目の密度は $25 \times 23$ 本/cm<sup>2</sup>の平織りで、綿製と思われる。強装束の立鳥帽子に同形状のもののが存在している。

資料③ (図174-7)

立鳥帽子の後頭部を窪ませ峯を後方へ倒して被る萎鳥帽子である。高さ23.0cm、幅27.5cm、皮革製の縁は2.3cmを測る。前頭部は後方への傾きを持ち、峯は後方に位置する。後頭部は膨らみをもち下から10.5cmのところで窪み、縁までは縫い合わされずに分離しており深く被れるようになっている。布目は綿織りで花菱の透かし模様が入っている。立鳥帽子の高さは37.0cmである。

## 6. 栗栖山出土鳥帽子の検討

### (1) 構造について

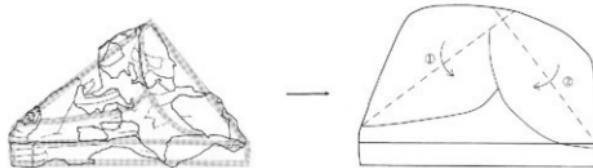
2枚の布地を鳥帽子の端部で縫い合わせているため、567号墓、572号墓出土鳥帽子はともに立鳥帽子での端部に縫い目が見られる。麻布、綿布と思われる布を重ねた布地の構造は、済遺跡と同様の構造を示し、總持寺遺跡資料についても同様と思われる布用い、共通性がみられる。これは鳥帽子製作における一つの共通性と捉えられる。布目は現代資料③以外すべてが平織りだが、その密度についてはそれぞれ異なっている。この布目密度の異なりが何を示すものかは現時点では不明である。

ここで少し總持寺遺跡出土鳥帽子の形状についてふれておく。總持寺資料は前方、後方を同じ方向に折り曲げられているが、その展開した形状は現代資料②と同様の鳥帽子といえよう。今までの出土例において、このような折り方をされているものはまだ発見されておらず、このことを考慮に入れると、この鳥帽子については報告されているように折鳥帽子と考えると同時に、実際は立鳥帽子で、棺内に納められた際に必然的に折れ曲がった可能性も考えるべきことを新たに提案しておきたい。

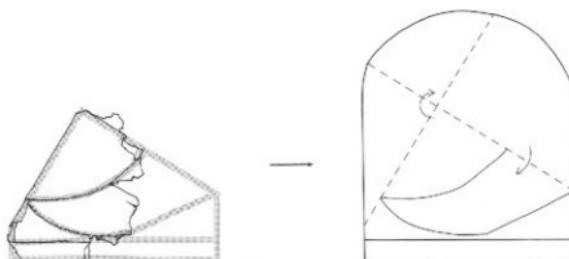
### (2) 復元鳥帽子の検討

前述した当遺跡出土の鳥帽子2点について、復元図を作成した。ここではこの復元図をもとに他遺跡出土鳥帽子との比較検討をおこなっていきたい。前頁で紹介しているもの他に、ほぼ完形の鳥帽子実測図が公表されている栃木県下古館遺跡、福岡県博多遺跡群出土の鳥帽子をさらに検討材料として加える。

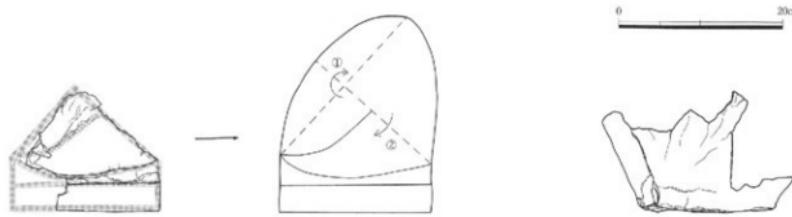
まず取り扱う資料の法量を表にまとめた(表13)。



1. 琴持町出土



2. 下吉原遺跡出土



3. 桥多遺跡出土



4. 佐道跡出土



5. 現代資料①

6. 現代資料②

7. 現代資料③

図174 烏帽子実測図および復元模式図

表13 掲載鳥帽子の法量表

資料名	種類	高さ	幅	縁の幅	峯までの高さ	時期
568号墓	立鳥帽子	11.2(約16.0)	22.0(約25.0)	3.0		13~14C 後半
573号墓	折鳥帽子	12.9(約16.0)	10.0(約24.5)	2.8	25.5	13~14C 後半
淡(92-2)	折鳥帽子?			2.8		14C 後半以降
總持寺	折鳥帽子	17.0(約18.0)	29.0	3.0	19.6	13C 後半
下古館	折鳥帽子	19.0	15.0(約25.5)	2.4	30.5	14C
博多	折鳥帽子	15.0 (15.5)	17.0 (18.5)	3.0	25.0	14C 後半~15C 前半
現資料①	風折鳥帽子	26.8	30.3	2.8	32.0	
現資料②	立鳥帽子	20.5	30.5	1.7		
現資料③	萎鳥帽子	23.0	27.5	2.3	37.0	

単位(cm)。 ( )内の数は推定復元値

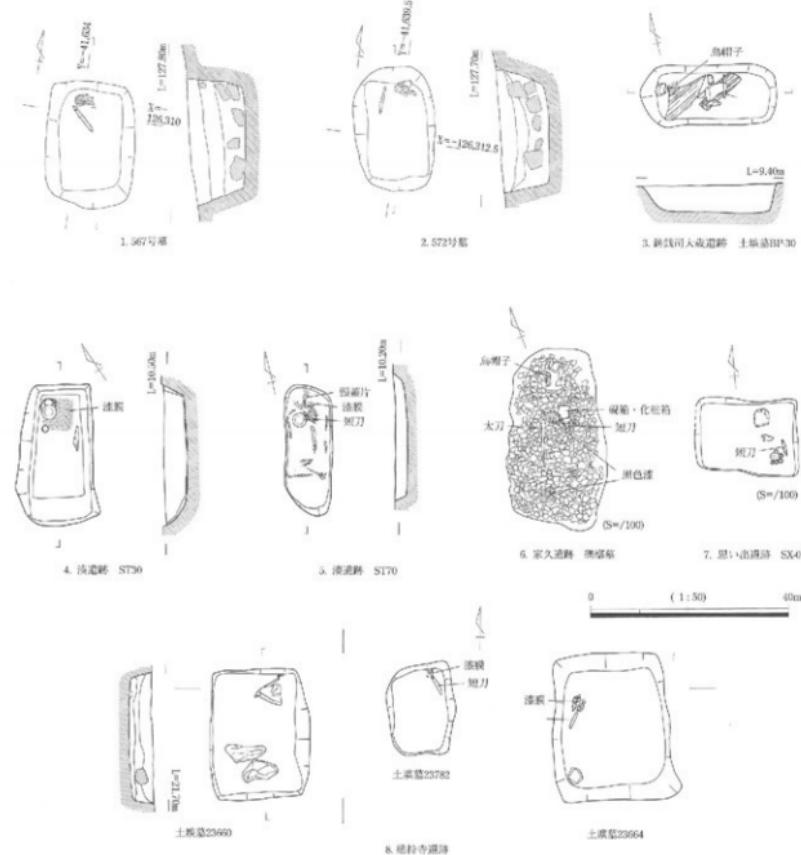


図175 鳥帽子が出土した墓の例

法量を出土鳥帽子に限定してみたところ、折鳥帽子の高さについては15~18cmと、比較的まとまった値を示している。つぎに縁の幅を比較すると、これについてもほぼ同じ値を示していることがわかり、それは現代で使用されている鳥帽子にも同じ傾向がみられる。この折鳥帽子の高さと縁の幅は、鳥帽子の成形形態であり、見かけの大きさを表している。568号墓出土の鳥帽子も立鳥帽子でありながら見かけの大きさは折鳥帽子と同じであることがわかる。軸については、大きなものは約30cm、小さなものは約18cmとその差は大きい。幅の差は風口の広さに関っており、中世段階において從来の幅8寸(26.5cm)の立鳥帽子から風口を持たない菱鳥帽子が登場するなど、種類が増加し多様化した際に風口のもつ意味が変質した結果とも考えられる。図173で復元した鳥帽子と、それとともに折鳥帽子を展開した立鳥帽子についても提示している。博多遺跡群、下古館遺跡の鳥帽子について同様の作業をしている(図174-2,3)。

これらの鳥帽子の復元の方法として、図面から端部と思われるラインをもとに展開し、端部が不明な箇所は展開した状態で確定ラインを生かしながら矛盾のない形状になるよう復元した。立鳥帽子を比較すると下古館遺跡、573号墓、博多遺跡群の順に峯が尖り、法量についても縮小化の傾向がみられる。それぞれの時期については、遺構や他の出土遺物からでは博多遺跡群がやや下るもの、明確な時期差はつけられない。しかし兵庫県思い出遺跡で出土している13世紀代の立鳥帽子は下古館遺跡のような円筒形であったことからこの形態の差異を単に多様性と捉えるだけでなく、時期差として捉えるべきことも考慮に入れなければならない。

折り方についてみると、すべて同様の折り方をしていることがわかる。資料の稀少さ、離れた地域という条件のなかで共通性を見いだせることは、布地の重構造における一致に加え、鳥帽子が広域にわたってある程度の共通性をもって流通していたことを示唆しているといえよう。折鳥帽子は折られた状態のものが製品であり、逆に上述した折り方や布地の構造以外の、立鳥帽子の形状や生地の粗密の差といった成形過程における点に共通性の薄さがみられることは興味深い。

以上の復元から、567号墓の鳥帽子は主頭の立鳥帽子と考えられる。塗られている漆は厚く、形状が変えられるほど柔軟であったとは考え難い。572号墓の鳥帽子については立鳥帽子を折り曲げて圭頭形を呈するものである。折り曲げる以前の展開した立鳥帽子は現代の資料③の菱鳥帽子を伸展したものとほぼ同様の形状を示す。このことから573号墓の形状復元された立鳥帽子の信憑性も高いと思われる。13~14世紀初めの絵巻物をみると一般庶民は主に立鳥帽子や圭頭形に折られた折鳥帽子、菱鳥帽子を被っている。なかでも圭頭形に折られた折鳥帽子が最も多く描かれ、その描写はここで取り上げている折鳥帽子3点に極めて似ている。上記では階級や用途に応じ分化していたことを説明したが、この時期には既にバラエティーに富み、分化についても厳しい規制下でおこなわれていた訳ではないことが窺われる(写真4参照)。

### (3) 埋葬について

土壙の規模については、長軸は約1.3~1.4m、短軸は約0.8~0.9mと同規模の範疇に捉えることができる。土壙上部には礫が確認され、また壙内からも礫群が検出されている。当中世墓では上部構造に石組を設置する型式の砾群があり、572号墓では砾の検出状況から上部構造の石組みが落ち込んだと推察される。567号墓についても同様に考えることもできるが572号墓のように明瞭ではない。木棺の復元については、漢遺跡と土壙の規模が近似していることから、当中世墓の木棺も同じような規模であった可

能性を指摘できよう。

ここで鳥帽子が中世墓から出土する意義について少し考えてみたい。当時成年男子によって一般的に被られていたことからも、故人の生前の愛用品であったと想像できる。また当遺跡も含め、墓から鳥帽子と一緒に小刀を伴う土墳墓が多い。小刀についても当時の男性が一般的に所持していたものであり、鳥帽子と同じく愛用品であったと考えられる。特に鳥帽子については前述したように露頂を恥辱とするほど、当時の人々にとって手放し難い服飾の一部であることを考えると、墓に埋葬される際に頭部に被せて埋葬される方がより自然に思われる。

現在のところ鳥帽子と判別できる完形品は、墓から出土しているものでは5点あり、それらは兵庫県思い出遺跡出土を除けばすべて慈塙の北隅で検出されている。もとの形状が不明である漆膜片についても北隅で多く発見されている。思い出遺跡の鳥帽子を出土した木棺墓SX-01は、副葬品に同安系青磁碗、土師皿、小刀、帶金具などがあり、時期は13世紀代とされている。出土している鳥帽子も高さ33cm、幅29cmの長鳥帽子で土壇の中央東寄りから出土している。報告者により莊官クラスの墓と考えられる。鳥帽子の種類も長鳥帽子の方が折鳥帽子より身分の高い人物が着用することから、この墓と当遺跡の墓とは明らかに身分差があり、時期的にも思い出遺跡の木棺墓の方が先行するもので墓の形式が異なるほか、鳥帽子の形状も異なっており、当遺跡などで出土している鳥帽子は折鳥帽子で高さは15cm前後である。ところが長鳥帽子は思い出遺跡を参考にすると、約30cmと長い。この長い鳥帽子を被せて遺体を棺に納めることは不可能と思われ、被せる代わりに遺体の傍らに納められたと想像できよう。

14世紀初めに成立した『春日権現記』のなかで、「俊盛卿往生」のシーンがある(写真5)。ここでは俊盛が息を引き取ったあと、俊盛が昇天している様子を夢に見たという場面が描かれている。この時俊盛は鳥帽子を被って昇天している。当時の人々が想像する昇天の際に鳥帽子を被っているということは、鳥帽子とともに埋葬したことを示唆しており、鳥帽子を出土する墓に関しては鳥帽子を被っていたという可能性が高いと考えができるだろう。追記すると、絵巻中では罪人は鳥帽子を被っておらず、地獄に落ちた者も、誰も鳥帽子を被って描かれている者はいない。『餓鬼草子』に棺内の遺体が描かれており、その遺体は鳥帽子を被っていないがそれは地獄ながらの当時の凄惨さを表現していると解するか、もしくは服飾の一部でありながらも埋葬の際には副葬品としての制限を受けていたと考えたい。

ここでもう一度当遺跡の埋葬状況について考えると、鳥帽子を遺体に被せて葬られていたと考えるのであれば、鳥帽子の復元形態から両者ともに前頭部が西側に位置していたことになり、遺体を横に向け西方を向くように埋葬されたことが復元できる。上記以外に鳥帽子を出土している中世墓で、墓壇の長軸を東西にとり頭部を西に向ける墓が存在することを考え合わせると、非常に興味深い仮説となるであろう。しかしこの仮説は当遺跡で考古学的に検証されたものではなく、中世墓から出土する鳥帽子を積極的に捉えた場合の推論の域を出ないものである。

## 7.まとめにかえて

以上のようにさまざまな角度から鳥帽子についての観察をおこなった。これにより鳥帽子は素材や形状にバラエティーを持ちながらもある一定の規格があったことを示唆している。鳥帽子折と呼ばれる職人は、16世紀に成立する「七十一番職人歌合」で初めて描かれる。しかし今回の検討により、14世紀には製品を作り出す職人と呼べる者が存在したと言えよう。また中世の人々にとっての鳥帽子の意味も埋

写真4 絵巻物に見る葬送の様子  
『北野天神縁起』による  
(13世紀前半成立)



- ①立鳥帽子  
②折鳥帽子



写真5 俊盛卿の死後、卿が昇天する様を夢に見たという場面。雲に乗って昇天する俊盛卿は立鳥帽子を被って描かれている。『春日権現記絵』より

券の点から少し垣間見ることができたように思われる。昼夜を分たず常に身につけてもらっていた鳥帽子は、当時の生活と密接に関わってきたものである。全国的に存在する製品であることからも詳細な分析によりその産業形態を把握できる可能性をもつ資料であるといえよう。しかし有機物であることから出土点数も少ないうえ、検出されてから取り上げられて保存処理が行われるまで、充分な留意が必要であるため図化されることも稀である。今後の課題としてまず鳥帽子に検討を加える以前に、資料としての価値を認識するという課題が残されているといえよう。今回の観察は鳥帽子の資料化への模索であり、今後より多くの鳥帽子が資料化され研究されることを期待し本稿のまとめと代えたい。

資料を実見させていただくにあたって、泉佐野市教育委員会の鈴木陽一氏、歴史館いすみさの学芸員の方々に多大なご厚情を賜った。末筆ながらここに記し深謝致します。

また下古館遺跡出土折鳥帽子の折り方について、報告書作成者の柄木県国分寺町教育委員会の山口耕一氏より、筆者の見解と異なるというご指摘を頂いた。再検討を試みたが本稿を私見として注記した。この点については更なる検討を要するものの、博多遺跡群出土鳥帽子の存在により折鳥帽子の折り方にある一定の規格性が見出せるものと考えている。

(長本 幹)

#### 註

- (1) 出土鳥帽子に関して、鳥帽子本体の大半は土壌化し、塗布された漆膜のみが残存している状態となっている。これはすべてに共通する事象であり、出土品に関しての鳥帽子という記述は鳥帽子の漆膜がそのままの形状で残存している個体のこととしておきたい。
- (2) 財団法人富山県文化振興財團 『埋蔵文化財調査概要』平成10年度 1999年
- (3) 泉佐野市史編さん委員会 1999年 『泉佐野市史研究』第5号掲載の鈴木洋一氏の山張報告内に記述。当該調査機関からの報告はまだ行われていないようである。
- (4) ここでの記載は以下の文献を参考にしましたものである。なかでも小田雄三氏の論稿は大いに参考にさせていただいた。ここに記し深謝したい。
  - 関根正直 1932年 『重修装束圖解』 林平書店
  - 1968年 『装束甲冑圖解』 協同出版
  - 宮本善太郎 1977年 「かぶりもの・きもの・はきもの」 民族民芸叢書
  - 国史大辞典編集委員会編 1980年 『国史大辞典』第3巻 吉川弘文館
  - 丹野 邦編 1980年 『総合服飾史辞典』 雄山閣
  - 坂本太郎監修 1981年 『風俗辞典』 東京堂出版
  - 小田雄三 1983年 『鳥帽子小考』 『近世風俗図譜』第12巻 小学館
  - 河瀬 実英編 1989年 『日本服飾史辞典』 東京堂出版
  - 故実叢書編集部編 1993年 [改訂増補] 故実叢書 装束集成』卷之六 明治図書出版
  - 朝日新聞学芸部編 1994年 『中世の光景』 朝日新聞社
- (5) 当遺跡出土鳥帽子は第7章第6節において自然科学的観察もおこなっている。合わせて参照していただきたい。

- (6) 泉佐野市教育委員会 1992年 『泉佐野市埋蔵文化財調査概要』平成4年度
- (7) 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998年 『總持寺遺跡』  
大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第30集
- (8) 財団法人栃木県文化振興事業団 1988年 『自治医科大学周辺地区 昭和63年度埋蔵文化財発掘調査概報』  
栃木県埋蔵文化財調査報告書第104集
- 山口耕一 1992年 『所謂中世遺跡出土の鳥帽子について』 『研究紀要』第1号  
栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- (9) 福岡市教育委員会 1989年 『博多』 福岡市埋蔵文化財報告書第204集
- (10) 中町教育委員会 1993年 『思い山遺跡(概報)』 中町文化財報告5
- (11) 「職人」という言葉が文書類で使用されるのは16世紀に入つてからである。中世では「道々のもの」、「道々細工」、「道々工」という言葉が使用されている。

表14 出土鳥帽子一覧表

遺跡名	発見地	備註	状況	回収	保存状況	時期	所在場	文獻
聖橋山南墳墓群	568号墓、573号墓	立鳥帽子	2点。所市に埋葬する。土器の北風から出土。	○ ○	短刀	13C末～14C初	大阪府茨木市	
横之瀬跡(第30次)	36SE2	立鳥帽子	所市外側のみに被る。鉢組ノ紀が2面ある。	○ ○	漆器模	12C	神奈川県平塚市	1
宮沢遺跡(昭77次)	1号墳穴道構 S11-不明		調査を終了している。	○	木製、石製品、土器等、陶器	生近世	愛媛県松山市	2
山手遺跡	S1560	不明	調査を終了している。	○	土器等、漆器類	9世紀後半	多賀市	3
下吉野遺跡	P地区2347号墓構(井戸)	折鳥帽子	帆形の形態を用い、襷も付属する。内面は漆を塗る。	○ ○		14C	新潟県下越郡四日町村	4
千葉北遺跡	造構外	折鳥帽子	5点出土。漆を塗る。漆器の間に附石が残る。	○		13C中～14C後	神奈川県鎌倉市	5
今小堀西遺跡	ピット7、道構外	折鳥帽子	立鳥帽子	3点出土。	○	かわらけ、漆器、	14C後葉	8
筑屋東東塚跡	第1周、第5周	折鳥帽子	1点と複数。白身の正面に漆を塗る。	○	木張め、漆器類、陶器類、灰骨	8		
研修施設用具 (足利八幡宮敷地内)の 石合大路周辺遺跡群 (No.242)				○		13C中期～14C初	足利市	8
由比ガ浜南遺跡				○		13～14C	足利市	9
迫塚1遺跡	SR1526	折鳥帽子		○		14C後葉	足利市	10
水久遺跡	森移築	立鳥帽子	高さ30cm、幅30cm、中央で折れ曲がる。北風に出土。		白面四片型、かわらけ、鉄製大刀、短刀、化粧箱(内部に鏡、鏡、手鏡)	12C後半	金井郡武生市	12
松戸遺跡	SK168	不明	木柄部の北風に出土。	○	灰釉陶製脚架2点、頭4点	12C中後	愛知県日進市	13
平安京左京七条三坊 井戸69	立鳥帽子		手縫で縫合部を成形、墨塗りで詰める。高さ30cm、直径25cm。			平安時代後期	京都府京都市	14
定山遺跡	石44	折鳥帽子	1点と鉢形。柄部分に漆付で塗りた。鳥帽子を塗せずにいる。	○	漆器類、土器鉢玉	平安時代後期	京都府京都市	15
浅持寺遺跡	2366、2373、23664	折鳥帽子	1点と鉢形。柄部分に漆付で塗りた。鳥帽子を塗せずにいる。	○	短刀	13C後葉	大阪府茨木市	16
浄蓮跡02-2	ST70、SK92	折鳥帽子	1点と鉢形。柄部分に漆付で塗りた。鳥帽子を塗せずにいる。	○	瓦器類、土器鉢、短刀	13C後葉～14C前	大阪府東大阪市	17
思い出遺跡(第7区) SX01	立鳥帽子		布(綿?)に漆を塗り、高さ33cm、幅29cm。漆器の間に沿ってある。	○	近畿系青磁碗、土器皿、刀、帶具	13C代	兵庫県伊丹市	18
詩歌人跡遺跡	土塙底BP 3	折鳥帽子	東西に舟形を持ち西面約30cm、西面に漆厚を出土。裏面に布の痕跡。		短刀、削、灰化材	古墳時代前半	山口県周防市	19
河内遺跡群	606号土塙	折鳥帽子	布に漆を塗る。	○ ○	土器類、漆油刷、瓦器、瓦、筒、骨器、石器、馬鹿頭、土器、石器、漆器、木製品、漆器	14C後半	愛媛県福岡市博多区	20
人穴洞				○		14C	太宰府市	21

## 文献

- 平泉町教育委員会、建設省岩手工事事務所 1994「柳之御所発掘調査報告書平泉バイパス・一関遊水地開連遺跡発掘調査」『岩手県平泉町文化財調査報告書』第38集
- 仙台市教育委員会 1992「富澤・泉崎浦・山口遺跡(4)・宮沢遺跡第70～75、77、79次発掘調査報告書」、下ノ内遺跡-第5次調査報告書-『仙台市文化財調査報告書』富澤第163集
- 宮城県教育委員会 1996「山王遺跡1・仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第170集
- (計7)参照
- 千葉池遺跡発掘調査団 1983「千葉池遺跡」
- 鎌倉市教育委員会、今小路西遺跡発掘調査団 1990「今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書」
- 江ノ電線合併発掘調査団 1983「蔵敷東遺跡・江ノ電線合併建設工事に伴う中世市街地遺跡の発掘調査概報-1」
- 鎌倉市鶴岡八幡宮、研修施設用地発掘調査団「研修施設用地発掘調査報告書」
- 鎌倉市教育委員会 1993「若宮大路周辺遺跡群(No.242)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9-平成4年度発掘調査報告』
- (社2)参照
- (計3)参照
- 武生市教育委員会 1992「家久遺跡発掘調査」  
〃 1993「家久遺跡(櫛塚墓)出土遺物について」
- 愛知県埋蔵文化財センター 1994「土器の北風」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第48集
- (財)京都市埋蔵文化財研究所 1993「平安京左京七条三坊」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993「定山遺跡3次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第54冊
- (社6)参照
- (計5)参照
- 中町教育委員会 1993「思い出遺跡(綾瀬)」『中町文化財報告5』
- 山口県教育委員会 1984「上社・銅鏡司大鏡・今宿遺跡」『山口県埋蔵文化財調査報告書』第75集
- (計8)参照
- (計7)参照

## 第10節 五輪塔・石仏の分析

当遺跡から出土した石造物には五輪塔及び石仏がある。その出土状態には地輪や石仏が設置されたものがある一方、倒壊し、散乱したものや墓の石組に転用されたものがあり、本来の使用目的ではない状態のものも見受けられた。ここでは各石造物を分類、また、出土状況を検討し、それぞれの変遷を明らかにしたい。

### (1) 五輪塔 (図126~129)

#### (空風輪)

空風輪は一石で作られており、空輪と風輪の分離状態を観察し、分類をおこなった。最も着目すべき点として、空風輪のくびれ部、風輪の上端面、空輪最大径の位置をあげることができる。

I類：風輪の上端面が水平に仕上げられ、くびれ部が屈曲しているもの。

II-A類：風輪の上端面がやや内上方に傾斜し、くびれ部が屈曲しているもの。

II-B類：風輪の上端面がやや内上方に傾斜し、くびれ部がやや湾曲しているもの。

III-A類：風輪の上端面が内上方に傾斜し、くびれ部の彫りが浅いもの。さらに空輪の最大径の位置が上位となり、下半部が直線的になっている。

III-B類：風輪の上端面が内上方に傾斜し、くびれ部の彫りが浅いもの。さらに空輪の最大径の位置が下位となり、上位のみ丸味がある寸詰まりの球形である。

IV類：くびれ部の彫りが浅く、溝のように表現されている。空輪の球形も崩れ、円柱状に近いものとなる。

以上の分類により、空輪と風輪の分離が明瞭なものから、不明瞭なものへの形態化していく傾向 (I類からIV類へ) が考えられる。風輪最大径(b)に対するくびれ部径(d)の比率は I類 - 0.59~0.60、II類 - 0.58~0.70、III類 - 0.67~0.82、IV類 - 0.76であり、I類が大きく、IV類になるに従い小さい傾向が認められる。

空輪頂上部つまみ部の形態をみても I・II類が整っており、III・IV類が崩れた傾向を見いだすことができる。

風輪下面のはぞ穴の突出はIII類が小さい。また、下面の形状はI類が内ぐり気味に掘いており、II~IV類は平坦に仕上げている。内ぐりしているもののほうが、火輪との接合が安定する。

図127-12の空輪・風輪部それには梵字が一方向に刻まれており、当墳墓群の中では1点のみで特異な存在といえよう。

#### (火輪)

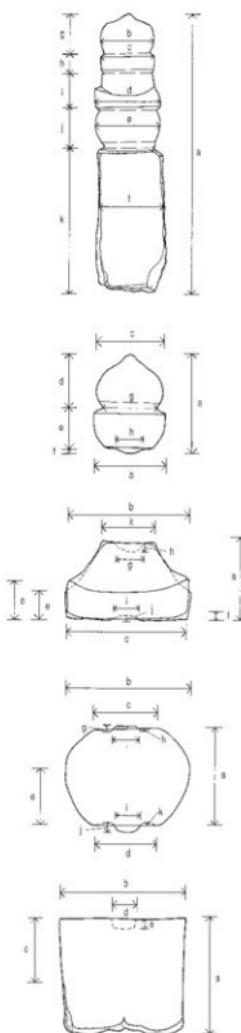


図126 五輪塔計測位置

火輪の高さ  $a$  と幅  $b$  の比率により 0.61 以下を I 類、0.62~0.66 を II 類、0.67 以上を III 類とした。I 類とした図 128-4, 7, 9, 18, 19, 25 は高さが低く、扁平なものである。

また、四隅の反りに着目し、分類した。まず、反りに係わる形態として底面を観察した。

A 類：下面が平坦なもの。

B 類：下面四隅が反り上がるるもの。

C 類：下面全体が中央を中心として反りあがっているもの。

さらに、四隅の反りの上端部が、

a 類：中央部より滑らかに

反り上がるるもの。

b 類：隅部からやや屈曲気

味に反り上がるるもの。

下面のほぞ穴の有無によ

り、I 類：有、II 類：無、に

分類できる。

この分類により反りの強弱が表される。火輪の本来の形態は下面が平坦で、四隅が反り上がる A 類である。反りを強調するために B・C 類となり、A 類 → B 類 → C 類への変化が想定される。また、小分類も a 類から b 類への変化が想定される。偏平率の変化は A 類 → B 類 → C 類の順で低い傾向が図 178 のグラフで読み取れる。

なお、すべての火輪上面にはほぞ穴があり、I・III 類の下面には、ほぞ穴を有さない 2 類としたものが存在する。

#### [水輪]

高さ  $a$  と最大径  $b$  の比率より、0.72 より低いものを I 類、(図 129-7, 10, 16, 17) それ以上のものを II 類とした。I 類が扁平な形態のものとすることがができる。

水輪は基本的に球形を成す

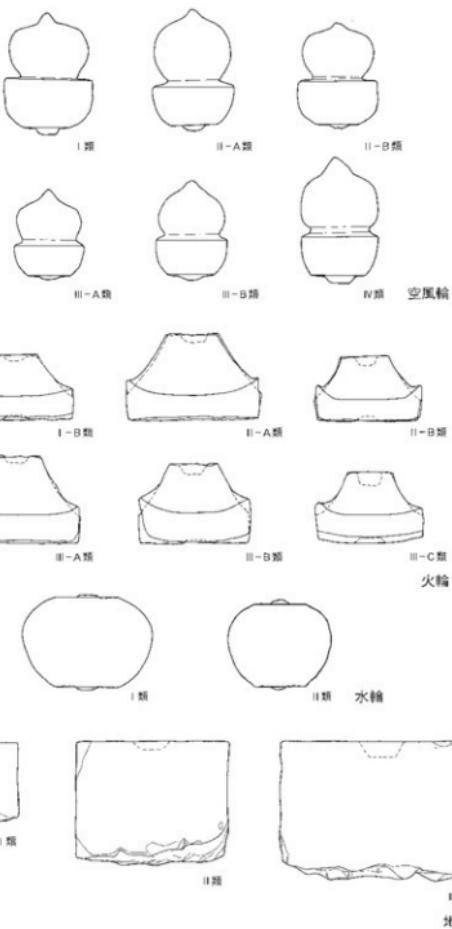


図 177 五輪塔各部の分類

がその最大径が中心より上位に位置する。水輪の高さ  $a$  に対する最大径の位置の高さ  $e$  の値が 0.55 を境にして 0.55 未満を A 類、0.55 以上を B 類とする。これは球形の肩の張りを表した数値である。

水輪の上面のはぞは、

a 類：有、b 類：無、に分類できる。

a・b 類は火輪・地輪の形態と連動しているものである。

上面、下面の平坦面の直径  $c + d$  は最大径  $b$  の 0.47～0.55 の比率であり、いずれも、およそ 1/2 を平均とするものである。なお、火輪・地輪との設置面となる上面・下面の平坦面はレンズ状に凹面とし、窪むものがある。

#### [地輪]

横幅により I 類—幅 25cm 以下、II 類—25～31 cm、III 類—32cm 以上、の大型・中型・小型の 3 類に分類される。

地輪はいずれも底面が加工されておらず、土中に埋めることを前提とした形態を示している。よって、高さは四隅あるいは各面の加工面をつくり出している範囲を示す  $c$  の値が本来の地輪の形を示すものと考えられる。この高さ  $c$  と横幅  $b$  の比率により、地輪の扁平率を求めることができる。

A 類—0.50 以上、B 類—0.35～0.49、C 類—0.34 以下、とした。A 類はほぼ直方体となり、C 類は扁平となっている。

部材高  $a$  と加工面高さ  $c$  の比率より、31%～71% の露出率が認められる。但し、露出率が低い 31% の図 130-13、33% の図 130-5 は一隅のみの成形が滞っているがための数値であり、実際は成形されている一部が露出した状態であったと考えられ、露出率はもう少し高いと考えられる。（市本）

#### [五輪塔と石組との関係]

これまで、五輪塔の各々の部位について見てきたが、本来、これらがどういう風に組み合わされているのか復元を試みた。

まず、當世墓では、全ての部位が原位置を保っていた墓が存在せず、辛うじて 12 基の墓に地輪が座っていた。これらを遺構から見てみると、次のような興味深い結果が得られた。それらの内、墓壙に伴う石組が残存している 148, 3, 293, 35, 33 号墓の地輪が一辺 27cm 以上の大きさであり、墓壙に伴わない石組のみの 176, 492, 208 号墓の地輪が一辺 26cm 以下である。また、石組が造り替えられた 240, 122, 81 号墓に座っているものは、一辺 25～28cm の範囲に納まる。

また、地輪の大きさは、石組の大きさにはほぼ比例していることが判り、墓壙に伴う石組が残存しているものは全て火葬墓であり、148 号墓が C I 類で、293 号墓が C II 類である以外は、A 類である。相対的に、墓壙に伴う石組に座っていた地輪は、時代に伴い大きなものから小さなものになって行く傾向があると思われる（第 7 章第 6 節参照）。このことから、墓壙に伴う石組→造り替えられた石組→石組のみの順に推移していく様子が追認できるものである。

#### [五輪塔の組合せ]

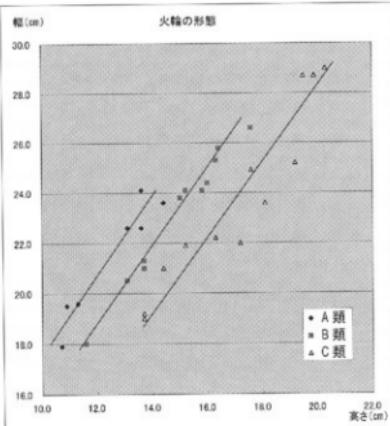


図 178 火輪の形態

組合せ式の五輪塔は、空風輪を除いて火・水・地輪が、ほぼ辺および径を揃えており、造られる時点で石材を統一していると考えられる。そこで、当墓群から出土している各部材の石材を観察すると、大きさは三種類に分類されることが判る。その石材は、粗粒花崗閃緑岩・斑状花崗閃緑岩・細粒花崗閃緑岩である。粗粒と斑状ではほぼ2分され、細粒は空風輪に1点（図127-20）のみ出土している。これらの石材の分布は、本文図5を参照されたい。

また、石材に加えて、組み合わせる時のための、ほぞ孔や突起の有無や形状により、各部位が顕著なく組み合わされるものと思われ、それらを比較検討した結果、3組の五輪塔が組み合わされた。

1組目……………辺25.4cm・高さ81.0cm

・空風輪（図127-9）火輪（図128-31）水輪（図129-8）地輪（図130-8）……粗粒

2組目……………辺24.1cm・高さ61.0cm

・空風輪（図127-1）火輪（図128-21）水輪（図129-7）地輪（図130-4）……斑状

※空風火輪（図128-1）を組み合わせても可能か

3組目……………辺21.3cm・高さ63.0cm

・空風輪（図127-3）火輪（図128-11）水輪（図129-3）地輪（図130-1）……粗粒

他に、地輪と水輪が組み合わされる例として、は水輪（図129-14）地輪（図130-13）・水輪（図129-16）地輪（図130-12）等がある。

各部材で見ると、地輪には21.3cm～40.4cm、水輪では20.2cm～34.0cm、火輪では17.9cm～29.0cmまであり、火輪でみると、25cm以下のものが33点中24点を占め、水輪では17点中7点、地輪では20点中5点であった。相対的に小型のものが多い。以上の部材を、先述と同様に石材等で組み合わせると50基以上のものがあると思われる。なお、残存していた石組の中で、石組の中心部に地輪の座っていた痕跡を残しているもののが23基（1.182,219号墓等）であった。（森屋）

## （2）一石五輪塔（図130）

一石五輪塔の出土点数は16点と少なく、また、完形品は1点のみであり、明確な分類はできない。地

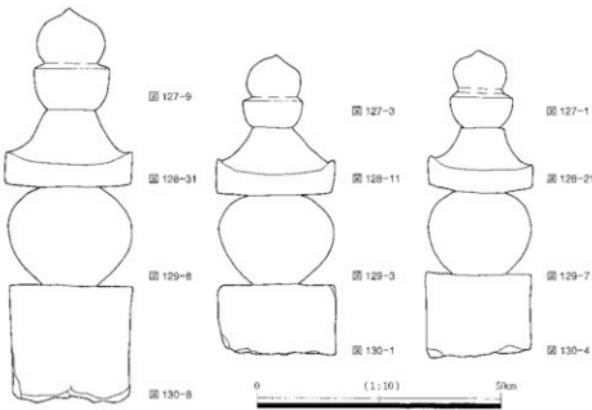


図179 五輪塔組合せ復元

輪の下半部はいずれも未加工のままであり、地中に埋め込むことを前提としている。

### (3) 石仏 (写真図版183~199)

出土した石仏はその形態より、光背と仏像を一石で作る「光背形石仏」と板碑塔身に仏像を掘る「板碑形石仏」があり、細部の表現によりさらに分類できる。

像容は阿弥陀如来像と地蔵菩薩像がみられる。地蔵菩薩像は1点のみである。一石に像容単体の彫刻が基本であり、2体彫刻されているものは光背形が2基、板碑形が4基ある。

#### (光背形石仏) (写真6)

白然石の1面に石仏を彫り込む。石材は下半部に重心を置き、下端部は土中に埋置することを前提として未加工である。

①光背形態・裏面形態

光背の頂部形態には

I類—頂部を尖らせた形

II類—上部が半円形

III類—上部が方形

の3分類できる。

I・II類には未加工部分をそのまま使用したものとすべての外形線を加工したものがある。III類は未加工のままであるが、側線上端部がやや湾曲するものを含む。半円を形作ることを前提としているが、石材の取り方の結果により、方形になったと考えられるものもある。

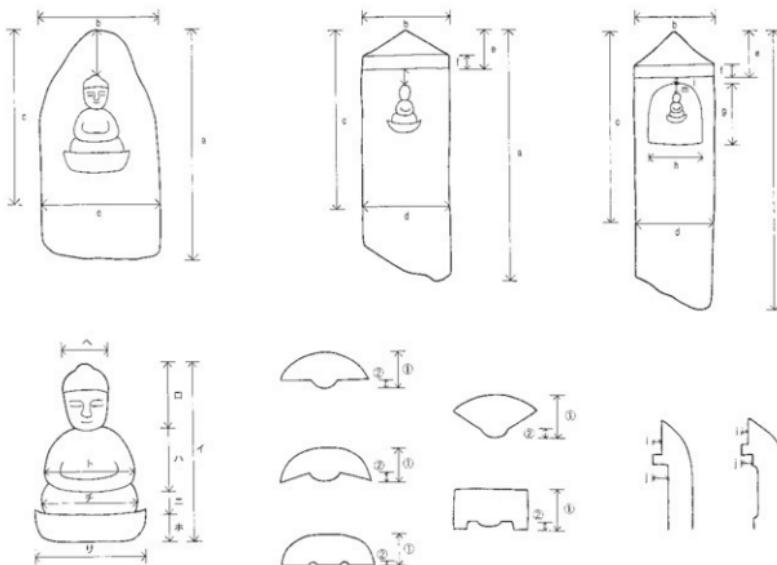


図180 石仏の計測位置

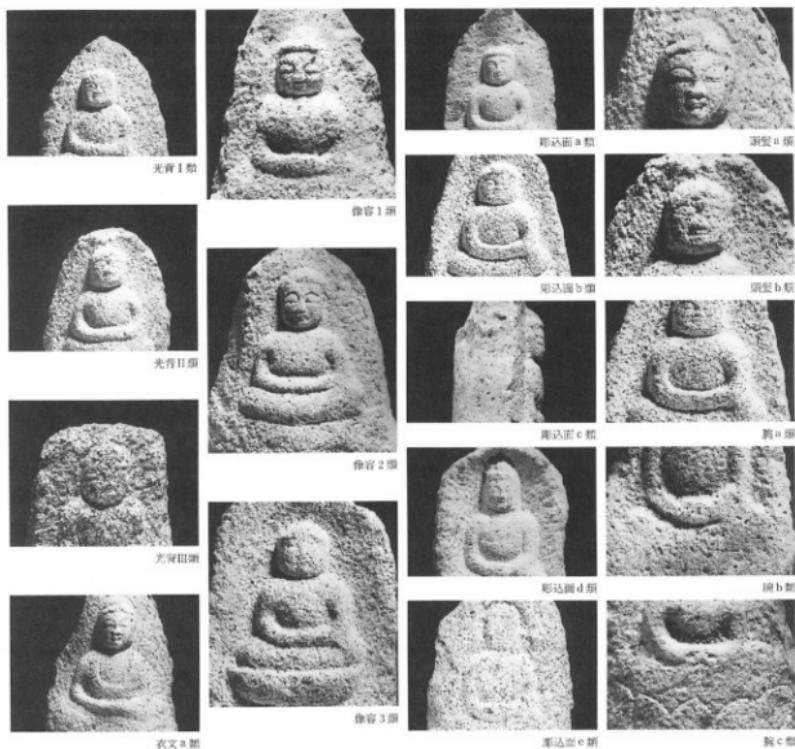


写真 6 光背形石仏の分類

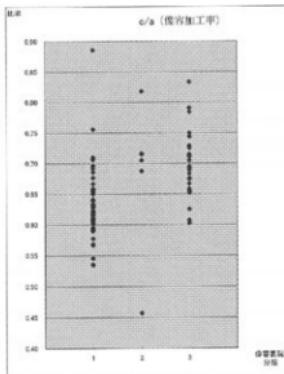
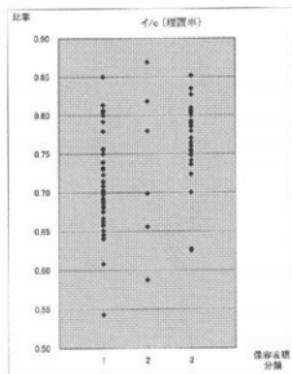


図181 光背形石仏の埋置率と像容加工率

像容彫り込み面の形態は、

- a 類 - 頭部先端で手前に反り上がるもの
- b 類 - 平坦面を有するもの
- c 類 - 裏面側に傾斜するもの
- d 類 - 犀状に彫り込んだもの
- e 類 - 像容境界部分のみを窪ませるもの

がある。

a・b 類は意識的に加工したものであり、c 類は石材の取り方により光背の面積がとれなかつたためと考えられる。

石材の裏面は粗くハツることにより、側面観において正面端部に向かうカーブを作り出し、また、真上から見た断面は半円状を呈するように加工している。裏面は加工することを基本とするが、作りだそうとするカーブが未加工面に合致した場合はそのままである。

光背には紋様、文字等はみられない。

## ②像容表現

像容はいずれも阿弥陀如来座像であり、その表現は簡略されたものである。

- 1 類 - 腕より上半身までを表現

- 2 類 - 座像全体を表現

- 3 類 - 台座を含めて座像を表現したもの

の 3 分類できる。

頭髪部は頭の頂上が隆起した a 類 - 肉髻のあるもの、b 類 - 肉髻のないものがある。

顔部は細部まで表現されているものと粗雑なものがあり、石材によって加工の細密に差があるようである。写真188-3、192-6は斑状花崗閃緑岩石・粗粒花崗閃緑岩であり、加工を細部までおこなっており、よく整った顔立ちをしている。

腕部は a 類 - 左右の区別なく一本に表現されたもの、b 類 - 手首部分を腕よりも幅広く脹らみを持たせた表現をしたもの、c 類 - 印相として定印の親指と人差し指を表現しているものがある。

胸部の衣は a 類 - 表現されているもの、b 類 - 表現されていないものがある。a 類には U 字形に胸が開くものと右脇へたなびくものとある。a・b 類共に左腕肘の外側輪郭線がなく、未加工部分や左膝にかけて連結している。袈裟の重ね下がった状態を表現したものと思われる。

## ③各部位の計測値

石仏の各部位を計測し、検討をおこなった。なお、b は石材の最大幅、c は加工面までの高さ、d は加工面幅を示す。

図181は石材の全高 a と像の彫られた範囲 c の比率（埋柵率）を像容表現の 1～3 類ごとに表したものである。この比率はその石材が設置された時にどの範囲まで、埋柵していたかを示している。像容 1 類は 0.57～0.71、像容 2 類は 0.69～0.72、像容 3 類は 0.65～0.75 の比率であり、このことから膝・台座を表現していない腕から上半身の 1 類が最も埋設深度が大きいことが分かる。台座まで、或いは膝まで彫刻された石仏が本来存在していたが、設置する上で台座・膝が隠れてしまい、「下半身を彫刻する必要性がなくなったと考えられようか。

加工された高さ c に対する像容高イ（図181・像容加工率）は 0.63～0.87 であり、像容表現 1 類が

0.64～0.82、2・3類が0.73～0.85であり、2・3類が像容の占める割合が高いことがわかる。これは1類が腕より下部を平滑に加工する面積が広いが、2・3類は膝・台座の下部はほとんど加工を施さないことを表している。

像の突出度を測った断面厚2は0.4～3.4cmの範囲でみられる。石材厚さ3や像容表現との相関関係は見出せない。

#### [板碑形石仏] (写真7)

像容は阿弥陀如来座像、二尊阿弥陀如来座像、二尊地蔵菩薩立像があり、その表現は簡略されたものである。

##### ①板碑形態

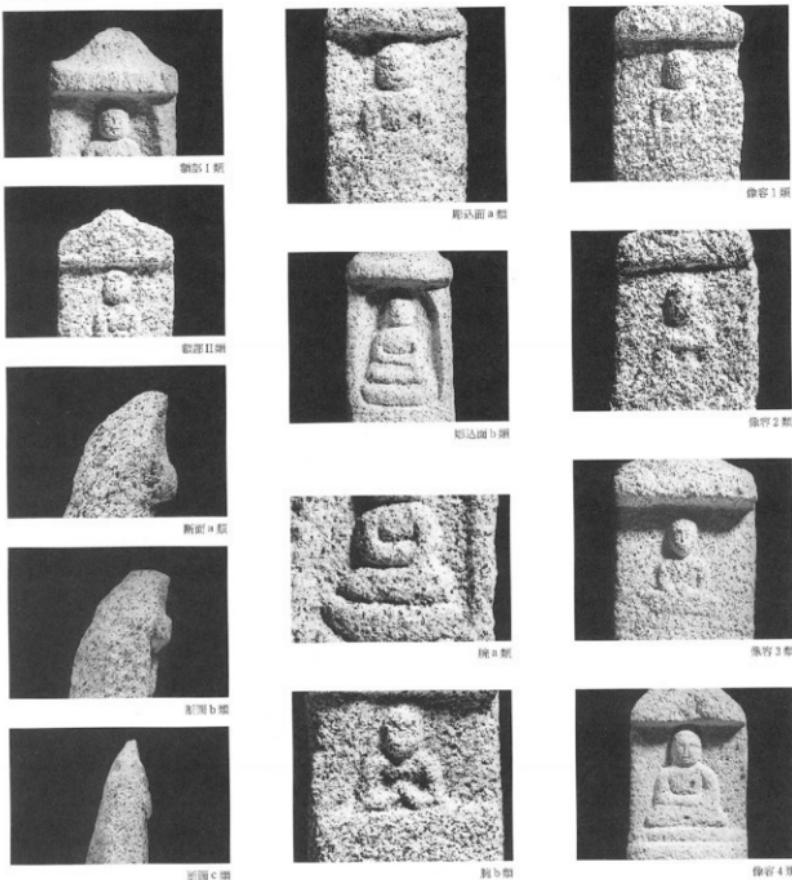


写真7 板碑形石仏の分類

I類－額部を有するもの  
II類－額部を有さないもの  
がある。

I類には断面形態が  
a類－額部から頂部に向かって反り上がるもの  
b類－額部が屈曲する凸部として存在するもの  
c類－額部を数段にわたって階段上にするもの  
がある。a類は左右端が直線ではなく、反り上がっている。  
額部背面は正面頂部に向かって半円状に丸くハツっている。

像の彫り込み面はa類－平坦なもの、b類－龜状に彫り込んだもの、がある。  
石材の裏面は粗くハツる程度である。光背形と比べ、頂部や側面の加工度が大きいので、裏面部分の加工度も広範囲となっている。

## ②像容表現

像の表現は、  
1類－腕上面から上半身までを表現  
2類－腕下面から上半身までを表現  
3類－膝より上面の座像全体を表現  
4類－台座を含めて座像を表現  
したものに分類できる。

頭髪部はすべて肉髪がなく、顔部は童顔である。腕部はa類－左右の区別なく一本に表現されたものとb類－合掌印と思われる印相がある。b類は光背形石仏には存在しない表現である。胸部の衣は表現されていないが、左肘部分は光背形と同様に袈裟が下部に向かって垂れる表現をしている。

## ③各部位の計測値（図180）

下部の埋置比率（c/a）は0.49～0.77であり、像を龜状に彫り込んだb類が0.62～0.77を示し、加工面が広く、埋没部分が少ないことがわかる。

像の突出の数値（断面2）は、0.6～2.8cmの範囲であり、像彫り込み面が龜状のもの（b類）が8点中7点が1.5cm以上を測り、深く彫られていることがわかる。なお、光背形と同様に石材の厚さや像容表現との相関関係は見出せない。

## （4）変遷

当遺跡から出土した石造物には紀年銘を有するものはなく、その年代推定は難しい。これまでの形態研究を参考にし、変遷を試みる。

### ①五輪塔・一石五輪塔の変遷

五輪塔の変遷を考えるにあたり、紀年銘を有する五輪塔の存在が注目される。栗栖山南墳墓群周辺では忍頂寺の元享元年（1321）銘五輪塔・大岩国見八幡神社の文安三年（1446）銘五輪塔<sup>D</sup>（図183）が存在する。忍頂寺五輪塔は総高227cm、地輪幅67cmを測る大型品である。複弁を有する台座があり、火輪軒裏には垂木の表現がなされ

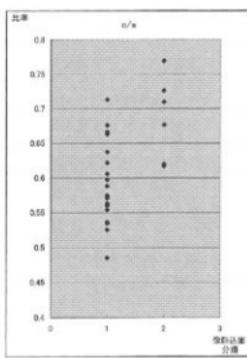


図182 板碑形石仏の像容加工率

ている。国見八幡神社五輪塔は総高225cm、地輪幅69cmを測る大型品であり、複弁を有する台座がある。北摂地域の14世紀、15世紀を示す資料として重要なものである。

既研究では以下のような、変遷が指摘されている。<sup>2)</sup>空風輪・水輪は下部のカーブの張りがなくなり、空風輪先端・火輪棟先端が尖るようになる。地輪は偏平なものから高さが高くなる傾向がある。石塔全体の大きさは大型のものから次第に小型のものが出現する傾向がある。

では、当墳墓群での変化を考えてみたい。

空風輪は空輪と風輪の分離が明瞭なものから、不明瞭なものへの形態化していく傾向（I類からIV類へ）が考えられる。

火輪は扁平なものから高さが高くなるものの変化（I類からIII類へ）が考えられる。また、四隅の反りは、小さいものから大きいものへの変化、つまり、A類からB・C類への流れが想定される。

水輪も偏平率が注目される。最大径と高さの比率から0.55までのものを偏平なものとした。また、最大径の位置が中央部にあるものから上位に位置するものへの変化が考えられ、球形から肩の張った形態変化が考えられる。

地輪の偏平率の変化は横幅に対する高さの比率が大きくなっていくと考えられる。C類からB・A類への変化が考えられる。

以上のように、個別の変遷を述べたが、次にこれらの実年代を考えていきたい。

既研究での各部の形態変遷ではいわゆる室町時代の範疇に含まれるもので、14~16世紀の実年代を与えることができ、前述の各部の変遷に沿って、時代が降りるものと考えられる。

ここで、当墳墓群の遺構からみた年代観を加えていきたい。

地輪の中には原位置を保ったものが存在する。図130-1・6~11・13・15・18~20はいずれも石組を有しており、中心に地輪が据えられていた。出土遺物、石組の形態、切り合ひ関係からそれらの墓は、9~14世紀、20~14世紀中~後半、18~19~14世紀後半、8~14~15世紀、10~11~13~14世紀後半~15世紀前半、15~15世紀、6~15世紀後半~16世紀中葉の実年代が与えられている。出土した地輪の形態からだけでは前述した分類において、明瞭な変遷は表れていない。しかしながら、6がもっとも新しい時期にあたり、小型としたI類に近い数値のもの（図130-1~7）が出土地輪の中では時代が新しいグループ（16世紀代）に属すると言えるだろう。

また、図130-3は火葬場4から出土したものであり、16世紀中葉以前のものであることが明らかになっている。同様に、空風輪の図127~14~25、火輪の図128-4~7~15~16~25が炭盛土や火葬場から出土しており、16世紀中葉以前のものである。

これを手掛かりとして他の空風輪・火輪・水輪について考えた。

水輪と火輪は地輪と同等の軸を有するものの組合せが考えられ、地輪の小型としたI類に近い数値のものの水輪の図129-1~9、火輪の図128-4~19が組み合うこととなり、16世紀代と想定する。しかしながら、火輪は軸を測った大きさだけではなく、軸と高さの偏平率が重要であり、火輪の図128-4~19のうち、6~8~10~12~14~17のみが16世紀代と考えたい。水輪も同様に軸の数値だけではなく、肩の張

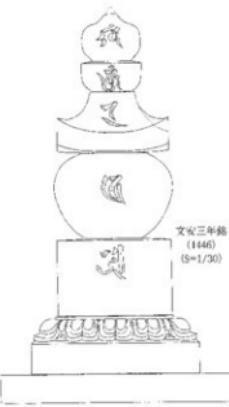


図183 国見八幡神社五輪塔

りや曲線度が重要である。幅の数値のみをみれば、水輪の図129-1～9が新しいグループに属するが、中でも6・7の肩が張っており、16世紀代と考えたい。10～17は14～15世紀に属すると考えられる。空風輪は以上の火輪・水輪・地輪の大きさに組み合う小型のもので、かつ、空輪と風輪の不明瞭なものが新しいグループに属すると考えられる。図127-9～20・22～24が14～15世紀、III-A・III-B類とした図127-1～8・21が16世紀代と考えられる。

このように実年代を与えることにより、五輪塔は当墳墓群の形成初期からやや遅れて14世紀頃から設置され、14～15世紀をピークとし、16世紀においても若干の設置をみることができるようである。

また、墓域の変遷の検討からも地輪の図130-13（3号墓）、130-18（19号墓）、130-20（33号墓）、130-19（35号墓）が属するA群が墳墓群形成初期の墓群に位置しており、上記の変遷に追従するものである。さらに、考古地磁気年代測定により35号墓は西暦1350年の値が与えられている。

一石五輪塔は一般的に14世紀末から19世紀にかけて造立されたものであり、16世紀に興隆したとされる。当墳墓群では出土数が少ないが、大きな時期幅をもつものではないと思われる。

東に位置する京都府長岡京市の勝龍寺跡では石垣に組み込まれた多量の石造物が出土した。<sup>3)</sup>この中に一石五輪塔も多く出土しており、紀年銘により大永3年（1523）から承保12年（1569）の前後する時期のものであることが明らかにされている。

当墳墓群の一石五輪塔と比較すると、地輪が押しつぶされた形状や、火輪の四隅の反り上がり方が勝龍寺出土品と類似している。当墳墓群と勝龍寺跡は地理的に近く、地域による形態差は少ないものと思われ、栗栖山南墳墓群出土の一石五輪塔はおよそ16世紀代のものと考えておきたい。

図131-2・9・10・14・15は火葬場から出土したもので、16世紀中葉以前のものであることが明らかである。

## ②石仏の変遷

石仏の変遷について2つの仮説を提示したい。仮説1は石仏そのものを形態分類し、型式学的に変遷を導いたものであり、仮説2は石仏の出土状況から定点を押さえ、変遷を導いたものである。

### 〔仮説1〕

光背形石仏では、像容表現の細部をみると頭髪部の内巻や手首のふくらみの表現があるものはすべて像容表現1類であり、胸部の袈裟表現は15点中13点が1類である。よって台座・膝までの全体を表現した像容表現2・3類は像の細部表現が粗く、腕から上半身の像容表現1類は相反して細部表現が成されている結果となった。

光背形態と像容表現1～3類の関係は、光背形態III類（上部が方形のもの）のもの13点中11点が像容表現1類に属しており、像容表現2・3類の光背は尖塔或いは半円形となる光背形態I・II類に大半が占められている。つまり、台座・膝までの全体を表現したものは光背も整った形態を有しているといえる。

板碑形石仏では龕状に彫り込んだb類がより整った形態を有する一群と考えられ、b類のすべての像容は膝まで、あるいは台座まで表現されたものである。また、龕状ではないa類の中で台座まで表現されているものは台座の下端ラインを直線としている。

光背形石仏と板碑形石仏の相違は像容表現に見られる。双方共に腕から上半身を表現したものがあるが、光背形は腕の下面ラインまで表現しているが、板碑形は腕の上面ラインまでの表現である。板碑形のほうが埋置することを意識していると考えられる。

以上から変遷を想定すると、

像容表現では、光背形石仏の3類が本來の形態であり、形態化の方向から2類、1類と移行していくことが考えられよう。

光背形石仏の光背形態I・II類は像容表現2・3類に多いことから、光背形態I・II類からIII類への動きも考えられよう。

光背形石仏の写真183-6, 184-1, 185 3, 186 2, 187-1, 5, 7は彫りが浅く、かつ、写真187 1, 5, 7は石材厚も薄い。光背形石仏の中で相対的に新しい時代に属すると考えられる一群である。

以上のことから光背形石仏では像容表現3類とした189-4～192 4が最も遅る一群と捉えられ、像容表現2類の188 6～189 3、そして像容表現1類の183-1～188 5がそれに続く一群と考えたい。

しかしながら、顔部・腕部の表現が像容表現1～3類共、大きな違いがなく、工人・工房などの相違であり、年代的な差異はさほどないものとも思われる。

板碑形石仏の像容形態は光背形石仏と同様に4類から3→2→1類への変化が考えられる。これと連動して、板碑表現のI類（顔部を有するもの）はすべて像容表現が4類である。また、像彫り込み面のb類はすべて板碑表現は1類である。

つぎに、これらの実年代であるが、五輪塔と同様に紀年銘資料は出土していない。

藤澤典彦は茨木市北部の石造物について調査<sup>4)</sup>を行っており、その中で栗栖山南墳墓群周辺地域の石仏も報告をしている。光背形、板碑形とともに類似したものが多くみることができる。特に光背形石仏では像容の左腕衣文の流れや顔部の表現方法が全く同様である。同一工人集団が栗栖山南墳墓群だけではなく、茨木市北部地域の広がりでの活動があったことが伺われる。

実年代について、藤澤は『室町』『桃山』という表示をしている。像容の細部がしっかりと彫刻しているものを『室町』と認定しているようであり、『室町』は室町中～後期を意味し、15～16世紀中ばをあてはめることができるようである。『桃山』は16世紀後葉のことであろう。

変遷については、本来の整った形から経時に退化していく変化を指摘している。

退化していく変化については前述した仮説1のとおりである。

このように考えるのならば、当墳墓群出土石仏は15～16世紀の範疇に収まり、光背形では台座まで表現した像容表現3類、板碑形では顔部を有するII類・台座まで表現した像容表現4類がもっとも先行するタイプであり、15世紀代と考えるべきであろうか。また、像彫り込みが像容境界部分のみを畳ませたものや、腕より上半身までを表現したものが16世紀の中でも新段階に属すると考えられるだろう。

#### 〔仮説2〕

以上のように形態変化を変遷と結びつけ、仮説1を提示したが、ここで、当墳墓群の石仏の出土状況をふまえて、その変遷を再度考えてみたい。

石仏には設置された状態で出土したものがいくつかみられる。

567号墓はI期の13世紀後半～14世紀中葉に位置づけられている。567号墓に設置されていた183-5の石仏は腕より上半身までを表現した1類である。

194・206・207・228号墓はII期の14世紀後半～15世紀後半に位置づけられている。いずれも腕より上半身までを表現した1類である。

25・62・95・96・179・183・184・186・189・198・213号墓はII期の14世紀中葉～15世紀後半に位置づけられている。写真186 4の95号墓と187-1の96号墓は接して検出された石組である。写真186-4・187 1共に像容表現は1類であり、187-1は線彫りに近いc類である。

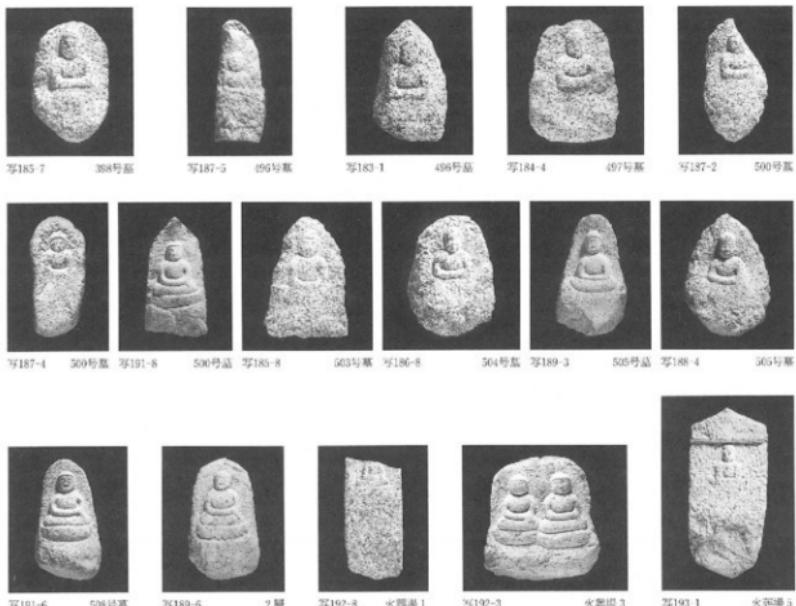


写真8 炭盛土下層および火葬場出土石仏

以上の実年代はあくまで、その墓の埋葬時期であり、上部施設の石組やそれに設置された石仏の時期と直結はしていない。特にⅠ期とした567号墓は石仏の年代観として大きく齟齬をきたすものであり、その時期以降に設置されたことが考えられる。

しかしながら、もう少し時期を限定できる石仏がある。

それは火葬場に係わる遺構である炭盛土に覆われていた石仏である。火葬場が形成されたⅢ期（15世紀後半～16世紀中葉）に設置されたものであり、それ以前の年代を与えることができる資料である。

写真185-7（398号墓）、183-1・187-5（496号墓）、183-4（497号墓）、187-2・4、191-8（500号墓）、185-8（503号墓）、186-8（504号墓）、188-4・189-3（505号墓）、191-6（508号墓）、189-6（2層）がそれである。

これらの石仏は光背形のみであるが、光背形態・像容表現共に様々な形態のものが含まれており、仮説1において述べた形骸化した形態への変遷は認められない。また、実年代においても16世紀後半と考えていた写真187-4（500号墓）がこのグループに含まれており、より時期が遡ることが認められる。

また、写真192-8（火葬場1）、192-3（火葬場3）、193-1（火葬場5）は上記の炭盛土形成に係わる遺構である。棺台などに転用されていた石仏であり、上記と同様に16世紀中葉以前の石仏であることが明らかな資料である。192-8と193-1は板碑形であり、像容の彫りは浅く、193-1は腕下面から下部が表現されていない形骸化が進んだ形態をしている。

このように最も形骸化したもののが、Ⅱ期という古い時期に存在することになり、仮説1において示し

た形骸化の方向が時期差と見なすことができず、当墳墓群の石仏は15～16世紀の中で多様な形態の石仏が設置されたと考えられる。

以上のように仮説1・2のいずれも実年代を考えるにあたっては、東に位置する京都府長岡京市の勝龍寺跡出土石仏が参考になる。石垣に組み込まれた状態で多量に出土しており、栗栖山墳墓群において光背形の像容表現1類とした石仏と同形式である。勝龍寺跡出土石仏は一石五輪塔の項目で記述した年代と同様に16世紀第1四半期から第3四半期のものと考えられており、栗栖山墳墓群出土の石仏もこの時期を中心とした時期幅が考えられる。

変遷については石仏そのもののみを検討した既研究に沿った「仮説1」と出土状況から検討した「仮説2」の2通りを提示しておきたい。

#### (5) 結語

以上、石造物を分類し、変遷を試みた。

光背形石仏においては分類することにより、像容表現1類・光背形態I・II類の中で顔の表現が類似する一群があることがわかった。写真189-7,190-1,2,3,5,7,191-1,3,4,6,7,8,192-3,5はいずれも丸顔で、眉毛が鼻筋から丸く描かれ、目は一本線で描かれている。同一工人、或いは同一工人集団の手になるものと考えられる。また、これらの中で写真190-1,5,192-5,191-4,6,8、189-7,190-2,7,192-3の3群がさらにそれぞれまとまりのあるグループであると考えられる。

写真187-4、188-7は石材の側面・背面を加工しておらず、像容の浅い彫り込み方からみて、同一工人、或いは同一集団のものであろう。

藤澤は五輪塔・石仏共に使用石材の粗粒タイプと細粒タイプを編年のひとつの視点として、掲げている<sup>6)</sup>。粗粒タイプが先行し、細粒タイプが後出する傾向があることを示した。しかしながら、当墳墓群ではその傾向を明瞭につかむことはできなかった。

石仏の変遷に関しては2つの仮説を提示したが、周辺地域をも含めた、鎌倉時代からの流れを把握する必要性はいうまでもないところである。しかしながら、当墳墓群出土石仏の様相を見るかぎりでは、大きな時代差の変化とは考えられない。

五輪塔・石仏の実年代については炭盛土・火葬場に伴うもの、あるいは覆われたものが、16世紀中葉以前という一定点であることを明らかにすことができた。

また、これら五輪塔・一石五輪塔・石仏の出現時期、盛行期間は造立者の社会的階級の裾野への広がりを示していると考えられる。(市本)

#### 註)

- 1) 藤澤典彦 1997 「金石文・石造物の調査」『安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査 中間報告書』  
(財) 大阪府文化財調査研究センター
- 2) 元興寺文化財研究所 1993 「五輪塔の研究 平成四年度調査概要報告」
- 3) (財) 長岡京市埋蔵文化財センター 1991 「勝龍寺跡 発掘調査報告」
- 4) 藤沢典彦 1999 「石造物調査」『彩都(国際文化公附都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』 (財) 大阪府文化財調査研究センター

註1と同じ

5) 註3と同じ

6) 註4と同じ

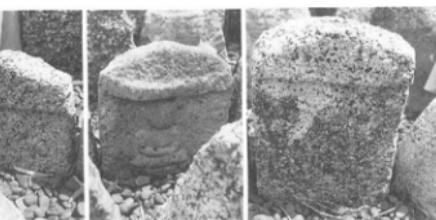
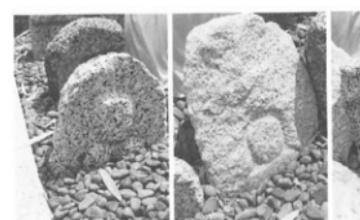
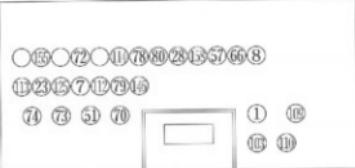
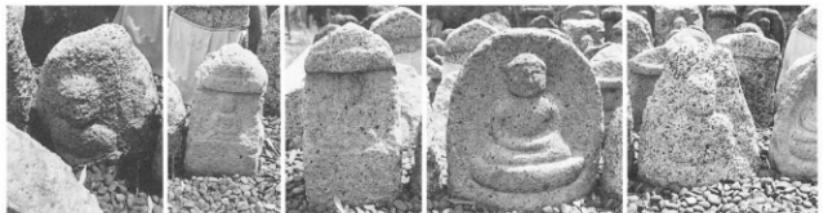


写真9 '67年出土石仏群（1）



79

146

74

73

51



70

103

110

1

109



(手前右から) 138 57 66 8



'67年出土五輪塔群



写真10 '67年出土石仏群 (2)

## 第11節 中近世墓群出土銭貨の検討

### 1. はじめに

中近世墓群の調査では、今回150枚もの銭貨が出土している。また、茨木市教育委員会の実施した1967年の調査でも90枚余りの銭貨が出土しており、銭文が確認できた枚数は合わせて224枚にのぼる。出土した銭貨は、そのほとんどが中世の日本で一般的に流通していた渡来銭である。これら出土した銭貨は、中世、近世の葬送における思想、儀礼を反映する重要な遺物の一つである。また、全国的に見ても中近世墓から出土する銭貨は数多く報告されており、これらの出土した銭貨からみた栗柄山南墳墓群の中世墓、近世墓の特徴と若干の問題点を他の調査例も踏まえながら述べたいと思う。

### 2. 当墓群における出土銭貨の概要

当墓群から出土した銭貨は唐、宋、明銭を中心とする渡来銭が大半を占め、その中でも北宋銭が最も多く出土している。唐銭は、開元通寶と南唐の唐國通寶の2種が出土している。宋銭は、皇宋通寶、元豐通寶、元祐通寶などを中心に20種の北宋銭、南宋銭の紹熙元寶が出土している。明銭は永樂通寶と洪武通寶の2種が出土している。これらの他に李氏朝鮮銭の朝鮮通寶が出土している。この朝鮮通寶は、李氏朝鮮において1423年に初鋤された朝鮮通寶であり、当墓群出土度米銭の中での最新銭である。また、渡来銭以外の銭貨は、墓壙内や火葬場などの構造からの出土ではないが、江戸幕府により寛永13(1636)年初鋤された寛永通寶が3枚出土している。

これら銭貨は土葬墓や火葬墓である墓壙やその上に構築された石組、そしてこれら単独の墓以外に火葬場とそれを覆う炭盛土、また堆積層である

第1～2層から出土している(表15)。

表15 中近世墓群出土銭貨遺構別一覧

銭貨名	初鋤年	国名	層1～2層	土壙	火葬場A類	土壙墓B類	土葬墓C類	合計
開元通寶	621	唐	4	6	0	0	1	11
唐國通寶	989	南唐	1	1	0	0	0	1
太平通寶	976	北宋	0	0	0	0	0	0
聖宋元宝	995	北宋	1	3	0	0	0	4
政和通寶	998	北宋	2	2	0	0	0	4
崇寧通寶	1004	北宋	0	0	0	0	0	0
神宗通寶	1009	北宋	2	3	0	0	1	6
哲宗通寶	1009	北宋	0	2	0	0	0	2
徽宗通寶	1017	北宋	1	3	1	0	0	5
大觀通寶	1023	北宋	3	9	0	1	0	13
崇寧通寶	1032	北宋	1	3	0	0	0	4
徽宗通寶	1034	北宋	0	2	0	0	0	2
徽宗通寶	1038	北宋	8	19	1	0	0	28
高宗通寶	1056	北宋	0	7	1	1	0	9
绍兴通寶	1064	北宋	0	3	0	1	0	4
治平通寶	1064	北宋	0	0	0	0	0	0
聖宋通寶	1066	北宋	2	11	0	1	0	14
元豐通寶	1078	北宋	2	15	1	4	1	26
元祐通寶	1095	北宋	3	16	1	3	0	30
紹聖通寶	1094	北宋	2	5	0	0	0	7
元祐通寶	1098	北宋	2	1	0	0	0	3
聖宋通寶	1101	北宋	2	1	0	0	0	3
崇寧通寶	1103	北宋	1	0	0	0	0	1
大觀通寶	1107	北宋	0	2	0	1	0	3
政和通寶	1111	北宋	2	5	0	0	0	7
正祐通寶	1157	金	0	1	0	0	0	1
紹興通寶	1190	南宋	1	0	0	0	0	1
紹興通寶	1198	明	1	1	0	0	1	3
永樂通寶	1408	明	3	7	0	0	1	11
制勝通寶	1423	朝鮮	0	1	0	0	0	1
吉慶永通寶	1658	日本	1	0	0	0	0	1
寛永通寶	1697	日本	1	6	0	0	0	7
寛永通寶	1739	日本	1	0	0	0	0	2
合計			49	141	12	12	10	224

(石組出土のものは第1～2層に、灰埴土は火葬場の間に各々含めている)

また、土葬墓B類は伸展葬による埋葬が行

われたもので、遺構の切り合い関係では墓群中もっとも新しい一群であるので、その上限を確定できないが近世以降、その下限が19世紀前半の波佐見が出土しており、その頃に求めることができるものである。このタイプでは555・600号墓から共に6枚の錢貨が出土している。

そして、石組から出土しているものがあるが、これは原位置であると断定ができるが、埋葬後に錢貨を使用する何らかの儀礼が行われた可能性が考えられる。また、第1～2層から出土した錢貨も同様の意味で捉えることができる。

墓以外の遺構では、火葬場及び炭盛土から前回の調査と合わせて141枚の錢貨が出土している。この火葬場は複数回の荼毘が行われた土坑であり、その際に生じた焼骨混じりの炭が盛り上がって炭盛土として形成されたものである。時期的には、出土した土器から15世紀後半～16世紀中葉が考えられる。

### 3. 出土錢貨中の模鉄錢

出土した渡米銭の中には、肉眼で容易に判別できる模鉄錢も含まれている。確實なものでは、火葬場出土の景德元寶が挙げられる。この景德元寶は、今回の調査で3枚出土している。この中の図123-20は、他の2枚と比べ、明らかに鉄文が不鮮明で文字と輪とが接しており、錢径もやや小さい。これらの特徴から、この景德元寶は模鉄錢であると考えた（図184）。このように肉眼観察で模鉄錢であると判断できたのは、この1枚の景德元寶のみであった。しかし、このことは鳩谷和彦氏が最近の一連の研究で主張するように、当墓群でもさらに多くの模鉄錢が含まれている可能性を示唆するものと言えよう。

### 4. 出土錢貨の錢種構成

山口県福光守跡遺跡の調査では、墓壙内に納められた錢貨の錢種構成に特色があり「祥符」の錢文を持つ祥符元寶16枚、祥符通寶26枚とこの2種が際立って多く出土している（表16）。報告者は特定の錢種が好んで入れられたものと想定している。当墓群ではこのような現象を認めることができようか。

当墓群全体の錢種ごとの枚数をまとめると、全国の備蓄錢調査の結果から得られた渡米銭の錢種順位と非常に近く似通ったものであった（表17）。このことから、当墓群全体では贈送の際に、特別な意味合いで選び出される錢種も反対に弾き出される錢種も存在せず、錢種の組み合わせ自身に何ら意味を持たないアットランダムなものであったと考えられる。墓壙内出土の錢貨では、他の錢種と比べると、「元祐通寶」「元豐通寶」の2種が多くみられるが、ただ、この2種は全国でも上位のものであるので、意識的に選び出して墓壙内に納めたものかどうかは断じ得ない。

### 5. 被熱錢と火葬行為

当墓群から出土した錢貨は、被熱したものと被熱していないものに大別できる。肉眼観察により異常

本鉄錢



図123-18

模鉄錢



図123-19



図123-20

な変形や変色、溶融した痕跡などがある、これらは火葬行為との密接な関係が想定できる。

火葬場出土の錢貨では今回の調査で出土した69枚しか観察を行えなかつたが、この約8割に確実な被熱痕跡が認められる。これらの錢貨

図184 中世墓群出土景德元寶の模鉄錢と本鉄錢

は、火葬場・炭盛土から被熱した多数の鉄釘、焼骨片とともに出土しているので、荼毘時に遺体とともに木棺に納められたものと考えるのが妥当であろう。また複数枚の錢貨が溶融、付着した状況で出土しているものもあるので、複数枚で使用された可能性がある。

一方、火葬墓A類である263号墓では、6枚の錢貨が重ねられた状況で床面より出土しているが、確実な被熱痕跡はなかった。出土状況からすると、拾骨の際の片付けが終わったあと床面に置かれたと考えられ、火葬場とは使用方法が異なる。同様の火葬墓A類である1967年に調査された501号墓でも、6枚の錢貨が出土しているが、その被熱痕跡は不明であるが、火葬場と火葬墓A類では錢貨の使用状況が異なっていた可能性がある。

しかしながら、大阪府和泉市万町遺跡では、当墳墓群の火葬墓A類と同様の性格が考えられる火葬土壙より永楽通寶を含む渡来錢が出土しているが、これらは全て被熱している。これらの錢貨は荼毘の際に遺体に供えたものを、拾骨の際の片付けを終え土壙を埋める時に納めたものとされている。よって、荼毘時に使用する点では当墳墓群の火葬場の在り方と共通しており、墓に納めるという点では火葬墓A類と同様の状況と言え、火葬における錢貨の使用法も多様であったと思われる。これらの違いを図式化するには資料が少ないが、古代の火葬墓で錢貨の出土状況を詳細に研究している小林義孝氏が指摘するように、火葬の過程を踏まえた上でその錢貨の性格を検討することが今後の課題と言えよう。

## 6. 錢貨の枚数と六道思想

全国各地で調査された中世墓の中には、一つの墓に多景の錢貨が納められた例が確認されている。山口県瑞光寺跡遺跡では、77枚もの錢貨を納める墓が1基存在し、岡山県大村遺跡では、98枚もの錢貨を納める墓が1基存在する。鳥取県布勢墳群群でも、45枚、30枚の錢貨が納められた墓の2基が存在する。山口県吉母浜遺跡でも、20枚の錢貨が納められた墓が1基のみ存在する。このような調査例からも、10枚以上の錢貨が納められる墓が墓群中では、きわめて少数ながらも存在することがある。これら多量の錢貨を納める墓は、被葬者の中でも突出した身分であったと考えられている例もある。しかし、当墳墓群ではこのように多量の錢貨を納める墓ではなく、また錢貨を納めない墓の方が圧倒的に多い。しかし、この両者間で墓の構造・規模において差異はないので、被葬者の階層差ではなく、錢貨の有無は単なる儀礼的行為の差異に過ぎないものと思われる。

六道鐵とは俗に「三途の川の渡し貨」と理解されているもので、中世から近世にかけて墓に納める6枚の錢貨は、六道思想に基づく六道錢と理解されている。全国的には6枚の枚数に集中する傾向があることは指摘されているが、先に挙げた遺跡などを含めて、各地の発掘調査の結果では必ずしも6枚

表16 各地の中世墓における錢種別出土数

	A	B	C	D	E
開元通寶	1	42	22	5	1
太平通寶	1	5	2	1	0
淳化元寶	1	5	1	0	0
聖道元寶	0	6	0	1	0
咸平元寶	1	4	6	3	0
景德元寶	2	6	5	5	0
祥符通寶	2	9	0	26	6
祐符元寶	0	10	5	16	3
天祐通寶	2	5	3	10	2
大聖元寶	1	12	11	8	0
明道元寶	1	1	0	0	0
景祐元寶	0	4	5	2	0
聖宋通寶	4	33	30	14	1
聖和元寶	0	3	4	1	0
嘉祐通寶	1	8	5	1	0
嘉祐元寶	0	2	0	1	0
治平元寶	1	2	3	2	1
治平通寶	0	0	0	1	0
熙寧元寶	5	33	18	13	4
元豐通寶	6	36	22	15	3
元祐通寶	3	34	17	8	1
紹聖元寶	0	11	7	2	1
元符通寶	0	8	4	0	0
欽定元寶	2	12	4	4	2
崇寧通寶	0	0	0	1	0
大觀通寶	0	5	0	2	0
政和通寶	0	12	1	4	3
宣和通寶	0	2	1	0	0
洪武通寶	1	6	2	9	5
永樂通寶	0	16	13	16	3
宣德通寶	0	0	0	1	0
A	広瀬地蔵山墓地跡				
B	大村遺跡				
C	布勢墳群				
D	瑞光寺跡遺跡				
E	吉母浜遺跡				

表17 栗栖山南墳墓群と全國備蓄錢の錢種構成

栗栖山南墳墓群		全國	
錢種	枚数	触仙	錢種名
1	聖宋通寶	28	1 圣宋通寶
2	元祐通寶	76	2 元祐通寶
2	元祐通寶	26	2 元祐通寶
4	熙寧元寶	16	4 熙寧元寶
5	天祐通寶	13	5 天祐通寶
5	永樂通寶	13	6 永樂通寶
7	開元通寶	11	7 入聖五寶
8	嘉祐通寶	9	8 嘉祐通寶
9	咸平元寶	6	9 咸平元寶
10	祥符通寶	7	10 祥符通寶
10	聖宋通寶	7	—
10	聖宋通寶	7	—

のセットに限らないものである。墓地ごと、あるいは地域ごとで枚数の特徴や差が存在することが考えられる。

当墓群では、銭貨が墓壙から出土したものは総数7基で、そのうち4基から6枚の銭貨が重なった状態で出土している。このように、当墓群は銭貨を納めない墓が圧倒的の中で、6枚納めた割合は非常に高いものと言え、6枚に対する強い意識があったことが推察できる。

一方、6枚以下の銭貨が出土する墓壙はどのように考えることができようか。546・581号墓共に、長軸0.8m以下と当墳墓群では最小規模のものであることがひとつの特徴と言える。このような少數枚の銭貨埋納については、山口県内の中世墓の調査で興味深い結果が出ている。瑠璃光寺跡遺跡や吉母浜遺跡では、出土人骨から6枚未満の銭貨を納めた墓は乳幼児の墓であるものが多く、また墓壙の規模も当墓群と同様で小さいものである。このことから、当墓群の6枚以下の銭貨が出土した墓壙は、その墓壙の規模から未成年者や乳幼児が被葬者であったことが可能性のひとつとして考えうる。

## 7.まとめ

さて、今まで中近世墓群で出土した銭貨について、幾つかの側面から検討してきた。ここでその成果についてまとめてることで、今後の中近世墓出土銭貨研究における幾つかの課題を整理しておきたい。

当墓群では、前回の調査と合わせると約240枚以上の銭貨が出土しており、店の開元通寶から李氏朝鮮の朝鮮通寶までの渡来銭と寛永通寶から構成され、その多くは渡来銭の内でも北宋銭である。この渡来銭の中で、肉眼観察により1枚の景德元寶が模鋳銭であることが判明し、この方面的研究を参考にすると、さらに多くの模鋳銭が含まれている可能性が高い。

銭貨の多くは、火葬場、火葬墓、土葬墓、石組などの遺構から出土しており、その全てが渡来銭であった。火葬場からは、全体の6割にある141枚の銭貨が出土しており、北宋銭を中心とするが、永楽通寶8枚と朝鮮通寶1枚と明銭も割合的に多く出土しており、出土土器から推定される時期である15世紀後半から16世紀中葉と一致した傾向であるので、この時期におけるまとまった良好な資料と言える。さらに、当墓群において火葬場が造営された時期が、銭貨を用いた葬送儀礼のピークと考えられる。

一方、寛永通寶が3枚しか出土しておらず、遺構からの出土はない。しかし、主に近世の所産と思われる土葬墓B類は、出土した1点の磁器碗から19世紀まで存続したと考えられ、寛永通寶流通期にも土葬墓が存在したことは明らかである。ただ、この土葬墓B類2基から各々6枚の銭貨が出土しているが、寛永通寶は含まれないので、古寛永の初鉢年である1636（寛永13）午以前のものである可能性が高い。また、銭貨を墓壙に納める風習もこの時期以降行わなくなつたことも指摘できる。

当墓群における銭貨の出土順位は、全国の備蓄銭調査によるものとほぼ同様の傾向である。このことは、中世におけるこの地域の銭貨の流通は他地域と大きく差がないことを示し、街道添いの市場を中心とした当時の銭貨による経済流通の一端が窺える。また、墓へ納めるためだけに、選び出された特別な銭貨、または銭種というものも当墓群では存在しなかつた。

当墓群での銭貨の使用法は、いくつかに分類できる。火葬の場合、遺骸とともに荼毘に付され、土葬の場合は、遺骸とともに棺内や墓壙に納められることが通例であったようである。これは、火葬場出土の銭貨がほとんどが被熱し、土葬墓出土のものには被熱がみられないことからも明らかである。しかし、火葬墓A類である263号墓では、火葬、片付け行為の後、重なった6枚の銭貨を床面に置いたと思われ

る。遺体の火葬時には入れられなかった銭貨が、火葬後の片付けが行われた後に銭貨を納めたと考えられ、遺体とともに茶毬に付された火葬場の銭貨とは副葬の方法が大きく異なる。また、石組の上や間からも銭貨の出土が認められ、なんらかの銭貨副葬における習俗の違いを示す可能性も考えられる。このような石組からの銭貨出土例は、奈良県広瀬地蔵山中世墓地でもみられる。また、土葬墓である600号墓出土の銭貨には、木質が残存しており木製容器に入れて納められた可能性が推定され、これは土葬墓特有に行われるものなのか、それとも火葬でも茶毬前には容器に納められていたのであろうか、その確定は難しいが、遺体と銭貨の関係を考える上で興味深いことである。

当墓群では、銭貨を納めた墓の絶対数は少ないが、それらの墓に納められた銭貨の枚数は6枚が比較的多く、6枚という枚数が意識されて納められた可能性が高い。これは六道思想を反映して6枚納めた結果とも考えられる。一方、6枚以下の銭貨を納めた墓壙は、当墓群でも規模的に小さいものであり、他跡の類例からも小児・乳幼児の墓である可能性が高いと考えられる。今後、銭貨の出土する中世墓群の調査では、特に注意が必要であると思われる。

以上、不十分ではあるが当墓群で出土した銭貨から葬式を観察することで、中世墓における銭貨についての幾つか課題を提示できたと思い、今後の研究の参考になれば喜びである。

#### 引用・参考文献

- 和泉丘陵内遺跡調査会 1991 『万町遺跡』
- 岡山県教育委員会 1995 『大村遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』113
- 兵庫埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭總覽』
- 坂詫秀一編 1986 『出土渡来銭－中世－』考古学ライブラリー45
- 鶴谷和彦 1994 『中世の板鈔銭生産』『考古学ジャーナル』372
- 鶴谷和彦 1997 『中世出土銭貨研究の現状－国内模範銭を中心に－』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第8集
- 下関市教育委員会 1988 『吉母浜遺跡』
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨からみた中・近世移行期の銭貨動態』『越境する貨幣』歴史学研究会編
- 鈴木公雄 1993 『渡来銭から古寛永通寶へ－出土六道銭からみた近世前期銭貨流遷史－』『論苑考古学』
- 奈良県立橿原考古学研究所 1989 『広瀬地蔵山墓地跡』
- 藤澤典彦 1994 『六道銭の成立』『出土銭貨』第2号
- 山口市教育委員会 1988 『瑠璃光寺跡遺跡』

## 第12節 栗栖山南墳墓群出土石器の検討

### 1. 出土石器の概要

栗栖山南墳墓群において石器が原位置を遺離した状態ではあるが、44点出土した。ほぼ縄文時代に帰属すると考えられるが、各石器の帰属時期に関しては後述する。石器組成の内訳は、石鏃、スクレイバー、二次加工を有する剝片、微細剝離痕を有する剝片、剝片、石核、碎片であり、石材はサスカイト39点、安山岩2点、黒色チャート2点、砂岩1点である。なお、サスカイトは肉眼観察による限りすべて二上山産であると考えられる。以下に器種ごとに石器の記述をおこなう。

#### (1) 石鏃 (図185-1~9)

石鏃は9点出土しており、石材別ではサスカイト7点(1~4、5、8、9)、安山岩2点(6、7)である。完形品は4点のみであり(2~6)、2、4、6、7には先端部に衝撃剝離痕が認められる。石鏃の形態は多様性に富んでおり、凹基無茎8点(1~7、9)、平基無茎1点である(8)。平面形については、やや幅広で正三角形に近いものと(1、2、4)、縱長で二等辺三角形に近いもの(3、5~7、9)に大別できるほか、五角形状のものもある(8)。側縁の調整はほとんどが直線的に調整されているが(1~7)、鋸歯線状を呈するものや(9)、側縁中央部に屈曲点を有するものが認められる(8)。基部の抉りについては、逆V字形に仕上げるものや(1~4)、逆U字形に仕上げるもの(9)、抉りが浅く、やや内湾するもの(5~7)などがある。脚端部の形状は、直線状を呈するもの(1、2、4)、先鋒でやや内側にすぼまるもの(3、5)、丸みをもたせるように仕上げるもの(6、9)など多様である。また、6は基部の形状が左右非対称であり、3は他の石鏃に比べ、器厚が薄い。

石鏃の製作技術に関しては、石鏃の器面上に素材面(素材剥片の主要剝離面もしくはその背面)を残す資料が5点あり(3、5、7~9)、そのうち、素材剥片を縦位に用いるものと(3、5、8、9)、横位に用いるもの(9)が認められる。

#### (2) スクレイバー (図185-10~13)

スクレイバーに関しては搔器(end-scraper)、削器(side-scraper)などの概念規定や器種分類がなされているが、本遺跡のスクレイバーに関しては厳密な区分をおこなわず、剝片の縁辺に連続的に二次加工を加えて刃部を作出したものを広い意味でのスクレイバーとして報告をおこなう。

スクレイバーは4点出土しており、石材別ではサスカイト3点(10~12)、黒色チャート1点(13)である。形態的には不定形であり、完形品はなくすべて一部、折損している。次に、個別ごとに石器の説明をおこなう。

10は背面に原礫面をとどめる横長剝片を素材とする。剝片の打面側に刃部が設定され、背面側からのみ二次加工が施されている。刃部は直線状を呈し、片刃で湾曲している。刃部角は約75度である。

11は自然面打面の横長剝片を素材とする。剝片の末端側に刃部が設定され、腹面側に二次加工を施した後に背面側を加工している。刃部は直線状を呈し、片刃で湾曲している。刃部角は約65度である。

12は薄手の横長剝片を素材とし、背面側からのみ二次加工が施されている。刃部は直線状を呈し、両刃で湾曲しない。刃部角は約30度である。

13は剝片を素材とし、背面側には自然面が残存する。刃部は折損しているため明確ではないが、曲線状を呈し、片刃で湾曲している。刃部角は約68度である。

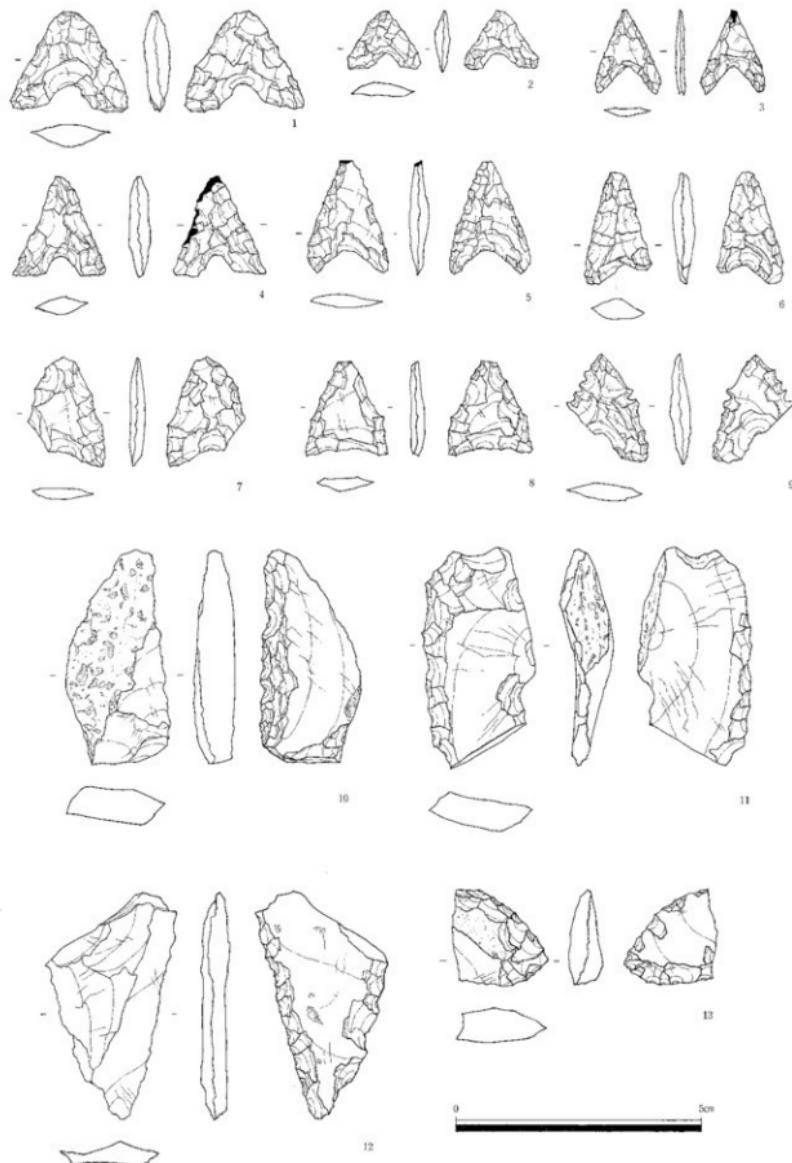


図185 栗栖山南墳墓群出土石器（石鏃、スクレイパー）

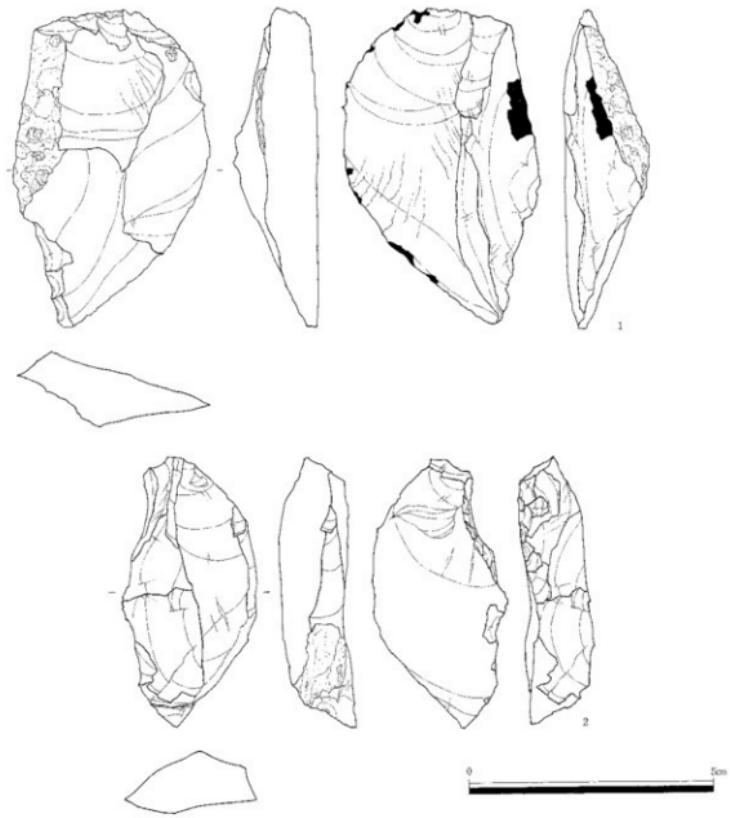


図186 栗栖山南墳墓群出土石器（二次加工を有する剝片）

(3) 二次加工を有する剝片：(図186-1-2)

本遺跡では6点出土しており、そのうち2点を図化し、石器の説明をおこなう。

1は一端にツブレ痕があり、腹面側のバルブが発達せず、フィッシャーが衝撃点へ集中することから、両極打法により剥離された剝片と推定され、腹面側には先行剥離面が認められる。背面側にポジティブな剥離面があることから、もともと自然面打面の剝片を素材とし、主要剥離面側および背面側に剝片剥離がおこなわれ、最終的に両極打法により、現在の剝片が剥離されたと考えられる。ゆえに腹面側にある先行剥離面の形状は不明である。また、背面側の自然面に隣接する数枚の剥離痕は腹面と切り合っていないので、断定はできないが二次加工とみなした。石材はサヌカイトである。

2は単剥離面打面の縦長剝片であり、背面側には自然面が残存する。背面構成から、連続的に縦長剝片が剥離されていたとは考えられない。二次加工は右側辺に打面を一部、除去するように施されており、その結果、側辺が逆「く」の字形になっている。石材は黒色チャートである。

表18 栗栖山南墳墓群出土石器属性表

遺物番号	尾版符号	地区	器種	折損	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考
1	185-1	4ATr	石劍	-	20	24	4.6	1.6	サヌカイト	凸基無茎
2	185-2	4ATr	石劍	-	12	15	3	0.4	サヌカイト	凸基無茎
3	185-3	C16n3	石劍	-	18	13	1.8	0.2	サヌカイト	凸基無茎
4	185-4	D16n1	石劍	-	19.5	19.5	4.3	1.1	サヌカイト	凸基無茎
5	185-5	奥山1	石劍	-	23	16	3.4	1	サヌカイト	凸基無茎
6	185-6	4ATr	石劍	-	23	13	4.3	1	安山岩	凸基無茎
7	185-7	C16n2	石劍	-	22	15.5	2.7	0.8	安山岩	凸基無茎
8	185-8	4ATr	石劍	-	19	17	2.7	0.8	サヌカイト	平基無茎
9	185-9	C16n2	石劍	-	22	16	3.6	1	サヌカイト	凸基無茎
10	185-10	4ATr	スクレイパー	-	45	20	7.6	8.4	サヌカイト	
11	185-11	4ATr	スクレイパー	-	45	23.5	9.5	9.9	サヌカイト	
12	185-12	C16n3	スクレイパー	-	47	28	5	4.9	サヌカイト	
13	185-13	4ATr	スクレイバー	-	19	19	5.7	2.3	黒色チャート	
14	186-1	3号墳	二次加工を有する剝片	-	67	41	16.6	20.5	サヌカイト	
15	186-2	C16n2	二次加工を有する剝片	-	55	29	12.7	20.2	黒色チャート	
16		C16n1	二次加工を有する剝片	-	15	34	7.7	8.9	サヌカイト	
17		4ATr	二次加工を有する剝片	-	28	23.5	7.2	4.3	サヌカイト	
18		4ATr	二次加工を有する剝片	-	23.5	14	3.2	1.1	サヌカイト	
19		C16n4	二次加工を有する剝片	-	17	35	5.5	3.5	砂岩	
20		4ATr	核	-	38	28	18.9	9.4	サヌカイト	
21		4ATr	微細剥離痕を有する剝片	打面側	34	26	6.5	6.9	サヌカイト	骨面削邊面に微細剥離痕
22		4ATr	微細剥離痕を有する剝片	末端側	32	36	7.2	12.1	サヌカイト	微細剥離面打面、撲滅切刃側に微細剥離痕
23		4ATr	微細剥離痕を有する剝片	側縁側	22	31	6.3	3.4	サヌカイト	自然面打面、背面末端部に微細剥離痕
24		4ATr	微細剥離痕を有する剝片	打面、側縁側	17	23	3.9	1.6	サヌカイト	背面打面側に微細剥離痕
25		C16n7	微細剥離痕を有する剝片	打面側	35	13	4.4	1.3	サヌカイト	骨面削邊面に微細剥離痕
26		6号墳尾辺	微細剥離痕を有する剝片	-	62	38.5	7	12.1	サヌカイト	自然面打面、撲滅切刃側に微細剥離痕
27		4ATr	微細剥離痕を有する剝片	打面、側縁側	23	30	7.1	4.2	サヌカイト	撲滅切刃側に微細剥離痕
28		C16n5	微細剥離痕を有する剝片	打面側	23	18	3.5	1.3	サヌカイト	撲滅切刃側に微細剥離痕
29		4ATr	微細剥離痕を有する剝片	打面、側縁側	22.5	18.5	3.2	1	サヌカイト	自然面打面側に微細剥離痕
30		4ATr	剝片	打面、側縁側	38	23	6.4	5.9	サヌカイト	末端側研磨
31		4ATr	剝片	打面、側縁側	28	28.5	7.4	6.8	サヌカイト	
32		4ATr	剝片	-	36	32	3.8	3	サヌカイト	條状打面
33		4ATr	剝片	打面、側縁側	30.5	20	7.8	5	サヌカイト	
34		4ATr	剝片	打面、末端側	29	22.5	4.2	サヌカイト		
35		C16n3	剝片	打面側	17.5	28	4	2.6	サヌカイト	
36		4号墳	剝片	打面、本端側	33	44	8.7	2.1	サヌカイト	
37		4ATr	剝片	打面側	50	63	15.9	10.5	サヌカイト	
38		4ATr	剝片	打面側	16	26	3.3	1	サヌカイト	
39		4ATr	剝片	-	17	12	1.1	1.5	サヌカイト	
40		4ATr	剝片	-	17	14	3.2	0.2	サヌカイト	
41		4ATr	剝片	-	16	15	6.5	0.6	サヌカイト	
42		3号墳尾辺	剝片	-	10	19	2.1	1.5	サヌカイト	
43		C16n4	剝片	-	7.5	18	2.2	0.3	サヌカイト	

## 2. 出土石器の帰属時期

### (1) 本遺跡出土の石鐵の形態分類

本遺跡で縄文時代中期末の北白川C式と考えられる縄文土器が出土しているが、原位置を遊離した資料であり、共伴関係は不明であることから石器の帰属時期を決定する根拠にはならない。そこで、石鐵の形態的特徴による型式学的研究を用いて、出土石器の帰属時期の推定をおこなうが、その前に、平面形、側縁の調整、基部の抉り、脚端部の形状などの特徴から、本遺跡の石鐵の形態分類を提示する。

A類 帽は長さよりも大きく、平面形はほぼ正三角形で、基部の抉りは逆V字形に仕上げられ、脚端部は直線状を呈し、基部がやや跳ね上がるもの(図185-1~2)。

B類 平面形は二等辺三角形で、脚端部の形状が片側は先鋒で内側にすばまるのに対し、一方は丸みをもつもの(図185-3、5)。

- C類 平面形は二等辺三角形で、脚端部の形状が直線状を呈するもの（図185-4）。
- D類 平面形は二等辺三角形で、基部の形状が左右非対称であるもの（図185-6）。
- E類 器体中央部に屈曲点を持ち、平面形が五角形状を呈するもの（図185-8）。
- F類 平面形は二等辺三角形で、側縁が鋸歯縁状に調整されているもの（図185-9）。

## （2）縄文時代早期～前期の石鐵との比較検討

本遺跡の石鐵のうち、A類～D類は基部の抉り、脚端部の特徴から、縄文時代早期～前期の石鐵に相対的に類似例が多いと考えられる。そこで、遺構を伴い、所属時期が比較的、明確な縄文時代早期～前期の遺跡から、形態的に類似する石鐵をとりあげ、土器編年にもとづき、大川式期、神宮寺式期、黄鳥式～条旗文土器群併行期、羽島下層式期～大歳山式期に分けたうえで、時期ごとに比較検討をおこなう。なお、大阪府下において遺構を伴う当時の遺跡の出土例が少ないことから、包含層出土の資料も用いるとともに近畿地方にまで比較対象を広げざるを得ない。また、縄文時代早期における石鐵の形態変遷に関しては、北村博義や久保勝正による研究がある（北村 1989、久保 1993）。

### 1) 大川式期（縄文時代早期前半 図187-1～9）

大川式期では、奈良県山添村大川遺跡、三重県松坂市鴻ノ木遺跡、飯南町足ヶ瀬遺跡の資料を扱う。

1～3は大川遺跡出土の石鐵であり、大川式期と考えられる住居跡2から出土している（松田ほか 1989）。1、2はロケット形石鐵とも呼ばれる小形で特異な五角形鐵（以下、五角形鐵）であり、3は脚端部が先鋭な石鐵である。

次に、鴻ノ木遺跡では85点の石鐵がみられ、そのうち、4～7は大川式期の煙道付炉穴（SF246）出土の石鐵である。4は五角形鐵であり、5～7は脚端部の形状が内側にすばまる点で共通している。

8、9は足ヶ瀬遺跡より採集された石鐵であり、五角形鐵（8）と脚端部の形状が内側にすばまる石鐵（9）が主体を占めている。本遺跡は縄文時代早期の大川式土器とそれに共伴すると考えられる石器を主体とする単純遺跡と位置付けられている（奥 1984）。

以上のことから、大川式期の石鐵と栗栖山遺跡の石鐵とはB類に類似する脚端部の形状が内側にすばまる石鐵以外、共通点は認められない。また、五角形鐵が出土していないことからも栗栖山遺跡の石鐵を大川式期に帰属させることはできない。

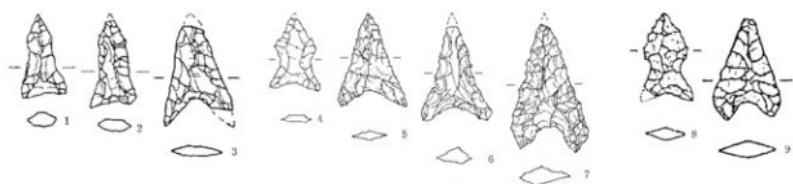
### 2) 神宮寺式期（縄文時代早期前半 図187-10～18）

神宮寺式期では、奈良県山添村大川遺跡、大阪府東大阪市神並遺跡の資料を扱う。

10～12は大川遺跡住居跡1出土の石鐵であり、住居跡1は時期の認定が難しいとしつつも、覆土中の土器から神宮寺式の段階に帰属するとされている（松田ほか 1989）。10は五角形鐵であり、11,12は脚端部が先鋭な石鐵である。栗栖山遺跡に類似する石鐵は認められない。

13～18は神並遺跡第12層出土の石鐵であり、神並遺跡は集石遺構を伴う神宮寺式系統の土器群を主体とする遺跡であるという（下村・橋本 1987）。基部の抉りが深く、逆V字形を呈するものや（13, 14）、基部がややはねあがるもの（15）が認められる。また、基部の抉りが浅く、脚端部が先鋭なもの（16）や脚端部の形状が先鋭で、やや内側にすばまるもの（17, 18）がある。栗栖山遺跡の石鐵と比較すると、15は分類上、A類に対応するが基部の形状が若干異なり、17, 18はB類にやや類似する。

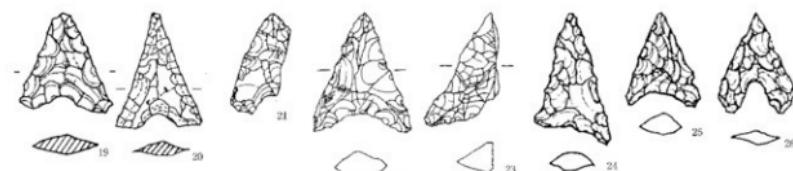
神宮寺式期の石鐵の特徴は、五角形鐵はほぼ消滅し、基部が鋭く尖り、抉りの大きい石鐵が主体を占めるにされる（北村 1989、久保 1993）。おそらく、13, 14が該当すると考えられ、栗栖山遺跡では出土しておらず、栗栖山遺跡の石鐵を神宮寺式期に帰属させえる可能性は極めて低いと考えられる。



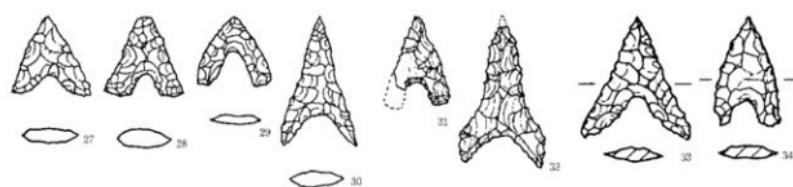
大川式（縄文時代早前半）

神宮寺式（縄文時代早前半）

黄島式～条痕文土器群併行期（縄文時代早期前半～後半）



黄島式～条痕文土器群併行期（縄文時代早期前半～後半）



黄島下層式期～大山山式（縄文時代前期）

0 5cm

## 図187 近畿地方における縄文時代早期～前期にかけての石器の形態変遷

## 3) 黄島式～条痕文土器群併行期（縄文時代早期前半～後半 図187-19～26）

黄島式～条痕文土器群併行期では奈良県大和市布留遺跡農井地区、平尾山遺跡、三重県度会町上ノ垣外遺跡、滋賀県米原町礎山城遺跡の資料を扱う。

19、20は布留遺跡農井地区出土の石鎌であり、高山寺式に伴うものだろうと考えられている。19は基部の形状がややはねあがり、20は脚端部の形状が直線状を呈する石鎌である。

21～23は礎山城遺跡出土の石鎌であり、21は1トレンチの高山寺式土器のみを含む6層から、22、23はAトレンチの高山寺式～石山式土器を含むV層から出土している。21、23は脚端部の形状が直線状を呈する石鎌であり、22は基部の形状が左右非対称の石鎌である。

24～26は上ノ垣外遺跡出土の石鎌であり、高山寺式～条痕文系土器が主体を占める遺跡であるとい

う。24、25は出土状況から、条痕文土器に伴うと考えられている。24、25は基部の形状が非対称の石鐵であり、26は脚端部の形状が内側にすぼまる石鐵である。

黄島式～条痕文土器群併行期の石鐵の特徴は、基部の形状がややはねあがる石鐵や脚端部が直線、斜めに断ち切られる形態で、基部の抉りが深い、いわゆる鉢形鐵の特徴をもつものが認められるとともに、基部の形状が非対称の石鐵が目立って存在するという（北村 1989、久保 1993）。また、栗柄山遺跡の石鐵と比較すると、19はA類に、26はB類に類似し、20、21、23はC類に、22、24、25はD類に対応する。以上のことから、当時期にはA類～D類がほぼ出揃っていると考えられる。

#### 4) 羽島下層II式期～大歳山式期（縄文時代前期 図170-27～34）

羽島下層II式期～大歳山式期では大阪府能勢町中筋遺跡、藤井寺市国府遺跡、京都府舞鶴市志高遺跡の資料を扱う。

27～30は志高遺跡出土の石鐵であり、石鐵は大半が北白川下層II式～大歳山式土器を含む第1層～第6層の範囲から出土している。27は基部の形状がややはねあがり、28は脚端部の形状が直線状を呈する石鐵である。29は基部の抉りが鐵身の半分以上あり、側縁が外渦状に調整されている。30は側縁が僅かにS字状を呈するように調整され、脚端部が先鋒になる石鐵である。栗柄山遺跡の石鐵と比較すると26はA類に、27はC類に対応する。

31～32は中筋遺跡出土の石鐵であり、北白川下層I式～III式土器を含む包含層から出土している。31は脚端部の形状がやや丸みをもち、32は側縁が緩やかなS字状を呈するように調整され、脚端部が先鋒な石鐵である。栗柄山遺跡の石鐵と比較すると、31はC類にやや類似する。

33～34は国府遺跡 SD 2 墓土出土の石鐵であり、羽島下層II式～北白川下層II式土器が出土して、出土層位から縄文前期に属する必然性が高いという（大野 1998）。33は基部の抉りが鐵身の半分近くまであり、脚端部が先鋒な石鐵である。34は脚端部の形状がやや丸みを呈している。

羽島下層II式期～大歳山式期の石鐵の特徴は、基部の抉りが相対的に大きくなり、幅広で左右対称が整い、側縁が緩やかな凸状を呈するものが多いという（北村 1989）。当時期の石鐵と栗柄山遺跡の石鐵を比較すると、A、C類が存在する点で共通性が認められる。

#### 3. 近畿地方における縄文時代早期～前期の石鐵の形態変遷

さて、以上の検討からここで縄文時代早期～前期における石鐵の形態変遷に関してまとめてみたい。まず、大川式期は五角形鐵が確実に伴うとともに、脚端部が内側にすぼまる石鐵もこの時期から出現しており、早期全般にわたり存在する。神宮寺式期になると、五角形鐵はほぼ消滅し、基部が鋭く尖るという点で齊一性が認められる。黄島式～条痕文土器群併行期では、脚端部が直線状を呈する石鐵、基部の形状が非対称の石鐵が新たに出現し、石鐵の形態が多様化すると考えられる。前者が押型文期末葉に、後者が条痕文系土器に共伴する傾向があるとの指摘もある（北村 1989）。この指摘に関しては後述する。羽島下層II式期～大歳山式期になると、基部の抉りが鐵身の半分以上になる石鐵や側縁が緩やかなS字状を呈するように調整された石鐵がさらに加わり、石鐵の形態がより一層、多様化する。一方、基部の形状が非対称な石鐵や脚端部が内側にすぼまる石鐵などはほぼ消滅すると考えられる。

次に A類～D類の石鐵が各時期においてどのように変遷するかをみていきたい。A、C類は黄島式期から出現し、前期にわたり組成すると考えられ、B類にやや類似する脚端部が内側にすぼまる石鐵は早期全般にわたり存在する。D類は黄島式～条痕文土器群併行期にのみ出現し、ほぼ条痕文系土器に共伴するという先の指摘は的確であるが、C類は押型文期末葉に限定せず、前期にわたり普遍的に存在す

ると考えられる。以上のことから、D類およびB類にやや類似する脚端部が内側にすばまる石鐵の所屬時期は早期には限定されると考えられる。

以上のことから、栗栖山遺跡の石鐵に関して帰属時期の推定をおこなうと、栗栖山遺跡の石鐵の大半は(A～D類)、ほぼ黃島式期～大歲山式期に帰属すると考えられる。さらに、帰属時期を限定できるか検討してみると、羽島下層II式期～大歲山式期にはA類、C類の石鐵は認められるが、両者は縄文時代早期から普遍的に存在するとともに、縄文時代前期になって出現する基部の抉りが鐵身の半分以上の石鐵や側縁が緩やかなS字状を呈するように調整された石鐵などが認められないことから、当時に帰属させることはできないと考えられる。ゆえに、栗栖山遺跡の石鐵の大半を黃島式期～条痕文土器群併行期の時期の所産であると結論づけたい。もちろん、出土状況から他の時期のものも混在しており、F類は側縁の形状から、縄文時代中期以降のものであると考えられる。

今回、栗栖山遺跡の出土石器の検討に際し、石器群として認識したうえでの比較検討がおこなえず、時期的に限定しやすい石鐵のみしか扱えなかった。また、時期的限定に主眼を置いたため、空間的側面に関する検討がおこなえなかったが、このことは、所属時期が明確な石器群を比較資料として用いたことが原因である。つまり、時期的に限定された土器と共に石器をとりあげ、土器編年に基づき石器群の序列化を試みた次第である。しかし、報告書において、石器の場合、遺構内での出土状況が不明確な場合や出土位置が記載されていないことから、比較資料が制限されたことは否定できない。今後、報告書において石器に関する基礎的データの充実や混在資料と考えられる石器においても積極的に評価していくことが重要である。そのことにより、縄文時代以降の石器編年研究が促進され、石器のみしか出土していない遺跡においても時期的限定ができるようになると考えられる。そして、さらに、石器群の地域色や原産地が特定できる遠隔地石材に基づき、一定の時期ごとの縄文時代における石材の流通の様相から他地域との交流の実態などを解明できると考えられるが、このことは今後の課題としたい。

本稿を執筆するにあたり、泉 拓良先生をはじめ、和泉大樹、岡田恵一、岡野由美、鈴木康二、田部謙士、中川和哉、森川 実の各氏に有益なご教示を賜った。末筆ながら記して感謝の意を表します。

(伊藤栄二)

#### 引用文献

- 天野未喜 1998「第二節 石器」『国府遺跡』 藤井寺市教育委員会  
奥 義次 1984「足ヶ瀬遺跡」『飯南町史』 飯南町史編さん委員会  
北村博義 1989「4. 平尾山遺跡出土の石鐵について」『平尾山遺跡発掘調査報告』 埼玉文化財天理教調査団  
久保勝正 1992「縄文時代早期における石鐵形態とその変遷－三重県を中心に－」『斎宮歴史博物館研究紀要二』 斎宮歴史博物館  
下村博文・橋本正幸 1987「(2)石器」『神並遺跡II』 東大阪市教育委員会  
中川和哉 1986「第2項 石器」『磯山城遺跡－琵琶湖辺縄文早期～晚期遺跡の調査－』 米原町教育委員会  
長谷川達 1989「第4項 石器・石製品」『志高遺跡』 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
埼玉文化財天理教調査団 1988「奈良貝天理市布留遺跡縄文時代早期の調査」  
松田真一ほか 1989「大川遺跡」山添村教育委員会  
三重県埋蔵文化財センター 1998「鴻ノ木遺跡 (下層編)」  
渡辺昌宏 1981「第4節 石器」『中筋遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会  
度会町遺跡調査会 1991「上ノ垣外遺跡発掘調査概報」

## 第8章 自然科学的分析

### 第1節 自然科学的分析の概要

栗柄山南墳墓群に関しての自然科学的分析は、主に、中近世墓から出土した遺物について行われたものと、各墓から出土した遺物が僅少であり時期決定が困難であったために遺構から時期が推定できないかと行ったものがある。

前者では、人骨・炭化材の鑑定、漆製品・赤色顔料の成分分析、鉄釘のさびについての分析が行われる。後者では、炭のC<sup>14</sup>年代測定および焼土の考古地磁気測定が行われた。

特に、人骨の鑑定は、土葬のものは1片も残存しておらず、火葬されたもののみの出土である。しかもそのために変形していたことと、本文でも記述したように拾骨が行われていることから、全ての人骨が残存していたわけではなく、また土中に埋もれていたことから碎片になっていたものが多量にあったにもかかわらず、多人数の時間を割いていただき、出土した全てを鑑定して顶いた。

後節で詳細が記述されているが、ほとんどのものが性別および年齢が特定できないものであったにもかかわらず、子供や老人の人骨が出土していることが判明した。

また、特筆すべき結果としては、1基の火葬墓に明らかに別の人骨を検出した火葬墓が2基（68号墓・420号墓）あったことが判明した。

当初、人骨に関しては、墓群を考える上で、DNA鑑定ができないものかと検討したが、人骨の検出・取り上げ時点で人が触ってしまったために不可能であることが判った。今後の検討課題であろうと考えられる。

炭化材の鑑定は、17点と少数であったが残存状況のよいもので行い、落葉樹や松・ヤブツバキといった樹種であることが判った。ほとんどのものが、丸太材であったことから、荼毘時の燃料として用いられたものと考えられる。

漆製品・赤色顔料の成分分析では、漆製品のいずれのものも、布に漆を塗布したものであることが判った。また、碎片で出土したものに、内面が赤色で外側が黒色漆で金泥が施されていたものが出土しており、分析から、その赤色顔料が朱であることが判明している。

特に、鳥帽子については、平織の絹に漆を塗布しており、その保存方法の詳細も記述されている。

さらに、鳥帽子については、出土状況のレプリカも作成されている。

鉄釘のさびに関しては、土葬墓から出土した鉄釘のさびの付着状況が顕著で、火葬場出土のものにさびがほとんど見られないことから防食性に関する検討がなされている。

なお、遺物の出土量がわずかで遺構から時期を推定するために行なった炭のC<sup>14</sup>年代測定では、5号墳の石室に堆積した炭層と古代の焼土坑4の炭層の分析を行っている。さらに、火葬墓および焼土坑の3基の焼土壁の考古地磁気測定による年代測定をも行っている。

いずれにしても、分析資料が少數のために全体を把握することが困難であるが、遺構・遺物等の総合的判断からすると、当墳墓群の変遷を追う上での定点観測の一助を担っているものと理解される。

## 第2節 栗栖山南墳墓群出土炭屑のC<sup>14</sup>年代測定

地質地球科学研究所

### 1. はじめに

栗栖山南墳墓群から検出された、以下の遺構出土の炭屑についてC<sup>14</sup>による年代測定を行った。

- ・5号墳の石室埋土である3層
- ・古代と思われる焼土坑4の埋土である3層

### 2. 測定方法

#### 1). 測定方法

- ・A M S : 加速器質量分析
- ・Radiometric : 液体シンシレーションカウンターによるβ線計測法

#### 2). 処理・調整・その他

- ・前処理 acid/alkali/acid (酸／アルカリ／酸洗浄)

最初に蒸留水中で試料を丁寧に細かく粉碎する。次にHClにより炭酸塩を除去した後、NaOHにより二次的に混入した有機酸を除去する。さらに、為HClで洗浄し、最後にアルカリによって中和する。洗浄の回数、時間、温度、薬品の濃度などは試料により異なる。

- ・調整、その他 charred material

#### 3). 分析機関 : BETA ANALYTIC INC.

4985 SW74Court, Miami, FL.33155, U. S. A.

### 3. 測定結果

- ・5号墳の石室埋土である3層

### 補足

試料データ	C <sup>14</sup> 年代 (y B P)	δ <sup>13</sup> C (permil)	補正C <sup>14</sup> 年代 (y B P)
Beta-134483	1220±60	-26.1	1210±60
・古代と思われる焼土坑4の埋土である3層			
試料データ	C <sup>14</sup> 年代 (y B P)	δ <sup>13</sup> C (permil)	補正C <sup>14</sup> 年代 (y B P)
Beta-134484	1850±80	-26.8	1820±80

C<sup>14</sup>年代 (y B P) : 試料のC<sup>14</sup>と標準試料のC<sup>14</sup>の比からリビーの半減期5568年を用い、1950年から何年前かを計算した年代値

δ<sup>13</sup>C (permil) : 試料の個体差によるC<sup>14</sup>の取り込み方の違いのために起こる年代のずれを補正するために測定した炭素安定同位体<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比。標準物質の同位体比からのパーセントで表記する。

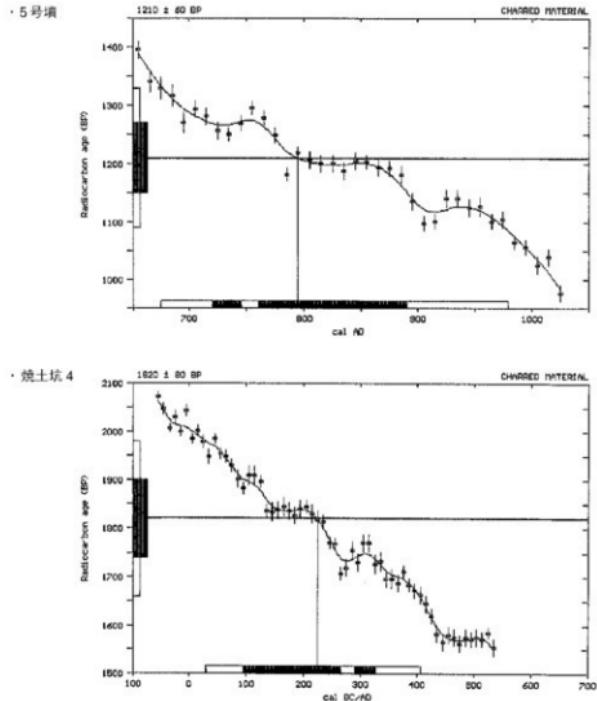
$$\delta^{13}\text{C} (0\%) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{試料}} - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{標準}}}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{標準}}} \times 1000$$

ここで (^<sup>13</sup>C/^<sup>12</sup>C) [標準] = 0.0112372である。

補正C<sup>14</sup>年代 (y B P) : 試料の<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cから同位体分別を計算し、C<sup>14</sup>年代 (y B P)に補正值を加えた上で算出した年代。

暦年代 : C<sup>14</sup>年代は、スタンダードのC<sup>14</sup>濃度と、試料がCO<sub>2</sub>の供給を絶たれた時のC<sup>14</sup>

濃度が同じであるということを条件に計算していきます。ところが実際には、銀河宇宙線の強度変化、地球磁場の変動、太陽活動の変動、水圏からのCO<sub>2</sub>供給量の供給、核実験の影響などにより、それらのC<sup>14</sup>濃度に違いが生じるため、C<sup>14</sup>年代と曆年代の間にずれが生じます。これを補正するために年代の判っている木年輪のC<sup>14</sup>年代測定(約10000y BPまで)、サンゴの年代測定とウラン-トリウム年代の比較(約10000y BPから約19000y BP)により作られた補正曲線が用いられます。



#### References :

*Calibration Database*

*Editorial Comment*

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al, 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

*Mathematics*

*A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates*

Talma, A.S., Vogel, J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

図188 C<sup>14</sup>年代の補正曲線図

### 第3節 栗栖山南墳墓群より採取した焼土資料の考古地磁気測定

花園大学 自然科学研究室

前中一晃・尾上 忍

#### 1. はじめに

今回、大阪府文化財調査研究センターの依頼を受けて、茨木市栗栖山南墳墓群より採取された焼土試料について、栗栖山砦の窯跡から採取された焼土試料と同様な手順を踏んでその焼成時期の測定を行つたので、その結果を報告する。

考古地磁気で年代測定が可能となるのは、地球磁場の方向と強度とが時間と共に変化(経年変化)する量であり、窯跡などの焼土は、それが高温の状態から冷却してきたときの地球磁場の方向や強度を化石化して保存しているからである。過去の地磁気強度の情報は、手間隙はかかるが壺や煉瓦の破片からでも引き出すことができる。それに対して地磁気方向の情報は窯や炉本体から直接採取された焼土からしか得ることができない。地磁気永年変化曲線との対比から受熱時の年代を割り出すとき、いかにして信頼度の高い地磁気化石を取り出すかが問題となる。

#### 2. 試料の測定手順

考古地磁気測定を行った試料は栗栖山南墳墓群より採取された焼土である。試料(サンプル)は3カ所の遺構から(33号墓、69号墓、焼土坑2)のそれぞれより平均10個、総計39個に定方位をつけて採取されている。

採取された試料からは、まず残留磁化方向測定用に3.3cm立法の大きさのサンプルが切りだされ、余裕があれば帶磁率および残留磁化強度測定用に2.5cm立法の大きさの複数個の小試料(スペシメン)が切りだされている。以下に帶磁率、残留磁化強度、残留磁化方向測定の手順について述べ、各遺構毎にその測定結果について述べる。

#### 3. 帯磁率の測定

帯磁率は地球磁場程度の弱い磁場によって誘導される磁化率であり、火を使用した炉跡や窯跡では帯磁率が強くなることが知られており、その測定は火氣を受けた遺構を検知するのに有力な方法となる。英國の Bartington 社によって高感度な帯磁率計が製品化されて測定が簡単になっている。帯磁率測定用に切りだした小型スペシメンについて、帯磁率の強さ( $R_c$ )を「帯磁率計」を使って測定するとともに、「残留磁化測定装置」を使って残留磁化の強さ( $J_n$ )を測定し、その相対比( $J_n/R_c$ )の値を計算によって求めていた。

その関係が表19にまとめてある。

一般に土壤の磁気的性質は受熱の過程で変化する火を使用した頻度、使用後の環境変化や時間経過、土壤の種類によって、現れる磁気的性質の差はまちまちであるが、定性的には焼かれた土壤は焼かれてなかった土壤の種類によってより大きな強度の、そしてより安定な残留磁気を持つことが示されている(森田他1989)。

表19 栗栖山南墳墓群焼土試料の帯磁率・  
残留磁化の強さ・その相対比

試料番号	$R_c$ (帯磁率 $\times 10^{-6}$ cgs)	$J_n$ (NRM 強度 $\times 10^{-5}$ emu)	$J_n/R_c$
焼土坑2-1a	126.85	62.08	0.49
1b	129.8	65.43	0.50
-3a	106.5	59.14	0.56
4a	78.3	16.92	0.22
4b	77.7	17.41	0.22
4c	81.55	19.63	0.24
4d	99.25	37.62	0.38
-7a	65.35	25.03	0.38
7b	80.1	15.45	0.19
-10a	129.25	25.41	0.20
10b	113.3	24.04	0.21
10c	98.95	25.29	0.26

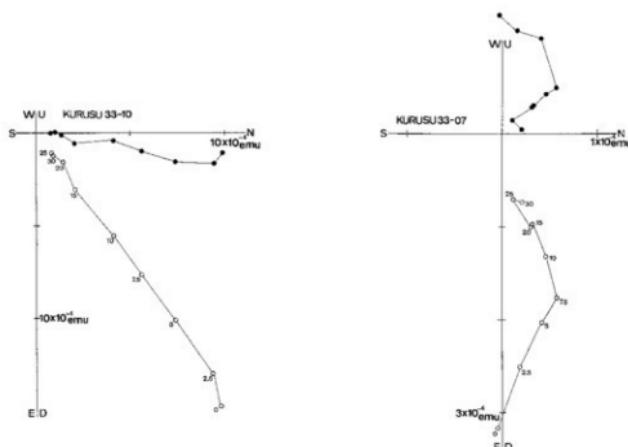


図189 33号墓の試料の交流消磁直交消磁図

#### 4. 残留磁気測定結果

試料の残留磁化の測定は手始めに「残留磁化測定装置」を使って各スペシメンの自然残留磁化（NRM）が測定されたがこの段階できちんとした磁化をもっていないことが判明した試料は棄却し、以下の作業を停止することになる。

次いで「交流消磁装置」を使って、遺構が最後に焼成を受けて後二次的に付着した二次磁化が除去され、試料が焼成時に獲得した初生磁化を分離した。交流消磁による初生磁化の分離がうまく働いているかどうかは後述する直交消磁図で確かめた。

分離された初生磁化方向の平均値の計算は、Fisher(1959)の統計法によって求められており、平均の方向より10度以上離れている試料は順次取り除いて平均値を再度計算するという作業を通して最終の残留磁化方向測定を決定した。

#### 5. 残留磁化方向測定の結果

##### 33号墓

33号墓の試料の交流消磁の結果は表19(a)および(b)に示すようになる。(a)に示す試料の消磁は別項の柴柄山空跡1の試料のようなきれいな一直線にはのらないが、それでも2.5mT以降の消磁で原点に向かう直線成分ができる、2.5mTで消磁した後の方向を初生磁化の方向とした。それに対して(b)は7.5mTで消磁した後の方向を同様に初生磁化の方向とした。(b)のタイプの試料は、06および07の二つである。他に04の試料はきちんと直線成分を得ることができなかったので、データとしては採用していない。さらに平均値の計算をしたとき、06および07の二つのデータは平均の方向から遠く離れるので最終的には信頼のおける値が得られなかったとして除去した。04、06、07を除く残り7つの平均値の計算の結果は第2表に示すとおりである。ちなみに信頼のおけるデータとして採用されなかった試料はNRM強度も他の試料に比べて半分以下の強さできちんとした磁化を獲得していなかったと判断される。

表20 33号墓の試料の残留磁化測定結果

スペシメン 番 号	NRM 強度 ( $\times 10^{-5}$ emu/g)	交流消磁前の磁化方向		交流消磁後の磁化方向	
		偏角 (° E)	伏角 (° )	偏角 (° E)	伏角 (° )
KURUSU33-01	2.0	34.2	54.0	24.8	55.7
02	1.8	36.4	49.2	27.9	54.0
-03	1.5	35.1	53.3	30.7	52.1
-04 *	0.74	4.6	67.2	--	--
-05	3.5	4.2	52.6	12.3	54.8
-06 *	0.82	6.7	51.6	14.0	38.8
-07 *	0.61	-91.9	68.6	-41.8	66.0
-08	1.7	19.4	44.2	-11.7	47.3
-09	3.9	-5.0	49.0	-1.7	50.1
-10	2.7	6.3	55.9	9.2	53.7
平 均 N = 7		16.7 ± 8.3	53.4 ± 8.3	16.5 ± 6.9	51.8 ± 6.9

## 69号墓

69号墓の試料の交流消磁の結果は02および08の試料が直交消磁図上で直線成分が得られず、初生磁化を分離できなかった。他の試料は原点に向かう直線成分が得られた。試料によって初生磁化の分離された消磁磁場強度が異なるが、一応表21に示すような結果が得られた。平均値の計算の過程で一つとびぬけて磁化方向の大きな違いを示す04のデータも除外した残りの7つの平均の磁化方向は最下段に示すとおりである。33号墓では磁化の安定性がよく消磁前後の磁化方向に大きな違いを見せなかつたが、69号墓の試料は消磁前後の磁化方向に大きな違いを見せた。消磁後の磁化方向のまとまりが消磁前に比べて極めてよくなつたことから消磁は有効に働いたと判断される。

## 焼土坑 2

表21 69号墓の試料の残留磁化測定結果

スペシメン 番 号	NRM 強度 ( $\times 10^{-5}$ emu/g)	交流消磁前の磁化方向		交流消磁後の磁化方向	
		偏角 (° E)	伏角 (° )	偏角 (° E)	伏角 (° )
KURUSU89-01	4.9	16.5	60.1	14.0	55.8
02 *	2.0	-100.5	69.5	--	--
-03	5.4	- 1.2	52.6	7.4	48.2
-04 *	1.9	- 20.0	32.6	-16.6	28.9
-05	1.8	12.1	64.2	4.5	51.9
-06	6.3	2.5	52.8	5.9	51.0
-07	1.7	13.2	37.7	5.7	40.8
-08 *	1.7	- 16.8	54.4	--	--
-09	2.5	- 13.2	51.9	2.6	53.4
-10	1.9	- 21.7	49.1	- 4.4	52.3
平 均 N = 7		0.6 ± 9.1	53.4 ± 9.1	5.1 ± 4.4	50.6 ± 4.4

表22 焼土坑2の試料の残留磁化測定結果

スペシメン 番号	NRM強度 ( $\times 10^{-5}$ emu/g)	交流消磁前の磁化方向		交流消磁後の磁化方向	
		偏角 (° E)	伏角 (° )	偏角 (° E)	伏角 (° )
KURUSU1096-01	5.2	19.9	49.3	14.4	53.2
-02	6.4	-23.6	51.9	-16.5	54.2
-03	13	-16.5	55.3	-12.4	55.7
-04	2.2	6.2	44.4	6.3	50.4
-05	6.2	4.5	49.3	2.1	51.3
-06	2.2	-2.4	50.6	0.2	51.0
-07	1.4	4.8	36.1	2.2	46.8
-08	1.5	16.8	50.6	9.9	53.3
-10	1.9	12.4	57.4	0.6	60.0
平均 N=9		-1.6±7.1	50.2±7.1	-2.2±4.3	53.2±4.3

焼土坑2の試料は07の試料のみが5mTの消磁で、他は2.5mTの消磁で原点に向かう直線成分を得ることができた。結果は表22に示すとおりである。

## 6. 考察

交流消磁によって二次磁化を除去し、分離された初生磁化方向の結果を改めて示すと下記のとおりとなる。

遺構名	測定出来た試料数	平均の偏角値	平均の俯角値	95%信頼角
33号墓	7個	東偏16.5°	51.8°	6.9°
69号墓	7個	東偏 5.1°	50.6°	4.4°
焼土坑2	9個	西偏 2.2°	53.2°	4.3°

試料の最終はクリノコンパスを使用しておこなわれたものであるので、得られた偏角値は磁北に対するものとなっている。従って真北からの偏角値を求めるためには試料採取地の地磁気偏角値(-6.7°)で補正する必要がある。補正後の値は以下のようになる。

遺構名	測定出来た試料数	平均の偏角値	平均の俯角値	95%信頼角
33号墓	7個	東偏 9.8°	51.8°	6.9°
69号墓	7個	東偏 1.6°	50.6°	4.4°
焼土坑2	9個	西偏 8.9°	53.2°	4.3°

表23は、現在までに西日本各地の考古地磁気測定から得られた過去二千年にわたる考古地磁気永年変化曲線(前中、1997)作成の基礎試料で、今回の測定値を順次当てはめて走査してみると以下のようになる。

### 33号墓

偏角が(9.8±6.9°)、俯角が(51.8±6.9°)という値を示す年代を走査していく。栗栖山砦跡窯1の試料の様には信頼度の高いデータを取り出すことが出来なかつたが、偏角が10°近い東偏を示すことからA.D.1275年以降の若い年代であることが予想されるが、俯角の値も考慮して最適年代を割り出すとA.D.1350年となる。

表23 西南日本の永年変化曲線作成基礎資料

Median Number of						Median Number of					
Age(AD)	Sites	Dec(^E)	Inc(^)	$\alpha_{es}$	K	Age(AD)	Sites	Dec(^E)	Inc(^)	$\alpha_{es}$	K
25	4	5.6	40.6	9.6	93	950	5	-16.1	46.1	5.3	210
50	2	-15.4	55.5	23.9	112	75	6	-16.2	53.3	4.3	242
75	2	-15.4	55.5	23.9	112	1000	7	-15.2	53.3	3.9	236
100	2	8.0	46.5	41.3	39	25	4	-11.7	50.9	5.5	282
25	2	-1.1	48.9	18.0	195	50	3	-14.3	48.6	4.2	861
50	3	7.1	60.8	13.7	83	75	8	-5.0	52.2	3.5	258
75	2	9.6	65.2	17.4	209	1100	13	-3.1	53.5	2.1	394
200	2	5.3	62.0	9.2	742	25	6	-2.2	54.4	2.8	592
25	2	5.3	62.0	9.2	742	50	6	-1.8	59.1	4.1	268
50	6	8.3	51.6	5.6	143	75	15	0.1	59.1	2.0	377
75	6	8.3	51.6	5.6	143	1200	17	0.8	58.9	1.7	466
300	1	9.1	58.3	.....	.....	25	15	1.7	57.8	1.9	411
25	3	4.8	49.2	25.8	24	50	9	3.5	57.3	2.2	525
50	3	3.9	48.7	25.8	24	75	7	9.6	58.3	3.9	241
75	1	-11.7	56.4	.....	.....	1300	9	7.9	60.3	3.7	196
400	1	-7.1	47.7	.....	.....	25	8	8.9	58.5	4.5	150
25	10	-7.2	45.2	3.2	233	50	9	8.2	54.9	2.6	398
50	39	-5.6	46.1	1.8	171	75	7	5.5	55.8	3.4	317
75	54	-6.0	47.8	1.5	169	1400	7	1.0	53.6	3.8	250
500	29	-8.9	49.8	1.7	257	25	6	1.2	52.8	4.2	256
25	20	-11.3	47.5	2.0	266	50	1	2.9	40.6	.....	.....
50	29	-9.1	46.9	1.8	230	75	1	2.9	40.6	.....	.....
75	35	-11.7	53.2	1.7	197	1500	1	6.0	42.4	.....	.....
600	38	-16.9	56.0	1.5	232	25	3	6.4	43.4	1.4	7264
25	27	-12.7	59.7	1.9	211	50	6	8.9	39.9	5.2	165
50	22	-12.8	59.4	2.1	218	75	5	9.3	38.8	6.1	160
75	21	-13.6	58.6	2.1	220	1600	4	5.8	39.3	4.7	391
700	21	-9.4	56.6	2.0	250	25	5	4.5	38.8	3.4	494
25	14	-9.2	55.7	2.4	268	50	10	4.1	40.0	2.5	380
50	48	-9.2	54.7	1.3	245	75	12	4.9	40.4	2.3	351
75	55	-9.8	53.2	1.3	217	1700	9	5.1	41.5	2.1	611
800	14	-14.2	48.3	1.8	422	25	6	4.2	41.8	2.0	1136
25	10	-13.4	49.8	2.4	342	50	2	2.1	37.1	19.7	163
50	11	-13.5	49.9	2.7	281	75	2	1.5	37.7	22.2	129
75	4	-15.3	51.7	5.4	294	1800	1	1.6	42.7	.....	.....
900	3	-9.8	48.8	10.2	148	25	..	...	.....	.....	.....
25	7	-13.1	46.2	4.3	197	50	4	-1.3	45.3	3.2	829

## 69号墓

同じく偏角が $(-1.6^{\circ} \pm 4.4^{\circ})$ 、俯角が $(50.6^{\circ} \pm 4.4^{\circ})$ という値を示す年代を走査していく。偏角が $0^{\circ}$ に近いことから A.D.1075年～A.D.1250年、あるいは A.D.1400年～A.D.1475年というところが候補に上がる。俯角の値の大きすぎるところ、小さすぎるところを除外すると最的確な年代としては、A.D.1400年～A.D.1425年というところが求められる。

## 焼土坑 2

同様に偏角が $(-8.9^{\circ} \pm 4.3^{\circ})$ 、俯角が $(53.2^{\circ} \pm 4.3^{\circ})$ という値を示す年代を走査していく。偏角が西偏 $10^{\circ}$ に近い値を示すところ、俯角値が $53^{\circ}$ 前後になる年代を拾い上げていくと、前三者の様には、ある程度限定された年代に絞り込むことができず、A.D.500年～A.D.1150年と幅広い年代が対応することになる。偏角値に商店を合わせると A.D.700年～A.D.775年、俯角値に魚点を合わせると A.D.975年～A.D.1125年となる。このサイトから採取された試料については地磁気方向からだけではなく、テリエー法 (Thellier & Thellier, 1959) による地磁気強度の推定が行われることが望まれる。

## 参考文献

- Fisher, R. A. (1953): Dispersion on a sphere. Proceed. Roy. Soc. London, A217, 295-305.  
前中一晃 (1977) : 考古地磁気永年変化曲線の作成、古文化論叢、65-71.  
Thellier, E. and O. Thellier (1959) : Sur I, Intensité de Champ Magnétique Terrestre dans le Passe Historique. Ann. Geophys., 15, 285-376.  
Zijderveld, J. D. A. (1967) : A. C. Demagnetization of Rocks: Analysis of results. in Methods in Paleomagnetism, edited by D. W. Collinson et al., Elsevier.

#### 第4節 栗柄山南墳墓群出土の火葬人骨について

安部みき子

翌西山南墳墓群の14~16世紀の火葬墓および火葬場から出土した人骨は、すべて火葬されていた。

出土した人骨は火葬時における骨の変形や収縮が著しいうえに、碎片で出土しているもののが多かったため、完全に復元できたものではなく、性が確定出来た固体はなかった。年齢の推定は、頭骨片と長骨片の緻密室脛が厚いものを成人、緻密質が薄いものや骨片数が少ないものを不明とした。成人としたなかには、頭骨の縫合が癒合しているもの、縫合線が消えかかっているもの、椎骨の椎体の上縁や下縁に加令による骨増殖が見られるものを熟年以上(40歳以上)とした。年齢を不明としたなかには、頭骨などの骨質の厚さが非常に薄いものから成人よりやや薄いと思われるものまで含まれており、これらは若い(思春期)と子供(幼小児期)と思われる。出土した人骨の年齢は、墓の形態にかかわらず、子供から熟年までの幅が広い。しかし、年齢が特定できた個体は出土骨全体の数パーセントのため、墓制に伴う性や年齢のかなりなどを検討することは出来なかった。

人骨が複数個体出土している炭盛上があり、年齢も子供から老年のものまで出土し、共同の火葬場であったとおもわれる。また、69号墓の藏骨器からは大きな骨なる軸椎(第2頸椎)が2片出土しているほか、成人の長骨片とともに小さな鎖骨も出土しているので、少なくとも2体は合葬されていたと思われる。

同定できた部位のなかで最も多く出土したものは、側頭骨の錐体部と大脛骨骨幹片が最も多いかった。これらの骨は骨質が頑丈であり、比較的の残存しやすい部位である。

概なが、人体の骨骼部位に関する理解していただくために、図190、191に名称を図示している。

## 人骨における発達段階と年齢区分

### 胎 兽 (出生前)

新生児（1ヶ月未満） ほぼ1歳刻みで

乳児(1歳未満) 年齢推定が可能

### 幼兒（1~5歲）

### 小 兒 (6~15歲)

成 人——— およびその推定のみ

成人 20歳前後（16~20歳）

壮年 40歳未満 (20~39歳)

熟年 60歳未満 (40~59歳)

老年 60歳以上

馬場松男編 1998「考古学と人類学」「考古学と自然科学」1 同成社

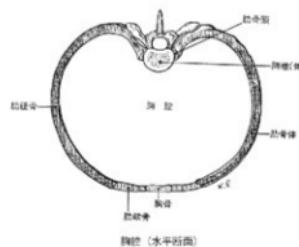
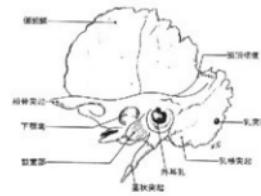
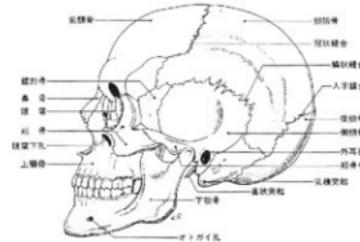
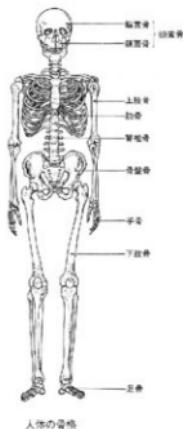
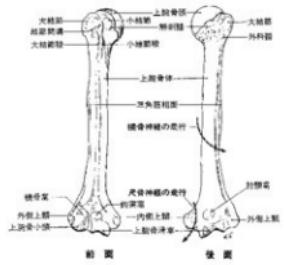
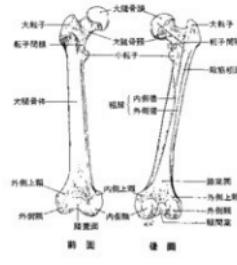


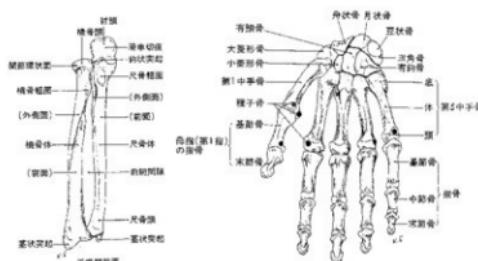
図190 人体の骨格部位名称(1)



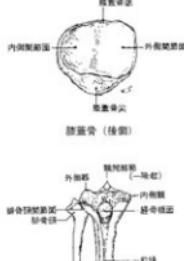
上胸骨（右侧）



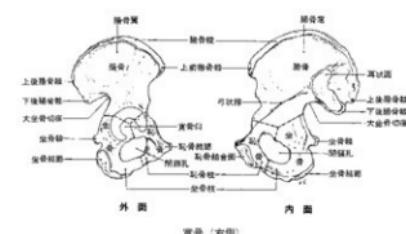
大腿骨(右侧)



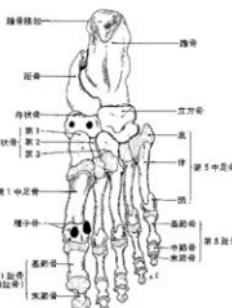
前脚骨（右侧背面）



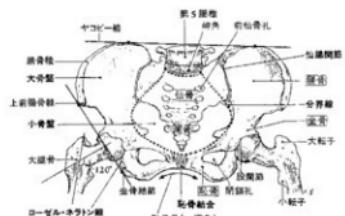
手の骨（右手掌面）



寬骨《右側》



### 足の骨（右、足底部）



骨盤のなりたち（前上面より見る）

図191 人体の骨格部位名称(2)



表25 栗柄山南墳墓群出土人骨一覧表(2)

遺構名	局名	墓番(式)	年齢・個体数	出土部位	備考
164号墓	墓壙内	5	不明	頭骨片・長骨片・その他	
167号墓	墓壙内	66	不明	長骨片・その他	
170号墓	墓壙内	14	不明(子供?)	頭骨片・長骨片	骨が薄い
173号墓	墓壙内	185	成人	右鎖骨(全体の内耳孔周辺)・頭骨片・肋骨片・右尺骨(尺骨粗隆)・右肩骨(鈎)・中足骨(舟骨)・長骨片・その他	
177号墓	墓壙内	34	不明	頭骨片・長骨片・その他	
179号墓	墓壙内	70	不明	長骨片・その他	
181号墓	墓壙内	47	不明	長骨片・その他	
184号墓	墓壙内	4	不明	長骨片・その他	
186号墓	墓壙内	83	不明	頭骨・長骨片・その他	
189号墓	墓壙内	62	不明	長骨片	
192号墓	石組上面	1	不明	長骨片	
192号墓	墓壙内	157	不明	長骨片・その他	
195号墓	墓壙内	13	不明	長骨片・その他	
197号墓	墓壙内	27	不明	距骨(距骨複合の一部)・長骨片	
213号墓	墓壙内	126	不明	頭骨片・長骨片・その他	
219号墓	墓壙内	14	不明	長骨片・その他	骨が薄い
221号墓	墓壙内	12	不明	長骨片	
223号墓	墓壙内	87	不明(子供?)	左尺骨(下腕屈)・頭骨片・大脛骨(骨頭)・長骨片	骨が薄い
225号墓	墓壙内	5	不明	長骨片	
237号墓	墓壙内	33	成人	左鎖骨骨(全体の内耳孔周辺)・頭骨片・尺骨 or 長骨(骨幹約1cm)・長骨片・その他	
242号墓	石組上面	27	不明(老い?)	長骨片	長骨の骨質が薄い
245号墓	墓壙内	11	不明	長骨片・その他	右足と膝蓋は同一?
245号墓	墓壙内	6	不明	長骨片	
249号墓	墓壙内	107	不明	左内耳骨(全体の内耳孔周辺)・頭骨片・長骨片	
251号墓	墓壙内	128	成人(性別不明?)	軽骨(腰骨突起)・頭骨片・長骨片	結合の内側面の膜が溶解
252号墓	墓壙内	74	不明(子供?)	頭骨片・腰骨(前弓歯突起周辺)・肋骨片・手の中掌骨片・其骨片・その他	骨が薄い
258号墓	墓壙内	166	不明	頭骨片・長骨片・その他の骨	
262号墓	墓壙内	7	不明	長骨片	
265号墓	墓壙内	1	不明	骨片	
267号墓	石組内	101	不明	長骨片	
285号墓	墓壙内	9	不明	骨盤片	
286号墓	墓壙内	32	不明	長骨片	骨が薄い
287号墓	墓壙内	110	成人	頭骨片・長骨片	
288号墓	墓壙内	205	成人	頭骨片・右上腕骨(骨幹中央から約10cm)・左尺骨(尺骨屈面)・腰骨(骨幹前約10cm)・長骨片・その他	
289号墓	墓壙内	74	不明	頭骨片・その他の骨	骨が薄い
292号墓	藏骨室内	134	成人(老年以上)	左尺骨・腰骨下端部(切迫第一・第二臼歯の箇所のみ残存)・頭骨片・腰椎(骨幹部)・右上腕骨(骨幹屈面)・左尺骨(骨幹屈面)・左腕骨(骨幹部)・左中足骨(舟骨)・足の小節骨片・手舟骨(中掌骨片)・腰骨(腰骨)・その他の骨	腰椎骨に付着感あり
296号墓	墓壙内	116	不明	右上腕骨(門診跡基部)・長骨(骨頭)・長骨片・その他	
297号墓	墓壙内	35	不明	長骨片・その他	
300号墓	墓壙内	39	不明	頭骨片・その他	
306号墓	藏骨室内	5	不明(子供?)	頭骨片・その他	骨が薄い
308号墓	墓壙上面	13	不明	長骨片	
309号墓	墓壙内	60	不明	頭骨片・長骨片	
327号墓	墓壙内	21	不明	長骨片	
312号墓	墓壙内	64	成人?	長骨片・その他	
314号墓	墓壙内	172	不明	長骨片・その他の骨	
319号墓	腰骨室内	106	不明	右鎖骨(腰骨の内耳孔周辺)・頭骨片・上腕骨(骨幹約5cm)・長骨片・その他	
320号墓	墓壙内	68	不明	頭骨片・腰骨片・その他	
321号墓	墓壙内	17	不明(子供?)	頭骨片・その他	骨が薄い
322号墓	藏骨室内	107	不明	頭骨片・腰骨片・その他	骨が薄い
323号墓	墓壙内	141	子供?	右鎖骨(乳様突起)・左鎖骨(脛骨次節基部)・左腕骨(頭骨)・頭骨片(下顎骨の内耳孔)・おとがい(鎖骨)・頭骨片・腰骨(前)・頭突起(高さ約2cm)・腰骨片・腰骨(腰骨)・その他の骨	
327号墓	島須上層	22	不明	長骨片・その他	骨が薄い
328号墓	墓壙内	56	不明(子供?)	右鎖骨(腰骨の内耳孔周辺)・頭骨片・長骨片・その他	骨が薄い
330号墓	墓壙内	29	不明	長骨片	
331号墓	墓壙内	13	不明	頭骨片	骨が薄い
332号墓	墓壙内	308	成人	腰骨(腰骨屈面の下部約5cm)・長骨片	
333号墓	墓壙内	1	不明	長骨片	
334号墓	墓壙内	254	成人	腰骨(腰骨約4cm)・大脛骨(骨幹)・胫骨片(骨幹約11cm)・長骨片	骨が薄い
338号墓	石組内	102	不明(成年?)	頭骨片・長骨片	
340号墓	石組内	17	成人(老年以上)	頭骨片・下位の腕骨 or 上位の腕骨(左下腕筋膜起)・長骨片・その他の骨	成人性骨増殖が少し見られる
341号墓	石組内	63	不明	左側頭骨(開閉翼窓外側部)・頭骨片・長骨片・その他	
342号墓	墓壙内	30	不明	長骨片	
343号墓	墓壙内	23	成人	大脛骨(骨幹約7cm, 長4cm)・長骨片	相場の発達が良いのでおそらく男性
348号墓	墓壙内	23	不明	頭骨片・その他	
349号墓	墓壙内	6	不明	頭骨片・その他	
351号墓	墓壙内	29	不明	長骨片	
355号墓	墓壙内	97	成人(老年以上?)	左鎖骨(腰骨の内耳孔周辺)・頭骨片・大脛骨・長骨片・その他	頭骨の内側面の結合部が消失し、骨が薄い

表26 栗栖山南墳墓群出土人骨一覧表(3)

遺物名	固名	年齢(?)	性別・肉体	出土部位	備考
361号墓	墓場内	101	不明	頭骨片・大歯骨片・その他 左腕骨・椎体の内耳孔周辺・鎖骨片・長骨片	骨が薄い
367号墓	墓場内	36	不明	右上腕骨(近中部へ1箇所突起)にかけて歯根部は破損・左下脛骨(下頸部) 第1・2小臼歯・前側部・頬骨片・その他	骨が薄い
372号墓	墓場内	34	不明	右上腕骨(近中部へ1箇所突起)にかけて歯根部は破損・左下脛骨(下頸部) 第1・2小臼歯・前側部・頬骨片・その他	
375号墓	墓場上	8	不明	長骨片	
378号墓	墓場内	2	不明	長骨断片	
382号墓	墓場内	14	不明	頭骨片・その他	
383号墓	墓場内	6	不明	手の中指骨(遠位部破壊)・長骨片	
390号墓	墓場内	8	不明	頭骨片・長骨片・その他	
394号墓	墓場内	38	不明	頭骨片・長骨片・その他	骨が薄い
398号墓	石畠上	5	不明	長骨片・その他	
401号墓	墓場内	33	不明	長骨片	
403号墓	墓場内	4	不明	骨断片	
405号墓	石畠上	4	不明	股骨片	
415号墓	墓場内	8	不明	長骨片	
427号墓	墓場内	3	不明	長骨片	
418号墓	墓場内	4	不明	長骨片	
119号墓	墓場骨部	3	不明	骨断片	
230号墓	墓場内	172	成人(焼灼以?)	頭骨片(頭面骨・椎体の内耳孔周辺)・鎖骨片・長骨片・その他	頭体焼灼が複合し骨が消滅しているので老若不分
	墓場内(土 輪廻田)	23	不明	右上腕骨(約突窓)・長骨片	墓場山土とは別個体で、より若い
425号墓	墓場内	15	不明	頭骨片・長骨片	
430号墓	墓場内	116	男(死因?)	右腕骨(椎体の内耳孔周辺)・頭骨片・右脛骨甲骨(近軸・脛甲骨外側1/3)・ 長骨片	骨が薄い
434号墓	墓場内	85	不明	長骨片	
437号墓	墓場内	21	不明	手の中指骨・手or足の掌節骨または中指骨	
429号墓	墓場内	1	不明	長骨片	
440号墓	墓場内	18	不明	長骨片	
444号墓	墓場内	44	不明	長骨片	
446号墓	墓場内	4	不明	長骨片	骨が少し薄い
454号墓	墓場内	28	小男(子供 or 幼児)	左腕骨片(椎体の内耳孔周辺)・頭骨片・長骨片	骨が少し薄い
463号墓	墓場内	38	不明	長骨片・その他	骨が少し薄い
466号墓	石畠上面	1	不明	骨片	
473号墓	墓場内	2	不明	長骨片	
474号墓	墓場内	51	不明	長骨片・その他	
476号墓	墓場上面	67	不明	左腕骨(下管体・右第2・3列頭・左第2小臼歯)・頭骨片	
477号墓	墓場内	3	不明	長骨片・その他	
478号墓	墓場内	274	不明(若い?)	右上腕骨(第2・3回曲・高1才)・頭骨片・上脛骨(脛粗部)・ 頭半管(脛中間部)・長骨片	
480号墓	墓場内	50	不明(若い?)	左腕頭骨(椎体の内耳孔周辺)・右腕頭骨(乳突起突起周辺)・頭骨片・右甲骨(脛粗部)・ 頭半管(脛中間部)・長骨片	骨が薄い
481号墓	墓場内	41	不明	長骨片	
482号墓	墓場骨部	17	不明	下顎骨(下頸体の一部)・頭骨片・その他	
483号墓	墓場内	2	不明(成人?)	頭骨片	
486号墓	墓場内	50	不明	左腕頭骨(脛粗部)・椎体の内耳孔周辺・後回線の一部・頭骨片	
494号墓	墓場内	9	不明	長骨片	
496号墓	石畠上	5	不明	頭骨片・長骨片	
501号墓	墓場内	26	成人	頭骨片・長骨片	
505号墓	石畠上面	1	不明	頭骨片	
559号墓	墓場内	12	不明	頭骨片	
564号墓	墓場内	92	成人	右頭骨片(頭頂部)・顎前面・長骨片・その他	骨が薄い
569号墓	石畠上面	1	不明	長骨片	やや小さいので若いまたは女性?
570号墓	墓場内	14	不明	手の小動骨・長骨片・その他	やや小さいので若いまたは女性?
572号墓	石畠上面	22	不明	頭骨片・長骨片	骨が薄い
575号墓	墓場内	183	不明	頭骨片・長骨片・その他	
579号墓	墓場内	44	不明	頭骨片・長骨片	骨が薄い
581号墓	石畠上面	3	不明	骨片	
583号墓	墓場内	129	成人	長骨片	
584号墓	墓場内	35	不明	長骨片	
588号墓	墓場内	15	成人	頭骨片・長骨片	
589号墓	墓場内	161	成人	頭骨片・長骨片・その他	
591号墓	墓場内	6	不明	頭骨片・長骨片	骨が薄い
592号墓	墓場内	27	不明	中手骨・長骨片	
593号墓	墓場内	72	不明	長骨片・その他	

表27 栗栖山南墳墓群出土人骨一覧表(4)

遺物名	資料No.	性別(?)	年齢(?)	個体数	出土部位	備考
火葬場2	No.1		26	不明	民骨片・その他の 左側頭骨(全体の内耳部)・頭骨・仙骨の一部・上頸骨(青筋の一帯)・ 脛骨(筋板部の一帯)・股骨臼・左大脛骨(股筋部の周辺)・大腿骨片(骨頭～筋膜、膝頭のみ、髓腔部の一部)・胫骨(骨幹の一部)・距骨(胫骨滑車の一部)・長骨・その他	
	No.2	成人	166		頭骨片・其の片	
	No.3	8	不明		頭骨片・腰椎(腰椎片・闊筋突起部)・左胸骨(胸骨下角)・右鎖骨(中足骨)	
	No.4	成人	89		頭骨片・腰椎(腰椎片・闊筋突起部)・左胸骨(胸骨下角)・右鎖骨(中足骨)	
火葬場3	No.1		66	不明	頭骨片・舌骨片・その他の 脛骨片・左肱骨(頭～肱頭)・頭骨(体の一部)・左上腕骨(三角巾帯部～肘窩部の一部)・頭骨(頭蓋部)・腰椎(腰椎部)・腰椎(腰椎部の一部)・大脛骨(骨幹の一部)・長骨・その他	
	No.2	成人	908		頭骨片・腰椎(腰椎部)・腰椎(腰椎部)・腰椎(腰椎部の一部)・大脛骨(骨幹の一部)・長骨・その他	
	No.3	49	成人		下顎骨(中or側切歯齒槽～下顎骨)・頭骨片・腰椎片・長骨片(骨頭部)・その他	口内の当時は閉鎖
火葬場4	No.1	352	成人(熟年以上?)		左上腕骨(手切開)・第2小臼歯根・切歯・側切歯・第1小白歯の歯根 は剥離。第1小白歯の歯根が小臼歯根に近接しておりと思われる。・下下顎骨(面筋の後部周囲)・歯槽骨(わざかに成骨)・ 右下顎骨(歯冠の後部周囲)・大臼歯の歯冠はすべて剥離)・下頸骨(歯槽の一部)・頭骨片・下位胸骨(全体の上部前部)・上位胸骨(骨幹の高位 5cm)・左上腕骨(骨幹の高位約8cm)・上腕骨 or 大腿骨(骨頭部)・腸骨片・腰椎骨・肋骨片・その他 左右鎖骨(極端の弓状孔周囲)・腰椎片・肋椎(椎体)・下位胸骨 or 上位 腰椎(腰椎部)・右肋骨(肋骨頭～第一肋骨始部)・右肩甲骨(圓窓部周囲)・右 腰椎(腰椎部)・右大脛骨(骨頭部)・大腿骨片・長骨(近位骨片)・長骨(骨頭部) 片・長骨片・その他	
	No.2	648	成人		頭骨片・腰椎(腰椎部)・人趾骨・長骨片・その他	
	No.3	212	不明		頭骨片・腰椎(腰椎部)・人趾骨・長骨片・その他	
火葬場6	No.1	46	不明		頭骨片(左側頭部の下側頭部底面)・頭骨片・長骨片	
火葬場7	No.2	10	不明		頭骨片・腰椎片	
火葬場	No.3	180	成人		前頭骨(眼窓上部以下～額骨上縫の一部)・頭骨片(頭骨部の2/3～頭骨突起と上顎骨 突起)	
	No.4	327	不明(若い?)		左下顎骨(下頬角)・頭部・頭骨片・左第1中手骨(骨盆腔破壊)・大腿 骨(骨頭)・左側腰骨(上部のみ)・中手骨 or 中腰骨(骨頭)・長骨片(骨 頭)・その他	
	No.5	202	成人		左下顎骨(筋突起)・頭骨片・助骨片・第3 or 第4肋骨(椎体)・右翼状骨 (甲冑装着部)・岬甲骨・右上腕骨(骨頭)・右尺骨(骨頭)・人恥骨(左 側)・左耻骨(腰骨門の一部)・火腿骨片・左膝蓋骨・長骨(骨頭)・長骨 片・その他	
	No.6	44	不明		頭骨片・長骨片・その他の 腰椎骨・大腸骨(骨幹・約12cm)・長骨(骨頭)・長骨片・その他	
	No.7	233	成人		左腰椎・腰椎・椎弓(左の上関節突起部)・頭骨片・腰椎片・上腰骨 (T12腰椎周囲)・右上腕骨(内側1/3)・左上腕骨(全骨格)・長骨(骨 頭)・その他	
	No.8	267	成人(熟年以上?)		左腰椎(腰椎部)・腰椎片・長骨(骨頭)・長骨(骨頭)・長骨(骨 頭)・その他	
	No.9	94	成人(熟年以上?)		左側頭骨(頭部)・頭～肱頭部の一部)・頭骨片・長骨片	種子類が付着して算が 消滅している
	No.10	2	不明		腰椎片	
	No.11	201	不明		左面部骨(腰椎突起部～闊筋部)・第3 or 第4腰椎(右の上・下関節突 起部)・第2 or 第3腰椎(左の上・下関節突起部・横突起)・左上腕骨(二 頭頭部の外側上部)・尺骨(尺頭頭部・前面のみ)・手の第2 or 第3基 頭骨(骨頭中央～遠位部)・(脊椎の断片)・長骨等	
	No.12	307	成人		左腰骨・腰椎骨(脊椎部)・右腰椎骨(骨頭部)・左腰椎骨(外ヨ 道周囲)・左上腕骨(上肢骨～第一肋骨)・頭骨片・腰椎(椎体)・腰椎(椎 体)・腰椎(椎体)・腰椎片・腰骨(体の高位部、その他の)・肋骨及び人頭骨 (骨頭)・腰骨(骨頭)・長骨(骨頭)・その他	
灰燼土	No.13	3	不明		頭骨片	
	No.14	11	不明		長骨片	
	No.15	106	不詳		右頭骨(腰椎突起部基礎)・左乳頭骨(下脇頭の外側部)・右下頭骨(腰突 起部)・頭骨片・椎骨(椎体部)・大体骨(骨頭)・长骨片・その他	
	No.16	21	不詳		足骨片・その他	
	No.17	63	成人(熟年以上?)		左心頭頂骨(蝶合部)・左小頭骨(下脇頭)・脛骨(脛状部～脛状部にかけ ての一部)・長骨片	左心頭頂骨の結合の内側 の結合線が消滅
	No.18	73	不詳		左乳頭骨(腰椎突起部)・腰椎片・長骨片・その他	頭骨の断面が無いので成 人
	No.19	11	成人		頭骨片・長骨片	由骨片の内側の結合に成 人
	No.20	8	成人(熟年?)		腰椎片(ラムダ結合部の一部)・長骨片	由骨片の内側の結合に成 人
	No.21	35			左上腕骨(第1切歯～第1前腕筋肉)・頭骨片・椎体部・人趾骨(並骨部 対応)・右腕骨(腕骨の一部)・右腕骨(骨頭)・腰椎(腰椎部の一部)・大腸骨(骨 頭)・腰椎骨・その他	
	No.22	588	成人			

表28 栗栖山南墳墓群出土人骨一覧表(5)

遺構名	資料No.	重量(kg)	年齢・性別	出土部位	備考
	No.23	235	成人(歯列以上?)	左肩下脇骨(左肩の切迫病部)、左尺骨(下腕部)、後腕骨(外後腕部)、右腕骨(右腕部へ弓状縫合にて一部)、心臓骨(乳頭骨)、長骨(青骨、その他)	
	No.24		成人		外後腕部端が丸剥離しているので男性?。右下腕側切迫以外の箇所の歯槽は磨耗しているので老翁?
	No.25	1477	複数例体: 約半以上と成人(若い?)	左面部骨(松竹筋の弓状縫合跡)、複体の内耳孔部へ一部部の一部、乳頭突起部、右側頭骨(左耳の内耳孔部周辺)、左鼻骨、右鼻骨、片側(前鼻孔)、鼻腔(後鼻孔)、喉頭(喉頭へ右喉頭弓)、第4 or 第5椎體(椎体加齢による椎体へ第3と下線の接合部)、老人(右骨盤突出部へ弓状縫合)、右骨盆(右骨盤骨部)、左腰骨(腰骨質の後部)、右腰骨(仙骨骨部の一部)、右骨(近骨臼)、大腸骨片、左右膝蓋骨(外側部)、左骨盆骨(右骨盤部の一部)、右腰椎(腰椎第2-後腰椎間関節)、第1中手骨(骨頭、骨幹)、長骨(骨頭、その他)	左側頭骨脛骨体が2箇出立。1体は老人(左状縮合部の側頭が消滅)。椎体に加齢骨増殖。1体は若い(仙骨の椎体は未癒合)
第1,2号	No.26	4	不明	右腕骨片、腕骨片	骨の断面が薄い
	No.27	129	成人	右翼骨(翼骨臼)、腰骨片、長骨(骨頭、その他)	
	No.28	1	不明	不明	
	No.29	11	不詳	腰骨片、無骨片、長骨片	
	No.30	12	不詳	腰骨片、長骨片	
	No.31	88	不明	左翼骨(翼骨臼結合部)、左腰骨(翼骨臼へ全骨結合部)、右坐骨(右坐骨臼へ全骨結合部)、右長骨片	
	No.32	47	成人	腰骨片、左の胸椎(椎体の右側半分)、大腸骨片、無骨片	
	No.33	29	不明	腰骨片、長骨片	
	No.34	46	成人	腰骨片、長骨片	
	No.35	60	成人	腰骨片、坐骨(坐骨結節)、恥骨(耳状凹)、尾骨?、腰骨片、その他	
	No.36	142	成人	右坐骨(下腰椎間)、腰骨片、大腸骨片、長骨片、その他	
	No.37	49	成人	腰骨片、長骨片	
	No.38	84	成人	上腰椎(頸椎)、腰骨片、右坐骨(腰椎間関節)、長骨(骨頭片、その他)	
	No.39	109	不明	心臓骨部(横骨突起部)、腰骨片、長骨片	
	No.40	235	不明	下顎骨(切迫部)、腰骨片、左坐骨(第2坐骨臼へ全骨結合部)、右坐骨(腰椎骨)	
	No.41	416	成人	上腰骨(第1大臼歯へ第2大臼歯にかけての梁構造)、右坐骨(腰椎骨)	
	No.42	61	成人	腰骨片、長骨片	
	No.43	45	成人(歯列以上?)	坐骨片、恥骨(坐骨の一部)、長骨片(骨頭片)、長骨片、その他	
	No.44	17	不明	骨片	
	No.45	1	不明	腰骨片、長骨片(骨頭片)、その他	
	No.46	不明	不明	不明	
	No.47	10	不明	長骨片	
	No.48	178	複数個体(少なくとも3体分?)	右側頭骨(右側頭部)、頭面骨(左の顎骨突起部)、右下脇骨(下脇枝の筋膜部)、右側頭骨(右側頭部へ右尖状部)、右腰骨(右腰骨臼)、左右下腰骨(下中腰骨の側頭の内側へ左の棘、右の棘)、切歯、切歯、犬歯、小臼歯の歯根部はすべて閉鎖)、下顎骨1 or 2 切歯(歯根のみ2本剥離)、切歯、犬歯、小臼歯と右上甲骨(右甲骨の正面)、手の中節骨(指骨破壊)、左右膝蓋骨、長骨(分岐、付属、その他)	1体は老人、1体は若い
表揮	No.49	1	不詳	骨片	
	No.50	129	成人	腰骨片、左腰骨(翼骨臼)、腰骨片、その他	骨頭が薄いので男根?
	No.51	130	不明(若い?)	右側頭骨(右側頭突起部)、腰骨片、右腕骨(右腕部内側の弱開裂)、切歯、犬歯、小臼歯の歯根部はすべて閉鎖)、右腰骨(右腰骨臼)、長骨片(長骨片)、腰骨片(腰骨臼)、長骨片(長骨片)、長骨片(長骨片)	
	No.52	40	成人	腰骨片、肋骨片、其の片	
	No.53	59	不明	腰骨片、肋骨(肋骨片)、腰 or 腹椎(椎体)、長骨(骨頭片、その他)	
	No.1	3	不明	骨片	
	No.2	19	不明	骨片	骨が少し薄い
	No.1	5	不明	腰骨片	
	No.2	67	成人	腰骨片、左手の第2 or 3掌節骨、大腸骨(骨頭片)、長骨片	
	No.3	5	不明	腰骨片	
	No.4	1	不明	不明	
	No.5	31	成人?	長骨片	
	No.6	17	不明	腰骨片、長骨(骨頭片、その他)	
	No.7	8	不明	腰骨片	
	No.8	不明	腰骨片		
	No.9	19	不明	腰骨片、右腰骨(翼骨臼)、長骨片	
	No.10	16	成人	腰骨(腰骨)、長骨片	小さいので女性? 骨が薄い
	No.11	4	不明	骨片	
	No.12	21	不明	腰骨片	
	No.13	108	成人	腰骨片、其の片	
第1,2号	No.14	193	不明	腰骨片、筋骨片(脊骨・腰椎・薄壁、その他) 左側頭骨(左側頭突起部-右側頭部)、腰椎(椎体の一部)、右下腰骨(下腰椎)、右腰骨(右腰骨臼へ右尖状部)、左腰骨(左腰骨臼)、左右下腰骨(下中腰骨の側頭の内側へ左の棘、右の棘)、切歯、犬歯(右上尖頭歯-右側頭部)、腰椎(椎体の一部)、右下腰骨(下腰椎)、右腰骨(右腰骨臼)、左右膝蓋骨、長骨(骨頭・骨幹中空、その他の)	乳頭突起・下頸面などが大きいので、女性または子供?
	No.15	22	不明	腰骨片、長骨片	
	No.16	14	不明	腰骨片	
	No.18	1	不明	腰骨片	

表29 栗栖山南墳墓群出土人骨一覧表(6)

調査名	資料 No.	性別(6)	年齢・個体数	出土部位	備考
第1・2号	No.19	5	不明	頭骨片	
	No.16	97	成人(年齢以-?)	右下頸骨(大顎齒槽後方-下頸枝前部)・頭骨片・左膝蓋骨(外側面)・足の第1末節骨・長骨片・その他の頭骨片・長骨片	Pm2の歯槽が深いので吸収が始まっていると思われる。全ての大臼歯の歯根は閉鎖している。
	No.20	19	不明	頭骨片	骨が薄い
	No.21	11	不明	脊椎骨	
	No.22	2	不明	脊椎骨	
	No.23	4	不明	頭骨片・長骨片	
	No.24	4	成人	長骨片	
	No.25	1	不明	骨片	
	No.26	20	不明	頭骨片・長骨片・その他の骨片	
	No.27	1	不明	頭骨片	
	No.28	2	不明	骨片	
	No.29	1	不明	長骨片	骨が薄い・骨片
	No.30	8	成人	頭骨片・長骨片	
	No.31	1	不明	骨片	
	No.32	5	不明	長骨片・その他の骨片	
	No.33	1	不明	長骨片	
	No.34	1	不明	脊椎骨	
	No.35	3	不明	長骨片・その他の骨片	
	No.36	1	不明	頭骨片	
	No.37	8	不明	頭骨片・長骨片・その他の骨片	
	No.38	2	不明	骨細片	
	No.39	1	不明	骨細片	
	No.40	35	成人	下顎骨(奥歯部分)・頭骨片・長骨片	
	No.41	4	不明	長骨片	
	No.42	20	不明	長骨片・その他の骨片	
	No.43	33	複数例か?	頭骨片・その他の骨片	骨が深いものと薄いものとが混在?
第2層	No.1	34	成人	前頭骨(額部の一部)・下顎骨(下頷体と右の大顎側縫合部)・長骨(骨頭・長骨・その他の骨片)	
	No.2	5	不明	長骨片	
	No.3	24	不明	大脛骨(骨頭)・長骨片・その他の骨片	
	No.4	4	不明	頭骨片・長骨片	
	No.5	不明	頭骨片		
	No.6	31	不明	右坐骨(坐骨窓・坐骨棘よりまで)・右膝蓋骨(外側面)・長骨片	
横土塚7	土塚内	1	不明	腰骨副骨・その他の骨片	
横土塚8	土塚内	1	不明	骨細片	

## &lt;出土人骨写真キャプション&gt;

写真○ 88・137・143・173・292号墓出土人骨

1. 頭頂骨片 次状縫合 2. 左側頭骨 緩骨突起基部から岩様部 3. 左下顎骨 内側面 4. 左下頸骨 外側面 5. 右距骨 距骨滑車 6. 右第3中手骨 7. 肋骨 肋骨体 8. 上頸骨 中切歯から第1大臼歯歯槽まで 9. 左下顎骨 下頸枝 10. 右月状骨 11. 右頸骨 12. 右有鈎骨 有鈎骨鉤 13. 左第3中手骨 14. 手の中節骨 15. 右第2中足骨  
(1~3…137号墓、4~6…292号墓、7~12…173号墓、8~10~13~15~143号墓、11~88号墓)

写真○ 69号墓出土人骨

1. 右頸骨 2. 左上頸骨 中切歯から第2小切歯歯槽 3. 下顎骨 左中切歯から右大臼歯歯槽 4. 右下頸骨 筋突起 5. 右下顎骨 関節突起 6. 軸椎 2体分 7. 左鎖骨 8. 右鎖骨 9. 右上腕骨 近位 10. 右上腕骨 遠位 11. 左橈骨近位と遠位 12. 右橈骨 近位と遠位 13. 右尺骨 14. 右手の舟状骨 15. 左第5中手骨 16. 右大腿骨 遠位端 17. 左距骨

写真○ 炭盛土・火葬場出土人骨

1. 左側頭骨 鱗部と内錐体 2. 後頭骨 外後頭骨隆起 3. 左前頭骨 頸骨突起部 4. 左前頭骨 眼窓上縁 5. 左上頸骨 6. 左下顎骨 下顎頭 7. 軸椎 齧突起 8. 頸椎 椎体 9. 胸椎 椎体 10. 第1または第2腰椎 椎体 11. 第4または第5腰椎 椎体 12. 左肩甲骨 関節窓 13. 右肩甲骨 眼窓 14. 左上腕骨 骨幹 15. 右上腕骨 骨幹 16. 橫骨 橫骨頭 17. 左尺骨 尺骨粗面 18. 右尺骨 肘頭 19. 左腸骨 腸骨窓外側面 20. 右腸骨 仙骨翼面 21. 左膝蓋骨 22. 右膝蓋骨 23. 左寛骨 寛骨臼 24. 左寛骨 寛骨臼 25. 左距骨 距骨滑車 26. 大脛骨片 27. 大脛骨骨幹 28. 大腿骨 骨頭



写真11 栗栖山南墳墓群出土人骨(1)



写真12 栗栖山南墳墓群出土人骨(2)

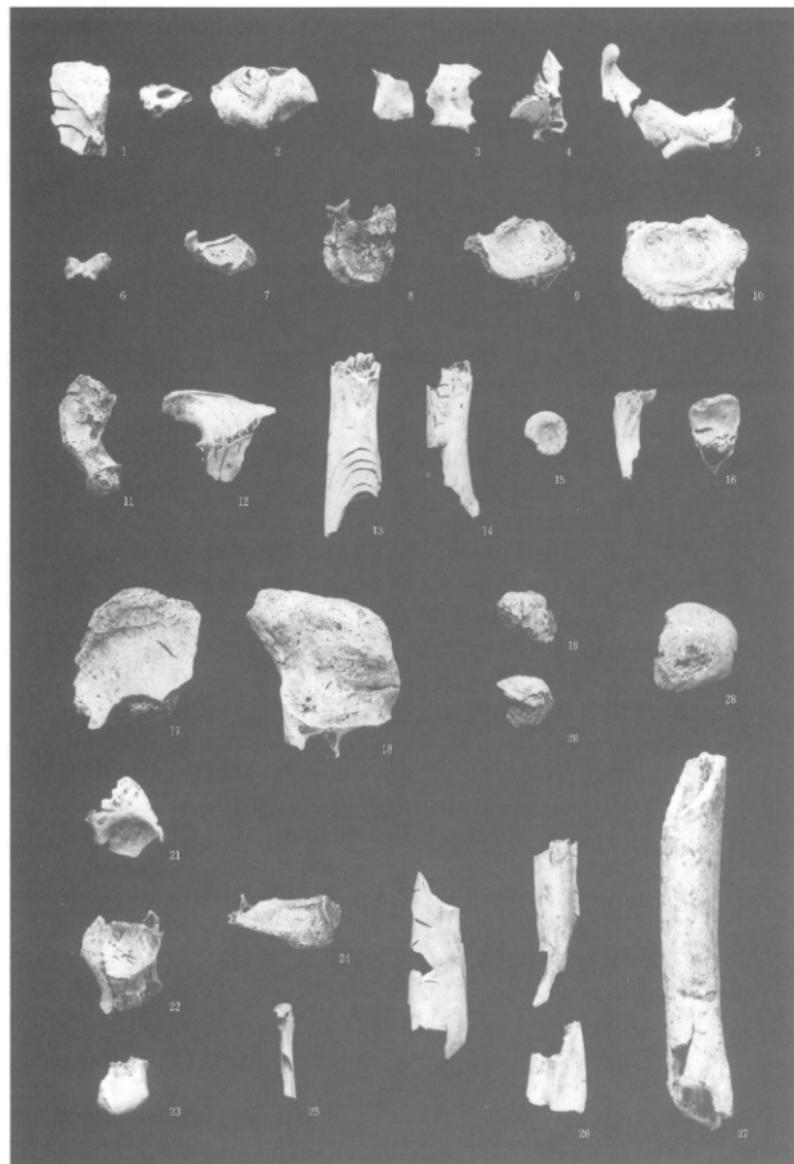


写真13 栗栖山南墳墓群出土人骨(3)

## 第5節 中世墓出土炭化材の樹種鑑定

山口誠治

### 1. はじめに

栗栖山南墳墓群の中世墓から出土した炭化材について、残存状況の良い17点の樹種鑑定を行った。

### 2. 樹種鑑定結果

樹種鑑定の結果、落葉の *Quercus* (ミズナラ、コナラ、クヌギ、アベマキ等) 類が圧倒的に多く、結果一覧表では種を限定できないのでコナラ亜属として報告している。

その他に、マツ科やヤブツバキがあり、以上の種類は、同様な中世墓遺跡である箕面市の小畠遺跡と共通のものである。なお、当遺跡では、ヒノキが数点あるのが注目される。

表30 炭化材の樹種鑑定結果一覧表

試料番号	遺構名	樹種名
No. 1	68号墓	コナラ亜属
No. 2	74号墓	マツ科
No. 3	99号墓	ヒノキ
No. 4	138号墓	コナラ亜属
No. 5	197号墓	コナラ亜属
No. 6	242号墓	コナラ亜属
No. 7	269号墓	コナラ亜属
No. 8	288号墓	ヤブツバキ
No. 9	300号墓	ヒノキ
No. 10	306号墓	ヤブツバキ
No. 11	330号墓	コナラ亜属
No. 12	343号墓	コナラ亜属
No. 13	361号墓	コナラ亜属
No. 14	367号墓	ヒノキ
No. 15	390号墓	コナラ亜属
No. 16	430号墓	コナラ亜属
No. 17	487号墓	コナラ亜属

## 第6章 漆製品の保存処理

立花るり子

### 1. はじめに

漆製品の保存処理には、アルコール・キシレン・樹脂法、PEG含浸法、高級アルコール法、糖アルコール法などが適用されてきた。現在では真空凍結乾燥法も導入されているが、漆工品の性格上、いずれも木製品の保存処理法がそのまま適用されているケースが大半である。ところがこれらの方では、木胎が収縮したり、漆膜自体に反り・取縮・変形が生じる場合も少なくない。処理に関わる成功・失敗の原因について、「漆の塗膜構造に起因し漆が厚く重にも塗り重ねられている製品は成功しやすく薄いものは失敗しやすい」という意見がある一方で、「必ずしもそうではない」という意見や、「漆製品の生産時期や製作技法に因る」という見解もあって、多くの機関ではまだ試行錯誤を繰り返しているのが現状だ。しかもこれらの方法は木胎を持つ漆製品に対する処理方法である。

今回の様に漆膜そのものの保存処理例では、漆膜断片の表面にアクリル樹脂・Paraloid B72を塗布して固化させてから、透明シリコンの中に封入した例や、鳥帽子を土ごとアクリル樹脂・Paraloid B72(商品名・ROAM & HASS 社製)で固定した例などがあるが、この他各地で出土している鳥帽子等の漆膜片の出土後の経緯は不明である。

こうした事情から、今回の処理はあくまでも「保存」という目的から外れない限り、特殊な機器を用いず、入手しにくい・あるいは人体に対して毒性が強い試薬を使用する事を極力避け、かつ、あまり複雑な処理工序を経る事なく現状を維持する方法を、将来より適切な技術が開発された際に、今回用いた試薬類が比較的容易に除去出来る状態を最善と考えて検討する事にした。

### 2. 処理前の調査

#### 1) 漆膜の観察

漆塗膜は既に何層かに分離している為、重なり順序に注意しながら各分離層毎にサンプリングし、ミクロトームで断面を得る。この薄片をオイキットで封入しプレパラートを作製し生物顕微鏡で観察した。

#### ①塗膜1・2(写真14-1・2)

いずれも83号墓より出土したものである。破片どうしの形状から推測して塗膜1(写真14-1)、塗膜2(写真14-2)の順に重なり、全体としておよそ5層(図193)から成っていた様である。現在は布帛の層(図193c/写真14-1)を境として分離している。

aの鮮やかな朱色は顔料の粒子は確認しづらいが、蛍光X線分光分析では水銀(Hg)及び鉄(Fe)が検出されている<sup>1)</sup>。

cは平織(織密度1.2×6本/cm<sup>2</sup>・筋筋<sup>2)</sup>二入・撚り有り)を透漆で塗り固めた状態で、外観は「火絵」に似るが素材は不明である。繊維は種類毎にその垂直断面の形状が異なり、これをを利用してある程度素材を区別するのだが、今回は痕跡なので正確には判別出来ない(写真14-9)。但し、繊維直径が大きく赤外分光分析でも特に指摘出来る要素が無かった事から、少なくとも絹ではない植物に由来する繊維とみる。図1-d(写真14-2)には黒色の微粒子が見

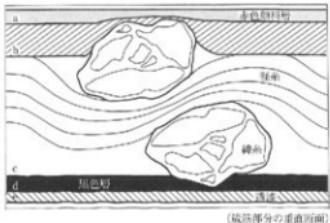


図192 塗膜1.2より復元した断面模式図

られ、透漆に炭粉を混ぜて黒色に着色したと思われる。なお金粉ないしは金泥等の加飾と見られる部分については、ごく僅かしか遺存していなかった為塗膜断面分析は行わなかった。

## ②塗膜3・4・5・6・7・8（写真14-3・4・5・6・7・8）

全て572号墓より出土しており、石に張り付いていた鳥帽子の塗膜破片が写真14-3～5（塗膜3～5）で、同じ壇内から床土に混じって出土した破片が写真1-6～8（塗膜6～8）である。鳥帽子の縁の折り返しと見られている部分の塗膜は6～8に当たる。本来3～8の順に重なり、全体としてはおよそ6層程度（図193）。縁は折り返しの為と思われるが、およそ12層（図194）から成っていた様である。現在は布帛の層を境として6つ程度に分離している。

図193-b（写真1-3）は、肉眼では表面に織密度9×9（本/cm<sup>2</sup>）程度の平織の痕跡のようなものが見られるが、断面に材質を推定出来る要素は見られない。この平織様の痕跡は、米栖山墳墓群で出土した他の漆膜片にも見られる。塗膜5（図2-d）には織密度50×50（本/cm<sup>2</sup>）程度の平織が見られ、これについては断面は痕跡となっているが（写真14-10）、原糸直径が極めて細く現断面形状がやや梢円で丸みを帯びている事から絹に近いと思われ、またフーリエ変換赤外光音響分光法（FT/IR PAS法）による分析結果では1,700-1,600cm<sup>-1</sup>付近でタンパク質を示すポリペプチド結合（-CO-NH-）に由来する Amide I・Amide II の各吸収バンドと考えられる伸縮振動のピークが得られている（図196）から、素材は絹とみて良い。なお、絹以外の紙・綿・皮革等はいずれのサンプルからも検出されていない。

塗膜6（図194-a'～c'）は縫い合わせ糸部分の断面で、現在は空洞となった周りを漆が厚く覆っている。空洞部分には恐らく元の素材があったと思われるが今は痕跡となっている。塗膜8に当たる写真14-8では、布帛は1枚のみだが、後にクリーニングを行った時の実感として、実際は少なくとも2枚重ね（図194-e'・f'）らしく、いずれも織密度はおよそ50×50（本/cm<sup>2</sup>）をはかる。

各層赤褐色を呈するが科学分析では顔料等は検出されていない。また塗膜3～5の塗膜構造は、567号墓の鳥帽子の塗膜構造と殆ど同じだった。よって両者同様の製作技法で作製されたと推測出来る。

以上の断面観察によって塗膜はいくつかに分離し、その分離は大半が布帛を透漆で塗り固めている部分で生じている事が判った。

## 2) 試薬類の選択

漆製品は漆そのものが天然の高分子樹脂である為、木製品や金属製品等に合成樹脂を浸透させる様な保存処理は殆ど不可能といえる。しかし今回の漆膜製品には各塗膜層間に隔たりのあるものが多く、こ

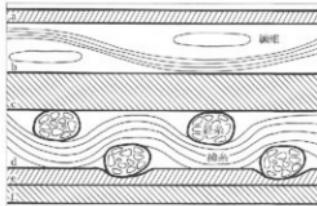


図193 塗膜3～8より復元した断面模式図

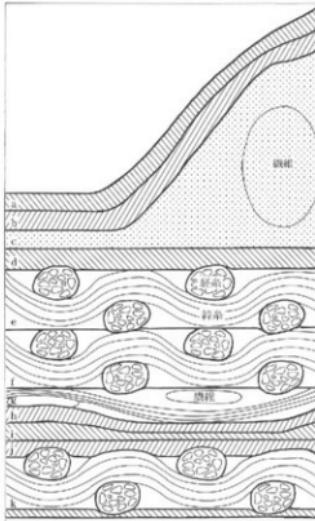


図194 同上・縁の折り返しの断面模式図

の空間に合成樹脂を行き届かせ塗膜を夾み込む事が出来そうである。そこで合成樹脂には、毒性が比較的低く・取り扱い易く・入手し易く、将来更に有効な保存手段が考案された場合、現在の樹脂を除去し易いものという点を考慮し、水溶性樹脂であるPEG及びPOLIOX<sup>TM</sup>(UNION CARBIDE日本株式会社製)<sup>3)</sup>を選択した。

### 3) 処理の前に

漆製品の分子量と合成樹脂の分子量が異なり過ぎると収縮率に差が出来、製品に収縮・変形が発生すると予測されたが、当室には分子量を計測する機器を備えていない為、濃度の設定等、経験に頼る部分が多くなる。そこで元の形状を復元する上で影響が無いと思われる塗膜断片を用いて、実資料を処理する前に試験を行った。

#### ① PEG (表31)による試験

表31 PEGの物性

仕上がり後にある程度の強度が求められるので、常温で液体状または軟膏状であるPEG 300～1500は除外し、4,000、6,000、20,000を用いて行った<sup>4)</sup>。

各PEGの10・20・30・50重量%水溶液（水は水道水）を用意しサンプル両面に塗布、乾燥しない内にサンプル両面に吸湿紙を当て、ガラス板で重さを加えながら乾燥させた。PEG 4,000の40%以降は常温では溶けにくい・または溶けなくなるので湯煎（50～60°C）しながら溶かす。

結果、4,000の10・20%溶液では乾燥後サンプルに微細なクラックが生じ、収縮を起こして粉の様な状態になり、6,000・20,000の10・20%溶液では乾燥後時間が経過するに従い徐々に反りを生じた。一方、20,000の50%液の場合はクラック等は発生しなかったが、乾燥後サンプルがPEGに白くまみれた状態になり、観察に適さなくなってしまった。

よって4,000の30・50%液、6,000の30・50%液、20,000の30%液が適当と思われた。この内、試薬の扱い易さという点では4,000の30・50%液・6,000の30%液が、仕上がり後の強度の点では20,000の30%液が良く、処理は布目が肉眼で確認出来る層の方が容易である。なおPEGを塗布したのみでサンプルを放置するといずれも反りを生じてきたので、塗布後は対象が破損しない程度に重さを加える必要がある。塗布回数を重ねるほど強度は増すが、反対に漆特有の光沢は失われてゆく。

#### ② POLIOX<sup>TM</sup>による試験

POLIOX<sup>TM</sup>の化学名はポリエチレンオキシド〔分子式：(CH<sub>2</sub>CH<sub>2</sub>O)<sub>x</sub>〕、ポリエーテル類に属し、分子量はPEGより遙かに大きくなる（表32）。

今回はWSR/N-80タイプを使用し、はじめこの1%、5%水溶液を用意した。サンプルに塗布し、吸湿紙を両面に当てて重さを加えながら乾燥させたが反りが生じたので段階的に濃度を上げていった。ところが樹脂濃度が10%以上になると常温では完全にペースト状になってしまった為に、溶液をホットプレートで加温しなければならなくなってしまった。加温した状態で製品を溶液に浸け、水分が蒸発しない様に表面をポリエチレンフィルムで覆って1週間ほど放置した。この後両面に吸湿紙を当て、ガラス板で適当な重さを加えながら乾燥させた。乾燥には室内温度10°C前後の環境で1週間以上要した。30%溶液でこの作業を行った所、乾燥後は反りを生じたり収縮することなくある程度の強度・柔軟性を残した状態で良好な仕上がりが得られたが、漆特有の光沢は失われてしまった。

種類	平均分子量	水溶性	外観
PEG-300	285～315	完全に溶ける	やや粘性がある無色の液体
PEG-400	380～420	完全に溶ける	透明液体
PEG-600	570～630	完全に溶ける	軟膏状
PEG-1000	950～1050	溶解度 70	軟膏状
PEG-1500	500～600	溶解度 70	軟膏状
PEG-1540	1300～1600	溶解度 70	ロウ状固体
PEG-2000	1900～2100	溶解度 62	ロウ状固体
PEG-4000	3000～3700	溶解度 50	フレーク状で白色
PEG-6000	7800～9000	溶解度 50	フレーク状で白色 透明性が小さい

以上より、PEGを用いる場合は仕上がり後の強度を最も重視して20,000の30%液を、POLIOX<sup>TM</sup>では30%液を用いる事にした。溶液を塗布する時は製品は脆くなっているので筆などで強く掃かない様に注意する。塗布後は吸湿紙を当て、その上から製品が破損しない程度の重さを加えつつゆっくり乾燥させる。この時の吸湿紙は滤紙でも良いのだ

が、製品と吸着し易く乾燥後に取り除きにくくなる場合があるので不織布系のワイパー<sup>®</sup>を使用した方が良いだろう。放置・乾燥する環境は一般室内で良いが、冷暖房がよく効いた部屋や日中と夜間の気温差が大き過ぎる場所だと急激な乾燥を起こすので避けた方が良く、また途中様子を見る事は極力控える。錆の取り外しを頻繁に行うと破損する確率が高くなるし、試薬の乾燥を早くしてしまうからである。

なお追記すると、当初から収縮したり反りが生じているようなものは復元出来なかった。

### 3. 実資料の処理

#### ①赤色顔料着色漆膜片（布目痕有） 83号墓

クリーニング：各漆塗膜は土中水分と土圧によって湿润した平面が保たれていた状態なので、これらが失われると反りを生じ或いは収縮を始める。これを防ぐ為、塗膜を水に浸け筆で少しづつ土砂等を除去した。土砂は層と層の間にも入り込んでこびりつき、面相筆で撫でる程度では除去出来ないものもあった。特に黒色層（写真14-2/図193-d）にこびりついている土砂を除去しようとするとき黒色層の上を覆っている透漆（写真14-2/図193-e）が剥離していく、赤色顔料層（写真14-1/図193-a）は粉状に溶解してしまうので拡大鏡で観察しながら竹串等で土砂を軽くつつき、崩れた土砂だけを筆で除去していく。

また塗膜によっては長期間水に浸しておくと水中で反りを生じ始めるものが見られた。漆工芸の技法には、仕上がりの光沢・透明性を良くするために漆にアマニ油・エノ油・桐油等の植物油を混合する場合があり、今回の科学分析では特に指摘されなかったが、こうしたものが本製品にも含まれていて水中に徐々に溶け出した為に反りが生じた可能性もある。この兆候が見られ始めてからクリーニングは細心の注意を払いつつも極力急いで行なった。

合成樹脂の塗布：PEG 20,000+30%溶液を使用した。溶液は常温になると間もなく硬化してくるので、常に60°C前後に保温した状態で使用し、これを塗膜の両面に素早く・まんべんなく筆で滴下させた後、両面に吸湿紙を当てガラス板で軽く重さを加えながら乾燥させた。乾燥は20°C前後の環境下で3日程度を要した。

この作業は分離した層どうしを重ね合わせず各分離層毎に行い、各々1過程を3回ずつ行った。特に写真14-1（図193-a・b・c）の層は、樹脂を1度塗布しただけでもよく固定出来た。しかし漆特有の光沢は合成樹脂塗布後に失われてしまった。

#### ②鳥帽子 4 A 地区567号墓出土

クリーニング：各層の重なり具合がよくわかる資料であるが、多少の衝撃でこれらが分離してしまい、塗膜表面も非常に脆くなっていたために、製品全体を静かに水に浸け、柔らかい筆や竹串或いはスティクの水圧を利用して慎重に土砂を除去した。しかし歯や細かい布目の間に入り込んだ汚れは無理に除去

表32 Pollox の物性

種類	平均分子量	粘度(各重量%の水溶液における平均分子量・温度25°C)		
		5%	25%	1%
WSRN-10	100,000	12-50	-	-
WSRN-50	200,000	65-115	-	-
WSRN-750	300,000	600-1,000	-	-
		1,000-1,200	-	-
WSRN-3000	400,000	2,250-4,500	-	-
WSR-333	400,000	2,250-3,350	-	-
WSR-200	600,000	4,500-8,800	-	-
WSR-105	900,000	8,800-17,000	-	-
WSRN-12K	1,000,000	-	400-800	-
WSRN-60K	2,000,000	-	2,000-4,000	-

※POLOXはグラニュー糖状のパウダーで白色を呈する。  
＊全て水溶性。

しようとする製品自体を痛めてしまうため、ある程度までしか出来なかった。

合成樹脂の塗布：ホットプレートで加温したPOLYOX™30%溶液中に製品を浸け、水分が蒸発しない様にポリエチレンフィルムで覆った。加温した状態で1週間ほど放置した後取り出し、両面に吸湿紙を当ててガラス板で重さを加えながら乾燥させた。乾燥には10°C前後の環境下で1ヶ月近くを要した。乾燥後は反りや取縮は見られず、ある程度の強度を保持し仕上がりは良好だったが、処理期間中、極度に高温ではないものの製品に熱が加えられていた状態は問題点を残す。

### ③鳥帽子 4 A 地区572号墓出土

クリーニング：石の角に押しつぶされて張り付いていたのでL字型的に曲がり復元出来なかった。この為折れ曲がったままの状態でクリーニングしなければならなかったが、水に浸けると製品を固定する事が難しく、安定を欠いた状態でのクリーニングは製品を破損する恐れがある。そこで複雑な形状に対応させる為、ポリエチレン袋を3重ぐらいにして水を入れ、袋の口を電熱シーラーで密封した「水枕」台を数個造り、この上を濡らせた不織布で覆って大きめのタッパーウエアに入れ、この中に製品を固定した。次にスポットで水を滴下させつつ柔らかい筆・竹串を用いて土砂を除去してゆき、層と層の間に土砂が入り込んでいる場合は破損しないよう十分注意しながらスポットの水圧で流し出した。塗膜表面はじきに乾燥してくるので時折霧吹きで水分を補いつつこれらの作業を行った。

合成樹脂の塗布：PEG20.000の30%溶液を使用した。溶液は常温になると間もなく硬化し始めるので常に60°C前後に保温し、筆で滴下させる様に素早く・まんべんなく塗布し、塗膜層が重なり合った部分には注射器で静かに溶液を流し入れてから、最も外側の面に吸湿紙を当てた。この後重さを加えるのだが、製品はL字型になっているためにガラス板が使えない。そこで「水枕」台で両面を夾む様にして乾燥させた。なお「水枕」台は製品によくフィットするので乾燥速度が遅くなる。そこで1日に1度、製品が破損しない様に注意しながら取り外して通気させ、適宜吸湿紙を取り替えた。1回の乾燥には20°C前後の環境下で約1週間ほど要し、一連の作業は合わせて3度行った。反りや取縮等は見られず、ある程度の強度を得られたので、まずはの仕上がりとなったが、漆本来の柔軟性や光沢は再現出来なかつた。

## 4. 終わりに

保存処理を終えて現段階では、少なくとも肉眼では取縮や崩壊は生じていないので今回の処理は妥当だったと言いたいが、安定している要因には、漆製品の保存状態が比較的良かった事と、出土時期が冬季で低温であり腐敗が進行しにくい条件であった事も良い結果に繋がったと思われる。

しかし処理によってある程度の強度を保っていても製品は脆いものであり、また合成樹脂は紫外線に弱く大気汚染物質なども吸着し易い。これから取り扱いには細心の注意が払われるべきであるが、今回、特別に保管展示用のケースが作成されたのはこの意味で非常に望ましい事だろう。

本製品が今後広く研究対象となる事を願っている。

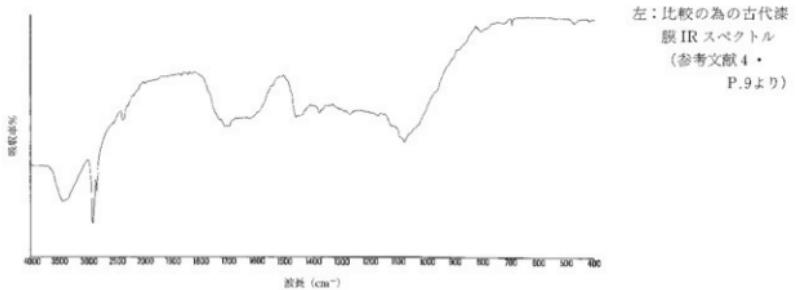
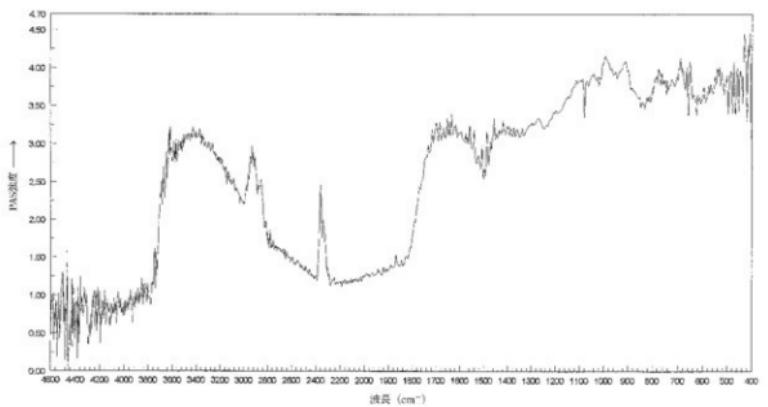


図195 栗栖山南墳墓群から出土した漆膜のFT／IR-PASスペクトル

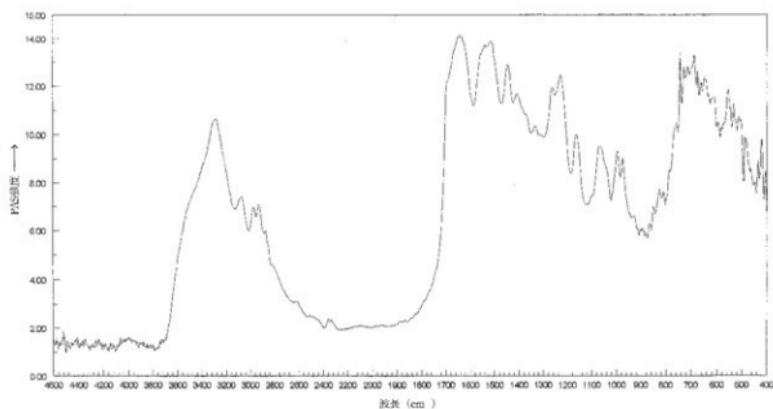


図196 栗栖山南墳墓群出土漆膜に伴う平絹のFT/IR-PASスペクトル

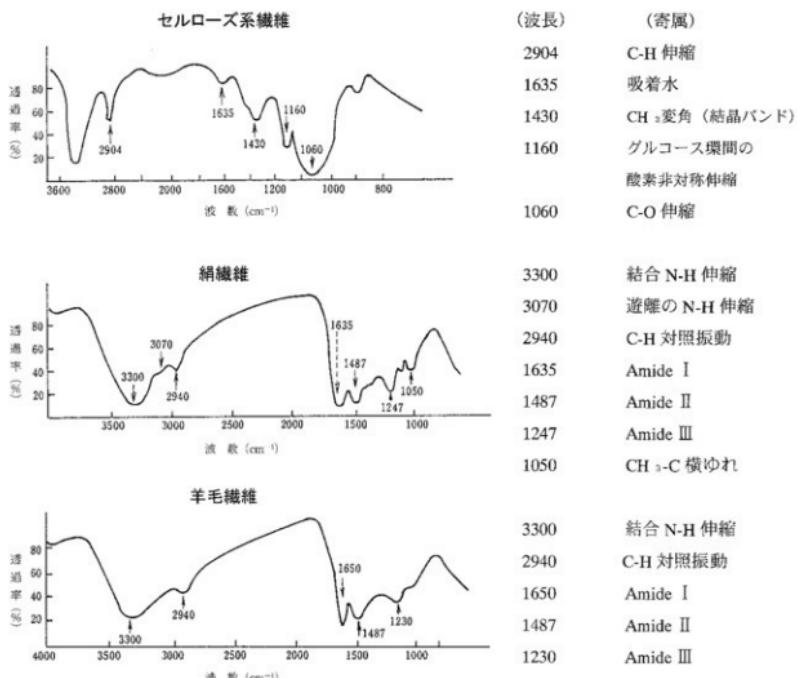


図197 天然繊維の赤外線吸収スペクトル（参考文献6）

注) 今回の保存処理については、当センターの山口誠治技師を始め、以下の方々のご協力・ご助言が  
あって良好な結果に導かれたものである。心より感謝申し上げます。(アイウエオ順、敬称略)

辻 博美、西山 要一、水取 康人

#### 註

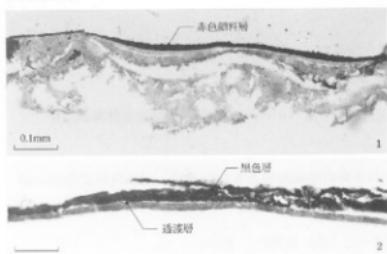
- 蛍光X線分析では水銀の他に比較的強いエネルギー強度で鉄(Fe)も検出されている。漆工の世界では水銀と酸化鉄の混合比率を変える事により赤の色合いを変える手法はごくふつうに行われるらしく、参考までに注記しておく。しかし天然辰砂や酸化鉄が含まれている事は珍しくなく、また蛍光X線分析では鉄が「ベンガラ」即ち酸化第二鉄( $Fe^{2+}O^4$ )であるかという点までは測定出来ないので、X線回折分析などでクロスチェックする必要があるだろう。
- 絹糸を織糸して綿糸を織り込む用具を簇(おき)という。織成された布帛には2本1組の筋があり、これを簇筋(おさすじ)と呼び、簇筋が見られる方が絹糸となる。
- POLYOX<sup>TM</sup>はあまり馴染みのない試薬であり当保存処理室でも使用した経験は無かったが、PEG20,000より高い分子量を試みる意味で使用を決めた。この試薬は、国内では古墳から出土した青銅鏡に付着していた布帛を取り外す際、脆くなったり繊維が崩壊しないための強化剤として用いられた事例がある。
- 国内で製造販売されているPEGの分子量は200~20,000。
- メッシュタイプのものが良い。
- 物質に赤外線を照射すると各物質はそれぞれ固有の波長領域で赤外線を吸収し、この性質を利用して主に有機物質を同定する方法が赤外線分析である。スペクトルを読み取るには、横軸は波数( $cm^{-1}$ )を縦軸は赤外線の吸収率(%TまたはAbs)を表しているから、横軸のどのあたりで吸収されているかを、予め得ておいた実資料の基本スペクトルと比較して同定する(ピークは下向きを見る)。ところが今回のPAS法では、考え方や予め得ておいた実資料の基本スペクトルと比較して同定するという点までは同じだが、波長が音響に変換されその強度がスペクトルとなって出現するので、横軸は波数( $cm^{-1}$ )を縦軸はPAS強度を表す事になり、横軸のどのあたりで強度が出現しているかを読み取る事になる(ピークは上向きを見る)。PAS法は赤外線の吸収が微弱な場合やより精密な分析を必要とする試料に対して有効な方法と言われている。しかしいずれの方法でもスペクトルの読み取りには相当の経験を要する事には変わりない。

#### 参考文献

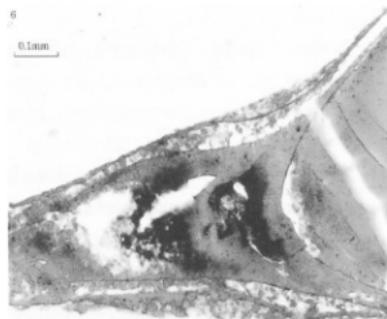
1. 登石健三・見城敏子、「漆塗膜の劣化」、『色材協会誌』Vol. 140 No.7 2月号、1967年
2. 見城敏子、「漆塗膜に関する研究(第3報) 漆塗膜の硬化および劣化過程の赤外線スペクトル変化および漆工品保存に関する考察」、『色材協会誌』Vol. 146 No.7 7月号、1973年
3. 見城敏子、「漆工品保存への科学的アプローチ」、『考古学雑誌』第61巻第2号、日本考古学協会、1975年
4. 見城敏子、「漆と植物油との相互作用」、『保存科学』16号、東京国立文化財研究所、1977年
5. 見城敏子、「漆の分析に関する研究(第2報) 赤外吸収分析」、『古文化財の科学』第23号、古文化財科学研究会、1978年
6. 長野正満、「古代織物を構成する繊維の鑑別法とその応用」、『古文化財の科学』第24号、古文化財科学研究会、1979年
7. 中川正人、「新庄城遺跡出土漆膜の保存処理」、『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要(昭和57年度)3 新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要』第3章、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会、1983年

8. 熊野路 従、「漆文化財の保存の研究法」、「古文化財の自然科学的研究」、古文化財編集委員会編・(株)同朋舎出版発行、1984年
9. 四柳嘉章、「七尾城跡シッケ地区遺跡出土漆器の塗膜分析(第1次報告)」、「七尾城下町遺跡 七尾城シッケ地区遺跡発掘調査報告書」、七尾市教育委員会文化課編・七尾市教育委員会発行、1992年
10. 平泉教育委員会、建設省岩手工事事務所「柳之御所発掘調査報告書—平泉バイパス・一関遊水地関連遺跡発掘調査—」、「岩手県平泉町文化財調査報告書」第38集、1994年
11. 佐藤昌宏・福島政文「草戸千軒町遺跡出土の鐵錫製品」「草戸千軒町遺跡発掘調査報告書III—南部地域北半部の調査—」、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編・広島県教育委員会発行
12. 岡田文男、「古代出土漆器の研究 一顕微鏡で探る材質と技法ー」、(株)見聞社、1995年
13. 川本耕三、「出土木製品を真空凍結乾燥法により保存処理するうえでの諸問題」、「元興寺文化財研究所 創立二十周年記念誌」、元興寺文化財研究所、1997年
14. 下野 聖、「土付き遺物」の保存処理」、「元興寺文化財研究所 創立三十周年記念誌」、元興寺文化財研究所、1997年
15. 沢田正明、「文化財保存科学ノート」、近未来社発行、1997年
16. 山口誠治「縂持寺遺跡出土烏帽子の赤外分析調査について」、「縂持寺遺跡」、(財)大阪府文化財調査研究センター、1998年
17. 西口裕泰・伊藤幸治・鳥居信子・今津津生・北野信彦、「糖アルコール含浸法による漆製品の処理」、「日本文化財科学 第16回大会研究発表要旨集」、日本文化財科学会、1999年
18. 山城直美・上條朝宏・門倉武夫、「PEG含浸法による出土漆器類の保存処理に関する研究2」、「東京都埋蔵文化財研究センター研究論集XVII」、東京都埋蔵文化財研究センター、1999年

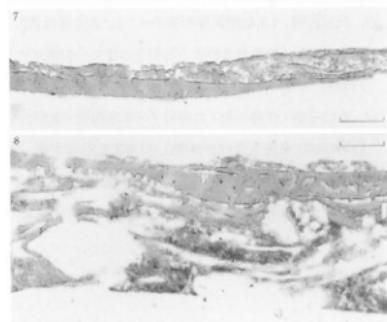
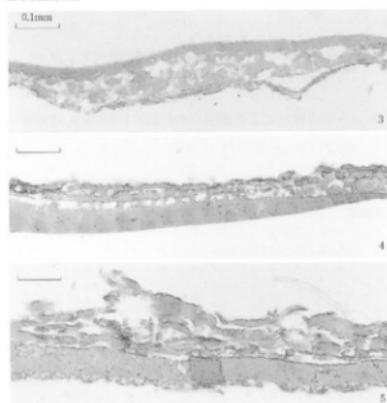
85号墓出土漆膜



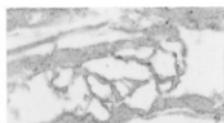
572号墓出土漆膜



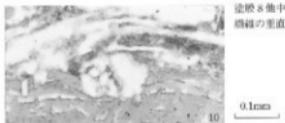
83号墓出土漆膜



塗膜1 中間層  
の垂直断面



塗膜8 油中  
樹脂の垂直断面



(参考)  
漆膜の垂直断面



(参考)  
漆膜の垂直断面



写真14 栗栖山南墳墓群から出土した漆膜

## 第7節 栗栖山南墳墓群中世墓出土赤色顔料付着布片の赤色顔料の成分分析

南武志、山際英樹

近畿大学豊岡短期大学生活情報学科 近畿大学共同利用センター

概要栗栖山南墳墓群中世墓から出土した布片に付着していた赤色顔料の主成分元素を蛍光X線分析装置で調べた。エネルギー分散型X線分光器(EDS)を用いて表面分析を行ったところ、イオウ、珪素、アルミニウム、鉄、および水銀と考えられるスペクトルが得られた。このうち珪素とアルミニウムは付着土壤由来であると考えられる。そこでイオウ、水銀、鉄と古代赤色顔料の組成元素の可塑性のある砒素と鉛を精査したところ、本赤色顔料は鉄と水銀から構成されていると推察された。その割合は3.6(水銀/鉄)と水銀を主構成成分としていた。また、布片の別の部分に塗布されていたと考えられている銀と金は検出されなかった。以上より、栗栖山南墳墓群の中世墓から出土した布片に付着していた赤色顔料は、硫化水銀(朱)を主成分に酸化第二鉄(ベンガラ)を混ぜて作られた顔料であると推察する。

### 1.はじめに

茨木市佐保字クルスに位置する栗栖山遺跡は、7世紀の古墳群から16世紀までの中世墓群までの複合墳墓であり、しかも16世紀半ばの岩跡も発見されている。今回分析した赤色顔料付着布片は15世紀頃の中世墓から出土したものであり、金泥が付着している部分があることが確認されている。土中で変色していないことから金属顔料である可能性が高く、この赤色顔料が何で構成されたものか、蛍光X線分析装置を用いて調べた。

### 2.分析試料と方法

#### (1) 分析試料

布片は、栗栖山南墳墓群の15世紀頃と推定される中世墓(約0.8m×0.6m、深さ約0.3mの穴に石組みをほどこしていた)の石組みの中から出土した。布片は朱色、赤茶褐色、黒色の3層にわかれている。このうち黒色層は布であると推定している。朱色層の一部に金泥が付着したものも確認されている。分析試料はイオン交換水で洗浄し、エタノールを少量含んだイオン交換水に保存処理していた。

#### (2) 方法

赤色顔料付着布片をろ紙の上に広げ、プレス機を用い5ton/cm<sup>2</sup>で20秒間加圧脱水および成形した。蛍光X線分析装置(RIX2000、理学電気工業株式会社(大阪))に成形した試料を入れ、エネルギー分散型X線分光器で検出した。

### 3.結果

赤色顔料部分を蛍光X線分析装置で定性分析を行ったところ、イオウ、珪素、アルミニウム、鉄、および水銀と考えられるスペクトルが得られた(図198)。次に鉄、イオウ、水銀、砒素、鉛、銀、金について詳細に分析を行ったところ、イオウ、鉄、水銀の存在が確認されたが、砒素、鉛、銀、金は検出されなかった(図199)。赤色顔料に含まれる水銀と鉄の強度比を計算したところ、3.6(水銀/鉄)であった。

### 4.判定

布片に付着した赤色顔料を蛍光X線分析装置で定性分析を行ったところ、数種類の元素が検出された。その中で珪素、アルミニウムは付着土壤成分の混在であると思われる。朱色層の一部に金泥が付着していたことから、金と銀の検出も行ったが、今回の試料中に金と銀は検出されなかった。古代より赤

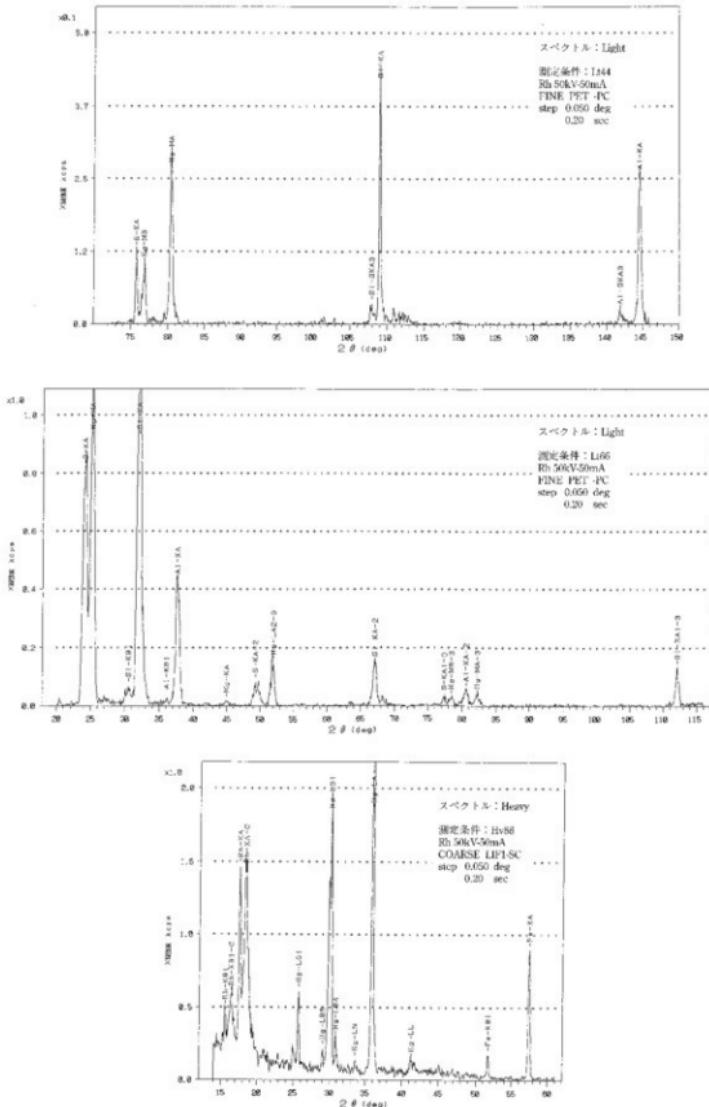


図198 赤色顔料の蛍光X線分析

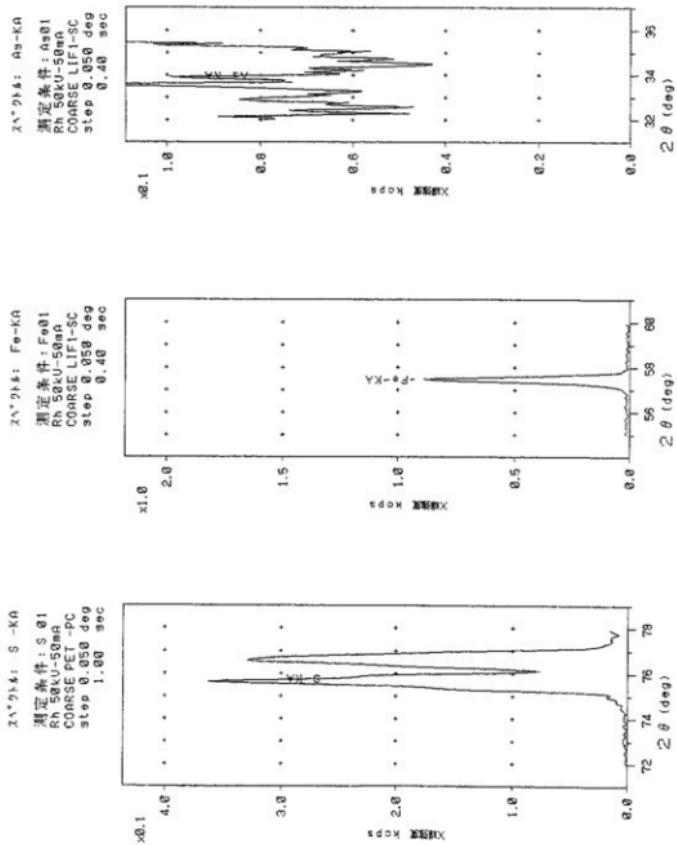


図199 赤色顔料の定性分析(1)

色顔料に用いられている金属には、鉄（酸化第二鉄：ベンガラ）、水銀（硫化水銀：朱）、鉛（四三酸化鉛：鉛丹）、砒素（二硫化二砒素：鷦鷯石）が知られている。そこでこれらの金属およびイオウを精査したところ、鉄、水銀、イオウが検出され、鉛と砒素は検出されなかった。しかも水銀と鉄の強度比を計算した結果、今回の試料の赤色顔料は朱を主成分にベンガラが少し混合されたものであると結論する。

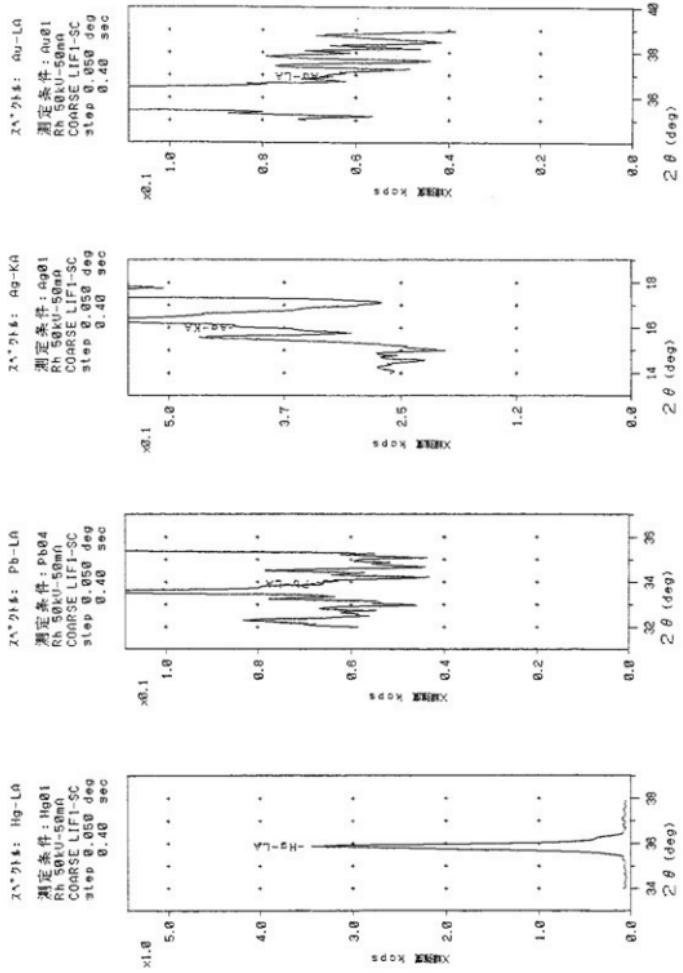


図200 赤色顔料の定性分析(2)

## 第8節 栗柄山南墳墓群中世火葬場から出土した鉄釘のさび層とその防食性

大阪市立大学工学部

姫路工業大学工学部

橋本 敏

山下正人

### 1. 緒言

鉄は強い、硬い、加工がしやすい、高温にも耐えられる、比較的安価である等の理由でほとんどあらゆる分野で使用されている。建物、橋梁、鉄道、自動車、各種プラント等などである。また、古くは武器、美術品等にも使用されている。しかし、鉄はさびて、消失していくことから、鉄の利用の歴史はさびとの戦いであると言っても過言ではない。

古代から保存されている、或いは最近見いだされ、発掘された鉄製の文化財の多くはさび層に覆われている。金属文化財のさび層の厚さや組成等はその文化財の年代と環境条件に密接に関係している<sup>①</sup>。鉄文化財の耐食性を示す事例にインドのクルップミナール寺院に紀元前3—4世紀の鉄の柱がある。長期間使用されているにもかかわらず、ほとんど腐食していないことで有名である。その理由としてデリーは乾燥している期間が長いことが最大の原因であると考えられているが、約0.114%のPを含んでいることも一因である。鋼のさび層の防食性向上にPが有効なことから、この柱がさびにくい理由は環境だけでなく、鋼質自身にもあると考えられる。

文化財等として現代に受け継がれているそれら貴重な遺産のさびを調査することは、先人の生活様式を知る上で重要である。また、工学的見地からの重要性も注目すべきであり、鋼構造物等の数百年～数千年にわたる長期耐久性を推定するためにも、文化財のさびと長期耐食性の関係を研究することが有効である。

大阪府茨木市の栗柄山南墳墓群の中世の墓から最近出土した鉄釘には、埋蔵箇所が同一であったにもかかわらず腐食の程度が大きく異なるものがある。本研究では、それらの鉄釘において腐食の程度が大きく異なることが、形成されたさび層の構造や化学組成の違いに起因すると考え、さび層の構造と防食性の関係を調査した。

### 2. 調査方法

#### (1) 試料

試料は(財)大阪府文化財調査研究センターにより学術研究用に提供された、栗柄山南墳より出土した鉄釘である。この墓群は13~16世紀に構築され、鉄釘は約500年間土中に埋蔵されていた。調査に供した鉄釘2種類のうち、一方はほぼ原形をとどめ緻密なさびが一様に表面を覆っている腐食の軽微なもの(T388:図118-15)で、他方は腐食が著しくほとんどさびに変化しているもの(T328)である。それぞれの外観を図1に示す。T328はきわめて厚い欠陥の多いさびを有することがわかる。いずれも墓群の火葬場から発掘されたもので、発掘箇所は火葬の際に生成した炭を多く含む“火葬場3”と名付けられた約2m四方の箇所である。

#### (2). 鉄釘の化学組成

鉄釘の一部を粉状にして、高周波プラズマ発光分光分析法により化学組成を調査した。なお、CおよびSiについては、高周波燃焼赤外線吸収法により分析を行った。

### (3). さび層の分析

#### (1). さび層の構造

さび層の構成化合物を定量するために、カッターナイフにて採取したさびをめのう乳鉢で粉碎し粉末試料を作製した。得られた粉末試料について、KCl 内部標準法を利用したX線回折法によりさび構成鉄化合物の定量分析を行った。装置は理学電機(株)製 RU 200 型によりターゲットとして Co を用い、電圧-電流を 30kV-100mA とし走査速度 $2^{\circ}/\text{min.}$ の条件による粉末法で行った。

さび層構成鉄化合物の定量は、一定量の KCl 粉末をあらかじめさび粉末中に混合し、作成した検量線を用いて  $\alpha\text{-FeOOH}$  の  $24.7^{\circ}$  (011) 反射、 $\gamma\text{-FeOOH}$  の  $16.4^{\circ}$  (020) 反射、

$\beta\text{-FeOOH}$  の  $13.9^{\circ}$  (110) 反射、 $\text{Fe}_3\text{O}_4$  の  $41.4^{\circ}$  (311) 反射の強度を KCl の  $33.0^{\circ}$  / (020) 反射の強度と比較することにより行った。

また、JOEL JEM200CX 型の透過電子顕微鏡および日立 HU-700H 型の分析透過電子顕微鏡を用いてさび粉末形態の観察を行った。試料作製のため、さび粉末をアセチルセルロース膜に付着させ、カーボン蒸着した。アセチルセルロース膜を除去後、カーボン蒸着膜上に付着している微粉末を、Mo メッシュに固定して電子顕微鏡試料を作製した。

#### 2). さび層含有元素

さび層を有する鉄釘を切断後、常温硬化型エポキシ樹脂に埋め込み断面研磨を施した。得られたさび層の断面について、走査型電子顕微鏡(SEM)、光学顕微鏡および偏光顕微鏡により観察を行うとともに、元素分布状態を電子線マイクロアナライザー(EPMA)により調査した。また、さび層の平均化学組成を調べるために、高周波プラズマ発光分光分析を行ったが、T388については十分な量のさび層が得られなかったため、分析透過電子顕微鏡により数カ所の元素分析を行いその平均値を平均化学組成とした。

### 3. 結果

#### (1). 鉄釘の化学組成

T388の化学組成を表33に示す。C含有量は低く純鉄に近いが、Pがやや高いレベルで含有されていることが特徴的である。また、Ca が 10ppm 程度含有されている。

#### (2). さび層構成物質

表2 にさび層を構成する化合物を示す。T388 さび層の主要な結晶性物質は、 $\text{Fe}_3\text{O}_4$  である。また、結晶性鉄化合物以外の“その他の物質”がさび層構成物質の約半分を占めている。後述するように T388 のさび層中には Si が検出されず Al も少量であったことから、その他の物質は X 線的非晶質鉄化合物により主として構成されていると思われる。後の走査電子顕微鏡写真に示すが、T388 のさび層は約  $300\mu\text{m}$  の緻密な層である。カッターナイフによるさび層採取が困難であったことから、さび層は地鉄に強固に密着していると考えられる。したがって、T388 は  $\text{Fe}_3\text{O}_4$  および X 線的非晶質鉄化合物を主体とした緻密さび層に覆われていると考えられる。さらに、微量ではあるが  $\alpha\text{-Fe}_3\text{O}_3$  が検出された。これは、赤色の着色顔料として一般に用いられるベンガラの主成分である。

一方、T328 さび層の大部分はその他の物質であった。後述するように、さび層中には Si が多量に検出されているとともに Al も存在しており、それらの酸化物を中心とした相当量の土砂がさび層中に混入していると思われる。実際に X 線回折スペクトルからも、 $\text{SiO}_2$  のピークも検出されている。また、 $\alpha\text{-FeOOH}$  が約 20% 認められたが、T388 で多量に検出された  $\text{Fe}_3\text{O}_4$  は T328 では少景であった。

### (3). さび層含有元素

さび層中の主要含有元素を表3に示す。前節でも述べたように、T328ではSiおよびAlの含有量が高い。一方、T388ではPおよびCaの含有量が高い。

### (4). さび層中の主要元素分布

写真16および17にさび層中の主要元素分布を示す。酸素の高い部分がさび層であり、T328についてはほとんどすべての地鉄がさびに変わっていることがわかる。

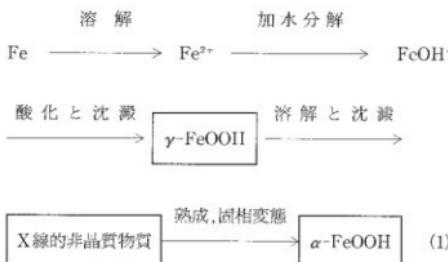
T388では、CaおよびPが層状に高い濃度で分布している。特にさび層と地鉄の界面に濃化している。

T328では、Ca、Pおよび土砂などに由来すると思われるAlとSiはさびの表層部に蓄積している。さび内部に含有される主要元素は腐食を促進する効果を有するClである。

## 4. 考察

T388のさび層の物理構造的特徴は、以下のように記述できる。

- ①約300μmの厚さを有する、地鉄に強固に密着した緻密な層である。
  - ②さび層を構成する主要な結晶性物質は $\text{Fe}_3\text{O}_4$ であり、その他X線的非晶質鉄化合物を含有している。
  - ③PおよびCaを比較的高いレベルで含有している。
  - ④ $\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$ を微量に含んでいる。
  - ⑤CaおよびPが層状に高い濃度で分布しており。特にさび層と地鉄の界面に濃化している。
- 以上のことから、酸素供給の少ない土中で後述するCaやPの効果により防食性の高いさび層が形成され始めたため、腐食により溶出した $\text{Fe}^{2+}$ イオンは十分に酸化されにくく、 $\text{Fe}^{2+}$ と $\text{Fe}^{3+}$ の混在するスピネル型酸化物である $\text{Fe}_3\text{O}_4$ が緻密なさび層を形成したと考えられる。通常、酸素が十分供給される大気環境におけるさび生成変態過程は、



となり、3種の鉄酸化物が形成されるが、水中や土中では一般に酸素分圧が低いため $\text{Fe}^{2+}$ の酸化が十分に進行せず、 $\text{FeOH}^+$ から $\text{Fe}_3\text{O}_4$ が生成しその後長期間にわたり安定的に存在していたと考えられる<sup>(1)</sup>。

なお、出土した鉄釘を密閉したポリ袋にシリカゲルとともに1年間保存した結果、T388と同等の腐食が軽微な鉄釘はほとんどその外観に変化は見られなかった。一方、T328のように著しい腐食が認められた鉄釘やT328よりやや腐食が軽微であった鉄釘には、1年間の乾燥大気中での保存により新たなさびが発生した。これらの新たなさびの発生は、土中に埋蔵された鉄釘が酸素分圧の高い大気中に置かれたためであると考えられるが、PやCaの濃化した $\text{Fe}_3\text{O}_4$ を主体とするT388のようなさび層は大気中でも変化せず、その高い防食性と安定性が指摘できる。

T388のさび層の防食性が高いことは、主としてPおよびCaの濃化に起因すると考えられる。Pある

いはリン酸イオンは溶出した  $\text{Fe}^{2+}$  イオンの  $\text{Fe}^{3+}$  イオンへの空気酸化反応を促進してさび粒子の微細化を促進すると考えられる<sup>(2)(3)(4)</sup>。このことにより、さび層が緻密となり腐食環境を遮断する効果を有すると考えられる。一方、Ca はさび層の pH を上昇させる。pH が上昇すると鉄酸化物の溶解度積が低下するため、溶出した  $\text{Fe}^{2+}$  イオンが酸化物として早期に沈殿する。また、形成されたさび層の安定性も高く、緻密なさび層が安定して存在した結果、地鉄を保護する役割を果たしたと考えられる。

なお、P および Ca は地鉄にも含まれていたが、T388鉄釘がほぼ原型をとどめていることと、さび層が約  $300 \mu\text{m}$  と厚いことを考慮すると、地鉄の腐食によるそれらの元素の供給のみでは、さび層中の濃縮を説明することは困難である。したがって、火葬場の環境側から供給された P および Ca がさび層に濃縮し、鉄釘を約 500 年間保護したと考えられる。第 5 章に述べたように、土葬の場合に墓地から出土した鉄釘には原型をとどめているものが多くほとんど腐食していた。今回調査した火葬場では約 600 回火葬が行われていたと推定されているが、T388鉄釘のさび層に認められた P および Ca の濃化は火葬場の特徴であり、そのために土葬の場合と異なり鉄釘が原形をとどめていたと推定される。

大気中で鉄鋼が腐食した結果生成する X 線的非晶質物質は、メスバウア分光法と X 線回折法を併用した最近の調査の結果、約 15mm 以下の粒径を有する超微細結晶からなる  $\alpha$ -FeOOH を主体としていることが指摘されている<sup>(5)</sup>。T388に認められた X 線的非晶質物質は、検出された結晶性物質が平均 2.7 倍の原子価を有する鉄の化合物である  $\text{Fe}_3\text{O}_4$  であったことを考慮すると、超微細  $\text{Fe}_3\text{O}_4$  を主体とすると推定される。

$\alpha$ - $\text{Fe}_3\text{O}_4$  が微量含まれていることは以下 2 つの可能性が指摘できる。一つは火葬による温度上昇により、火葬時に生成していた表面酸化物の脱水反応が生じ  $\alpha$ - $\text{Fe}_3\text{O}_4$  が生成した可能性である。この場合、ある程度さびた鉄釘を使用したと考えられる。もう一つは、鉄釘に  $\alpha$ - $\text{Fe}_3\text{O}_4$  を主成分とする赤色顔料が塗布されていた可能性がある。いずれにしても、今後考古学的観点からの知見と対比する必要がある。

一方、T328のさび層は以下の特徴を有する。

- ①地鉄はほとんどさびになっており、きわめて厚く欠陥の多いさびの集合体である。
- ②さび中には Si および Al の酸化物を中心とした相当量の土砂を含んでいる。さび構成物質としては、X 線的非晶質および  $\alpha$ -FeOOH を主体としており、T388で多量に検出された  $\text{Fe}_3\text{O}_4$  は少量であった。
- ③さび内部に含有される主要元素は Cl である。Ca、P および土砂などに由来すると思われる Al と Si はさびの表層部に蓄積している。

T328のさび中に検出された  $\text{Fe}_3\text{O}_4$  が少量であったことから、このさびは T388 に比較して良く酸化されたと考えられる。Ca や P は主として表層の土砂に取り込まれていたことから、前述したさび層の防食性を向上させるそれらの元素の効果は期待できない。すなわち、T328 は Ca や P が供給されにくい位置において腐食した結果、防食性が低いさびが生成し、比較的酸化されやすい環境条件の下ほとんどの地鉄が腐食し、結果として厚く粗雑なさびが形成されたと考えられる。

## 5. 結論

- (1) 腐食が軽微であった T388鉄釘のさび層は緻密な  $\text{Fe}_3\text{O}_4$  を主体としている。このさび層は、P および Ca の濃化に起因して高い防食性を有すると思われる。鉄釘の化学組成を考慮すると、この P および Ca は火葬場の環境側から供給された可能性が指摘できる。
- (2) 著しく腐食した T328鉄釘のさび中には、ほとんど P および Ca が濃化しておらず、このことが T388 と対照的にほとんどの地鉄がさびに変化した主因であると考えられる。

表33 鉄釘の化学組成.(mass%)

C	S i	M n	P	S	C u	N i	C r	M o	C a
0.005	<0.01	<0.01	0.037	0.003	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.001

表34 鉄釘のさび層構成物質.(mass%)

	$\alpha$ -FeOOH	$\beta$ -FeOOH	$\gamma$ -FeOOH	Fe <sub>3</sub> O <sub>4</sub>	その他の物質*	$\alpha$ -Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>
T388	3.8	0.0	0.8	45.5	49.9	微量あり
T328	19.3	1.3	0.5	9.0	69.9	検出されず

\* 非晶質さびおよび土や砂を含む。T328では SiO<sub>2</sub>が検出された。

表35 鉄釘さび層の化学組成.(mass%)

	P	C a	S i	A l	C l
T388	0.86	0.78	—	2.10	0.87
T328	0.40	0.30	26.40	5.40	0.60

### 謝辞

本研究を遂行するに当たり、貴重な試料をご提供いただいた市本芳三技師をはじめとする(財)大阪府文化財調査研究センターの方々に感謝する。また、試料作製にご協力いただいた(株)京都科学 鈴木重夫 殿、今西寿光 殿に感謝する。また、本研究は、文部省科学研究費補助金「課題番号 10875144」(萌芽的研究)によってなされた。記して感謝の意を表する。

### 参考文献

- (1)長野博夫、山下正人、鈴木重夫:材料、44, 1314(1995)
- (2)E.P. Egan, Jr., Z.T. Wakefield and B.B. Luff: J. Phys. Chem., 65, 1265(1961)
- (3)J. King and N. Davidson: J. Am. Chem. Soc., 80, 1542(1958)
- (4)H. Kihira, S. Ito and T. Murata: Corros. Sci., 31, 383(1990)
- (5)山下正人、三澤俊平、H.E. Townscnd, D.C. Cook:日本金属学会誌、印刷中

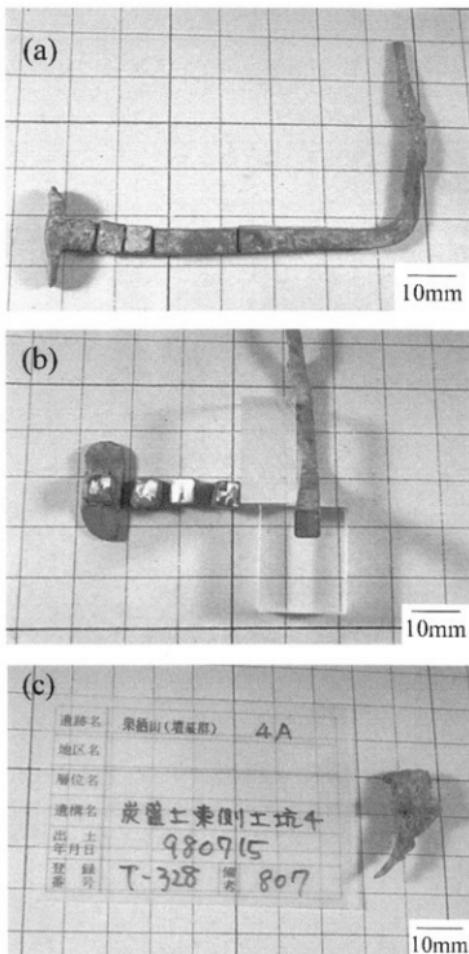


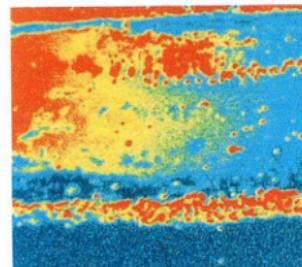
写真15 T 388(a), (b) と T 328(c) 鉄釘の外観

SEM



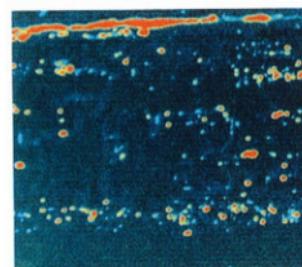
O

Ca



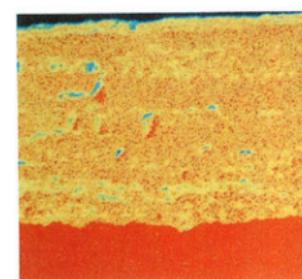
P

Al



Si

Fe



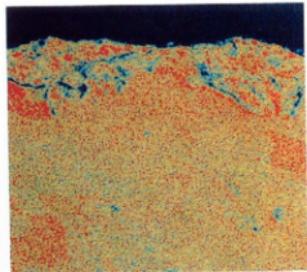
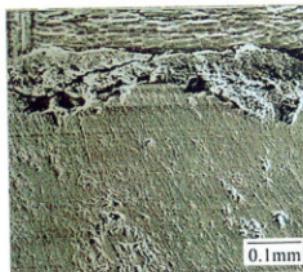
Cl

T-388

Higher concentration →

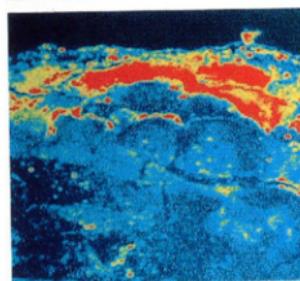
写真16 T 388のさび層中の主要元素分布

SEM



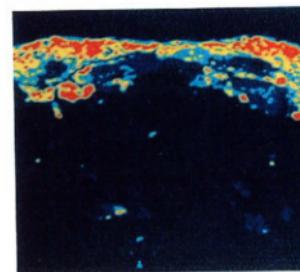
O

Ca



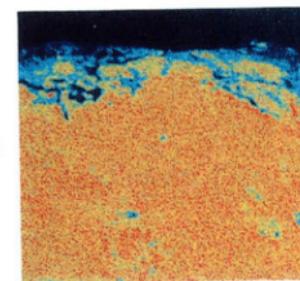
P

Al

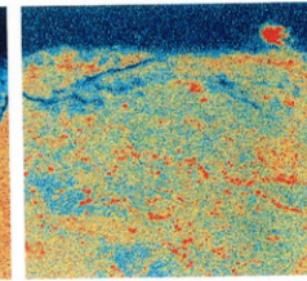


Si

Fe



Cl



T-328

Higher concentration →

写真17 T 328のさび層中の主要元素分布

## 第9章 総括—栗栖山南墳墓群の変遷とその歴史的空间—

### 第1節 古墳群および古代墓

#### 1.はじめに

これまで記述してきたように、栗栖山南墳墓群は600基の中近世墓が検出された墓地跡であるが、さらにその前代に6基の古墳および木棺墓・火葬墓等の古代墓も検出されている。

総括として、まず本節では古墳群およびそれに継続すると思われる古代墓について、その構造および変遷を検討したい。その後、まとめとして歴史的、地域的位置づけについて若干考察する。

#### 2.各古墳の属性の抽出と整理

古墳群の構造・変遷を検討するために、まず各古墳の属性を抽出し整理することで、その共通点(および相違点)を浮かび上がらせる必要があると思われる。

各古墳の属性として、(1)立地、(2)墳丘、(3)外部施設、(4)石室、(5)墳丘と石室の築造基準、(6)遺物という6項目で考えることにした。分析対象は6基の古墳であるが、鉄釘の類似、位置関係から古墳群と同時期と推定される木棺墓1も共に検討したい。

##### (1)立地

立地は、さらに古墳が位置する標高・地形、各古墳間の距離に分けて考えられる。

総体的に見ると、茨木川へ向かって伸びる尾根中腹の南端から東側縁辺にかけて、6基が線状に連なるような形で分布しており、尾根の中央部からは古墳が検出されなかった。微視的に見ると、3・4号墳がほぼ平坦面、5号墳から北が傾斜がきつくなっている、6号墳が最高所に位置し非常な急斜面に築かれている。各古墳の間隔は、約10~20mと比較的距離を保って存在している。ただ、その内で、5号墳、1号墳、2号墳、木棺墓1の間が近接した位置関係であるのが目に留まる。

##### (2)墳丘

墳丘は、さらに形態・規模・構築技法に分けて考えられる。

形態 まず、墳丘を画する溝を有する1・3・4~6号墳と、有しない2号墳・木棺墓1に分けられる。そして、墳丘があると思われる古墳については平面形と立面形から考えることができる。

平面形は区画溝から考えると、方形もしくは台形を呈する1・5・6号墳と、やや不整な円形または方形を呈する3・4号墳に分けられる。4号墳は方形と捉えることも可能であり、中間的な形態というように捉えることもできる。また、5・6号墳は、東西辺に比べると南北辺に長く、南辺が北辺に比べてやや長い台形を呈するもので、より類似性が高い。

次に、立面形でみると、6号墳は盛土により3段の墳丘を造り、その前面にはテラスを一段設けるという、3段築成の古墳である。その1・2段目は、一部列石を使用して造られている。他の古墳は、墳丘盛土が残存していないため断言はできないが、おそらく顯著な段築はなかったと思われる。

規模 区画溝がない2号墳および木棺墓1は、盛土があったとしても他の古墳に比べて小さかったと思われる。他の古墳は区画溝および盛土から考えると、6号墳が一番大きく、次は3・4・5号墳がほぼ同様の規模で、1号墳が一番小さい。

**構築技法** 盛土がほとんど残存していない現状では困難だが、わずかに盛土が残存している5・6号墳から推定すると、まず地山に墓壙を掘削した後、石室を構築しながら盛土も合わせて積んでいったと考えができる。そうすると、斜面に位置する1・5・6号墳では、区画溝および墓壙が斜面をL字状にカットしたような形になる。斜面に造る場合の方が、より少ない土量で盛土を形成することが可能であったと思われる。しかしながら、6号墳は斜面がかなり急であることと、段築を有することから他の古墳と比べると技術的に高度なものと思われる。

#### (3) 外部施設

当古墳群の外部施設は列石で2つのパターンがあり、一つが4・5号墳のように石室の開口部から左右へ展開するものである。もう一つは、6号墳のように墳丘の段築を造るために使われるものである。また、1・3号墳では開口部の西側に1石だけ外側に突き出してあり、これも列石に展開するならば前者と同様のものと思われ、6号墳では開口部から2段目の列石に繋がるものもあるので、全体的に開口部を画する意識が強いと言える。

#### (4) 石室

石室は、形態・規模・構築技法・床面の状況・開口方向といった属性から考えられる（図201）。

**形態** 横穴式石室と小石室がある。横穴式石室には袖の有無に違いがあり、3・5・6号墳が両袖で、1号墳が無袖である。両袖のものも、3・6号墳が20cm前後、5号墳が10cmにも満たないもので、いずれにせよ退化傾向にあるものと言える。4号墳は石室の石が全て抜かれているため、袖の有無までは不明であるが、あったとしても顕著ではないと思われる。また、2号墳は開口部がないため小石室としたが、横穴式石室の形骸化したものと捉えることができる。

**規模** 全長もしくは玄室長では、6→3→4→5→1→2という順で大小を付けることができる。だが、規模的には各々数値がまちまちであるので、グルーピングが難しい。

奥壁幅では、3→6→4・5→1→2号墳という順で、4・5号墳が約0.8mとほぼ同様と言える。

奥壁幅と玄室長の比率は、3・5号墳が30%前後で、1・6号墳が25%前後である。

また、木棺がいくつ配置が出来るかという視点から規模を捉えることもできよう。便宜的に木棺墓1の木棺で考えてみると、木棺が配置できる数は、3号墳が4基、4・6号墳が2基、1・5号墳が1基と考えられ、2号墳では木棺墓1と同様の木棺を置くことはできないであろう。

**構築技法** 当古墳群の石室は、墓壙を掘削してから基底石を設置しており、1・3～6号墳ではその部分を布振り状にしている。基底石の据え方を側壁で見ると、3・5・6号墳では石を縦位、1・2号墳では横位に置いている。この側壁の石の大きさは、2・3・6号墳が長細いものを使っており、1・5号墳では、長さと幅がほぼ同様で、大きさも他に比べると小さめである。

奥壁の据え方は、3・6号墳では1石の奥壁を側壁で挟み込むようにしている。一方、1・5号墳では2石の奥壁に側壁を接する形で据えている。

また、石材は基本的に粗粒花崗閃緑岩である。6号墳のものは他のものと比べると、表面に凹凸が少なく滑らかであるので、加工されている可能性がある。

石室の裏込めは基本的には、質の違う土を互層状にしている。その中で、6号墳では、この互層が一見版築に見えるほどの細かい単位で、非常に堅固である。他の古墳では、1・5号墳がやや堅固であり、他のものはそれほど土は締まった状況ではなかった。

石室の構築技法を各々の要素に細分して見てきたが、技法そのものには差がない。ただ、6号墳にお

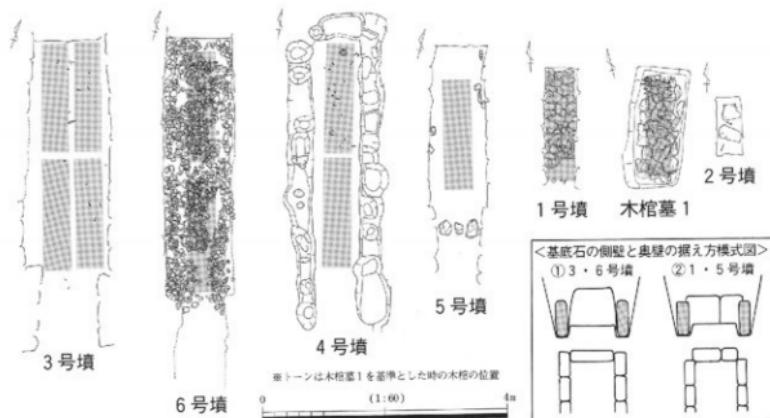


図201 石室の比較

いては、石を設置する為の布掘りも他のものよりも深く、石の積み方や奥込め等において、より丁寧であり、石材も一番大きい。

**床面** 3・4・5号墳においては、成形した地山を床面としている。6号墳では10cm前後の川原石を中心丸みのある石を敷きつめている。1号墳では、20cm前後の偏平な石で敷きつめており、これは木棺墓1でも同様の状況が見られ、古墳群と同時期と考える根拠の一つである。2号墳では、2つの偏平な石を南北に配しており、棺台と考えられる。また、5号墳の床面には袖部より約30cm南側に、3つの川原石が置かれてあり、樋石の形骸化したものと思われる。

**主軸方向** 1・2号墳はほぼ真北で、他は西に振り、その数値は3・5・6号墳が17~18°、4号墳が10°、木棺墓1が東に13°である。以上のように石室の主軸方向は微妙な差異が見られるが、大きく地形に逆らったものがないので、ここに何らかの意図を読み取るのはやや恣意的なものと言えよう。

**石室の型式学的変遷** 当古墳群の石室は形態・規模などに各々相違があるので、型式学的にその変遷を追うことができる。横穴式石室は、基本的に両袖から無袖に、そして小石室がその形骸化の最終段のものと考えられている。<sup>1)</sup>また、規模的には基本的に縮小化する傾向が指摘されており、家族墓から個人墓への転換という流れの中で理解されている。<sup>2)</sup>そう考えると、規模の縮小化を埋葬できる人数、つまり木棺を置くことができる数の減少化と読むこともできる。

以上のように考えると、3号墳→6号墳→4号墳→5号墳→1号墳→木棺墓1→2号墳という変遷を考えることができる。この変遷が時間差と考えると、奥壁の据え方および床面の疊敷の変化も対応するので理解はしやすい。しかしながら、この石室の型式差は、被葬者の階層を表すものという意見もあるので、単位群および群構造全体から見たときに再検討する必要があろう。

#### (5) 墳丘と石室の築造基準

第7章第2節で検討したように、玄室の奥壁と袖部（玄門）の中心を基準に石室と墳丘の位置関係を決めるものと、墓壇の奥壁側の下端と袖部の中央を基準にするものの2種のパターンがある。これによると、前者が1・5・6号墳、後者が3・4号墳に分けられることが判明した。

## (6) 遺物

当古墳群から出土した遺物には、土器、鉄釘、鉄錫、鉄斧、刀子、鍛冶滓があり、古墳の石室・区画溝または第1～2層から出土している。

**土器** 出土土器全体としては從米の飛鳥編年のIII～IVに相当するもので、最近の土器研究の年代観では650～690年の幅で考えることができる。各古墳ごとに見ると、4号墳の石室、3号墳の区画溝・6号墳の石室からから飛鳥III～飛鳥IVの須恵器が出土しているが、厳密には原位置を保っていない。

**鉄釘** 2・3・4・6号墳から出土している。2号墳以外は、全て後世の攪乱を受けており、厳密には原位置ではない。

2号墳では、鉄釘が全て頭部がなく、出土位置から木棺の復元は難しいが、鉄釘には木質が付着していること、棺台があることからは木棺が存在したと考える他なく、不可解な状況である。

3・4・6号墳では、20本前後の鉄釘が出土している。鉄釘は、頭部が基部よりも大きく突き出すB類と、円形の餅を呈し装飾性が高いと思われるC類に分けられる。3号墳ではB類のみ、4号墳がB・C類さらに鍔、6号墳がC類と鍔が出土しており、各々差が見られる。先述したようにこれらの古墳では、石室の規模からは2体以上の埋葬が可能だが、鉄釘の出土状況・本数からでは断定ができない。

木棺墓1からは43本の鉄釘が出土し、B類とC類がある。鉄釘の配置から復元すると、170×40cmの木棺で、外から見える部分が全てC類で、外から見えない底板のものがB類を使っており、蓋もC類で打ちつけている。この内C類の鉄釘は6号墳のものと類似しているので、古墳群と同時期と考えられる。

他に3号墳の石室からは平根形方頭式鉄錫が出土しており、7世紀以降に多くの形態だが、畿内で出土数が少ない。1号墳の石室の開口部から鍛冶滓が出土しており、供獻された可能性もある。他に、刀子、鉄斧が出土しているが、堆積層からの出土であるので、古墳のものは断定が出来ない。

## 3. 群構造の検討とその諸問題

### (1) 分析方法とその問題点

前項の検討を踏まえて、当古墳群の群構造の分析を行っていくが、その前提としてその方法に関する問題点を若干整理しておく必要があると思われる。

古墳群および群集墳の群構造は、水野正好氏の画期的な分析を代表として様々な研究が行われてきた。<sup>3)</sup> この群構造の分析は、有機的な関係が想定できる数基の古墳を「単位群」として抽出し、その単位群間の相互関係を比較するという方法を取るものが多い。しかし、その同様な方法においてさえ、同一の古墳群でも様々な見解が出されている。このことは、森本徹氏が指摘するように、古墳が有する属性のどれを重視するかの相違に起因するものと思われる。

そこでより妥当的な群構造を構築するためには、どれか一つの属性を重視するのではなく、前項で挙げた様々な属性を踏まえて検討する必要があろう。

### (2) 単位群の抽出と各単位群の構成

当古墳群でもまず単位群の抽出を行い、その単位群間の相互関係を比較するという方法で行う。

**単位群の抽出** この単位群は、立地から考えたときに有機的関係が想定できるものを一単位群とする。この一単位群は、基本的に同一集団によって造営されたと考える。そう考えると、平坦面に隣接して造られている3・4号墳が一単位群とまず捉えられる。他の古墳は、南斜面に線状に並ぶように位置しているが、その中では6号墳がやや東にずれており、最高所に造られていることから分けられる。そし

て、全体的に散漫な分布を示すなかで、1・5号墳の近接関係が注目されるのでこれも一単位群とする。

2号墳と木棺墓1は近接しているので、これを一単位群として設定することは可能である。しかしながら、2号墳は1号墳とも近接しており、さらに石室の主軸方向が同一であるので、1・5号墳と同様の単位群に含むことにする。次に木棺墓1だが、鉄釘においては6号墳のものと類似しているが、床面の疊敷においては1号墳と共通するものである。だが、立地的には両者の中間に位置しており、何方かの群に限定することは難しい。

以上のことから、立地的にはA群（3・4号墳）、B群（1・2・5号墳）、C群（6号墳）と捉えることができる。また、木棺墓1はB・C群のいずれかに決めがたく、逆に言えば両群の関連性の強さを表しているものと言える。以下、この各単位群の構成について検討を行いたい。

**A群の単位構成** 立地的には、平坦面にあるので他の単位群よりも良好な場所にあるといえる。墳丘は規則的に差がなく、墳形が他の古墳と比べ不整である点で共通している。石室では、3号墳が4号墳に比べ、奥壁幅が広く木棺が4基置くことが可能であること、岡袖が明瞭であること等から、型式学的には古相といえる。よって、墳丘・石室で見ると、3号墳が4号墳よりも古相ということもできる。いずれにせよ、他の単位群に比べ内容的に均質的である。

**B群の単位構成** 立地的には、斜面の縁辺部に近接して位置しているので、造営する場所が規制されているように思われ、他の単位群より不利な場所と言える。各古墳は、墳丘および石室に明瞭な差があり、それを時間差で捉えると墳丘の規模が大きく、石室がより古相である5号墳から北へ向かって築造された一群と考えることができよう。ただ、2号墳は規模が小さいので小児、または副葬による埋葬とするか、頭部のない鉄釘から改葬墓とするなどが考えられるが断定ができない。

**C群の単位構成** 立地的には、急斜面に造られたという点では不利な場所にあるが、最高所に造られているという意味では他の単位群とは隔絶している。先述したように立地および木棺墓1の存在からB群との何らかの関連性が想定できる。内容的に、立地・墳丘・石室共に隔絶した一群と言える。

### （3）各単位群の併行関係

以上のように、主に立地で分けた各単位群は、その内容において各々差異があるものであることが判明した。それでは、次にこの3つの単位群の併行関係を検討してみる。その方法としては、まず出土土器の年代から検討することが考えられる。

**古墳群の時期幅** 土器の型式では飛鳥III・IVのものが出土しているので、650～690年程度の時期幅で考えることができる。だが、出土土器が少ないとここれが古墳群の時期を表しているかは判断しがたい。そこで、火葬墓が8世紀前半であるので、古墳群をこの時期まで下げる考えることもできる。

細かく言うと、4号墳では飛鳥III、3・6号墳では飛鳥IVの須恵器が出土しているが、石室の型式が合致しない。しかし、土器の微妙な型式差が必ずしも造営時期の差であるとも限らない。また、鉄釘の出土状況からでは断定できなかったが、追葬の可能性も考えなければならないであろう。いずれにせよ、土器・石室の微妙な型式差を即時期差とするのは難しいといえる。しかしながら、B単位群のように明らかな石室の型式差があるものは、時期差を示していると考えたい。

以上から、古墳群は7世紀後半を中心に形成されたと考えるのが妥当と思われ、3・4・6号墳より明らかに後出する2号墳や木棺墓1に関しては、火葬墓が始まる前までの幅で考えることができよう。

**各単位群の併行関係** 以上から、当古墳群の時期幅を最低50年、長く見て70年程度と仮定して、各単位群の併行関係を検討してみる。

A群は、尾根の先端で平坦面に立地すること、石室の型式が他の単位群よりも古相であることを考えると、単位群全体としては最初に形成されたと思われる。だが、3・4号墳間で時期差があったかは断定がしがたく、B群に比べるとそれ程差がないものと考えられる。

B群は立地的には一番不利な場所であること、石室の型式ではより新相であることから、少なくともA群よりは形成が遅かったと考えられる。この群は何度も述べてるように、5号墳→1号墳→2号墳という順序で造営されたものと思われる。

問題となるのはC群で、まず他の単位群より内容的に隔離していることが挙げられる。先に挙げたように立地・墳丘においてはB群と関連が深いことに注目すると、石室の型式を踏まえたときにA群よりはやや形成が遅く、B群よりも前に形成された可能性がまず考えられる。しかしながら、全ての古墳が見渡せる立地であること、構築技法自体が共通しながらより高度で丁寧であることなどからすると、古墳群の最後に造られたとも考えることもでき、どちらかに限定することは困難である。

木棺墓1は1号墳の礫敷、6号墳の鉄釘に類似しているが、墳丘を有さないと思われるので、両者よりも後出するものと考えられる。そして、石室の変遷を踏まえると、伸展葬による埋葬が不可能な2号墳よりも古いものと考えられる。

#### (4) 古墳群の群構造と諸説との対応

これまでの検討を踏まえて、当古墳群の構造・変遷についてまとめてみる（図202）。

当古墳群の群構造 今まで見てきたように、当古墳群は主に「立地」から3つの単位群に分けることができる。各群の併行関係は各群の「立地・石室・墳丘」から想定され、A群がB群より先に形成されたのは確実であるが、C群が両者の中間かもしくは最後の2通りの可能性が指摘できる。古墳群の形成時期は「土器」から7世紀後半が中心と言えるが、各群の厳密な時期を比定するのは困難である。だが、B群は「石室」から時間差を想定できることから、1世代ではなく2～3世代程度の時間幅を考えたい。

各群は「立地・石室・墳丘」の側面を細かく見た場合には異なる内容を持っている。これを集団の個性とするならば各集団は階層があり、特に6号墳を有するC群が隔絶していると考えられる。ただ、B・C群は互いに関連性が強いので、同一の群である可能性も考えられる。

以上から、栗栖山南古墳群は7世紀後半を中心に2または3つの階層が異なる集団が、2～3世代に渡って造墓が行われた結果と考えることができる。

諸説との対応 当古墳群の構造・変遷を提示したわけであるが、既往の研究の見解を参考にした場合に異なる考え方方は可能であろうか。森本氏が指摘することには、当古墳群のように7世紀代に形成を開始する古墳群では、「短期形成説」と「長期形成説」の大きく2つの見方があるようである。<sup>4)</sup>

まず「短期形成説」で見れば、7世紀代の古墳群は基本的に同時に造られるとして、埋葬施設・位置関係から（3・4）、（5・1）、（2・木棺墓1）、（6）と4群に分けられる。埋葬施設の違いが階層差を表すので、当古墳群は各々階層が違う4家族が一齊に造墓を開始した群であると考えられる<sup>5)</sup>。しかし、先述したように土器の型式幅・B群の様相から全く時間差を認めることは不自然であろう。

次に「長期形成説」であるが、戸主の死に際して累代的に造墓が繰り返されたとするが、当古墳群では各小単位群の基數がそれ程多くないので、例えば100年もの長期の造墓を考えがたい。

他に、田中勝弘、安村俊史両氏は7世紀代の古墳が夫婦单位で営まれたものと考えている。<sup>6)</sup>この考えは非常に魅力的であるが、当古墳群の鉄釘の出土状況では、実際に2体以上埋葬が行われたかは断定できない。

C群の位置づけにおいては2通り示したわけであるが、最後に造られたとする見解には次の考えが参考になる。安村俊史氏は、群集墳形成の最終段階に横口式石槨および岩屋山型石室を主体とする古墳が築かれる例を挙げており、6号墳の隔絶性をこのように理解することも一考といえる。<sup>7)</sup>

以上のように、当古墳群でも幾つかの見解が考えられ、細部については断定できない部分も多いが、7世紀後半を中心に形成された古墳群であること、それが幾つかの単位群に分けられるることは大方妥当と言えよう。

#### 4. 古代火葬墓群の検討

さて当墳墓群では、古墳群形成、8～9世紀にかけて火葬墓1を始め、数基の火葬墓および荼毘施設が營まれたと考えている。まず、この古代火葬墓群の様相を示し、古墳群との関連を検討する。

##### (1) 古代火葬墓群の様相

古代の火葬墓の遺構としては、8世紀中葉ごろの火葬墓1のみしか検出していない。しかし、前章まで検討してきたように、荼毘施設と考えられる焼土坑や藏骨器と思われる土器の存在から、当該期に数基の火葬墓が造営された可能性が考えられる。ここではその具体相を検討していきたい。

第7章第1節で検討したように、藏骨器と思われる土器も本来火葬墓であったことを前提にして考える。また、同章第3節で検討したように、荼毘施設としたものは焼土坑7基と、5号墳の石室である。焼土坑は、土坑の壁・床面が被熱しており埋土の下層に多量の炭を含む遺構である。また、5号墳の石室にはC<sup>14</sup>測定で680～900年と想定される炭層が見られ、これも荼毘を行った痕跡と考えたい。

確実な遺構である火葬墓1は、藏骨器が土師器甕と須恵器壊蓋をセットとし、8世紀前半のものと考えられる。この火葬墓1の北東約10mに焼土坑7が位置し、両者を関連付けると焼土坑で荼毘を行い、焼骨を藏骨器に埋納したという過程が復元できる。この類例として、福岡県朝倉町大追遺跡では古墳が營まれていないが、8世紀中葉

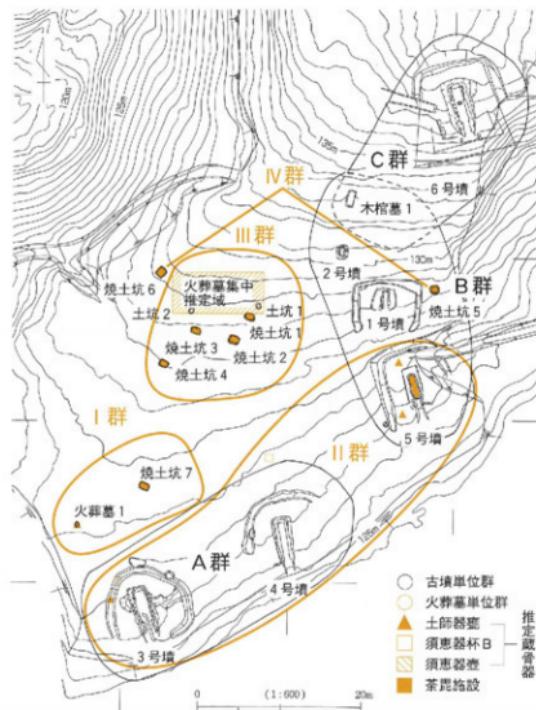


図202 古墳群・火葬墓群の単位構成

～9世紀前半にかけて「火葬土壙」と称される茶毘施設と藏骨器が各々に塊まって形成されており、同様のセット関係が考えられる。<sup>9)</sup>

このように、焼土坑と火葬墓の位置関係に目を向ければ、尾根中腹の中央部に4基集中している焼土坑から南側で、須恵器壺が4個体程度破片であるが出土しているので、焼土坑群の北側に火葬墓が営まれる情景を想定できる。この焼土坑群のすぐ北に2基の炭が充填された土坑が検出されている。この内、土坑1から須恵器小壺と被熱した鉄釘2本が検出されており、本来藏骨器が納められていた土壙であった可能性が考えられる。また、小林義孝氏が指摘するような火葬時に生じた灰や炭を埋めた遺構とを考えることもでき、いずれにせよ火葬に関する遺構と思われる。よって、火葬墓1と同様な関係をもつ火葬墓がもう4基あった可能性が指摘でき、時期的には8世紀前半～中葉のものである。

一方、土師器壺が3・4・5号墳の周囲から3個体程度出土している。先述したように、時期的にはおよそ8世紀代のもので、火葬墓1から推定してこれらも藏骨器であったと考えたい。そうすると、位置関係からは5号墳の石室で茶毘を行ったものと思われる。他に、8世紀末～9世紀初頭の須恵器壺Bもあり、これも藏骨器と仮定するとここで茶毘に付したと考えられる。

また、焼土坑5は先の焼土坑と異なり平面形が方形で、9世紀後半の猿投産灰釉陶器が出土している。焼土坑6はこれと形態的に類似するので同時期のものと思われる。一方、9世紀後半頃と限定できる藏骨器と思われる土器の出土はなく、この時期においては茶毘施設だけが営まれた可能性が指摘できる。

### (2) 火葬墓群の単位群

以上のような様相が想定できる古代火葬墓群であるが、これらは立地・藏骨器・茶毘施設から4つの単位群で捉えることができる(図201)。

I群は、3号墳より北約10mに位置する茶毘施設として焼土坑7・藏骨器として火葬墓1の土師器壺のセットで捉えることができる。II群は、茶毘施設としては5号墳の石室、全てが藏骨器であるかは断定できないが、3～5号墳に土師器壺3点および須恵器壺B2点が考えられ、一つの茶毘施設に複数の藏骨器といった関係が想定できる。III群は、古墳が存在しない尾根中腹の中央部に集中するもので、茶毘施設と藏骨器である須恵器壺のセットで、4基の火葬墓が推定できる。

IV群は、茶毘施設である焼土坑5・6で位置的には離れているが、形態的に類似するので何らかの関係が考えられる。しかし、これらと関連付けられる藏骨器として想定できるものはない。

I～III群は藏骨器の年代が8世紀代であることは確かで、IV群が焼土坑5が9世紀後半であることから、時期によって火葬の仕方が異なっていた様相が想定できる。8世紀代と考えられる3つの単位群は、I・II群が土師器壺、III群が須恵器壺と藏骨器に違いがあることが分かる。既往の火葬墓の研究を参考にすると、土師器壺よりも藏骨器専用の須恵器壺A(茶壺)の方が階層的に優ると考えられ、各群は階層の異なる集団で営まれた可能性も想定できる。<sup>10)</sup>

### (3) 古墳群と古代火葬墓群の関連

さて、この火葬墓群と古墳群の関係はどのように捉えることができようか。まず前提として、火葬墓は8世紀前半には造墓が開始されたと考えるので、7世紀後半を中心に形成された古墳群とは全く関係がないものと捉えることは不自然であり、立地においても古墳を意識しているように窮るので、大きく捉えて火葬墓は先行する古墳を意識して造墓されたと考えることにする。

さて、両者を立地から考えると、I群は3号墳に近く、II群は3～5号墳と関連していると考えられるが、III群は特に特定の古墳と結び付けることは難しい。そこで藏骨器の違いに目を付けると、須恵器

庶Aを含むIII群がより優位と考えられ、C群との関連を想定することができる。いずれにせよ、古墳群と同様に火葬墓群でも2または3つの階層の異なる集団によって営まれた可能性が考えられよう。

## 5. 栗栖山南古墳群をめぐる諸問題

これまで、栗栖山南古墳群・火葬墓群の構造、および両者の関係について検討してきた。その結果、火葬墓群の変遷・構造については断定できない点があるが、一定の見解を提示できたことと思う。そこで、歴史的・地域的な位置づけについて若干の考察を行うことで、本稿のまとめとしたい。

### (1) 終末期群集墳としての栗栖山南古墳群

多くの群集墳は、7世紀初頭～中葉には造墓を停止するが、栗栖山南古墳群は7世紀後半に営まれた古墳群である。このように7世紀代に新規に営まれる群集墳は、「終末期群集墳」と呼称されている。この定義は各論者によりやや差異があるが、①7世紀末には遅くとも造墓を停止すること、②通常の群集墳と異なり、より急斜面または高所に密集して造られること、③墳丘が極めて不整形なものが多く、顕著でないこと、④埋葬施設は小型の横穴式石室が主であるが、小石室、木棺直葬、木炭櫛等多様であること、⑤副葬品が非常に貧弱であることの5点を特徴と考えることができる。<sup>11)</sup>意義付けとしては、異なる見解もあるが、通常の群集墳では家族墓であったものが、個人墓として展開する様を表出したものと大きくとらえることが出来よう。

以上挙げたような終末期群集墳の特徴と比較すると、当古墳群もこの範疇で捉えられるものである。だが、形成時期がやや遅い可能性があること、隔絶した6号墳の存在など、今まで指摘されていたように終末期群集墳間における多様性がより明確になったことと思われる。この多様性は造営した集団またはその地域性に起因するものと思われ、今後の課題としてはこの個性を追求することが挙げられよう。

### (2) 終末期群集墳から古代の火葬墓群

このような終末期群集墳に後続して、8世紀代の火葬墓が検出されている例が最近の調査で増加しつつあり、安村氏が検討しているように柏原市田辺古墳群・平尾山古墳群雁多尾畠第49支群、太子町田須谷古墳群、東大阪市墓尾古墳群といったものが挙げられる。<sup>12)</sup>また、第7章第3節で検討したように、茶毘施設と思われる焼土坑が検出されている古墳群も入れると、兵庫県山本奥古墳群、大津市横尾山古墳群といった例も同様に考えることができる。

群集墳で検出される火葬墓は、当墳墓群と同様に8世紀前半・中葉の藏骨器を使用する火葬墓が1～数基営まれている点で共通している。また、火葬墓近辺に焼土坑が検出されることが多く、まさに当墳墓群と同様に茶毘施設と藏骨器がセットになった関係が想定できる。また、古墳と火葬墓の数を比べれば、独立墳的な要素が強い2基で形成される田須谷古墳群を除けば、火葬墓の数が複数であるので、古墳群と火葬墓群に共通する単位群が想定できる可能性もある。さらに、雁多尾畠第49支群では、当墳墓群と同様に藏骨器に須恵器皿と土師器皿を使用していることも共通した要素と言える。調査例がすぐない現段階では被葬者集団の性格を断定することは難しいが、少なくとも河内・摂津では終末期群集墳から継続して類似する内容の火葬墓を営む集団が存在したことは言える。

### (3) 地域における栗栖山南古墳群

以上のように、当墳墓群で検出された7世紀後半に形成を開始する古墳群は、個々には多様性がありながら、いわゆる終末期群集墳の範疇で捉えることができ、またその後継続して火葬墓を営むことは、少なくとも河内・摂津で共通するものであることが判明した。

さて、当古墳群が所在する三島、北摂地域における位置づけは、付章で森本氏が詳細に行っているので、ここでは簡単に触れるだけにする。当地域では、水域ごとに分かれて群集墳が営まれており、造営集団の基盤を表しているものと考えられる。茨木川流域においては、下流では6世紀代に形成の中心がある左岸側に新屋古墳群、右岸側には將軍山古墳群・真龍寺古墳群があり、上流になると森本氏に終末期群集墳の可能性が指摘される鶴井北古墳群、そして当古墳群と、時期が下るとより山間部に形成していった可能性も考えられる。

だが、6世紀代に形成の中心がある古墳群でも、7世紀には小石室が築造されているので、下流域に6世紀代に群集墳を営んでいた集団が新たに墓域を求めたというよりも、7世紀後半になって造墓が許された集団であったと考えたほうが妥当と思われる。そして、この終末期群集墳を営めた集団は、火葬が始まったとされる700年に近い8世紀前半に継続して火葬墓を造営しているので、安村氏のような渡来系氏族を想定するかは別として、有力な集団であったことは確かであろう。今後は、このような終末期群集墳の個々の特性・地域性に関しての追求が必要と言えよう。

#### 註

- 1) 横穴式石室の袖の形骸化については、当古墳群と同時期の群集墳での状況を踏まえて考えられることが多い。また、白石太一郎氏はこの傾向を畿内の大型横穴式石室において、各部分の比率を数値化することでも指摘している。  
白石太一郎 1966「畿内の大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』第42・43合併号 古代学研究会  
1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集、国立歴史民俗博物館
- 2) この代表的な考え方として水野正好氏の論考があり、基本的にこの理解に基づいて群集墳を分析したものも多い。  
水野正好 1974「雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格」『古代研究』4 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室
- 3) 前掲註2) 水野文献
- 4) 森本 順 1999「群集墳の変質からみた古代墳墓の成立過程」『古代文化』第51巻第11号 (財)古代学協会
- 5) 木下保明 1985「『7世紀型古墳群』について」『考古学論集』I 考古学を学ぶ会
- 6) 田中勝弘 1988「終末期古墳群の問題—群構成の分析とその意味—」『横尾山古墳群発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 7) 安村俊史 1990「終末期群集墳の一形態」『柏原市歴史民俗資料館報』創刊号 柏原市歴史民俗資料館
- 8) 安村俊史 1995「群集墳と横口式石槨」『古代学研究』第132号 古代学研究会
- 9) 狹川真一 1999「北部九州における火葬墓の出現」『古代文化』第51巻第11号 (財)古代学協会
- 10) 小林義孝 1999「古代火葬墓研究の分析視角」『古代文化』第51巻第11号 (財)古代学協会
- 11) 黒崎 真 1980「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集』VII 奈良国立文化財研究所
- 12) 服部伊久男 1988「終末期群集墳の諸相」『橿原考古学研究所論集』第9 奈良県立橿原考古学研究所  
森本 順 1995「大阪の終末期群集墳」『古代学研究』第132号 古代学研究会
- 13) 安村俊史 1999「火葬墓を内包する終末期群集墳」『古代文化』第51巻第11号、(財)古代学協会

## 第2節 中近世墓群

### 1. はじめに

7世紀の古墳群、8～9世紀の火葬墓群が営まれたあと、再びこの地で墓が営まれるのは13世紀後半からである。その後16世紀まで約500基を越える墓が造られ、その後も少数ではあるが19世紀まで造墓が行われる。本稿では、まず、第5章、第7章で記述したことを踏まえて、中近世墓群の構造と変遷について総括する。最後に、この墓群をめぐる歴史的空間について若干考えることにする。

### 2. 中近世墓群の概要

当墓群の概要を項目毎に整理して、その構造と変遷を記述する際の前提および課題として抽出する。

#### (1) 墓の構造（第5章第3・5節、第7章第6・7節）

墓は地上施設である石組と地下施設である墓壙の組み合わせにより構成される遺構である。基本的に「石組と墓壙が対応する墓」であるが、「石組のみの墓」「墓壙のみの墓」と思われるものもある。

石組は、外周に枠を有するもの（I類）と無いもの（II類）に大きく分けられる。I類は、①石造物を据えないものの、②五輪塔を据えるもの、③石仏を据えるものの3つに細分できる。これらは、実際に石造物が原位置を留めてなくとも石組の中央部の形状から判別できるものもある。また、元からあった石組に隣接して新しい石組を造るときに、元のものを造り替えることが行われたようである。

墓壙は、总数が515基で、基本的に火葬墓と土葬墓である。

火葬墓は、269基を数えるが性格の違いにより細分している。A類は茶毬・抬骨が行われた墓壙で、その後納骨されたものもあり、196基と一番多い。B類は他所で茶毬された骨を納めた墓壙で、瓦賀羽蓋を藏骨器とするものもあり、29基を数える。C類は多量の炭だけ、または併せて焼骨も検出されるもので火葬に関する遺構と思われるが、その性格を断定できないもので44基を数える。なお、これら全てのタイプから、成人だけでなく小児・乳幼児の焼骨が検出されている。

土葬墓は、火葬墓でなく規模・形態から推定されるもので、233基を数える。A類は、主軸が概ね南北を指向し、その規模から屈葬されたと思われるもので、212基を数える。棺台・石囲いがあるものや、鉄釘や埋土から木棺の存在が指摘できるものもある。B類は、主軸が概ね東西を指向し、その規模から伸展葬されたと考えられるもので、21基を数える。基本的に木棺が使用されたものである。また、土葬墓もその規模から、小児・乳幼児が埋葬された子墓と考えられるものがある。

他に墓ではなく、土器や石造物を埋納したと思われる遺構、さらに次に述べる火葬場がある。

火葬場は、火葬墓A類とは異なりその規模・堆積状況から複数回の茶毬が行われたと考えられるもので7基を数える。この火葬場の一帯はそこから排出された焼骨混じりの炭盛土に覆われている。また、火葬墓と同様に、ここでも年齢の区別無く、火葬が行われたようである。

当墓群の墓は、基本的に石組を有するが、それらが造り替えられることで、再度墓群の構成が変わることもあり、その意味を検討する必要がある。なお、葬法には土葬と火葬があることが判ったが、それは時期的差だけではなく、同時に行われていることから、その背景をも考える必要がある。

#### (2) 墓群の構成（第5章第4節、第7章第6・7節）

当墓群の分布上の特徴は、基本的に墓が等高線に沿って東西に列状に並んでいることである。だが、部分的には散在しているところや、塊状に密集しているところもある。大略的には土葬墓と火葬墓が広く分布しているように見えるが、微視的には二者とも數基でのまとまりを持っている。また、石組は墓

域北半の残存状況が比較的良好で、石造物が原位置を留めているものが多い。このような状況から大きく幾つかの墓群を設定でき、それらはさらに数基のまとまりをもつ小さな単位により構成されていると捉えた。このような墓群の単位が何を表わしているものかを検討していく必要がある。

#### (3) 出土遺物の様相（第5章第6節1～4、第7章8・9・11節）

当墓群から出土した遺物には、土器・陶磁器・短刀・鉄釘・錢貨、温石などがある。土器には瓦器椀・瓦質羽釜もあるが土師器皿が多く、これらは13世紀後半～16世紀中葉の幅をもつが、特に15世紀後半～16世紀が多い。陶磁器には古瀬戸・備前・中国製が14～15世紀、肥前が近世で、16世紀代がなく土師器皿の傾向と異なる。これらの土器・陶磁器は、副葬品として出土するものが10基程度しかない。一方、短刀・鳥帽子は明らかに副葬品で、13世紀後半～14世紀前半のものと思われる。錢貨は224枚を数え、その大半が北宋錢であるが明錢も見られる。これらの多くは火葬場・炭盛土から出土しており、錢貨の使用が15世紀後半～16世紀に多くなるようである。また、錢貨が出土した墓7基の内5基に6枚組があり、六道錢としての意識が強いと言える。1191本もの鉄釘は基本的に木棺に使用されたもので、火葬・土葬両方に使われている。遺物の様相は、被葬者の階層や社会的背景を考える材料になるであろう。

#### (4) 石造物の様相（第5章第6節5、第7章第10節）

五輪塔は、各部位の総数が140点で、その組合せを検討すると本来、約50基ほど建てられたものと思われる。時期的には14世紀中葉から建て始め15世紀をピークとするが、16世紀のものも若干見られる。また、一石五輪塔は16点で、おおよそ16世紀代のものである。石仏は総数239点で、光背形と板碑形があり、その像容には阿弥陀如来像と地蔵菩薩像があるが、後者が1点のみである。この像容の彫刻は、1体のみが多いが2体のものもある。これらの年代は、従来の年代観からその多くが16世紀後半のものとされる。しかしながら、火葬場の炭盛土に覆われた石仏や、石仏が原位置を保っていると判断できた墓域の時期からすると、15世紀代にも石仏が建てられていた状況も想定できる。

石造物では、特に石仏の年代観が問題となるが、墓群総体で考えると、より妥当な見解が導かれよう。また、造立者の階層や時期的な背景も考えておきたい。

#### (5) 谷部の土地利用（第6章）

当墓群が広がる尾根の東西両側には小規模な開墾谷が走っている。この西側の調査を行っており、谷を埋める堆積には2枚の土壤化層が見られた。この土壤化層の上層より上には近世の遺物を含むが、その下から下層の土壤化層までの間では、古代のものもあるが13～14世紀の瓦器椀・瓦質羽釜・土師器皿などが出土した。後者の遺物は墓群がある尾根から流出した可能性もある。また、性格不明ではあるが焼土坑も下層上面に検出されていることから、墓群とは直接的に関係しない谷部においても何らかの土地利用が墓群形成初期に始まっていた可能性が考えられる。このような谷部の土地利用も、当墓群の背景を理解する上で、ひとつの材料となるものと思われる。

#### (6) 画期の設定とその様相（第7章第5・7節）

各墓壙の出土土器の時期幅から、その変遷には4つの画期があることが判った。まず、13世紀後半に土葬墓A類が営まれたことが墓群形成の開始で、ここから火葬墓の造墓が始まるまでをI期とした。この時期の墓は20～30基程度であったと推定している。II期は14世紀中葉～15世紀中葉・後半で、火葬墓全タイプと土葬墓A類が7：3程度の割合で約400基が営まれたようである。III期は15世紀後半～16世紀中葉で、火葬場が墓域の南半に造られることになる。一方、土葬墓A類も約20基が営まれている。IV期は、16世紀後半～19世紀前半で伸展墓の土葬墓B類が21基造られる。

石組や石造物は後世の改変を受けているため、この墓壙による両期を踏まえて検討することで、より具体的な様相を描くことができるものと思われる。

### 3. 小群の形成過程から見た墓群の構造

当墓群は、基本的に等高線に沿って東西に列状に並ぶ墓群によって構成されているように見える。しかし、微視的には数基の墓でまとまったより小さな単位が集まつたもので、この関係を小群・大群として理解する。この単位は、墓壙の検討でII期とした14世紀中葉～15世紀中葉・後半に形成されたものである。そこで、このII期の展開を検討するために、特に小群の形成過程を分析することにしたい。

#### (1) 前提と方法

当墓群の構造を検討するために、小群の形成過程を分析するが、その前提と方法について記述する。

まず先述したように、この墓群の大半は基本的にII期の100～150年の間に形成されたものと考えられるが、個々の墓群の時期幅を假定することができなかつた。よつて、各墓群はII期という幅で広く捉えることとするが、I期からII期に渡つて形成されたと考えられる小群も2・3ある。

次に分析対象とする小群とした単位は、第5章第4節では墓の見かけ状の分布から、第7章第6節では火葬墓と土葬墓の差異、石組みの造り替えを踏まえて各々検討したが、両者の見解ではその細部まで一致していない。ここでは、大群を第7章第6節の大群7別（図156.164）で使用するが、小群を土葬から火葬への変化も形成過程の一つと捉えたために、捉え方が異なる小群もあることを前提としておく。

分析方法は、まず小群を分布的な特徴から列状のもの、塊状に密集するもの、散在しているものの3つに分ける。その区別ごとに、小群内の切り合い関係や位置関係を中心にして、墓壙および石組のタイプ・規模・方向、石組の造り替えなどを検討することにより、各墓の先後関係や同時性を抽出する。その結果、小群内の造営順序、葬法の変化、また、さらに小さな単位が見えてくるものと考える。

#### (2) 列状に展開する小群（図203-I）

等高線に沿つて基本的には東西に並ぶもので、墓域北半の多くがこの配列をしており、特に北側最高所に位置する1群は、最も整然としている。一方、南半では少なく散在した分布である。

**列状展開の形成過程** まず、一番整然と列状に並ぶ1群の形成過程を見ていく。この大群は、南北2段の平坦面で構成されているが、北半には墓壙がほんどのないので南半について検討する。この南半の墓壙は、基本的に平坦面全体に列状に並んでいるが、2ヵ所墓壙が見られない部分が、大きくは3小群に分けられる。しかし、この部分には後に石組のみの墓が造り足されており、この平坦面全体として共有する意識があったことが考えられる。各小群の形成過程については省くが、15.16号墓などのように墓の規模・方向から2基程度のさらに小さな単位を見つけることができる。また、やや北側に位置する29.30号墓、35.37～40号墓などは立地的に後出するものであろう。なお、規模から子墓と思われる土葬墓の23.24号墓が火葬墓A類の小群の中間にあり、さらに2分できる可能性がある。

次に、切り合いから形成過程が明確に追える413～424号墓を見てみる。土葬墓である416.422号墓から形成され、その後火葬墓が造られる。この内424号墓の墓壙が30.44cmと深いタイプであることからも最初のものであろう。次に同A類の414.415、417.418、420.421号墓が各々一つの単位として認識でき、これらはその配置から東西で2小群に分けられる。最後には、東側に子墓である土葬墓の413号墓、西側に火葬墓A類423号墓、同B類の419号墓が造られ、最終的には石組の造り替えにより一列に墓が並ぶ景観が想定できる。

**小群の最小単位** この2例から列状に展開する小群は、さらに2基程度の小さな単位をもつて段階的

に形成された可能性が考えられた。この単位には、土葬墓A類である214.215号墓や火葬墓A類である519.520号墓などに明らかに2基隣接するものがあることから、小群の最小単位と考えて良いであろう。なお、この2基が展開して4基になった例として、54~57号墓、または202.206号墓の各々東側に203.207号墓を造ることなどが挙げられる。

この列状小群に見られる2基単位は、その密接した位置関係・類似する墓の構造・規模などから、これらが同時性をもったもの、つまり非常に短期間で造られたことが考えられる。そのように考えると、小群に見られる段階は時期軸として理解することができよう。

**I期を含む小群の形成過程** この2基単位の成立を考えるために、I期の墓壙を含む列状の小群を検討してみる。566~572号墓の小群は、副葬品・規模などからI期の土葬墓と思われる567.569.571.572号墓を含んでいる。この内の567.569号墓の間には、副葬品がなく規模的にII期と思われる566.568号墓が位置するので、これらは4基並ぶことになる。そして、さらに569.571号墓の間には火葬墓A類の570号墓が位置するので、やや不整列ではあるが6基が列状に並ぶことになる。571号墓は土器から13世紀後半であることが判り、火葬墓A類が14世紀中葉を大きく通過することないとすると、この小群はI期からII期にかけて形成されたものと考えたい。

ここで、よりI期の小群の状況を見るために、337~341.390号墓(図203-II)を検討する。この小群は、規模からI期の土葬墓と思われる341.340.390.339号墓が南北に並ぶように分布し、このすぐ北側に接して火葬墓A類である338号墓がある。この墓は他の火葬墓A類と比べると、I期の土葬墓と石組および墓壙の規模が類似しているので初期のタイプと考えられる。この火葬墓の西側には、これと同規模の土葬墓である337号墓が位置する。このような状況からは、341号墓から北へ順に造墓され、火葬墓が造られた段階で東西に並列する2基単位となったものと考えられる。

### (3) 塊状に密集する小群(図203-III)

墓が密集して切り合うことで塊状に展開する小群が少数あり、特に北半西側では複数見られる。

281~287.291.292号墓でこの展開を良く見ることができる。一番切り合い的に古いものは281号墓で

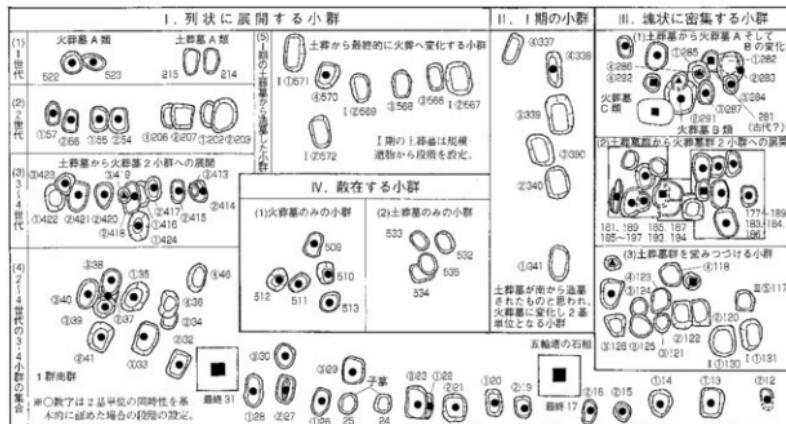


図203 II期における小群の展開モデル

あるが、中世よりも古代墓との関係も考えられるのでここで省いて考える。最初は土葬墓である282.285号墓、次に火葬墓A類の規模が大きい283.291号墓、その後小型の火葬墓A類である284.287号墓、B類である286.292号墓というように、2基単位で4つの段階を経て形成されたものと考えられる。このように、塊状の小群でも2基単位による段階的な形成が見られ、列状のものと同様の状況と言える。

このような塊状小群の中で、先の列状小群で見たような段階が下れば小群が増加・分裂するものもある。その例としては、土葬墓A類である185.187.193.194号墓から、東側の177~179.183~186.192号墓、西側の188.195~197号墓の火葬墓群の2つの小群が展開するものである。一方、土葬墓を営み続けたものもあり、I期の130.131号墓から造墓し、II期は2基単位で考えると3段階で8基、そしてIII期の117号墓まで営まれる小群がある。

これら塊状に展開する小群は、周囲にスペースがあったとしても同一の場所に墓を造るので、造墓範囲が決められていたものと考えられる。また、列状小群で個々の墓自体が切り合うことがなく独立性を持っているのに対して、この塊状小群は全体として集合するという意識が強く表れたものと言える。このような違いは、藤澤典彦・瀬戸眞司両氏によると、各々石組墓の連接過程から、後者が後出するものと考えられている。ただ、当墓群では小群内の墓数、土葬から火葬への展開などが列状の小群と共通しているので、この違いは時期差よりも、例えば階層などの集団的な違いと考えた方が良いと思われる。

#### (4) やや散在した小群(図203~IV)

やや散在した分布であるが、数墓が近接しながら営まれている小群である。509~513号墓など4~6群の土葬墓A類や、532~535号墓などの5群の火葬墓A類がこの分布をとる。今までの例と比べると墓相互の結びつきが弱く感じられ、2基単位による段階的な形成が認められるものかどうかは判断しがたい。しかしながら、各々近接して営まれているので、やはり何らかの共通した意識のもとに形成されたものであろう。これらは、墓域の縁辺部に立地することが多く、列状の小群より時期的に後出するか、または、階層の違いなどと考えられる。

#### (5) 小群の構造と集団構成

小群は基本的に2基単位が幾つかの段階を経ることによって形成されたものと捉えることができたが、この小群がどのような集団構成を表しているのかを検討したい。

**家族墓としての単位** 小群の最小単位である2基単位は、その密接した関係から、かなり短期間の造墓と考えられるものである。このような状況からは、この2基単位が藤澤典彦氏が指摘するように夫婦墓として捉えることが妥当なものと思われる。

各小群は段階的に形成されているとしたが、先述した時期幅としての理解をすることが妥当であると思われる。そのように考えるならば、小群は夫婦を単位として数世代の造墓により形成された可能性が浮かび上がる。先に見たように小群の段階は、1~5程度の間で設定できるものであった。これは、II期の時期幅として想定した100~150年間の世代数を表しているものと思われる。このような理解は、佐々木好直氏が奈良県久安寺モッテン墓地で2基単位を夫婦、1世代を20年前後という前提でその変遷を分析したことと同様なものである。佐々木氏はこの分析により、この墓地が4世代の造墓により、土葬から火葬に変化したこと、世代が下るほど墓の数が増えていることから分家の過程が表れていると考えた。当墓群の小群も、このような家族墓的な性格をもったものと考えたい。

**小群の集団構成** この家族墓的展開は、密接した2基単位の登場によるものと考えると、この意識がII期の段階で生まれたものと言えよう。さらに、小群が最低2基で、多いものが10基程度であり、その

ことから、小群の墓数は、世代数の違いもしくは分家数の違いと考えられる。そう考えると、小群内の墓数が多いほうが、形成期間が長く分家が多いと考えることができよう。

当墓群では成人以外に、墓の規模、焼骨などから子供の埋葬もまま見られることを先に指摘した。この子墓の分布状況であるが、先の24.25墓のように2基単位、もしくは小群の端、そして墓域縁辺である5・6群に数基が集中するなど、子供が成人と違った意識で埋葬されていた可能性が考えられる。

これら的小群は、葬法の違いで捉えると、土葬墓の小群、火葬墓の小群、土葬墓から火葬墓に変化する小群があることが先の検討で判明した。当墓群では土葬墓から形成されるので、土葬墓を営む集団がより伝統的、火葬墓を営む集団がより新興の集団と単純には考えられる。ただ、このように土葬墓と火葬墓を全て集団差で説明できるかは、次項の墓群全体の変遷を述べる際に検討したい。

#### 4. 墓群の変遷

前項の分析により、II期における墓群最小単位である小群は、夫婦を基調とした家族墓として考えるに至った。それでは、第7章第5・7節で検討した墓壙の変遷と画期をもとに、石組・石造物・遺物などの様相を踏まえて、主に集団構成の様相とその変化について検討していきたい。

##### (1) I期〔13世紀後半～14世紀前半・中葉〕

当墓群における中世の墓地は13世紀後半に始まり、屈葬による土葬墓（A類）が尾根の高まりに形成されるようになる。この時期の墓は後代のものよりも規模が大きく、墓壙の長軸が1.2m以上、石組も一辺1.3～2.0m以上で、20～30基前後あったものと考えられる。また、石組は石造物を有さないものである。これらの墓は、尾根の稜線上に散在することから、墓道としては南からの道が考えられる。このような基本的には散在した分布のなかで、墓域南半に、先述した339～341号墓（図203-II）、567.569.571.572号墓（図203-I5）という2つの小群が認められる。なお、これらは、鳥帽子・短刀・土御器皿といった副葬品が見られることも併せて考えると、この時期の中心的な集団と捉えられる。

以上のような状況から、家族の中で選ばれた人物の埋葬を考えたい。さらに、南半の2つの小群は、先に分析したように時期幅をもつ可能性があり、2・3世代に渡っての造墓によるものかもしれない。

##### (2) II期〔14世紀中葉～15世紀中葉・後半〕（図204）

14世紀中葉には火葬墓が開始されることで、この時期に土葬墓と火葬墓が併存して営まれたことである。ただし、先にも記したように総数約400基の中で、火葬墓と土葬墓の割合が7：3であることから、火葬墓が優勢となっていく過程を描くことができる。

**火葬墓開始期の状況** 火葬墓は、A類とした茶毬を行った場を墓としたタイプが最初に営まれる。このタイプの初期の一つは、先に見たI期の土葬墓と近接して営まれる338号墓と、これに規模が類似する長軸が1.4m、長短の比率が2.5以上の平面プランが細長い68.197.331号墓である。これらは、石組の残存が不良であるが、墓壙の規模からI期の土葬墓に類似する大きな石組が想定でき、また338号墓は石造物を有さないタイプであることからかも、I期の土葬墓集団がそのまま火葬墓を営んだものと思われる。これらは数的に少ない、少数派のものである。

一方、大多数の火葬墓A類は、墓壙の長軸が0.80～1.10mで、より方形に近いプランをもつものである。このタイプの墓壙は、第7章第7節で検討したように、深いものから浅いものへという傾向があるものと考えている。そうすると、古い傾向がある深いタイプは、墓域最上段で整然とした列状をなす1群に多く、多数派の火葬墓A類が最初に形成された場所と推察される。そして、この多数派の火葬墓の石組には五輪塔が建てられており、先の少数派の火葬墓とは石組の点でも違いが見られる。

以上のように、初期の火葬墓A類にも2つのタイプがあることを示したが、この違いについて土葬墓と火葬墓の展開について別個に見た後に検討したい。

**土葬墓の展開** 土葬墓の分布を見ると、墓域北半の尾根の高まりに集中して列状もしくは塊状のものが8小群程度見られる。これらの小群は4~8基前後で構成されることが多く、またⅠ期と思われる土葬墓が4基前後散在して見られる。これらの土葬墓は、規模的には長軸1.0~1.2m前後で多数派の火葬墓A類とそれ程差がないものである。以上のことから、これらの小群は土葬墓をⅠ期から引き続いて、Ⅱ期にも造墓されたものと思われる。また、先に挙げたように土葬墓の小群から火葬墓の2小群に展開するもの〔図203-III 2〕や、同様に火葬墓が列状小群に含まれることなどから、Ⅱ期の間で終焉するものや、火葬墓に変化したものなどもあったことが推察されよう。しかし、土葬墓でⅢ期まで引き続いて営む小群があるが、これのみの可能性もある〔図203-III 3〕。

一方、Ⅰ期には造墓の中心であったと思われる南半の2つの小群であるが、この小群にはⅡ期の土葬墓が2・3基程度しか含まれないし、周囲にも数基が散在するのみである。

**火葬墓の展開** 火葬墓の分布を見ると、墓域北半では土葬墓が集中する一帯の東西両端と、墓域南半に多い。そこで、北半最上段の1群が多数派の火葬墓A類を最初に営んだものとすると、他の列状小群も基本的にその形成開始がこれと近い時期と考えられる。また、墓の数が多い塊状小群も形成時期は比較的早かったであろう。このように理解すれば、1群に次ぐ火葬墓の小群は、墓域北半の東西両端に

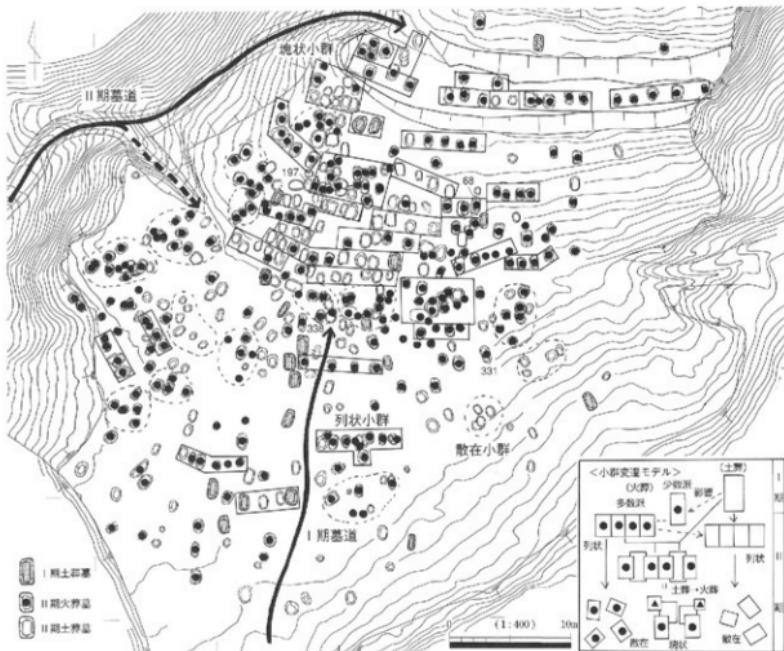


図204 Ⅱ期における墓群構造モデル

5小群、墓域南半に3小群程度が散在して形成を開始していったものと考えたい。だが、1群〔図203-I4〕の小群は2～4世代という時期幅を考えているので、1群から次の火葬墓の小群へと、新しい場所を求めたというわけではないと考えたい。なお、これらには、先に指摘したように土葬墓から展開した小群も2・3見られ、時期的に下るほど火葬墓を営む集団が増えたものと思われる。

このような列状・塊状小群の次に造墓を開始した小群としては、墓域南西縁辺に散在して展開するものがある。その理由としては、密接した2基単位の意識が弱いことと、時期的に新しい傾向と考えられる深さ10～20cm前後の浅いタイプの火葬墓A類で構成されているからである。この浅いタイプの火葬墓A類から15世紀前半の土御器皿が出土しているので、この時期に、さらに多くの火葬墓が造営されたのであろう。さらに言うと、これらの分布が縁辺に集中するので、階層的に先行した集団よりもやや低かったことも想定されうるのである。また、一部の塊状小群には蔵骨器を含めた火葬墓B類が多く見られ、2・3の家族で流行った葬法と言えようか。

**I期の土葬墓集団とII期の火葬墓の関係** 先に記したように、初期火葬墓A類には少数派と多数派がある。問題は、火葬墓開始初期の多数派の火葬墓A類が、新規の集団に営まれたものか、I期に造墓を行っていた土葬墓集団によるものかについてである。仮に前者の立場でみると、I期の土葬墓集団は、造墓を停止してしまったか、引き続き土葬墓を営んでいたかもしくは遅れて火葬墓に転換したなどと考えられ、火葬墓が多くなるII期ではやや劣勢になったことが指摘できる。一方、後者に立つと、I期の土葬墓集団の中でも有力なものは先に火葬墓を造営し、それより劣勢なものは土葬墓を営み続けるか、遅れて火葬墓に転換できたと考えることもできる。どちらであるかの判断は難しいが、いずれにせよ、この葬法の変化が何らかの社会的変化によるものであったのは間違いない。

また、多数派の火葬墓A類が北半最上段に営まれたことから、I期の墓道と推定した南側からの道だけでなく、北側からの道も造成された可能性が考えられる。また、火葬墓が南半に及ぶ頃には今里道である尾根を東西に横切る道の入り口が造られた可能性もある。

**土葬と火葬の違い** 土葬と火葬は一部が併存していたものと考えると、この違いは何が表したものであろうか。このII期にはほとんど副葬品がなく、火葬墓に温石・蔵骨器の備前窯、土葬墓に瀬戸小皿があるが差は付けがたい。次に石組では、火葬墓の北半最上段の1群を中心に五輪塔が20基前後、地輪で一辺30～40cm、高さ推定約100～130cm前後のものが据えられていたようである。石仏は既往の年代観とは食い違うが、浅いタイプの火葬墓A類の石組が炭盛土に埋もれていることから、15世紀前半以降にはある程度が火葬墓の石組には据えられていたと想定したい。一方、土葬墓は後述する北半の石組再整理により墓壇と対応した石組がなく断定できないが、I期からの流れで考えると石造物を据えることは少なかったとも考えられよう。

以上から土葬と火葬の差は、その葬法と石造物の有無であった可能性が考えられる。水藤真氏は『大覚寺文書』の「定於尼崎墓所条々事」で始まる墓所の掻を挙げ、茶毬および拾骨で一貫五百文、桶に入れた土葬には五十文、筵に入れるのは十文などと、庶民の葬送でも方法により費用に差があったことを指摘している。このように考えると、火葬墓集団もしくは土葬から火葬に転換する集団の方が、土葬墓よりも有力もしくは裕福であったと考えられる。また、石造物では石仏よりも五輪塔の方が高価であったとすることで、五輪塔が初期火葬墓の多い1群に多く見られることとも合致している。

### (3) III期〔15世紀後半～16世紀中葉〕 (図205)

以上のように、当墓群の大半の墓が約100～150年間に形成された後、15世紀後半には火葬場が営まれ

こととなる。後述するが、この火葬場を造営した集団が前代の火葬墓もしくは土葬墓集団とどのような関係にあったのかを主に検討したいと考えている。

**火葬場の造営** 火葬場は、墓域南半西側のやや墓の分布が少ないと見られる場所に造営されたようである。まず最初に周辺の火葬場1・5~7の小規模なものが造られ、次に火葬場3・4が、さらに2が常まれたようである。一番使用期間が長かったものは火葬場2と推定され、この周囲に石垣を巡らすことにより区画している。ここから排出された大量の炭で、石垣より外の石組・以前の火葬場が埋もれてしまうのである。ここからは、大量の土器皿・鐵貨が出土しており、今までとは異なった葬送儀礼が行われたようである。具体的には、どれだけの死者が荼毘に付されたかは不明であるが、鉄釘・鐵貨の量からでも数十体、炭盛土の量からでは百体以上の荼毘が想定されるほどであった。荼毘された骨を埋葬した墓を具体的にできず、石組への追葬・散骨もしくは別の場所に納骨したものと思われる。

この火葬場は火葬という点で、II期の火葬墓と共通しているが、その方法が大きく異なっている。そこで、II期の造墓集団とこの火葬場造営集団の関係を検討してみる必要があろう。

**石組群の再整理** ここでは、前代の墓と火葬場の関係を検討するために、一つの方法を試みようと思う。それは、このIII期の石組がどのような状況であったかを検討することである。後述するが、近世には若干の上葬墓が常まれるが、その際には石組の構築が見られず、また近世以降の遺物も非常に少ない。そこで、前回の昭和42年時の調査をも考慮に入れて、最終的な石組の状態を復元することにして、

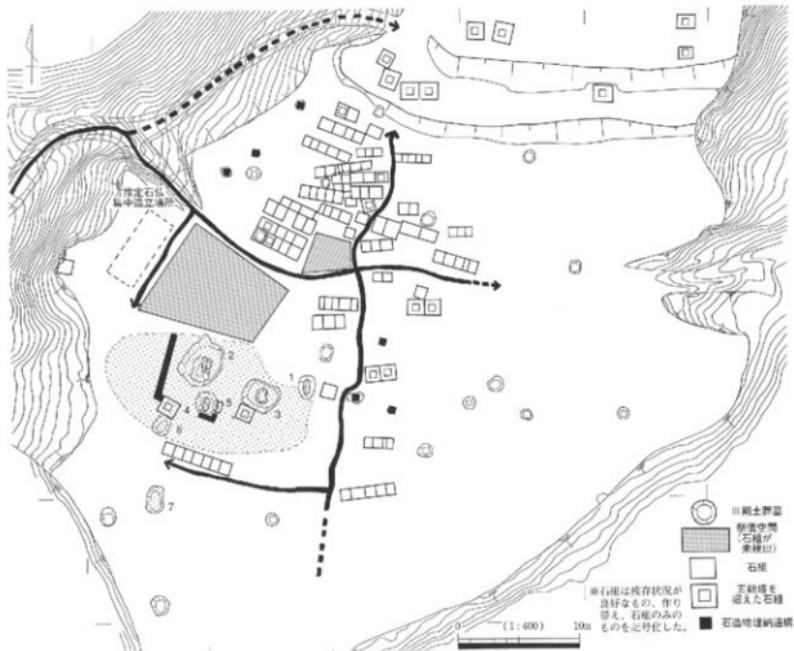


図205 III期における墓群構造モデル

この状況がIII期に形成されたものと前提にした上で、上記の問題について考えてみたい。

図205は、前代の石組が造り替えられたもの、残存状況が良好な石組、石組だけが造られたものを、模式化した状況である。これによると、五輪塔が残存していた石組が北半最上段に多く、また北半西側には石組が再整理されて接続した石組群が多くあり、そこには石仏が建てられていたことが推定される。そして、火葬場の北側は墓壇自体が検出されているが、石組が検出されないので空間をつくり出すために石組を除去した可能性を考えたい。この空間には、蒸堂などの建物があった可能性が指摘できるが、建物跡を検出しておらず、葬送に関する祭儀空間としておく。また、この空間の東西両側縁辺には石造物が多く散在しており、ここに集中的に建てられていたかもしれない。このような状況からIII期には北側から最上段へ至る墓道の他に、現在の里道と同様な東西に横切る道が使われた可能性が高い。

**火葬場と石組群の関係** この石組の再整理に関しては第7章第6節で詳細に検討しており、基本的には前代からの石組を意識しながら各々の石組を接続したものであることが判った。そのように考えると、石組を再整理した集団は、大きな意味ではこの前代の墓と関係があると考えられ、全く新しい集団によるものではないと、まず言える。

それでは、III期には墓域北半で造墓を行っていた集団と最上段の1群の集団が、自分たちの祖先を祀るために石組群を整理して、主に火葬場造営の主導権を握ったのであろうか。仮にそう考えると、火葬場が造営され、石組が除去された墓域南半は、II期では遅れて火葬墓を営んだ集団が幾つかあったところであるため、この時期には軽視されたであろうなどと想像することができる。そして、各所に見られる石組列は、この時期にも火葬場を使用していた集団と思われる。しかしながら、これらを決定付ける要素が他ではなく、想像の域をでないもので、一仮説としておきたい。

以上のように、火葬場を造営した集団を特定することは難しいが、いずれにせよ、今までより大規模な造営と思われる火葬場や、石組群の再整理、大きな空間の設定などからは、より全体的な意識によって形成されたものと考えたい。

**土葬墓の様相** 一方、この時期には土葬墓が20基程度、火葬場・石組群の縁辺に営まれたようである。この土葬墓は、II期よりも方形・円形のプランのもので、方形木棺・桶棺などによる席臥屈葬の姿勢で埋葬されたものと思われる。近世に入る可能性もあるが、方形のものには当該時期の土器が出土しているので、この時期にも営まれたことは確実である。先述したように、一部にI期もしくはII期から引き続いて土葬墓を造墓した集団もいるようである。

#### (4) IV期〔16世紀後半～19世紀前半〕

近世以降は、伸展葬による土葬墓（B類）が200年間に渡って、21基が営まれたようである。今までとは異なった葬法であること、墓壇に併せた石組を構築しないなどからすると、別の集団によるものかは置いておくが、前代とのつながりについても不明である。いずれにせよ、造墓集団がおそらく極端に少なく、1・2家族が長期間に渡って営んだものと考えたい。

### 5. 栗栖山南中近世群をめぐる歴史的空間

報告および検討の総括として、栗栖山南中近世墓群の集団構成の変遷について考えてきた。それでは、当墓群の地域的な位置づけについて若干検討することで、報告のまとめとしたい。

#### (1) 周辺の中世墓地の様相

茨木市北部ではこれまで本格的な中世墓地の発掘調査がなされていない。だが、若干の小規模な発掘もされており、また当センターでは当地域の現行民俗・歴史的環境・石造物などの調査も行っている。

そこでこれらの成果を引用して、当墓群周辺の中世墓地の様相について考えてみたい。図206は、推定される中世墓地や、中世期の石造物がある場所を示したもので、個々の詳細については省くが、若干の補足をしておく。発掘された中世墓地は当墓群の他に、石造物を有する石組や藏骨器の瓦質羽釜などが検出された屋上（伏原）墓地跡と地蔵山墓地跡がある。他に、その立地・石造物の分布や採集される遺物から墓地と推定される所もある。また、中世の石造物が多く見られる現在の共同墓地もあり、真龍寺や地福寺の寺院に付属する墓地や桑原共同墓地では200基以上もある。これらは、中世から継続した墓地であった可能性がある。また、当地域では大型の石塔や石槽などが多く見つかっている。

このような状況からはまず、福井の真龍寺のように平野部にも当墓群に匹敵する中世墓地があったと考えられる。よって、当墓群は現在の佐保とした閉鎖的な空間の集落の墓地と考えることが妥当であろう。さらにその佐保の中にも幾つかの墓地があるが、その立地・石造物の数からはおそらく小規模な墓地と考えられ、時期や階層の違いかもしれない。そして、教円寺にある鎌倉時代末から南北朝時代の高さ約3mと推定される宝鏡印塔などの大型石塔の存在は今の大字単位で見られる。これは、藤澤典彦氏が指摘するように村落レベルの惣供養塔的存在とも考えられる。ただ、忍頂寺五輪塔のように定盛といった個人名のみ刻まれているものは、在地領主などが個人的な供養碑として建てた可能性もある。

## （2）当墓群の画期と歴史的状況

当墓群は佐保の集落の墓地であったとすると、どのような階層の人々が葬られていたのであろうか。この問題を先述の画期ごとに歴史的・社会的な背景を追っていくことで考えたい。

I期の段階は、2・3家族による造墓で墓の数が少ないので造墓階層が限られており、この時期の村落の特権身分とされる名主層でも家長のみによる埋葬と考えたい。この造墓開始の13世紀後半には、西大寺觀尊がその晩年に近辺の勝尾寺や忍頂寺で受戒を行っている。藤澤典彦氏は、当地域の石槽の分布状況は律宗の展開を表したものと指摘している。細川涼一氏は、律宗には斎戒衆という葬送に携わった僧が存在していることから、当墓群も彼らが関与していた可能性が考えられる。しか

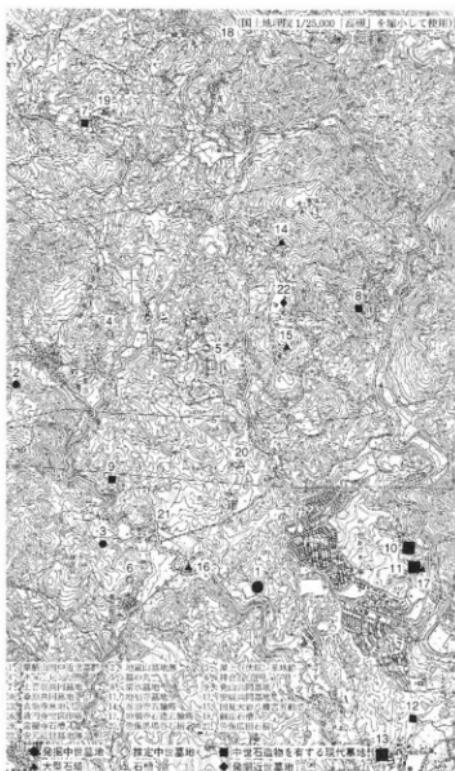


図206 茨木市北部中世墓地関連地図（縮尺1：50,000）

し、この時期には石組に石造物がなく、それを実証するような文献資料などがない。

II期の段階は、14世紀中葉に火葬墓が造営され、一方では土葬墓も引き続き営まれるなどといった複雑な状況の中で、全体的には15世紀にかけてさらに多くの家族による造営が行われるのである。この時期には夫婦を単位とした家族墓的展開が見られ、子供も埋葬され、まさに村落の墓とも言うべきものである。文献史学による村落の研究では、この14～15世紀に村落共同体である惣村が成立したものと考えられている。惣村は、名主層の分解の中から成長してきた土豪層と一般農民の結合によるものとされている。このII期の複雑な様相は、この時期の村落の人間関係が表れたものと考えることができよう。石組には五輪塔が据えられる、律宗などを含めた宗教の開拓が確実にあったのであろう。また、葬法や石造物の違いがあるため、これが被葬者の村落の中での階層を表しているものかもしれない。

III期の段階は、15世紀後半～16世紀中葉の火葬場が造営され、個々の墓が少数の土葬墓のみとなる。この時期は、応仁の乱の後の複雑な政治状況の中で、様々な宗教的な活動がより広範囲に行われた時代である。例えば、蓮如が越前吉崎を退去し摂津・河内国に入った頃でもあり、この茨木では真宗寺院が増え、教円寺も真宗寺院として再興されたようである。このことが直接的に当墓群の状況を表しているものかどうかは別としても、より共同的な力により成されたと思われる火葬場の造営、前代の石組群の整理、石仏の多数の造立などを、宗教を介した村落共同体の強化と見ることができよう。

IV期の段階には、1・2家族が近世以降の約200年間に土葬墓を細々と営むのみとなる。この土葬墓は、極端に細長い木棺に伸展葬されるもので、16世紀後半の高槻城のキリスト教墓と非常に類似するものである。これを実証するものは検出されていないが、千提寺や下音羽ではキリスト教墓碑や遺物などが発見されており、その関係を今後も検討していく必要があろう。

これまで、非常に不十分ではあるが当墓群の地域的な位置づけに関して若干検討してきた。最後に、高槻市岡本山古墓群では13～14世紀を中心として約400基、箕面市小畠遺跡では13世紀後半～15世紀代の201基の土葬墓・火葬墓などが検出されているが、これらは当墓群と同様に列状に展開する墓群であることを挙げておく。このような北摂地域の中世墓地の断片的な様相は、葬墓制研究において今後より地域性の把握が必要であることを物語っている。

#### 引用・参考文献（紙幅の都合で一部省略）

- (財) 大阪府文化財調査研究センター編 1999『彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査』(井藤曉子「千提寺・上音羽のキリスト教信仰」、井藤曉子・免山篤「水利その他の現地調査の成果」、藤澤典彦「石造物調査」、免山篤「考古資料よりみた清瀬周辺」等所収)
- 瀬戸眞司 1992「中世墓地の集団構造—その基礎操作(1)ー」『紀要』第5号 (財)滋賀県文化財保護協会
- 佐々木好直也 1995「久安寺モッテン墓地跡」奈良県文化財調査報告書第70集 奈良県立橿原考古学研究所
- 水野 真 1991「第五 色々な墓—墓や死にまつわる話ー」『中世の葬送墓制』吉川弘文館
- 鶴川涼一 1987「中世の律宗寺院と民衆」吉川弘文館
- 藤澤典彦 1990「墓地景観の変遷とその背景—石組墓を中心としてー」『日本史研究会』330 日本史研究会
- 藤澤典彦 1993「夫婦墓の成立と展開—中世墓地成立の面影ー」『元興寺文化財研究』 (財)元興寺文化財研究所通信 No.47
- 三好孝・ 1998『小畠遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書
- 峰岸純夫 1970「村落と土葬」『讀書日本史3 封建社会の展開』東京大学出版会
- 森田克行 1986「大阪府岡本山古墓群」『歴史手帖』第14巻第11号 シンポジウム中世墳墓を考える

## 付章 北摂地域における栗栖山南古墳群の位置づけ

森木 徹

### 1.はじめに

栗栖山南古墳群の調査において確認された7世紀代の群集墳と8～9世紀の火葬墓群（以後、栗栖山南古墳群と呼ぶ）は、調査以前には存在が全くしらべていなかった群であり、従来、茨木・箕面両市域における古墳分布とされていた範囲をさらに山間部に広げる結果となった。また群形成の時期も、周辺地域での一般的な後期群集墳の形成時期からは遅れるものであり、いわゆる「終末期群集墳」と称される範疇に属する群であった。近年「終末期群集墳」の調査例も増加し、比較的まとまった検討もみられるが<sup>1)</sup>、その理解や評価については依然、資料的制約に起因する推測が多く含まれていることも事実である。従って栗栖山南古墳群の評価についても既応の研究成果に単純にあてはめることには、いまなお慎重でなければならないと考える。

本稿では栗栖山南古墳群の評価をおこなうに際し、その基礎的な作業として周辺地域における同種資料・同時代資料の認識を企て、特にこれまでまとまった検討がそれほどおこなわれていない北摂地域の群集墳の動向について整理するなかで<sup>2)</sup>、栗栖山南古墳群の有する歴史的意義について考察を試みることを目的とする。

### 2.群単位の認識と終焉類型

本題に入る前に、前提としての群集墳の群単位の認識基準と呼称、終焉類型にかかわる考え方を示しておきたい。

古墳群の例	群単位古墳群 B支群	栗栖山南古墳群	栗栖古墳群群	栗栖山南古墳群 B支群	平尾山古墳群 尾多尾頭古墳群	山辺古墳群	栗栖山南古墳群
単位レベル	河本1992	弘前1981	園田1973	坂井1989	大阪府教委1990	女川1990	本著
単位a	(B支群)	栗栖山南古墳群			(第40大群)		(栗栖山南古墳群)
単位b	B支群 (単位a 1～2群) ・A支群 (単位a 1群)	栗栖山南古墳群 (単位a 2～3群)	X支群	B支群 (単位a 4～5群)	第42支群 (単位a 1～2群)	出迎古墳群 (単位a 2群)	栗栖山南古墳群 (単位a 1～2群)
単位c	羽田山中西古墳群 (単位b 3群) ・A～C支群	源治山古墳群 (単位b 1群)	年原古墳群 (単位b 2群)	栗栖山南古墳群 (単位b 3群) ・A～E支群	栗栖山南古墳群 (単位b 3群) ・A～E支群	平尾山古墳群 (単位b 3群) ・A～E支群	栗栖山南古墳群 (単位b 1群)
単位d				栗尾山三峰の古墳群 (単位c 7群)	平尾山古墳群 (単位c 6群)  ・栗宝～三古墳群 ・雪室白束尾根古墳群 ・栗佐山南尾根古墳群 ・平井古墳群 ・山本古墳群 ・山本南古墳群 ・中條山字古墳群	平野・人妻古墳群 ・太平寺支群 ・安堂支群 ・栗井口支群 ・甚多尾畠支群 ・小原口支群	

図207 群集墳の単位レベルの認識

群集墳の群単位の認識はすでに研究史上の有効な成果（代表的なものに水野1974や広瀬1975）があり、基本的な認識はこれを踏襲するが、群呼称による単位認識のそれは研究者レベルにおいてもいまなおみられるところである。群集墳が一定の墓域に順次築造され、我々が認識できる「多数の古墳がまとまって分布する」状況は最終的な景観として形成されたという前提では、一見まとまってみられる古墳のグループのなかから、各古墳の築造順序とその配置を通じてさらに小さな単位を抽出することが可能な場合が多い。それは2～4基で構成される場合が多く、群構成の最小の単位となる（単位a）。この単位aは分布状況から抽出が可能な場合もあるが、築造時期や主体部の構造の検討を経てはじめて認識が可能な場合も多く、調査を経ない段階では必ずしも認識が可能なものとはいえない。分布調査レベルで一定の群として容易に認識できるまとまりは、2～4基で構成される単位がさらに複数集合したものであり、これが通常「古墳群」、あるいは古墳群の「支群」として呼称されている（単位b）。現実にはこの単位bが古墳群とよばれる場合と支群とよばれる場合があり、その呼称が統一されていない点に議論上の混乱の一端がある。単位bを支群とよぶ場合は地形などの一定の範囲内で、近接して同等と判断される他の単位b（他の支群）がみられる場合であり、それら単位bが集合したものが古墳群（単位c）とよばれることになる。また単位bが古墳群とよばれる場合は、近接して同等の単位bが存在しない場合はもちろんであるが、存在する場合でも地名が異なる場合や行政的な遺跡呼称の方法によって別名称の古墳群とされている場合も多い。さらに単位cとしたものが集合する場合（単位d）があり、これに古墳群という呼称が付けられる場合もある。この基準により現行の群集墳呼称を例示したものが図207である。この図で明らかなように、「古墳群」という名称が付されたものでもその単位レベルは様々で、直接の比較などの作業は困難である。群集墳の構造的把握は、群の形成過程の検討なども消化したのちに初めて可能となる場合が多く、分布図上での推論が危険をはらむものであることは事実であるが、次に述べるような群集墳の類型化の作業においては個々の群の単位レベルを同じくしたうえでの比

西暦		600	619	655	656	675	700	
須恵器型式 (奈文研編年)		TK209	TK217	TK46	TK48	MT21		
		(飛鳥 I)	(飛鳥 II)	(飛鳥 III)	(飛鳥 IV)	(飛鳥 V)		
群 集 墳	I	A 水 扇(1) 白 石(a)						
	B	水 扇(2) 白 石(b)	横 六 式 石 室		(平尾山西墳群)			
	C1		追 深	小 型 横穴式石室・小石室	(雲雀山西尾成3支群など)			
	C2	水 扇(3) 白 石(b)	追 深	横穴式石室	(芦屋越山古墳群など)			
	C3		追 深	横 口 式 石 室	(平尾山西墳群など)			
	III	D 水 扇(4) 白 石(c)	横穴式石室	小 型 横穴式石室	小 石 室	木 相 道 路・木 灰 墓	火 墓	
(高尾古墳群・野間中古墳群・高安古墳群・田辺古墳群・平尾山西尾成多尾成3支群)								
清 藩 制 種 の 単 位		→ 家族墓として →	←	個人墓として	→			

図208 群集墳の終焉類型

較が前提となる。特に古墳群という呼称の影響で、単位 c による比較がおこなわれると、内在する単位 b の様相が表現されず誤った認識につながる場合がある。また群集墳の規模を評価するに際しても、單に古墳数の多寡を比較するのみならず、各単位レベルでの古墳数の比較と、同じレベルを構成する単位数の比較などが可能となる。むしろこの認識を踏まえたうえでの規模の比較でなければ、群集墳の性格を歴史的に評価することは困難であると考える。

群集墳の終焉類型はかつて筆者が大阪府下の群集墳の終焉を概略的に整理した際の分類を基本とするが（図208・森本1997）、上記の単位レベルでは単位 b による終焉状況の分類ということになる。これは学史的にも著名な研究（水野1970・森1970・白石1982）をベースに、その後の知見を加えた形のものであり、筆者のオリジナルではないが、従前の研究成果では上記の単位レベルをそろえたうえでの検討が十分でない場合があり、注意を要するところである。

この分類は群集墳の時期的な消長に各群の形成過程の盛衰を加味したうえで、大別 3 類、小別 5 類に分けるものである。畿内地域で一般的とされる、6世紀代に群形成のピークがあり、6世紀末から7世紀の前半には形成を終えるものを I 類、群形成のピークを過ぎてもなお7世紀後半まで古墳の築造を続けるものを II 類、I・II 類が群形成のピークを終えた時期にあらたに墓域を得て群形成を開始するものを III 類として大別する。III 類が「終末期群集墳」と呼称され、栗栖山南古墳群もこれに該当すると考えられるが、近年の群集墳の調査成果では、従来 I 類と考えられてきた群において、なんらかの形で7世紀代の古墳の築造がおこなわれた状況が認められるケースが増加しており、II 類の割合が高まる傾向を指摘できる。このような類別がみられる背景については、研究者間でも認識にばらつきがみられ、今後の検討の余地も多いものと考えるが、後述する筆者自身の見通しも、基本的には既に示されている研究成果の影響を強く受けているものである点を断っておかなければならない。いずれにしても、単位的な地域に則したさらなる具体的な検討が必要であるという認識も強く感じられるところであり、本稿ではこの分類に則した既述をおこなうこともあるが、実態としてはそれが妥当であるかどうかという相互検討の側面を有している点も断っておきたい。

### 3. 北摂地域の「終末期群集墳」

上述の分類におけるIII 類、すなわち終末期群集墳の調査例は近年増加していることは事実である。しかし今回検討する北摂地域、特に大阪府域に属する範囲のように、比較的はやい段階で開発による埋蔵文化財の消失が進んだ地域では一定の調査成果は蓄積されながらも、群集墳総体としての検討が十分なされていない場合が多い。特に終末期群集墳の理解には形成時期や群単位での把握が有効な部分が多く、逆に断片的な情報では評価が困難な場合が多い。筆者がかつて大阪府下の終末期群集墳の検討をおこなった際（森本1995）は資料の収集が不十分なこともあります、北摂地域では能勢町野間中古墳群の B 支群をカウントしたのみであったが、今回、北摂地域の後期古墳、群集墳を悉皆的に検討した結果、限られた材料からの推測を含むものの、いくつかの群に終末期群集墳としての評価が可能な状況を認めるに至った。すでに若干の検討を加えたものを含め、例示する。

#### ①野間中古墳群 B 支群（岡本1992）

大阪府下では最北部に位置する能勢町野間盆地に位置する古墳群で、従前横穴式石室墳 4 基からなる古墳群として理解されていたが、1991年度、圃場整備に伴う発掘調査で近接地で新規に 4 基の古墳が確



- 1 栗栖山南古墳群 2 福井北古墳群 3 新屋古墳群 4 安威古墳群 5 長ヶ瀬古墳群 6 将軍山古墳群 7 真庭寺古墳群  
 8 大門寺古墳群 9 郡山古墳群 10 原古墳群 11 片ヶ谷古墳群 12 駒脇古墳群 13 尼ヶ谷古墳群 14 唐井谷古墳群  
 15 大歳河古墳群 16 慈願寺山古墳群 17 紅葉山古墳群 18 奥坂古墳群 19 安瀬山古墳群 20 養子社古墳群 21 萩庄古墳群  
 22 挑原古墳群 23 占志部古墳群 24 太鼓冢古墳群 25 美裔古墳群 26 野間中古墳群 27 藤巻古墳群 28 石原古墳群  
 29 円山古墳群 30 大貝谷古墳群 31 弥五郎谷古墳群 32 台坂古墳群 33 小戸古墳群 34 間崎古墳群 35 浜場塙古墳群  
 36 境原古墳群 37 東郷古墳群 38 塚山古墳群 39 戸川山古墳群 40 墓木古墳群 41 岩井古墳群 42 元屋敷古墳群  
 43 塚本古墳群 44 吉井山古墳群 45 城山古墳群 46 駒治郎山古墳群 47 三草山古墳群 48 雲雀ヶ丘古墳群  
 49 霊鶴山東尾根古墳群 50 霊雀山西尾根古墳群 51 平井古墳群 52 山木奥古墳群 53 山本古墳群 54 山手古墳群

図209 北摂地域の後期古墳・群集墳の分布

認され（B支群）、出土遺物の様相から「終末期群集墳」として認識されることとなった。從来しられていた群はA支群とされ、若干南に離れて単独で立地するとされてきた広子古墳が、B支群の確認によりC支群を構成する可能性が想起された。A支群・C支群は今のところI類に属する状況であり、I類の単位b 2群、III類の単位b 1群からなる古墳群（単位c）であると認識される。A支群は単位a レベルでは2群からなる可能性が指摘されており（広瀬1981）、報告書（岡本1992）でも複数の単位（単位a レベル）が想定されている。一方、7世紀第II四半期～中葉の形成期間とされるIII類B支群は4基の古墳が順次築造されたとされているが、この期間での4世代にわたる築造は考えがたく、単位a レベルで複数の群を想定する必要がある。なおB支群は、現況で水田地域となるような扇状地上に立地しており、終末期群集墳他例とは異なる様相をみせる。またA支群・C支群は現状ではI類に属することから、B支群との時期的な並行を示すことはできない。

#### ②円山古墳群 尾根頂部の群（高橋1991）

野間中古墳群と同じく能勢町内に位置するが、地理的には隣接する盆地、水系に属する。円山古墳群も從来しられていた群は丘陵裾部に位置するI類に属するもので、横穴式石室からなる古墳が5基並んでいる。1989年度の工場建設で同じ丘陵の頂部に近い部分で3基の古墳があらたに検出され、出土遺物から終末期の古墳と判断された。特に立地や石室構造など丘陵裾の古墳と頂部の古墳には大きな差が認められ、調査者も単純な連続性は認められないとしている。群の単位レベルでは両者とも単位bと考えられ、裾の群では内に単位a を複数有している可能性が高い。一方頂部の群は出土遺物としては1基の古墳から7世紀第II四半期～中葉とされる土器が出土しているのみで、築造順を考察することはできないが、石室構造から築造の順序を想定できる状況からは、単位a 1群で単位b を構成するものと判断している。なお、丘陵裾部のI類に属する群と、立地上の隔絶は確かに認められるが、丘陵そのものが盆地内の独立丘陵状を呈しており、比高差は顕著なものではない。野間中古墳群が扇状地に位置する点も加え、後述する源治郎山古墳群や三草山古墳群が山塊の高所に位置する状況と対照的である。

#### ③小戸古墳群 B支群（広瀬1981）

円山古墳群が属する田尻川流域のさらに上流側の支流域に位置する古墳群で、同じ盆地・水系に属する古墳群ということができる。発掘調査を経ていないため分布調査で得られる情報からの判断であるが、A支群3基、B支群6基の存在が確認されており、A支群の3単位がB支群へ移行する可能性が指摘されている。B支群が石室の規模などから判断して7世紀代の築造も想定されるが、A支群からB支群への単純な墓域の移動以外に、B支群が終末期群集墳である可能性も否定できない。A支群内でB支群の時期に並行する古墳が検出されればその可能性は高くなる。

#### ④源治郎山古墳群（広瀬1981）

能勢町の西端を画する三草山から東へ延びる山塊の、標高370mの尾根上に位置する。2基の古墳が確認されており、1号墳は地元の有志による発掘がおこなわれ、鉄釘とともに7世紀中葉の須恵器が出土している。内部主体は無袖の横穴式石室で、小型である。2号墳も類似する内容と考えられており、盆地縁辺に多数みられる他の古墳との隔絶した立地も踏まえ、終末期群集墳の類型に属すると考えられる。単位a 1群が単位b を構成している。

#### ⑤三草山古墳群（大阪府教育委員会1990）

源治郎山古墳群からさらに高所、標高450m付近に3基の古墳が確認されている。発掘調査を経たものではないが、無袖の小型横穴式石室を内部主体にもつ小型の古墳で構成されると考えられており、

立地上の観点を踏まえて終末期群集墳と考えられる。源治郎山古墳群同様、単位a 1群で単位bを構成している。

⑥大門寺古墳群（笠川・免山1963）

茨木市東部、安威川西岸の標高180mの山頂部に位置する群で、2基の横穴式石室の存在が指摘されている。詳細な調査を経ていないため古墳でない可能性もあるが、近接して他の古墳の存在が認められず、標高等などの立地条件からもIII類（終末期群集墳）に属する可能性を指摘することができる。

⑦塚原古墳群 N支群（原口1973）

塚原古墳群は高槻市域の西部、阿武山の南斜面に分布する古墳群で、塚原の地名とともに北摂地域を代表する群集墳として認識されている。古墳数は確認されているもので110基とされ、すでに市街地化が進行していることから本来の古墳数はさらに多かったものと考えられる。遺跡地図上は分布状況から判断されたとおもわれる十数群の支群が設定されているが、1基のみでくくられている群もあり、現在の支群の呼称がそのまま単位bレベルとみてよいかは検討を要する。分布図上からの判断では、支群とされるなかで単位bレベルと考えられるものはN・P・T支群などが挙げられるが、このうち最高所に立地するN支群（単位bレベル）は木棺直葬の方墳を含む群で、III類「終末期群集墳」に属すると考えられる。また、全体が調査されたものではないが、標高の低い部分に立地するA支群、B支群では7世紀代の石室も検出されていることから（西谷1968）、単純な墓域の移動がN支群を成立させたものではないと考えられる。

⑧大藏司古墳群（郡家古墳群）（西谷1965、村川1968、原口1973）

前期古墳群として著名な弁天山古墳群が立地する丘陵には芥川に面する東寄りに後期の群集墳が点在する（唐井谷古墳群・尼ヶ谷古墳群など、II類に属する群と考えられる）が、現在では宅地造成により全て消滅している。この地域の古墳群あるいは個々の古墳の名称はやや複雑な状況が受けられるが、一角に集中する7基の古墳が大藏司古墳群とされている。1963年、宅地開発に伴い調査されており、小規模な石室で構成され、終末期の須恵器が出土したとされる。詳細をしりえないが、III類の単位bレベルの群となる可能性が高い。なお別文献（原口1977）では6世紀代の群とされている。また近接して奈良時代の火葬墓を含む岡本山古墓群（西谷1966）が位置している点は興味深い。

⑨塚脇古墳群（大船1982、高槻市教委1993）

塚原古墳群とならんで高槻市域を代表する群集墳であり、消失したものを含めて約50基の古墳が確認されている。上述の大藏司古墳群からみて芥川の上流域に位置し、遺跡地図上では芥川を挟んで東群・南群・西群の3群に大別されている。現在は塚脇古墳群として総称されているが、かつて松ヶ丘、上ノ口、塚穴、下ノ口古墳群として個別に呼称された群を内包しており、現状では東、南、西の各群内における古墳の分布は疎密が顕著である。おそらくは単位bレベルを複数含んだまとまりが現在の群呼称に反映していると考えられる。特に帶仕山の頂部付近に立地する一群は、遺跡地図上では南群に含まれるとされているものの、他の古墳とは隔絶した立地を示しており、単位bレベルでの群を構成しているものと考えられる。この内調査されたD-1号墳は無袖の横穴式石室を主体部に持つ小型の方墳で、内部から7世紀前半～中頃の須恵器がまとまって出土しており、該期の古墳と考えられる。この点と立地条件を勘案すると、この一群はIII類に属する単位bレベルの群であると考えられ、さらに奈良時代の土器が出土することから近接地に火葬墓が存在したであろうことが推測されている（大船1982）。塚脇古墳群としては各古墳の調査成果は次第に蓄積されつつあるが、面的な調査はそれほど行われておらず、相

対的に低い位置に立地する群がI類かII類かの判断は容易ではない。現状では6世紀後半から末に全体的な群形成のピークがあり、比較的標高の高い地点に無袖の石室を中心とする小規模な群が立地する状況をみることができる。

⑩奥坂古墳群（橋本1976）

奥坂古墳群は紅葉山古墳群などとともに松尾川に面する丘陵上、対岸に安満山古墳群をのぞむ位置に立地する群であるが、学校建設に先立ち一部が調査されている。調査された3基のうち、確実に主体部として確認されたものはA5号墳で、小型の無袖横穴式石室を主体部に持つ小型の方墳であった。7世紀前半～中頃の須恵器が出土しており、該期の築造と考えられるが、周囲の未調査の古墳も同類のものである場合、III類の群となる可能性がある。あるいは周囲の古墳が6世紀代に築造されたものとなればII類C1となる可能性もあるが、詳細は決しがたい。いずれにしても奥坂古墳群という名称は単位bレベルでの群に対しての呼称となり、紅葉山古墳群や古曾部古墳群といった単位bレベルの群が周辺に分布する環境にあり、7世紀代の造墓を確認することのできる例となる。

⑪吉志部古墳群（吹田市立博物館2000）

千里丘陵東縁に立地する古墳のうち、数少ない群集墳であり、1～3号墳がやや距離を置いて立地する。近年の再調査により1号墳が無袖横穴式石室を有し、7世紀前半の築造であることがあらためて指摘されるに至った。「終末期群集墳」として評価され、近接する8世紀末の吉志部火葬墓との関連も示唆されているが、他の古墳の詳細は不明であり、各墳が散在する状況からは可能性を指摘するにとどめておきたい。

以上、可能性を有するものも含めて例示したが、報告書の刊行されていないものも含め、調査を経たものとしては①・②・④・⑦～⑪をあげることができる。いずれも単位bレベルでの群として認められるものであり、遺跡名称としての古墳群を即「終末期群集墳」と呼ばれる群に対応させるべきではないと考える。遺跡名称としての「古墳群は」多くの場合単位b～cレベルで使用されており、その呼称を尊重するならば「終末期群集墳」を内包する「古墳群」という表現が適切と言える。

現状でIII類に属すると判断される群は全て単位bレベルのものであり、実際の呼称はさておくとしても、周囲の同じ単位レベル（単位bレベル）の群との関係が重要な検討視点としてあげられる。実際に分布などから判断して一連の古墳名称が用いられる単位cレベルの場合はそれらに何らかの関連性を求める方が一般的である。とくに単位cレベルの群中に単位bレベルのIII類が含まれる場合、時期による墓域の移動として説明される場合も少なくはない。ただすでに各群の説明でも触れたように、必ずしも単純な墓域の移動として説明できる例は少なく、周辺の単位bレベルの群が未調査の段階でI類と判断されるか、あるいはII類に属する例が確実に存在することから、むしろ時間的には並行関係を想定しなければならない例が多い。またここで示した例ではIII類と判断できる単位bレベルの群は単位c中に1～2群しかなく、古墳数もさることながら単位の数も確実に少数である。特にこれは塚原古墳群や塚脇古墳群などの全体的な古墳数の多い群で顕著であり、III類の単位b数は、他の単位bの数とは直接的な関連がないことを示している。逆に、III類以外の単位bの数が多い状況は、III類出現以前の単位cレベルの群形成に反映する背景があるということを示している。

例示した大阪府域の北摂地域に属するIII類の群の特徴としては、既に示された「終末期群集墳」の諸特徴（服部1988、安村1990・1995・1999、森本1999）以外に、

- ①単位bレベルの群として認められ、周辺に同じく単位bレベルの群が複数存在する。

- ②三島地域（島上・島下）、能勢地域といった群集墳の分布地域にみられ、千里丘陵、猪名川東岸地域といった群集墳が顕著に確認できない地域にはみられない。
- ③詳細は不明な部分が多いが、周辺の単位 b レベルと時期的に並行するものがみられ、単純な墓域の移動として説明することは困難である。
- ④単位 c レベルの古墳群の規模に比例したあり方を示すものではなく、その中に含まれていながら単位数、古墳数共に少數である。

という状況を説明することができる。では今回調査された栗柄山南古墳群は上記の状況に合致する特徴を備えているだろうか。

すでに本文で示されたように、群構造の詳細、特に形成過程の説明にやや困難な点はあるが、おおむね從来の「終末期群集墳」特徴に合致する状況を指摘できる。形成時期に関しては、出土遺物から7世紀でも後半代に中心をおく可能性が高い点が示されており、この点は他例より遅れるものとなるが、後述のように「終末期群集墳」の意義を説明した場合、この程度の時間差は特に問題ではない。一方、単位 b レベルでの存在の仕方をみた場合、從来古墳の存在が全くしらされていなかった状況が示すように、從前しらされている古墳群からは全く独立した群である点が際立った特徴といえる。最も近接する群としては南に離れて位置する福井北古墳群が挙げられ<sup>5)</sup>、試掘調査しか經ていないため詳細な構成や時期は不明といわざるをえないが、現在確認できている古墳数や石室構造からはⅢ類に属する単位 b レベルの群とすることが適当である。したがってⅢ類に属する単位 b レベルの群が2群、若干の距離をおいて立地していることとなる。この状況は数少ない判断材料から論じられてきた「終末期群集墳」の理解に、周囲の群集墳分布との関係というひとつの視点を提供する可能性がある。次節においてはこのような状況がみられる背景について、周辺地域の同時代資料として、古墳のあり方を検討したい。<sup>6)</sup>

#### 4. 栗柄山南古墳群周辺の群集墳と独立墳の動向

すでに本文において記述されているように、栗柄山南古墳群は地形的には茨木市北部に展開する北摂山地の南寄りに位置することになる。河川の流域としては茨木川（旧佐保川）流域に属するが、山間部に端を発する茨木川が形成した狭小な段丘部分との比高約30mを測る尾根上に位置している。茨木川は古墳群より南へ3km程度で平野部へと流れ出し、西から流走する勝尾寺川と合流する。

栗柄山南古墳群付近はそれまで古墳の存在はしられておらず、国際文化公園都市の開発に伴う各種調査によって初めて古墳の存在がしられたものであり、近接するものでは先述の福井北古墳群がみられるのみである。一方、茨木川と勝尾寺川の合流地点付近は摂津地域全体でも特徴的な古墳分布がみられる地域であり、群集墳のみならず、独立墳においても著名な古墳が分布する。この地域の地理的なまとまりとしてここでは千里丘陵の東側から安威川までを範囲とし、便宜的に古代の行政区画名称を用い、島下地域と呼称することとする。

茨木川と勝尾寺川の合流点付近は茨木市域の平野部分が北の北摂山地と西の千里丘陵によって画される地形を呈している。つまり各古墳が立地する尾根からは東から南方面の平野部に対しての眺望が開けており、逆に千里丘陵方向には平野部の眺望は求められない。この点からは、この地域に集中的に古墳を営んだ集団の生産基盤や聚落域が茨木市域の平野部から低地域に位置するという推測が想起されるが、現時点で平野部における聚落遺跡の様相から積極的に墓域との関連を説明できる状況には至っていない

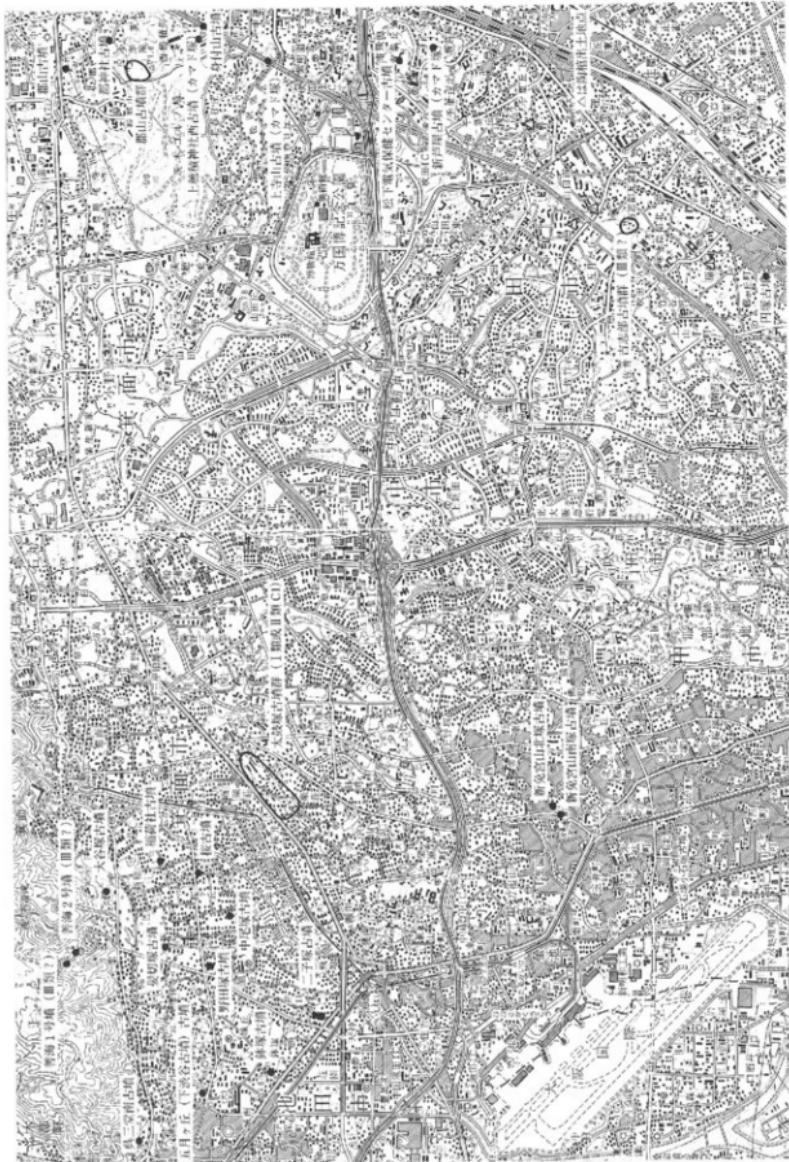


図210 島上・島下地域（国土地理院1/50,000「京都東南部」「大阪東北部」使用）

ない。主に古墳時代集落の分布と規模の大小からある程度の集落群程度のまとまりを抽出する程度の状況であろう。実際、古墳時代における地形環境に対する意識と、古墳分布との関連が合理的に説明できる例は多くはなく、古墳にみられる階層性を集落遺跡の調査成果と直接的に対応させることもこの地域では困難である。しかしこの地域に比較的古墳がまとまって分布するという状況は、単に集落域との関連のみならず、地形環境によるものである可能性は指摘されるべきである。すなわちこの島下地域の古墳分布は、北側地域を千里丘陵を境に地形的に東西に分した場合、東側平野部からみて、最もおくまつた部分とみることができるもので、この地域から山間部へはさらに北側の地域への交通路がのがるといった環境が古墳の分布と無関係ではないと考えるものである。

この地域の古墳は平野部が丘陵あるいは山地帯と接する部分の尾根や丘陵上に比較的まとまって立地するほか、時期幅を若干ひろげると、集落跡に接して削平された古墳がまとまって検出される例が近年増加している。群集墳としては郡古墳群・新屋古墳群・大門寺古墳群・安成古墳群・長ヶ瀬古墳群・将軍山古墳群・真龍寺古墳群が挙げられるが、発掘調査による詳細な内容の報告は極めて少ない状況である。以下冗長とはなるが、各群の概略を記しておきたい。

#### 島下地域の群集墳の状況

郡古墳群は千里丘陵の東側端部の尾根上に位置し、現状では郡山古墳群とされる一群と、数基の古墳が散在する形で立地する。この丘陵は古い段階で開墾が行われたようで、地形的にも旧状を残しているとはいがたく、本来はさらに古墳が存在した可能性がある。このような現況から群構成の詳細を認識することは困難ではあるが、横穴式石室を内部主体にもつ古墳が散在する群として認めておきたい。群集墳とするか散在する独立墳とするかの判断は微妙であるが、群集墳としての郡山古墳群と、独立墳としての郡神社古墳群などが近接している例としておきたい。しかし後述する首長墓としての独立墳と比較すると内容的には劣るものと推測される。各古墳の調査成果について詳細は知りえないが、時期的には6世紀代に築造された古墳を主体とする群であると推測される。なお見付山古墳では組み合わせ式の家形石棺が用いられるほか、上穂積山古墳では円筒棺・土器棺を主体部にしていたとされる。丘陵下に近接して位置する郡遺跡は古墳時代の中心的な集落の一つと考えられているが、ここでは削平された古墳が十数基調査されており、その形成時期は古墳時代中期から後期とされている（浜野1994）。

新屋古墳群はこの地域では最も大規模な群集墳で、現時点では消滅したものを含んで約30基の古墳が確認されている。これらは3～5基を単位とするまとまり（単位a）を認めることができ、単位a、単位bレベルでの認識が可能であると考えられる。部分的に発掘調査がおこなわれており、その結果、群形成の核となると考えられている26号墳では組み合わせ式の石棺が用いられていたほか、発掘調査で新規に検出された31号墳や32号墳は小型の横穴式石室を有していることが明らかとなった。小型の石室については明確な遺物の出土はないが、石室の形態を根拠に7世紀代のものとされている（茨木市教育委員会1998）。発掘調査の詳細な成果が公表されておらず、グルーピングに課題は残すものの、形成時期は6世紀代から7世紀代にわたるものと考えられ、II類C1に属する単位b、あるいは単位cの群と考えられる。なお、新屋古墳群の丘陵麓に位置する福井西遺跡では茨木川の段丘面上で削平された古墳群が検出されている。未報告であるが、部分的に明らかにされた調査成果（奥1998）では、小型の円墳・方墳・前方後円墳からなる群が5世紀後半に営まれたとされており、T K47～MT10型式段階の須恵器のほか、埴輪が出土している。直接の関連を示す事ができる状況ではないが、時期的、あるいは立地からみて新屋古墳群に先行する群である可能性は高い。

安威古墳群は前期古墳として著名な安威0号墳、1号墳を群の西端に有し（奥井1982）、その東側に後期まで古墳の築造が続く、総計20基からなる古墳群とされている。群の東寄りでは5号墳、12号墳、15号墳などで横穴式石室が調査されており、須恵器や耳環等の出土がしらされている。前期から後期まで連続と古墳の築造が続くという視点から、同一集団が長期間に渡って勢力を維持した例としてあげられる場合（森1978）もあるが、これらすべての古墳を同一の群として認めることが適当であるかどうかは、さらに検討の余地があるものとおもわれる。少なくとも横穴式石室を主体部に有する後期の古墳に関しては、一般的な後期群集墳としての評価が適当であり、0号墳、1号墳といった前期古墳との関連は各時期における墓域の立地の問題として検討する必要があろう。群構造の詳細についても検討材料が不足している状況である。

長ヶ瀬古墳群は安威古墳群に東接する群で、安威川に面した北向きの一級低い段丘面に立地する。安威古墳群との関係については十分に検討されていないが、安威古墳群を単位bあるいはcレベルとし、長ヶ瀬古墳群をその中に含まれる単位aあるいはbレベルの群としてみることも可能ではある。しかし安威古墳群が比較的散在的な古墳の分布を示すに対し、長ヶ瀬古墳群では密集して古墳が分布する点で質的な差を見いだすことも可能である。7基の古墳が調査されているが、周辺の地形をみるとかぎりさらに古墳が存在した可能性が高い。調査された7基の古墳は全て横穴式石室を内部主体に有し、最大の規模を有する7号墳が出土遺物からみて6世紀中頃の築造であり、その他の古墳は6世紀末から7世紀初頭に築造されたとされる。安威古墳群の詳細な形成時期が不明ではあるが、長ヶ瀬古墳群の形成時期が6世紀でも後半以降となることから、安威古墳群の形成の後半期に並行するか、あるいは安威古墳群に継続する可能性も今のところ否定はできない。

将軍山古墳群は前期の前方後円墳である将軍山古墳が立地する丘陵上に営まれた古墳群の総称であり、実態としては将軍山古墳（2号墳）、独立墳とすべき将軍塚古墳（1号墳）に近接する3～5号墳・7号墳の4基の古墳によって形成される群集墳として把握される。現在は宅地造成により旧地形の認識は困難であるが、将軍塚古墳が一連の丘陵の頂部に立地するのに対し、3～5・7号墳はその前面の将軍山古墳が立地する一段低い尾根縁辺部分に立地しており、両者の関連は指摘できても基本的な性格は異にするものであろう。調査時にはすでに破壊を受けた古墳が多く詳細な検討は困難であるが、3号墳は片袖の横穴式石室を有する円墳で土器や耳環等の副葬品が出土している。他の古墳も横穴式石室を内部主体にしていたようであり、おおむね6世紀代に形成の中心を置く群集墳と考えられるが、終焉の状況やグループングは不明である。

真龍寺古墳群は将軍山古墳群が立地する同じ丘陵の西側斜面に位置している。周辺が造成による地形の改変を受けているため、両者間の状況は不明瞭であるが、それぞれが単位aレベルの群であり、一連の古墳群であった可能性を有している。横穴式石室が南北に2基並ぶとされているが、現在は1号墳のみが残されており、南向きに開口する横穴式石室を主体部に有している。直径18mを測る円墳で、石室は全長6mを越える規模のものである。須恵器の出土がしられており、6世紀代に築造されたものと考えられる。また確実に古墳が存在したとすることはできないが、国際文化公園都市に先立つ試掘調査では北に隣接する尾根上で、盛土中から6世紀代の須恵器が出土しており、さらに北に存在したとされる熊ヶ谷古墳群を含めて古墳群の範囲がさらに広がっていた可能性がある。<sup>7)</sup>

以上、この地域の群集墳を概観したが、分布状況としては茨木川、安威川流域に群集墳が集中する傾向を指摘することができる。一連の水系でありながらも勝尾寺川流域には群集墳の存在は全くみられ

ず、対照的である。また実態不明な大門寺古墳群を除くと平野部に接した尾根上に立地する場合がほとんどであり、栗柄山南古墳群のような山間部の立地を示すものはみられない。さらに現状では新屋古墳群を除くと、数基からなる群（単位もレベル）が古墳群と呼ばれている傾向が伺え、群の数は多いものの古墳数はそれほど顕著なものではない。各群を構成する古墳の数が少ないということと、おそらくは耕地開発が遅れたであろう勝尾寺川流域に群集墳がみられないということは、各古墳群の形成主体が安威川や茨木川流域に位置したであろう集落域の小規模なまとまりを単位にしている可能性を示すもので、後述する島上地域の状況とは対照的な様相を示している。次いで、同時期の独立墳の状況を概観しておきたい。

### 島下地域の独立墳の様相

横穴式石室などを主体部に有する後期の独立墳は、新屋古墳群のさらに南の尾根上から勝尾寺川に面する段丘面上に位置するグループ（南塚古墳・青松塚古墳・海北塚古墳）と将軍山古墳群から南の段丘上に立地するグループ（将軍塚古墳・耳原古墳・鼻摺古墳）が、茨木川を挟んで東西に対峙する形で位置し、さらに先述の郡古墳群を含む千里丘陵東部のグループがみられる。

茨木川の両岸に位置する両グループは、それぞれ紫金山古墳や将軍山古墳といった前期前方後円墳と分布が重なっており、直接の関連は指摘できなくとも、前期段階からの地域首長の墓域としての認識がみられたようである。両グループは時期的にも重複する可能性が高く、異なる系譜を想定するべきであるが、時期不詳の鼻摺古墳に7世紀代の方墳の可能性を考慮することが許されるならば、東岸のグループがやや遅れた形成時期を示す可能性がある。また西岸グループは各古墳が近接しているのに対し、東岸グループはやや分散した状況をみることができる。茨木川西岸のグループでは前方後円墳の南塚古墳（MT15型式段階、川端・金闇1955）、円墳の青松塚古墳（TK10型式段階）、同じく円墳の海北塚古墳（TK10～TK43型式段階、中村1993）の順で築造されたと考えられるが（池田市歴史民俗資料館1993）、各古墳が近接した立地を示すことから一連の首長系譜によるものと考えられる。南塚古墳に先行する首長層の古墳は知られておらず、南塚古墳の段階においてこの地域の首長が独立墳を営むに足る政治的地位を獲得したものと考えられる。<sup>3)</sup>このような独立墳系譜が出現する背景には、地域的なまとまりの形成を指摘する意見（池田市歴史民俗資料館1993）や、繼体天皇擁立に係わる状況を反映したものとする意見（岡野1991）などがみられるが、単に独立墳を営むという点にとどまらず、各古墳が畿内でも有数の内容を持つものである点は重要である。特にこのグループでは最後の古墳となる海北塚古墳の副葬品は大阪府愛宕塚古墳や奈良県藤ノ木古墳に類似した構成をみせるなど、畿内でも有数の古墳に数えられる（森本1994）。

千里丘陵東部のグループは先述のように、群集墳としての郡山古墳群との分別が課題であるが、仮に独立墳によって形成されるものとした場合、構成する各古墳の内容は海北塚古墳などと比べると劣位である印象が強い。後期段階の相対的な勢力の差とみることが適当と考えるが、この箇所に前期から中期の首長墳がみられない点との関連も考慮する必要があろう。すなわち千里丘陵に墓域を求めた被葬者集団は地域の伝統的な墓域を獲得することができなかつた新興の集団、あるいは首長層であったという考え方である。逆にいうならばこの地域の首長層の伝統的な墓域として茨木川と勝尾寺川の合流点付近が意識されていたということになる。また近接して群集墳が集中するということもこの意識が反映しているとみることも可能である。

千里丘陵の独立墳では、郡古墳群のさらに南の尾根上に特徴的な内部主体である木芯粘土室を有する

古墳、いわゆるカマド塚とよばれる上寺山古墳（筧川・免山1963）やその可能性が指摘される上穂積神社西古墳（大阪府教育委員会1990）がみられるが、これは吹田市域にみられる同種の主体部を持つ古墳との関連が想起され、茨木市域の各古墳とは異なるグループを構成するものと考えられる。

なお独立墳としての終末期古墳として著名なものに、阿武山古墳、初田古墳1号墳、2号墳があげられる。いずれも山頂付近の尾根稜線上などに立地し、近接して系譜を追える古墳がみられず、上述の独立墳の系譜との直接の関連を追うことは困難である。いうまでもなく阿武山古墳は被葬者に藤原鎌足の名があげられるほどの古墳であり、詳細な時期の検討は課題としても、単純に地域のなかから成立した古墳とは考えられない。

以上、島下地域の群集墳・独立墳のあり方を観察したが、巨視的には一定の範囲に独立墳と群集墳が集中する状況があり、微視的には群集墳の立地と独立墳の立地が重なることはない点を指摘できる。行政的に將軍山古墳群とされるなかにも独立墳としての將軍塚古墳（將軍山1号墳）と他の古墳には立地上も厳然たる差があり、関連は指摘できても墓域としては区別されている。また首長層のものと考えられる独立墳が系譜を追える形で認められ、かつ複数の系譜が想定できる点もこの地域の特徴であろう。一方群集墳のあり方についてみれば、最大の規模を有する新屋古墳群（単位cレベル）でも古墳数が30基程度であり、単位bレベルで認識できる群が数群まとまるという程度の状況である。無論このなかには安威古墳群と長ヶ淵古墳群、あるいは將軍山古墳群と真龍寺古墳群の関係のように、単位cレベルで一括できる可能性を有するものもあるが、それでも数基で構成される単位bレベルの群が2群集まり単位cレベルを構成する程度である。このような島下地域の後期古墳のあり方を特徴づけるために、ひきつづき島上地域の同時代の様相と比較したい。

## 5. 島上地域の群集墳と独立墳

島上・島下地域の区分はいうまでもなく律令期における郡名であり、これをそのまま古墳時代の地域区分に用いることを適當と考えるものではないが、ここでは便宜的に現在の高槻市域から島本町にかけての範囲を島上地域とし、上述した茨木市域を中心とする島下地域と比較していきたい。島上地域では平野部で削平された古墳群が検出される例はあるが、後期古墳の大多数は基本的に北部の山地域から山麓部にかけて分布している。

繼体天皇陵であることがほぼ確実な今城塚古墳を別格とすれば、独立墳の系譜については詳細が不明な部分が多い。島下地域では南塚→青松塚→海北塚といった系譜のように近接する古墳で首長基の系譜を想定することが可能な状況がみられるが、島上地域では南塚古墳とほぼ同時期とされる前方後円墳の星神車塚古墳の周辺においても明確な独立墳の系譜を追うことはできない。逆に新池遺跡（森田1993）や古曾部遺跡（宮崎1996）で検出されたような、単独立地の小型横穴式石室墳が点在する状況は島下地域にはみられない。この種の古墳は立地的には独立墳ではあるが内容的には群集墳のそれに近く、規模や主体部の様相を島下地域の首長墓と比較すると非常に大きな格差を認めざるをえない。また古曾部遺跡では横穴式石室の再利用という形で8世紀の薬莢形蔵骨器を用いた火葬墓が営まれ、新池遺跡でも直接の関連は定かではないが、近接して土器棺墓などが検出されている。このような状況は島下地域の独立墳の様相にはみられないもので、現時点では群集墳被葬者層によって営まれた独立した古墳と考えておきたい。古曾部遺跡では追葬の痕跡も認められる状況であり、被葬者が個人であるとは断言できない

が、古墳が単独で立地する以上、集団の墓域としての評価が適當とは考えられない<sup>9)</sup>。古墳の時期を限定できないうらみはあるが、6世紀代あるいは7世紀代に至り群集墳を形成しえなかつた集団から個人、あるいは一家族が抽出され、単独で墓域を獲得した可能性を指摘しておきたい。あえて先の終焉類型に当てはめるならばII類C1の弔式とでもなろうか。なお検討を要する古墳のあり方である。

一方、群集墳についてみると、島下地域では単位bレベルの群が1～2群で単位cレベルの群を形成する状況が多いことは対照的に、先述の塚原古墳群（原口1973）を例に出すまでもなく、5～10の単位bレベルの集合で単位cレベルの古墳群が形成されている。詳細な単位レベルの検討は十分ではないが、塚原古墳群北方、女瀬川をのぞむ阿武山東斜面に47基からなる片ヶ谷古墳群（大阪府教委1990・原口1977）、おそらくは50基以上の古墳が存在したであろう芥川流域の塚脇古墳群（原口1973・高槻市教委1993）や、現状で25基、本末は40基の古墳が存在したとされる桧尾川流域の安満山古墳群（原口1973・川端1998）など、現象的には主要河川の流域ごとに相対的に規模の大きい群がみられるほか、平野部に面した丘陵上には単位bレベルで古墳群と呼ばれている群も立地する。丘陵部の比較的小規模な群のあり方に島下地域の群のあり方との類似を認めるとするならば、島下地域と島上地域の群集墳のあり方の相違は、まさに塚原古墳群のような大型の群の形成にあるということになる。この点を理解するための検討は十分ではないが、ここでは繰り返し述べてきた単位レベルの評価を一定の基準にして理解したいと考える。古墳数の多い塚原古墳群のような群は、単位bレベルの群が多数集まる形で構成されているのであり、一つ一つの単位bレベルの規模は小規模とされる群における同レベルの単位とそれほどの差があるわけではない。すなわち単位bレベルでの被葬者集団の構造的な差は認められず、逆に同時期でありながら内部主体の構造や石棺、さらには副葬品に認められる差が質的な差を表象しているものと考えられる。したがって被葬者集団の構造がほぼ同規模であったとすると、全体的な数にみられる規模の差は、単位bレベルの被葬者集団の数を反映していると考えられる。すなわち単位cレベルでの古墳群の規模の差は、単位bレベルの集団数の差ということになる。各単位レベルの集団を実態としてどのように理解するかは群集墳研究における重要な課題であり、単純に結論付けることは避けたいが、個人一家族一集落一集落群一地域といった単純な図式を考えるならば、塚原古墳群のような単位は集落群といったまとまりを想定する事が可能であるし、いっぽう集落群といった地縁的な結合を超越した墓域設定原理が存在したと仮定するならば、集落群といった範囲を越えた集団墓地的な状況を推測することも可能となる。いずれにしても単位レベルの被葬者集団の実態は、集落遺跡が実態としてどのような形で構成されているのかという課題と大きくかかわり、現時点では推測の域をでるものではない。しかし島下地域と島上地域の二者を群集墳と独立墳双方のあり方をふまえて単純に比較した場合、大規模な群集墳がみられる地域で独立墳の系譜が希薄であり、逆に独立墳の系譜が明瞭な地域では大規模な群集墳がみられないという図式をみることができる。この点については現時点ではいかようにも解釈の余地を残すものであることは認めながらも、何らかの政治的な制度が両地域の古墳のあり方を規定したものであるという考え方を有しておきたい。

さて島上地域では先述のように可能性を有するものを含め、いくつかの「終末期群集墳」の存在を指摘することができた。これは島上地域に群集墳が多く分布するという状況のなかで、必ずしも地域全体の群集墳の規模に比例しているのではなく、大規模な群集墳の一つの単位を構成するものでしかないという点は先述した。塚原古墳群のN支群とされるものがその典型で、複数の集団による大規模な群集墳の形成が進むなかで、その後半にそれまで古墳の築造が行われなかつた比較的の高所に墓域を設定して群

が形成されている。そして他の群においても同時期の造墓が続けられている可能性は高く、新規にごく少數の集団が造墓を開始した状況をみてとることができる。一方、栗栖山南古墳群ではやはり新規に基城を得た集団による造墓という状況は認められるが、その立地が全くそれまでの群集墳のそれとはかけ離れた状況を示している。この点が塚原古墳群N支群と栗栖山南古墳群における立地上の最大の相違点であり、さらにこれは上述したような島上・島下両地域における群集墳のあり方を反映しているとみることができる。言い換えるならば、「終末期群集墳」の立地はその地域の群集墳構成パターンを反映している可能性が高いという点を指摘することが可能で、さらにいうならばそのパターンを生み出した各地域の群集墳構成背景を反映しているということになる。

## 6. 摂津地域における群集墳と後期古墳の動向

前項までに島上・島下両地域の後期古墳、特に群集墳のあり方を比較することで、「終末期群集墳」とされる群がそれ以前の群集墳とは異なる消長をみせるものの、地域的な古墳建築背景の中に位置づけられる可能性を指摘した。続いて地域を接する千里丘陵地域、猪名川東岸地域、能勢地域、長尾山丘陵地域の後期古墳、あるいは群集墳の状況との比較を試みたい。資料的制約から概略的な検討しかおこないえないが、従来個別に検討されることの多い各地域の様相を、少なくとも一定の巨視的な観点で観察することにつとめたい。

千里丘陵地域は北摂山脈から南に張り出す形の丘陵地で、山地とつながる基部は東を勝尾寺川、西を箕面川、千里川によって開析されている。標高100m程度の部分をピークに南東、あるいは南西方向への傾斜を示し、縁辺部は数メートルの段丘状を呈しながら神崎川や猪名川の河岸段丘面へつながる地形を示している。この丘陵は初期の須恵器窯として著名な吹山32号窯を先駆とし、古墳時代後期には一大須恵器生産地として利用されていたことはよくしらされているが、集落や古墳の状況は不明な部分が多い。既に消滅したものを含めた断片的な状況を整理すると、島下地域の検討で触れた郡古墳群が位置する丘陵東部から吹田市域の丘陵南東部にかけての丘陵縁辺部に古墳が散在する状況をみてとができる。この範囲ではさらに陶棺の出土地点も点在し、それらを含めて古墳時代後期の墓域として利用されていたことがわかる。これらの古墳のなかには先述した上寺山古墳や、吹田市新芦原古墳（網干編1981）などの木芯粘土室を主体部に有する古墳がみられることや、陶棺が用いられる古墳の存在が推測されるなど、須恵器生産地における古墳のあり方を示しているとされている。不明な部分が多いなかでこの地域の古墳のあり方を整理するならば、際立った首長墓としての独立墳は観られないものの、新芦原古墳などは須恵器生産に係わった首長葬の墓と考えることは可能であり、また顕著な群集墳がみられない点も特徴的であろう。周辺での集落遺跡の調査、検討は十分ではないが、神崎川や安威川に面する段丘面は集落立地として適当な状況であり、その居住集団の墓域としての群集墳はこの地には営まれていないことになる。また丘陵中央部では須恵器生産とそれにかかわるとされる集落が認められるものの、全く古墳がみられない点は古墳立地の偏在性を端的に示している。

千里丘陵の西側は猪名川に面した段丘状の地形を呈し、ここでは猪名川東岸地域としておきたい。古代においては豊島郡とされる範囲に相当する。地形的には千里丘陵東部と比べ、箕面川や千里川によって開析された谷が丘陵を区分している点を指摘することができ、古墳分布もこの単位で異なる様相をみせている。箕面川から北側の部分では横穴式石室を主体部にもつ古墳が点在しており（橋高1985）、丘

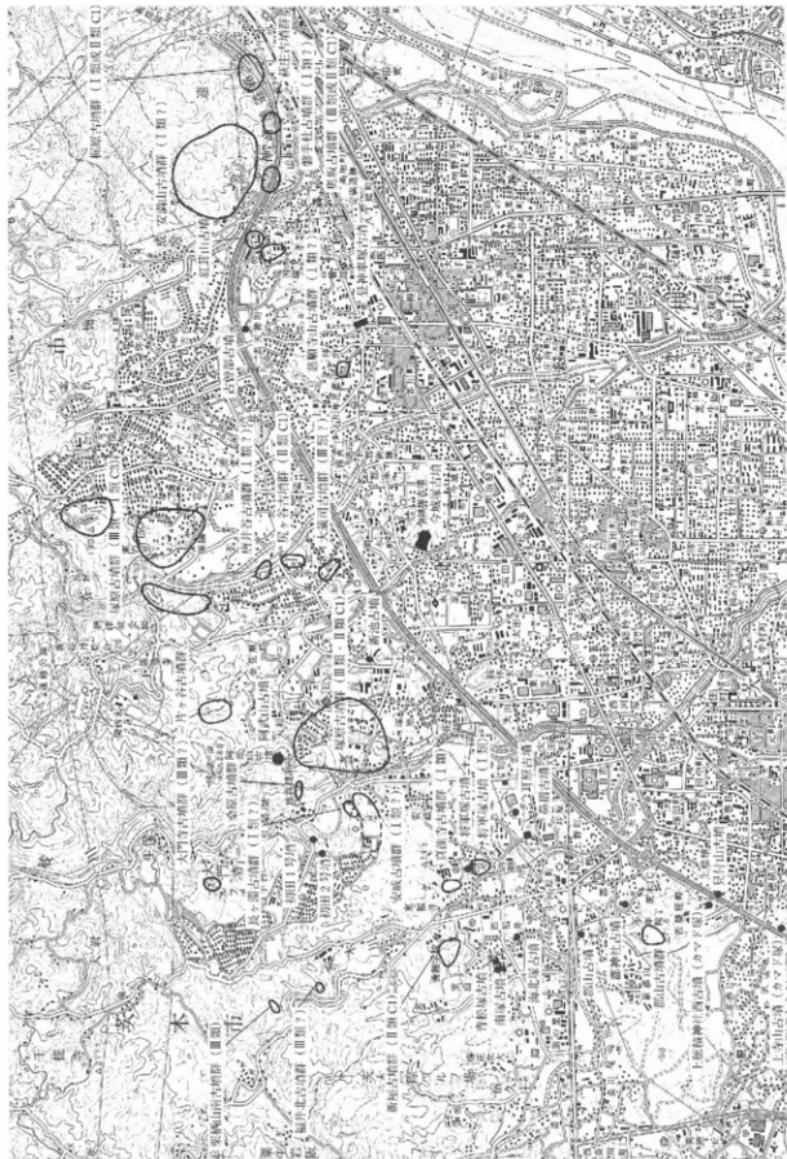


図211 千里丘陵・猪名川東岸地域 (1/50,000「大阪東北部」「大阪西北部」使用)

陵の西縁辺に並ぶグループと丘陵上面に点在するグループに分けることが可能かと考えるが、縁辺のグループでは前方後円墳の池田市二子塚古墳（田上1987）や巨石墳として著名な鉢塚古墳（梅原1935）が含まれ、地域首長墓の系譜を求めることが可能である。また池田城の下層では6世紀代の木棺直葬墓が検出されており（富山1997）、下位の被葬者像を想定すべきであろう。一方北側の山地頂部には近接する尾根に2基の小型横穴式石室墳（善海1号墳・2号墳）が築造されている（大阪大学考古学研究会1988・田上1988）。築造時期は特定されていないが、石室の様相からは7世紀代に下る可能性もあり、この2基を独立墳と評価するか、「終末期群集墳」とみるかの判断は鷄頭を覚えるところである。丘陵部の古墳との立地上の隔離性を重視し、現時点では後者の可能性に重きを置いておきたい。箕面川と千里川に挟まれた丘陵上では群集墳である太鼓塚（たこ塚）古墳群がみられ、横穴式石室に陶棺を収めた古墳を含み、30基程度が存在したと推測されている（藤沢1961・野上1969）。また段丘面に立地する宮之前（宮の前）遺跡では古墳時代後期の削平された古墳群が検出されている（宮之前遺跡調査会1970）ほか、近年の調査では7世紀代の木棺墓が調査されている（三宮1994）。千里川の南では新免宮山古墳群と称される群があり、2基の古墳が終末期の古墳とされている（藤沢1961・大阪府教委1990）。実態は不明な部分が多いが、首長層の古墳と考えられ、近接する独立墳としての評価が適当であろう。以上のように、猪名川東岸地域では河川によって分けられた丘陵ごとに独立墳の立地と群集墳の立地が区分されており、両者は重ならない。この点は独立墳と群集墳が立地を違えながらも近接する島下地域と比較して、一層その区分が明瞭であることが指摘できる。ただ猪名川流域の肥沃な可耕地を背景に多数立地したと思われる集落に比例する古墳が営まれているかどうかは疑問であり、少なくとも群集墳被葬者層が太鼓塚古墳群に集約されているとは考えがたい。この地域では池田市五月ヶ丘古墳（ド渋谷古墳）、太鼓塚古墳群、新免宮山古墳群において陶棺が用いられており、これをもって須恵器生産と関連付けるならば須恵器生産に関与した集団の墓域として太鼓塚古墳群が位置づけられることになり、それ以外の群集墳は存在しないことになる。

能勢地域は大阪府域では最北部となる地域であり、地域のほとんどが山間部となる地勢のなかで、比較的古墳の多い地域としてしられている。古代においては能勢郡とされた地域であり、現代の行政区画上は大阪府に属するが、水系的には猪名川水系に属し、またそれ以外にも島下地域からの交通路の存在も推測されるところである。能勢地域では前期から中期の確実な古墳はしられていないが、後期以降急激に古墳が築造されるようである（広瀬1981）。能勢地域でも豊能町域では古墳の存在はしられておらず、より北側の能勢町域に集中する点がまず特徴的である。現状ではこれが平野部（盆地）の規模に起因する集落の多寡を反映している可能性が高いものの、豊能町域の状況を一般的とした場合、能勢町域の古墳の集中度は何らかの特殊な背景を想定する必要がある。能勢町域の盆地は、大路次川や山田川流域の「西郷」と田尻川流域の「東郷」に大きく区分され、その間は竜王山系により隔てられている。先述した「終末期群集墳」の類型に属する野間中古墳群や円山古墳群、さらには可能性を指摘した小戸古墳群はともに「東郷」地域に位置し、源治郎山古墳群、三草山古墳群は「西郷」地域に位置すること事になる。古墳分布の特徴として両地域を比較すると、明確に認識できる首長墓の系譜は「西郷」地域、塩山古墳群や狐塚古墳で追うことができるとされ、この地域の古墳は横穴式石室に先行する木棺直葬墳が比較的まとまって分布するようである。そして横穴式石室はそのような古墳が築造を追えたのち、若干の期間をおき導入されている。「西郷」地域では横穴式石室採用後の古墳の分布も散在的で、顕著な群集墳を形成することはない。すなわち単位レベルでの群が点在する状況をみせている。このような

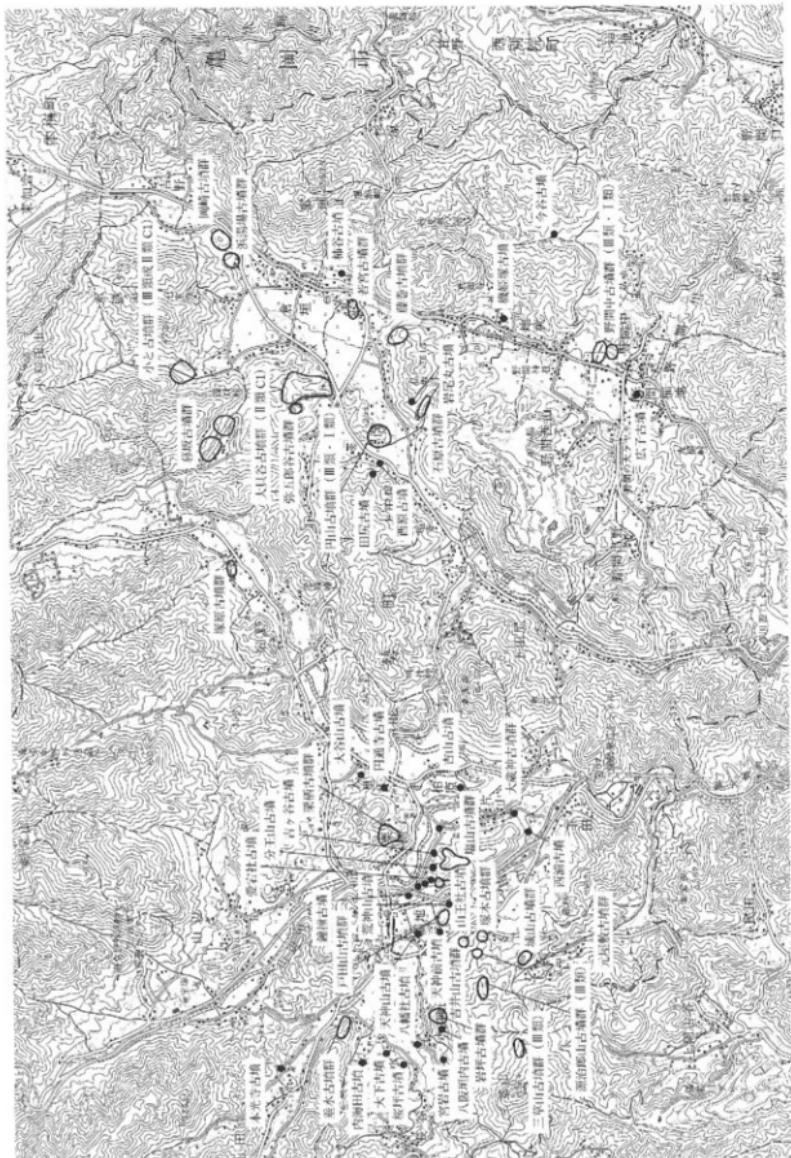


図212 能勢地域 (1/50,000「広根」使用)



図213 長尾山丘陵地域 (1/50,000「広根」「大阪西北部」使用)

状況のなか、「終末期群集墳」として認識できる二つの古墳群は、他の古墳群と隔絶した立地を示し、先行する時期の古墳群として直接に関連する群を指摘することは困難である。一方、「東郷」地域では北寄りの田尻川流域で5世紀代に遡る可能性のある木棺直葬墳がみられるが、それが6世紀代の群集墳と断続するという状況よりは、大貝谷古墳群にみられるように群中に先行して築かれる例もしられている。またこの大貝谷古墳群は現在しられているものでも17基の古墳からなり、単位レベルではbレベル3~4群によりcレベルの古墳群を構成している。このような状況はその立地や密度には差異を認識する必要があるが、南寄りの野間中古墳群においても基本的には同様で、「東郷」地域の群集墳のあり方として認められる。さらに「終末期群集墳」あるいはその可能性を指摘できる野間中古墳群B群や円山古墳群の6~8号墳、小戸古墳群のB群においても単独で単位bレベルの群が立地するのではなく、先行する時期の単位bレベルの群の存在を容易に指摘しうる。いいかえるならば「東郷」地域の終末期群集墳のあり方は島上地域に類似する様相を指摘できるのに対し、「西郷」地域のそれは島下地域に類似する様相を示すものであるといふことができる。

最後に現在の行政区分では兵庫県に属する地域となるが、学史的にも著名な長尾山丘陵地域の後期古墳あるいは群集墳の様相を概観しておきたい（武藤・橋本編1977・坂井1980）。この地域は古代には川辺郡とされた範囲に含まれる。広く猪名川西岸域をみた場合には猪名川下流域の沖積地に前方後円墳を主体とする猪名野古墳群がみられ、中期段階の地域の中心地として把握できる。また御園古墳、あるいは天狗塚古墳といった後期の前方後円墳までの首長墓の系譜は追える可能性が高いものの、6世紀後半から7世紀代の古墳の存在はしられておらず、群集墳も認められない。一方、長尾山丘陵では前期の前方後円墳である万籾山古墳、中期の前方後方墳と考えられている長尾山古墳が単独でみられるが、後期以降の古墳としては独立墳である川西市勝福寺古墳北墳の横穴式石室の導入を端緒とし、以後6世紀代を中心に多数の横穴式石室が丘陵上に営まれる。学史的にも検討の俎上にのることの多かった長尾山丘

陵の古墳群という呼称は本稿でいう単位dレベルのもので、東から雲雀ヶ丘古墳群、雲雀山東尾根古墳群、雲雀山西尾根古墳群、平井古墳群、山本古墳群、山本奥古墳群、中筋山手古墳群といった単位cレベルの古墳群が東西約3kmの丘陵南斜面に分布している総称として用いられる。またそれぞれの古墳群には支群と呼称される単位bレベルの群があり、地形や分布状況でグルーピングが行われている。すでに消滅したものを含めて400基を越すとされる長尾山丘陵の古墳群は、その規模もさることながら、「終末期群集墳」と認める事のできる単位bレベルの群を12群含み、それを構成する古墳数がそれ以外の古墳数、すなわちI・II類の古墳数を凌駕している点が極めて特徴的である。いかがわるならば近畿地方でも有数の「終末期群集墳」集中地帯といえるのである。個々の群の具体的な検討は省略するが、近年の調査の進展により、「終末期群集墳」に先行して形成された群がII類に属するものを中心とする状況が次第にあきらかになりつつあり、すでに述べてきたように、時期による単純な墓域の移動ではないことを説明することが可能である。したがって7世紀代に多数の集団が新規に墓域を獲得した状況がみてとれるのである。このような状況を生じせしめた背景はこれまでの研究史においても十分に説明できるものではなく、様々な説明が可能な状況であるが、本稿でこれまで検討をおこなってきた北摂地域の群集墳のあり方との比較では、古墳数の問題は残されるが、「終末期群集墳」の立地が単位cレベルの群の最高所付近にみられるという特徴に合致する状況を指摘することが可能である。すなわち、塚原古墳群や塚脇古墳群に代表される島上地帯=能勢「東郷」地域の類型である。長尾山丘陵の群集墳の被葬者集団の居住域に関する検討も從前議論のみられるところであるが、猪名川西岸の平野部に群集墳が全くみられないことからも非常に広範囲の集団の墓域である可能性が高い。想像をたくましくするならば長尾山丘陵から一望できる上町台地周辺を範囲にすることも否定はできない。<sup>10</sup> このような状況は島上地帯における塚原古墳群の被葬者集団の居住域に安威川流域という広範な地域が想定される状況とも対応し、逆に島下地帯での河川単位の小地域、あるいは集落単位での墓域の設定が推測される状況と対照する。

## 7. 「終末期群集墳」出現の背景

前項までに栗栖山南古墳群を中心に周辺各地域へと検討の範囲を広げ、後期古墳とりわけ群集墳のあり方を比較的に検討してきた。概略の検討に終始した感はあるが、結果、「終末期群集墳」のあり方がその地域での群集墳構成パターンとでも呼ぶべきものに従っている状況や、そのパターンが大きく二つの型に類別できる状況を示すことができた。このパターンに2者がみられることの要因についてはいまだ十分な検討は成していないが、いまのところ、小地域内での集落関係が純粋に地縁的な関係を基盤にした状況と、あるいはそのような集落群がさらに広い範囲で集団されるような状況（時として地縁結合を分断することもありうる）の二つの集団関係のあり方が群集墳の築造パターンに反映したものとしてとらえておきたい。この状況の説明には集落遺跡の検討が必要であり、いまのところその準備は不十分であるといわざるをえない。

パターンの背景についての検討は今後の課題とするとして、次に、いずれのパターンにおいてもみられる「終末期群集墳」の出現の背景について考察を進めたい。長尾山丘陵地域の群集墳の状況は前項で示したが、一方この地域での後期以降の独立墳の系譜も特徴的で、近接した範囲内において、削抜家形石棺を収める中山白鳥塚古墳（直宮1998）－多角形の列石を墳丘に巡らせた中山莊園古墳（直宮

1985) 一石櫃に金銅製の蔵骨器を収めた米谷古墳（末永1966）という系譜を率直に追うことができる。そしてその墓域は小規模な河川をもって群集墳の墓域と明確に区分されている。中山白鳥塚の出現の背景を説明することはいささか困難ではあるが、猪名川東岸地域で二子山古墳・鉢塚古墳と続く系譜やさらに島下地域で海北塚まで続いた系譜、あるいは耳原古墳を含む系譜などとの比較のなかで検討する方法が有効と考えられ、中央との関係を背景にした地域首長層の消長を示しているものと理解しておきたい。島下地域における独立墳の系譜を検討した際、南塚古墳から海北塚古墳へいたる系譜と、耳原古墳を含む系譜との比較において、耳原古墳の系譜が時期的に遅れるのではないかという見通しを示したが、三彩の蔵骨器を石櫃に収めた茨木市大鐵冠古墳（野上1969）までの系譜を想定するならば、その系譜の消長は長尾山丘陵地域のそれに似たあり方ということができる。今回各古墳の石室構造や石棺、副葬品などの詳細な検討は成しえないが、このような類似性の背景に、6世紀後半あるいは末以降、中央と結んだ新興の地域首長の台頭あるいは設置という状況の想定が許されるならば、まさにそれをせしめた地域性のなかに「終末期群集墳」出現にいたる背景の一端をのぞくことができる。能勢地域や島上地域など首長墓系譜が認められない地域においても「終末期群集墳」は出現するのであるから、地域首長層の盛衰と群集墳のそれとが必ずしも結びつくものではなく、その両者がともによってたつ地域、まさに地域の有する社会的意味のなかに、「終末期群集墳」出現の背景が隠されていると考えられる。栗栖山南古墳群、あるいは福井北古墳群の出現は、島下地域のなかでもとりわけ茨木川東岸地域の首長層の動向とも連動した現象であり、その地域そのものに出現の背景があるという可能性を指摘しておきたい。そしてその地域性の持つ社会的意味とは何であるか。これは各地域において分布する終末期古墳研究全般に課せられた課題であり、研究者各氏により意見のみられるところではあるが、いまなお明確な回答は準備できていない。7世紀代に開始される生産活動などに要因を求め、官位の制定や軸軸といつた様相を反映したとみる意見もみられるが（木下1985・服部1988・安村1990）、地域性の説明として十分ではない。現時点での見通しとして「7世紀の始まり頃以降、新興の首長、あるいは集団を直接掌握する関係が中央と地域性を介して成立し、それが終末期群集墳や終末期古墳と称される古墳の築造という形で表象され、さらには火葬墓の出現という墓制史上の画期を実現せしめたのではないか」という説明を提示するにとどめ、今後の検討を期したいと思う。

## 8. 「終末期群集墳」の歴史的意味と栗栖山南古墳群－まとめにかえて

前項までに主に後期古墳・群集墳の分布と立地の観点から北摂地域の「終末期群集墳」のあり方を検討し、「終末期群集墳」の出現の背景について考察を試みた。残念ながら確たる歴史的状況を説明するには足らなかったが、北摂地域における古墳時代後期以降の墓制について、その一端を垣間見ることは成したるものとおもう。最後に、すでに別稿（森本1995）で示した内容と重複する部分も多いが、本稿ではあえて言及することを避けた群構造的な観点から栗栖山南古墳群に若干の検討を加え、「終末期群集墳」の有する歴史的意義を示しておきたいとおもう。

栗栖山南古墳群では横穴式石室を内部主体に有する古墳が5基、墳丘の存在は不明ながら竪穴式の小石室、木棺墓が各々1基、遺構が確認できた火葬墓1基のほか、火葬遺構と考えられる「焼土坑」などが検出され、蔵骨器と考えられる土器が数点出土している。火葬墓まで継続する「終末期群集墳」として非常にまとまった内容を示しているのであるが、「終末期群集墳」一般にみられる傾向と同じく、群

構造についてはいくつかの可能性が提示できるものの、全てが納得できる見解を示すことは困難である。筆者は栗柄山南古墳群を単位a レベルの群を複数含む単位b レベルの群として認識するが、この場合においても単位a レベルの抽出は観点によって様々なパターンが可能となる。一般には立地・分布、墳形、主体部の規模、主軸の方向などから単位a レベルの群を抽出することになるが、重視する項目によっていくつかの案が提示可能な状態になる。また群の形成時期についても通常、出土遺物の年代を持って構造の時期を設定するが、これも出土状況の評価や個々の遺物の有する時間幅の解釈、遺物の出土していない遺構の附属などの考え方の違いにより、同じ資料を用いていながらも一定の時間幅のなかで累代的に順次築造をみたとする意見と、非常に限られた時間幅のなかで一齊に築造されたとする意見が示されるという状況を生み出している。群構造の理解は非常に重要な観点でありながら、抽出される共通項は非常に限られているといった状況となっている。

本文で示されているように、栗柄山南古墳群においても単位a レベルの群の抽出は容易ではなく、重視する観点別にいくつかの案を示すことができる状況といえる。また形成期間については遺物の出土した古墳の築造年代はその遺物の年代とし、遺物の出土しなかった遺構については遺構の種類や立地の観点をふまえて時間差を持って築造されたと考えられている。土器が出土した古墳は5基中3基であり、いずれも7世紀後半のものであった。また8世紀代の火葬墓が確実に営まれている状況から、墳丘を有しない主体部がこの間を埋めるものと考えられている。形成が始まった時期を限定することは難しいものの、全般に7世紀前半～中頃までの遺物が出土しないことから、形成の中心は7世紀後半にあるとされている。繰り返すが、栗柄山南古墳群における単位の抽出と形成過程の追求はいさか資料不足の感があり、遺物の様相を加味しても明確な説明は困難なようにおもわれる。しかしだけで調査、検討がおこなわれたいくつかの「終末期群集墳」の様相から、類似する状況をみいだすことは可能である。特に火葬墓まで継続して墓が営まれる群（安村1999）では木棺墓や堅穴系の小石室は横穴式石室からは後出しし、火葬墓との間を埋める埋葬施設であるという理解が適切であることから、栗柄山南古墳群での上記の理解も整合性を持つものと考えられる。したがって、柏原市田辺古墳群や平尾山古墳群雁多尾知49支群などと同じように、小型の横穴式石室により群形成を開始し、最終的には火葬墓を含むまで継続する群という類型に属すると判断できる。このような群の歴史的評価についてはすでに別稿で述べたとおりであり（森本1999）、古墳時代社会が特徴的に有していた政治的墓制管理制度にその最終の段階まで管理されていた集団の墓群ということになろう。

最後に栗柄山南古墳群6号墳の評価について若干の私見を示しておきたい。6号墳は群中最高峰に営まれた比較的大型の古墳で、切石風に加工した石材を用いる点や前面の外装に手を加えるといった特徴を有している。また石室奥方の裏込めに、一見版築かとおもわせる異質の土砂を用いて交互に埋めるといった技術を用いている。様々な意味で群中抜きんでて存在といえるこの古墳は、調査成果からは群形成のどの段階に位置づけるかは明確にされていない。資料が限られた状況での推論に過ぎないが、私はこの古墳が古墳としての群形成の最終に位置づけることができないかと考える。本来、数次にわたる埋葬を前提とした施設である横穴式石室は、その袖が有していた本来の機能を失い、単体埋葬の施設へと変化する。これは一般には小型化の流れで理解されているが、いわゆる終末期古墳とされる大型横穴式石室にはその規模にかかわらず、卓越した個人の墓である古墳が存在する。横口式石槨墳も個人埋葬を前提にした埋葬施設であり、その築造技術の高さや古墳の立地など周囲から際立った存在であることは疑いようがない。「終末期群集墳」の範疇には属さない群において、群形成の最終にこのような古

墳が築かれる例はいくつかが知られており（森本1997・安村1995）、先述の終焉類型では群形成のピークを終えたのちも個人墓の築造を行うII類のなかでも、それまでの古墳を凌駕する内容を有するC2・C3としたものに該当する。一方、「終末期群集墳」において古墳の最終段階に大型の石室が築かれる例は今のところ確認できないが、栗栖山南古墳群に似た群形成を示す半尾山古墳群雁多畠支群では石室墳後の古墳築造の末期に、2棺を収めた木炭椁を主体部に有する古墳が築かれている。当初より2名の埋葬だけを前提にした特殊な墳墓である。このように「終末期群集墳」ではその形成過程のなかで複数埋葬から単体埋葬へ、家族墓から個人墓への変化を示すわけであるが、この過程は社会のなかで社会的地位の主体が集団から個人へ、氏族から個人へと変化した様相を反映したものと考えられる。栗栖山南古墳群においても群を営んだ集団のなかから卓越した古墳を築くことが許される個人が輩出されたことを示しているのではないだろうか（6号墳では2棺の埋葬も示唆されるが、追葬を前提とした施設ではなく、卓越した個人あるいは夫婦という位置づけが可能かと考えられる）。いさきか推論がすぎるようではあるが、古墳時代から律令時代への墓の変化のなかで、このような形で個人墓が集団の墓域のなかに築かれたのだとすれば、その過程はまさに歴史に位づけられるものとなり、「終末期群集墳」の有する歴史的意味がより鮮明になるものと考える。

本稿では当初、摂津地域全体の後期古墳の検討を試み、地域の持つ歴史的意義をあきらかにしたうえでその地域性のなかに栗栖山南古墳群を位置づけることを目指したものであるが、筆者の力量に応じて検討範囲を縮小せざるを得ず、確たる地域性を導くにはいたらなかった。また、個々の遺跡についても出土遺物などに直接接する機会を持ちえず、概略的な評価に終始した。今回検討した範囲、内容を一定の基準とし、今後さらに範囲を広げ、かつ可能な限り内容を深化させて摂津地域の歴史的状況を追求していきたいと考えるところである。

## 註

- 1) 「終末期群集墳」に関する論考も近年増加しているが、論点については（森本1995・1999）を参照されたい。また、（安村1995・1999）において終末期群集墳の概略がまとめられているほか、関連する検討が行われている。
- 2) 北摂地域における古墳の総合的理解を目指した先駆的な作業に（野上1969・1970）をあげることができる。
- 3) 終末期群集墳をめぐる議論のなかで、累代的な造墓を否定する見解もみられる（木下1985・1993）。
- 4) 資料の集成と内容の検討には各編著報告書のほか、遺跡分布図及び地名表（大阪府教育委員会1990・1991）、各市町史などを利用した。
- 5) 平成9(1997)年度、国際文化公園都市建設に伴う試掘調査により丘陵頂部において2基の古墳が確認された。他にも古墳の存在が予想されるが、部分的な調査のため古墳数や時期については不明である。検出された古墳は無袖の小型横穴式石室を主体部にもち、終末期群集墳の可能性が高い。
- 6) 内容の検討については（荒川・免山1963、野上1969、茨木市教育委員会1990・1998）などを参考とした。
- 7) 平成9(1997)年度、国際文化公園都市建設に伴う試掘調査において丘陵上の試掘トレンドから6世紀前半～後半の須恵器壙などの遺物の出土をみたが、古墳などの遺構は全く確認されなかった。
- 8) 中期段階の首長墓がこの地域にみられないということから前期古墳からの首長層の系譜が途絶えたということを説明できるものではない。しかし仮に首長層の系譜が連続していたとしても古墳の築造に反映される地位を中期段階では失っており、南墳古墳の被葬者の段階にいたり、改めて当時の古墳築造背景のなかで、横穴式石室を有する前方後円墳を築造するに至ったということになる。

9) 群集墳を理論的な枠組みのなかで理解すると1基のみで構成される群も存在しうるし、その実例をあげることも可能である。しかし、古曾部・新池例は主に立地上の観点から群集墳とはいえない。

10) 伊丹段丘上にかつて緑ヶ丘古墳群が存在し、箱式石棺が出土したとされるが（植本1984）、詳細は不明である。

11) 上町台地北端の難波宮地域で活躍したであろう集団の墓域については十分な検討が進んでいない。難波宮時代に限らず、主要な港湾施設の存在と都市的な活況は前後の時代においても十分想定できるところであり、それは難波津以前の住吉津などにおいても同様であったと推測される。これら上町台地での集団の活動と墓域との関わりは検討を要する課題である。なお墓域の位置関係では逆になるが、大阪城三ノ丸地域の調査において検出された古代墓群の被葬者に関して、上町台地北端地域で活躍した河内地域の官人を当てる意見がみられる（鈴柄1999）。古墳時代において律令期と同様の葬地設定がなされていたとは考えがたく、上町台地地域で現在まで明確に確認できていないとすれば、墓を営むことが無かったか、あるいは他地域に墓域を求めるべきだ。

12) この2者の理解に関して、先述の単位レベルの帰属と関連させて從前の研究成果との対応を見ることができる。

水野正好氏はそれぞれの群の規模や構成から、家族の墓域・氏族の墓域・同族の墓域・村々の墓域という類別を示した（水野1970）。詳細は異なる部分もあるが、家族の墓域－単位a、氏族の墓域－単位b、同族の墓域－単位c、村々の墓域－単位dという対応が想起される。このようにみると二つのパターンは単位a・bによる群が自立するものが多い場合と、単位c・dまでの群がみられる場合との二者に言い換える事ができそうであるが、それが地域にどのように位置づけることができるかが課題と考える。

広瀬和雄氏は群集墳をその規模から大型群集墳と中小群集墳の2者に分類し、異なる政治的過程を経たものという可能性を指摘している（広瀬1978）。類別の基準になる規格が異なるが、ここで示した二つのパターンと類別の視座は同じくするものと考えられる。また中小群集墳が聚落を単位とするグループであるという評価も同じくするが、大型群集墳の理解において、それを特定の職能集団の掌握の結果ととらえる点にはいまなお検討が必要と考える。本文に示すように群集墳の規模に表出された関係が、すでに集落群の掌握というレベルで実施されていた可能性を持てきれないからである。

太田宏明氏は規模のみならず時期や内容の違いから「型」を設定し、群集墳の成立にはそれとの「型」に反映した異なる要因（制度）が存在したことを想定している（太田1998）。しかし「型」の設定がごく機械的におこなわれ、特に本筋でいうところと群中の単位レベルの関係を評価していない点に問題が感じられる。またその「制度」に地域性が無関係であるかどうかの議論は重要と考える。

13) 鉢塚古墳を中山白鳥塚古墳に先行する時期におき、白鳥塚の石棺が「公的棺」と考えられる事から、鉢塚と白鳥塚の間に猪名川流域の首長層の変動（中央との関係の深い首長層の進出）を想定し、耳原古墳の出現もこれに對応する事象ととらえる意見がある（池田市歴史民俗資料館1993）。それに伴う北摂地域社会の変化を想定する意見であり、非常に興味深い。白鳥塚の場合先行する古墳の存在がまったくみられない状況であるのに対し、耳原古墳の場合は築造年代と将军塚古墳との関係の評価によっては先行して系譜的なつながりを認める必要があるが、方墳の鼻嘴古墳と多角形墳の中山莊園古墳、石體に収められた三彩蔵骨器の大職冠古墓と同じく石體に収められた金銅製蔵骨器の米谷古墓が各々対応する可能性が高い点は注目される。

14) 日本における古墳の終焉と火葬墓の出現について、仏教文化との関連や薄葬思想の浸透といった説明が加えられることが多い。しかし、朝鮮半島諸國の櫛棺などと比較するとその経緯は極めて特殊であり、政治的な背景を想定せざるをえない（森本1998・1999）。今回検討した範囲では「終末期群集墳」から火葬墓への連続や、新興の首長墓系譜からの火葬墓への系譜は一連の墓制管理政策の一貫としてとらえられる。

## 引用文献

- 網干善教編 1981『考古資料』（『吹田市史』第8巻、吹田市）
- 池田市歴史民俗資料館 1993『混迷の6世紀—巨石古墳への時代』1993年度特別展図録
- 茨木市教育委員会 1990『わがまち茨木 古墳編』
- 1998『茨木の史跡』
- 梅原末治 1935『攝津鉢塚古墳の調査』（『近畿地方古墳墓の調査』一、日本古文化研究所）
- 大阪大学考古学研究会 1988『善海1号墳の調査』（『まちかね考古』No.1、大阪大学考古学研究会）
- 大阪府教育委員会 1990『大阪府文化財地名表』
- 1991『大阪府文化財分布図』
- 太田宏明 1998『類型化による群集墳分析—中河内地域を中心として』（『網干善教先生古希記念 考古学論集。網干善教先生古希記念会』）
- 大船亭弘 1982「X 塚脇古墳群」（『鶴立郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要』6、高槻市教育委員会）
- 阿野慶隆 1991『畿内における初期横穴式石室の一型式』（『関西学院考古』No.9、関西学院大学考古学研究会）
- 岡本敏行 1992『野間中古墳群発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 奥 和之 1998『5世紀代の小規模古墳について』（『みかん山古墳群』大阪府教育委員会）
- 奥井哲秀 1982『茨木市安威0号墳、1号墳の調査』（『大阪文化誌』15号、（財）大阪文化財センター）
- 川畠真司・金闇 恵 1955『摂津豊川村南塚古墳調査概報』（『史林』第38巻5号、京都大学文学部）
- 川端博明 1998『尾原古墳群発掘調査報告書』名神高速道路遮断調査会
- 橋高和明 1985『原始・古代の池田』池田市立池田中学校地歴部
- 木下保明 1985『「7世紀尾原古墳群」について』（『考古学論集』第1集、考古学を学ぶ会）
- 1993『「7世紀尾原古墳群」再論』（『羽安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会）
- 坂井秀弥 1980『2、長尾山の古墳群の概要』（『長尾山の古墳群調査集報』宝塚市教育委員会）
- 笛川隆平・免山 篤 1973『古墳』（『茨木市の文化財』第3号、茨木市教育委員会・茨木市文化財研究調査会）
- 三宮昌弘 1994『宮の前遺跡（1・2）』（『宮の前遺跡・宝池東遺跡・宝池西遺跡』1992・1993年度発掘調査報告書）（財）大阪文化財センター）
- 白石太一郎 1982『畿内における古墳の終末』（『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集、国立歴史民俗博物館）
- 吹田市立博物館 2000『吉志部古墳の発掘調査の概要』（『吹田市文化財ニュース』No.21、吹田市立博物館）
- 木永雅雄 1966『宝塚市北米谷出土の火葬骨灰器』（『日本歴史考古学論叢』日本歴史考古学会）
- 鈴納俊大 1999『聖武朝難波京の構造と平安時代前期の上町台地』（『文化学年報』第48輯）
- 高槻市教育委員会 1993『塚脇古墳群』（遺跡ガイド10）
- 高橋克壽 1991『円山古墳群発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 田上雅則 1987『二子塚古墳』（『池田市埋蔵文化財発掘調査概報 1986年度』池田市教育委員会）
- 1988『善海1号墳測量調査』（『池田市埋蔵文化財発掘調査概報 1987年度』池田市教育委員会）
- 富田好久 1997『古墳時代の池田』（『新修池田市史』第1巻、池田市）
- 中村 浩 1993『摂津南北塚古墳出土須恵器の再検討』（『考古学雑誌』第78巻3号、日本考古学会）
- 齊宮憲一 1985『中山莊園古墳』宝塚市教育委員会
- 1998『中山寺白鳥塚古墳の再検討』（『網干善教先生古希記念 考古学論集』網干善教先生古希記念会）
- 西谷 正 1965『塚脇古墳群』（『高槻市文化財調査報告書』第1回、高槻市教育委員会）

- 1966 「紅葉山と岡本山東地区遺跡の調査」（『高槻市文化財調査報告書』第2冊、高槻市教育委員会）
- 1968 「塚原古墳群の研究（1）」（『高槻市文化財調査報告書』第4冊、高槻市教育委員会）
- 野上丈助 1969 「摂津の古墳」古美術鑑賞社
- 1969・1970 「摂河泉における古墳群の形成とその特質」（『考古学研究』第16巻3・4号、考古学研究会）
- 橋本久和 1976 「奥坂古墳群発掘調査報告書」（『高槻市文化財調査報告書』第9冊、高槻市教育委員会）
- 服部伊久男 1988 「終末期群集墳の諸相」（『福原考古学研究所論集』第9・奈良県立橿原考古学研究所）
- 浜野俊一 1994 「茨木市内出土の律式系土器について」（『律式系土器研究』V、律式系土器研究会）
- 原口正三 1973 「考古編」（『高槻市史』第6巻、高槻市）
- 1977 「考古学からみた原始・古代の高槻」（『高槻市史』第1巻、高槻市）
- 横本誠一 1984 「日本の古代遺跡3 兵庫南部」保育社
- 広瀬和雄 1975 「群集墳研究の一状況」（『古代研究』7、元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室）
- 1978 「群集墳論序説」（『古代研究』15、元興寺文化財研究所考古学研究室）
- 1981 「考古資料」（『能勢町史』第4巻、大阪府能勢町）
- 藤沢一夫 1961 「古墳文化とその遺跡」（『豊中市史』第1巻、豊中市）
- 水野正好 1970 「群集墳と古墳の終焉」（『古代の日本』5近歳、角川書店）
- 1974 「雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格」（『古代研究』4、元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室）
- 宮崎康雄 1996 「古曾部・芝谷遺跡」（『高槻市文化財調査報告書』第20冊、高槻市教育委員会）
- 宮之前遺跡調査会 1970 「宮之前遺跡発掘調査概要」
- 武藤 誠・橋本 久編 1977 「考古編」（『宝塚市史』第4巻、宝塚市）
- 村川弘行 1968 「大阪府高槻市大蔵司山古墳群」（『日本考古学年報』16、日本考古学協会）
- 森 浩一 1970 「古墳時代後期以降の埋葬地と墓地」（『古代学研究』第57号、古代学研究会）
- 1978 「古墳文化と古代国家の誕生」（『大阪府史』第1巻、大阪府）
- 森田克之 1993 「新池」（『高槻市文化財調査報告書』第17冊、高槻市教育委員会）
- 森本 健 1994 「土師器」（『河内愛宕塚古墳の研究』八尾市立歴史民俗資料館）
- 1995 「大阪の終末期群集墳」（『古代学研究』132、古代学研究会）
- 1997 「摂・河・泉州地域の群集墳の終焉」（『古墳時代から古代における地域社会』埋蔵文化財研究会）
- 1998 「律国における初期火葬墓の研究」（『青丘学術論集』第13集、（財）韓国文化研究振興財团）
- 1999 「群集墳の変質からみた古代墳墓の成立過程」（『古代文化』第51巻11号、古代学協会）
- 安村俊史 1990 「終末期群集墳の一形態」（『柏原市歴史民俗資料館報』創刊号、柏原市歴史民俗資料館）
- 1995 「群集墳と横口式石櫛」（『古代学研究』132、古代学研究会）
- 1999 「火葬墓を内包する終末期群集墳」（『古代文化』第51巻11号、古代学協会）

## 報告書抄録

ふりがな	くるすやまみなみふんほぐん						
書名	栗柄山南墳墓群						
副書名	国際文化公園都市整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	大阪府文化財調査研究センター調査報告書						
シリーズ番号	第57集						
編著者名	市本芳三 濑戸哲也 福島正和 森屋美佐子						
編集機関	(財)大阪府文化財調査研究センター						
所在地	〒590-0105 堺市竹城台3-21-4 Tel0722 99 8791 Fax0722-99-8905						
発行年月日	西暦2000年11月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くるすやまみなみふんほぐん 栗柄山南墳墓群	大阪府茨木市 佐保字クルス	27211	34度 51分 46秒	135度 32分 54秒	1997.11.4 ～ 1999.4.15	14,960m <sup>2</sup>	国際文化公園都市整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
栗柄山南墳墓群	古墳墓	古墳時代 古代	古墳 火葬墓・木棺墓 焼土坑、土坑	須恵器蓋坏 須恵器坏身・短頸壺、 土師器壺、	7世紀代の終末期古墳 8世紀代の火葬墓・ 木棺墓	13世紀末～19世紀後半の墓を全面調査しその墓群の変遷と構成を明らかにした	
	墓	中近世	土葬墓・火葬墓 火葬場 炭盛土	土師器皿・瓦質羽釜 備前壺、美濃瀬戸皿、 石仏・五輪塔、刀子・ 錢貨・鉄釘、温石、島帽子			

# 栗栖山南墳墓群

（助）大阪府文化財調査研究センター

—国際文化公園都市特定土地区画整理事業に  
伴う発掘文化財調査報告書—  
本文編

---

2000年11月

編集発行／助大阪府文化財調査研究センター

〒590-0105 堺市竹城台3-21-4

Tel.0722 99 8791 Fax.0722-99-8905

印 刷／鶴じんのう

---

